



# 『三国志演義』研究：そのテキスト生成に関する考察

竹内, 真彦

---

(Degree)

博士 (学術)

(Date of Degree)

2000-09-30

(Date of Publication)

2007-10-19

(Resource Type)

doctoral thesis

(Report Number)

甲2303

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/D1002303>

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。



平成十二年 九月二十九日

『三國志演義』研究

——そのテキスト生成に関する考察——

(第一冊)

神戸大学大学院文化科学研究科文化構造専攻(博士課程)

竹内真彦

『三国志演義』研究—そのテキスト生成に関する考察—

目次

総序(付 凡例) .....	3
第一部 『三国志演義』における伝説の受容	
小序 .....	11
第一章 剣と馬—呂布 .....	12
第一節 『演義』の呂布の形象 .....	12
第二節 方天画戟 .....	14
第三節 呂布と薛仁貴 .....	15
第四節 英雄の祖型 .....	20
第五節 呂布と赤兔馬 .....	23
第六節 関羽と赤兔馬 .....	27
第七節 呂布と関羽 .....	30
第二章 対偶の創出と受容—諸葛亮と司馬懿 .....	37
第一節 諸葛亮と司馬懿 .....	37
第二節 北伐(一)—正史 .....	41
第三節 北伐(二)—『平話』 .....	45
第四節 北伐(三)—『演義』 .....	48
第五節 伝説の受容 .....	50
第六節 伝説受容の準備 .....	55
第二部 長篇としての『三国志演義』	
小序 .....	66
第三章 『演義』の貴種流離譚—劉備 .....	67
第一節 従来 of 劉備像 .....	67

第二節	逃げる劉備	68
第三節	劉備の逃走譚	70
第四節	劉備をめぐる「劉」	72
第五節	貴種流離譚	78
第四章	鼎立の構造—曹操	83
第一節	「奸雄」曹操	83
第二節	『演義』の曹操	86
第三節	呼称をめぐって	92
第四節	曹操の呼称(一)—曹公	93
第五節	曹操の呼称(二)—丞相	96
第六節	曹操の呼称(三)—魏王	103
第七節	鼎立の構造	105
第五章	物語の終焉—司馬炎	111
第一節	『演義』の始点と終点	111
第二節	『平話』の始点と終点	113
第三節	司馬炎の父祖	117
第四節	司馬炎の形象	121
第五節	「皇帝」司馬炎	124
第六節	『演義』の歴史観	125
附考	二十卷本繁本系諸本および毛本について	131
結語		134
初出一覧		136

# 総序

『三国志演義』（以下、『演義』と略す）が、講史<sup>二</sup>の筆頭であり、四大奇書の一つであることは、今更確認するまでもないであろう。その『演義』を評するものとして、餘りにも有名な章学誠の言説がある。

……蓋編演義者本無知識、不脱伝奇習氣。固亦無足深責、却為其意欲尊正統、故於昭烈忠武頗極推崇、而無如其之陋爾。凡演義之書如『列国志』『東西漢』『說唐』及『南北宋』多紀実事、『西遊』『金瓶』之類全憑虚構、皆無傷也。惟『三国演義』則七分実事・三分虚構、以致觀者往往為所惑乱。如「桃園」等事、学士・大夫直作故事用矣。故演義之属、雖無当於著述之倫、然流俗、耳目漸染実、有益於勸懲。但須実則概從其実、虚則明著寓言。不可虚実錯雜如三国之淆人耳。<sup>三</sup>

（……蓋し演義を編む者は本より知識無く、伝奇の習氣を脱せず。固より亦た深責するに足ること無く、却って其の意 正統を尊ばんと欲するが為に、故に昭烈の忠武に頗る極めて推崇するも、其の陋たる如き無きのみ。凡そ演義の書の『列国志』『東西漢』『說唐』及び『南北宋』の如きは多く実事を紀し、『西遊』『金瓶』の類は全く虚構に憑り、皆な傷うこと無きなり。惟だ『三国演義』のみは則ち七分の实事・三分の虚構、以て観る者 往往にして惑乱する所と為るを致す。「桃園」等の如き事、学士・大夫 直ちに故事と作して用う。故に演義の属、著述の倫に当たること無しと雖も、然れども流俗は、耳目 漸く実<sup>な</sup>に染み、勸懲に益すること有り。但だ 須く実<sup>すべ</sup>は則ち概<sup>おほ</sup>ね其の実に従い、虚は則ち明らかに寓言に著くべし。虚実の錯雜すること三国の人を淆<sup>ま</sup>じらしむが如くなるべからざるのみ。）

清代に現れたこの言説は「七実三虚」という言葉の出典でもあり、その後の『演義』解釈の基調となる。すなわち、『演義』は往々にして「実（史実）」との関係性において語られるようになるのである。そして、多くの論者は『演義』のストーリーは史実に拠ってある程度規定されると考えている。

範例を示そう。『中国小説史略』において、魯迅は次のように言う。

說『三国志』者、在宋已甚盛、蓋當時多英雄、武勇智術、瑰偉動人、而事状無楚漢之簡、又無春秋列国之繁、故尤宜於講說。<sup>三</sup>

（『三国志』を語ることは、宋代、すでに甚だ盛んであった。思うに三国時代は英雄が多く、武勇と智謀は雄渾で人を感動させる。また事の展開は楚漢の時のように単純ではなく、春秋列国のように繁雜でもなかったから、語るには最適のものであった。）

魯迅は、この部分で直接的に『演義』に言及するわけではない。しかし、この後に続く言説などから推して、彼が『演義』を手放しで評価していたとは思われない<sup>四</sup>。とすれば、やや穿ちすぎかも知れないが、この語は、魯迅が『演義』のおもしろさを、史実そのもののおもしろさに依拠していたと考えていたことを示唆しているであろう。

このように『演義』をして史実に束縛された作品と見ることは、現代に至っても餘り変わりがない。磯部彰の言を挙げよう。

治世に対する関心は、講史小説の体裁をとって現れたことを前項で述べた。しかし、過去の治世に対して是非の評価は与えられても、動かしがたい事実は敷衍する。『三国志通俗演義』などの講史小説の泣き所はそこに存在するので、作者たちは極力事実経過の必然性を説こうと努める。しかし、史実の偶然的変遷と小説に記される人物との間に横たわる狭間は、時に読者に対して、もの足りない気分、わり切れない気持を懐かせる場合がある。<sup>〔五〕</sup>

磯部は、更に附言する。

正統である蜀の劉備らの最後は、決して良いものではなく、これに反して篡奪者曹操は、次々と足場を固め、中原に魏王として覇をとる。天下がこれに帰すという『三国志』の記事は、何人とも如何しがたい事象である。<sup>〔六〕</sup>

章学誠から魯迅や磯部に至る言説に共通しているのは、史実を「主」と見、『演義』を「従」と見る態度であろう。「実（史実）」を語ることは、『演義』は史書に及ぶべくもないのである。

一方、「虚」についてはどうか。

一九六七年、『花関索伝』が上海近郊で発見されたことは、史実から大幅に逸脱した「三国志」故事の存在を研究者に再認識させたように思われる。そして、已に知られていた『三国志平話』（以下、『平話』と称す）を含むそれらの所謂「伝説」をめぐる研究は、近年に至るまで連続と続いている<sup>〔七〕</sup>。この種の研究において、『演義』は多く比較の対象と

して言及されるものの、伝説を語るテキストとして扱われることはほとんどない。つまり、「虚」についても『演義』は「従」なのである。

その結果、『演義』は史書（実）や「伝説（虚）」との関係性のみが拡大され、『演義』そのものは「伝説よりは史書に近い作品」、文字通り「七実三虚」であることを確認されるばかりであった。そして、このような言説が繰り返されることで、多くの読者も『演義』は七実三虚であるという先入観を持つに至った。

一方で、『演義』のテキストが、どう「実」であり、どう「虚」であるのが問題にされることは少ない<sup>〔八〕</sup>。

そこで、本研究では、『演義』テキストを詳細に分析することで、改めてその特徴を明らかにし、併せてテキストがどのような過程を経て生成されてゆくかを見てゆきたい。そのために、二つの視点を準備する。

一つは、『演義』がどのように伝説を受容しているかという視点である。『演義』が史実のみではなく「虚」をも記していることは疑いない。従来、その「虚」の来源が指摘されることはあったが、それは来源が極めて判り易い事例に限られていた。そこで、本研究では、これまで指摘されることの無かった伝説を『演義』テキストから発掘し、『演義』が如何に巧妙に伝説を語るかを再構成する。

いま一つは、『演義』は長篇であるという視点から分析する。これは、至極当然のことのように思われ、これまで意識されることは少なかった。しかし、『演義』が一個の作品である以上、その始点と終点、そして始点から終点へと至る流れ（長篇としての構成と換言できよう）は、他のテキスト（史書・平話など）とは決して一致することのない『演義』独自のものである。そこで、『演義』が如何に巧妙に長篇として生成されているかを論じてみたい。

なお、『演義』全体を漠然と論じたところで、焦点がぼやけるばかりであろう。それゆえ、本研究では基本的に一人の人物に着目し、人物形象論の形で論を進めてゆくことをお断りしておく。

テキストについて

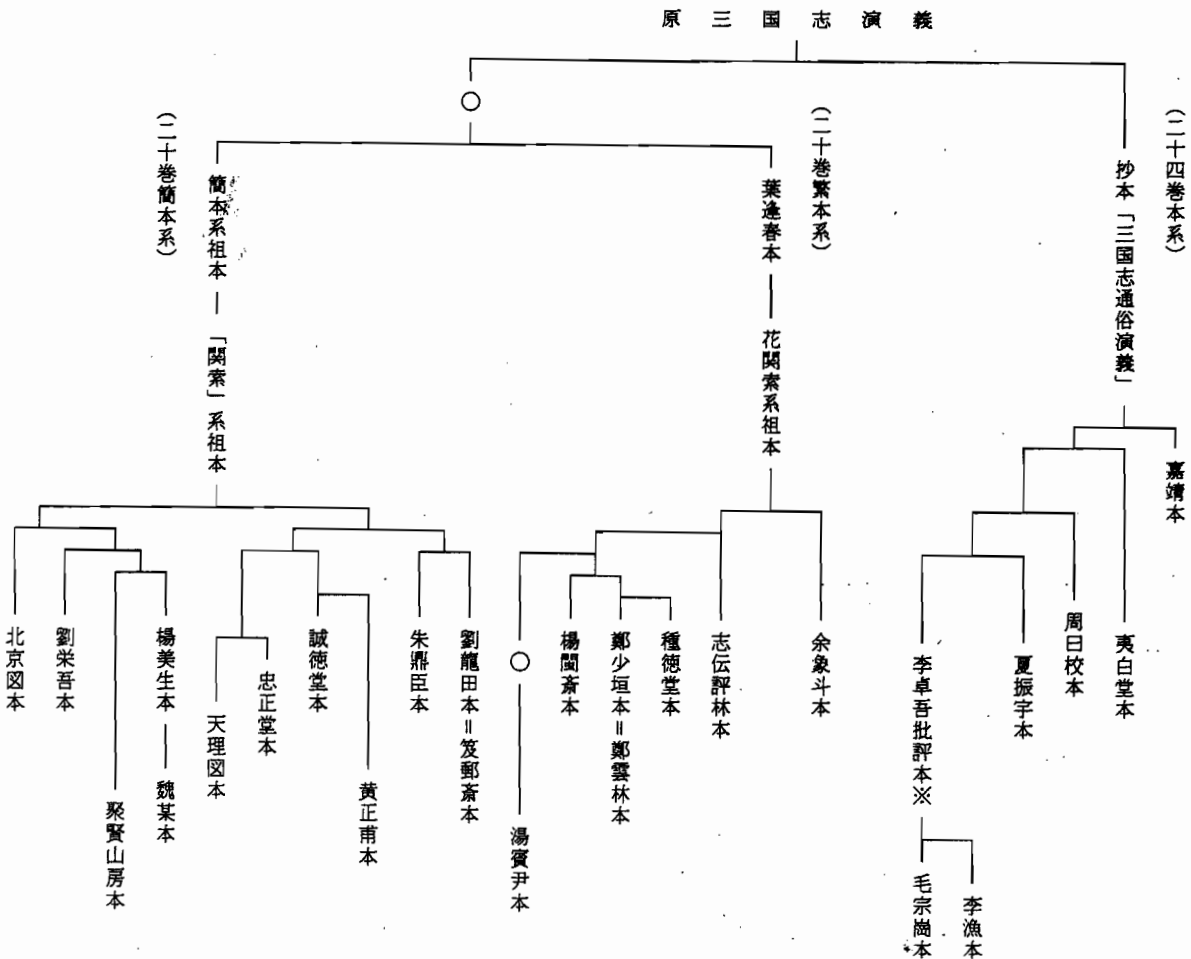
前節で、断りなく『演義』テキストの語を用いたが、実際のところ、『演義』のテキストには幾多の問題が付随している。

近年、『演義』の版本研究は目覚ましい進捗を見せ、現存する版本の系統付けなども、ほぼ定説を得るに至っている<sup>1)</sup>。参考までに、中川論の作成した『演義』版本の系統図を示そう(図〇—一参照)。

このように、『演義』版本の系統付けは、ほぼ完成を見ている。そして、その成果は、『演義』の内容研究にも重大な影響を与えざるを得ない。何故ならば、『演義』版本は系統ごとに内容の相異を見せるからである。この事実を、一つの版本(系統)に限定して、『演義』テキストの内容を分析しても、その分析は或る一系統にしか当て嵌らないローカルなものにしか成り得ないことを意味している。換言すれば、一種類(一系統)の版本のみを見て、『演義』テキストの内容を語ることは不可能なのである。

具体例を挙げよう。現在、毛宗崗本(以下、毛本)と呼ばれる版本が、『演義』の通行本として読まれている<sup>2)</sup>。ところが、この版本は、毛本以前に刊行された二十種を越える諸版本とはかなり性質を異にしているのである。第四・五章で詳述するが、毛本は編者(毛声山・毛宗崗父子)個人の歴史観・人物観が濃厚に反映されたテキストであり、結果として、毛本以前のテキストが共通して持っていた記述が、少なからず滲減している。つまり、『演義』テキストの生成を問題にするには、全く

図〇—一 『三国志演義』版本系統図(中川論氏作成のものに拠る)



※ 吳観名本は李卓吾批評本に含まれる。

ふさわしくない版本だと言わざるを得ない。

それでは、以前は原作だと認識され、現在でも現存最古の版本である嘉靖本はどうか、というところ、やはり毛本と同様にこれ一つで『演義』テキストの生成を論じることはできない。部分的ではあるにしろ、嘉靖本よりも古態をとどめた版本の存在が指摘されているからである<sup>〔二〕</sup>。つまり、嘉靖本は現存最古だが、すべての版本の祖本ではないのである。

つまり、『演義』テキストの生成を問題とする以上、現存する版本を原『演義』からそれぞれ発展した群体として捉え、処理せざるを得ない。ならば、複数の版本を参照することは必須と言える。

ただし、やはり、中心を定めないので議論が煩瑣に過ぎよう。そこで、本研究では暫定的に『李卓吾先生批評』三國志（呉観明本）を中心に置き、他の版本をも参照するという方法を選択する。

呉観明本を選択する理由を列挙しておこう。

### ①百二十回本である。

一般に、『演義』は百二十回よりなる章回小説だと認識されている。これは、通行本の毛本が、その体裁を採るためである。しかし、『演義』諸本を概観すると、百二十回の体裁を採るものは少なく、二十四巻本か二十巻本の体裁となっており、更に全体は二百四十に分割されるものがほとんどである。一方、呉観明本は百二十回本ではあるものの、実際には一回が二分され、それぞれに七字単句の標題が附されている。標題そのものは嘉靖本や周曰校本など先行する二十四巻本系版本に準じており、毛本とは一致しない。

つまり、呉観明本は百二十回本でありながら、二百四十に分割されるといふ、先行諸本と毛本の中間的な形態をとるのである。これは、

双方との比較を容易にする形と言い得るであろう。

### ②毛本の祖本である。

毛宗崗本が、何を祖本とするかは屢々議論されていたところであるが、ほぼ呉観明本が祖本であることが確認された<sup>〔三〕</sup>。すなわち、毛父子のテキスト改変過程を検証するには、呉観明本と毛本の比較が基礎作業となろう。

### ③周静軒詩が挿入されている。

この詩は、版本に拠って多少の異同こそあるが、嘉靖本を除く全ての版本に見られるものである。中川論は、周静軒詩は原『演義』にはなく「後から挿入されたに違いない<sup>〔三〕</sup>」と指摘する。とすれば、呉観明本は嘉靖本に比して二十巻本系に近いと言え、二十四巻本系と二十巻本系の比較をするにも適当であろう。

以上が、筆者が呉観明本を選択する理由である。

なお、本文中では、呉観明本が毛本を除く他系統の版本と原則的に一致するとき、単に『演義』と称することとし、諸系統に無視できない異同が存在するときは、その版本名を明示することとする。

### 〔註〕

〔一〕通常、「講史小説」と呼ばれることが多いが、筆者は『演義』などを安易に「小説」と称することに疑問を覚える。そこで、本研究では、単に「講史」と称している。



〔二〕『章氏遺書』（漢声出版社影印本 一九七三年一月）外編卷三「丙辰筭記」五二葉b  
一五三葉b。

〔三〕『中国小説史略』（魯迅全集）第九卷「人民文学出版社 一九八一年」所収）第十四  
篇「元明伝来之講史（上）」一二八頁。〔四〕註〔三〕所掲「元明伝来之講史（上）」  
及び「魏晉風土及文章与葉及酒之關係」（魯迅全集）第三卷「而已集」所収 五〇  
一一五二九頁）などを参照。

〔五〕磯部彰『〈西遊記〉受容史の研究』（多賀出版 一九九五年二月）八頁。

〔六〕註〔五〕所掲『〈西遊記〉受容史の研究』一六一―一七頁。

〔七〕この種の研究は本主に枚挙に暇がない。代表的などころでは、金文京「関羽の息子  
と係悟空（上・下）」（『文学』第五十四巻第五号「一九八六年六月」）七六一―七八頁、  
および同第八号「同年九月」八二―九二頁）、井上泰山他著『花関索伝の研究』（汲  
古書院 一九八九年一月）、大塚秀高「小説と物語―劍神説話を端緒として―」（『中  
国古典小説研究動態』第四号「一九九〇年十月」三三―六九頁）などが挙げられよ  
う。

〔八〕無論、絶無というわけではなく、金文京『三国志演義の世界』（東方選書 一九九三  
年十月）、井波律子『三国志演義』（岩波新書 一九九四年八月）などの専著もある。  
しかし、これらの本は概説書的な傾向が強く、ことテキストの詳細な分析について  
は不足していると筆者は考える。

〔九〕『演義』版本研究の専著としては、〔英〕魏安『三国志演義版本考』（上海古籍出版社  
一九九六年六月）と中川論『三国志演義』版本の研究』（汲古書院 一九九八年十  
二月）がある。後者は前者を含め、先行研究を網羅的に継承・発展させており、現  
在のところ、最も信頼し得る結論を出しているといつて良いであろう。故に、本論  
における版本の系統付けや版本の呼称などは、この『三国志演義』版本の研究』を  
踏襲している。

〔一〇〕日本でも事情は同じである。現在刊行されている『演義』の翻訳は、岩波書店版な

どが嘉靖本をも参照しているものの、基本的にはすべて毛本を底本としている。

〔一一〕註〔八〕所掲『三国志演義の世界』七 『三国志演義』の出版戦争』一九一一―二  
七頁。

〔一二〕註〔九〕所掲『三国志演義』版本の研究』第二章第三節「毛宗崗本の成立過程」一  
一五頁―一二八頁参照。

〔一三〕同右三九頁。

## 凡 例

- 一 漢字は原則的に新字体を用いた。但し、「豫」と「予」の如く誤読の恐れがあるものについては、適宜旧字体を用いた。
- 二 仮名遣いは、漢文訓読を含め現代仮名遣いに統一した。
- 三 文中の敬称は省略した。
- 四 引用資料で各版本を比較する場合、版本間の違いがわかりやすいよう、適宜空白を開けた。
- 五 註釈は各章末に附した。
- 六 本研究では、論考の性質上、特定のテキスト（史書・『演義』諸本など）を繰り返し用いる。註記の繁瑣を避けるため、多用するテキストの書誌をここに掲げておく。

### 〔三国志演義諸本〕

#### ① 呉観明本 不分巻百二十回

テキストは徳田武編『(対訳) 中国歴史小説集4』(ゆまに書房 一九八四年一月)所収の『(李卓吾先生批評) 三国志』(蓬左文庫蔵本影印)に拠った。なお、引用の際は回数・葉数を示すが、前述したように、呉観明本の一回は更に二分される。それゆえ、「第〇回前」「第〇回後」のように、一回を二分して示すこととする。

#### ② 嘉靖本(初刻・重刻) 二十四卷

初刻本のテキストは『三国志通俗演義』(人民文学出版社影印本 一九七五年七月)に拠り、重刻本(涵芬楼蔵本)のテキストは『(明

弘治版) 三国志通俗演義』(新文豊出版影印本 一九七九年十月)に拠った。引用する際は、巻数・葉数を示す。

#### ③ 毛宗崗本 百二十回(「毛本」と略称)

テキストは『三国志演義』(上海古籍出版社排印本 一九八九年二月)に拠った。引用の際は、回数・頁数を示す。

#### ④ 余象斗本 二十卷(繁本)

テキストは陳翔華主編『三国志演義古版叢刊五種』(中華全國圖書館文獻縮微複製中心 一九九五年五月)所収の『双峰堂批評三国志伝』(日本建仁寺他蔵本影印)に拠った。引用の際は巻数・葉数を示す。

#### ⑤ 劉龍田本 二十卷(簡本)

テキストは前掲『三国志演義古版叢刊五種』所収の『喬山堂本三国志伝(上・下)』(天理図書館等蔵本影印)に拠った。引用の際は巻数・葉数を示す。

### 〔史書〕

正史については、便宜上、排印本を用いているが、テキスト本文は百衲本をも参照した。引用の際の冊数・巻数・頁数を示すが、全て排印本による。

#### ⑥ 『三国志』

中華書局排印本(平装全五冊) 一九八二年七月第二版。

⑦『後漢書』

中華書局排印本（平装全十二冊） 一九六五年五月。

⑧『晋書』

中華書局排印本（平装全十冊） 一九七四年十一月。

⑨『資治通鑑』（『通鑑』と略称）

中華書局排印本（平装全二十冊） 一九五六年六月。引用の際は、冊数・巻数・頁数を示す。

⑩『資治通鑑綱目』（『綱目』と略称）

テキストは神戸大学附属図書館所蔵の万暦刊本に拠った。引用の際は巻数・葉数を示す。

〔その他〕

⑪『三国志平話』（『平話』と略称）

テキストは神戸大学附属図書館所蔵の内閣文庫影印本に拠った。ただし、『平話』には当て字・欠字が極めて多く、そのまま引用すると、読解が困難である。また、神戸大学蔵本に限れば版心が判別できず、葉数を示すことが不可能である。そのため、引用の際は、特に不都合の無い限り、『元刻講史平話集』（北京図書館出版社 一九九九年六月）第五冊（排印線装本）の校訂に従い、同書の葉数によって引用箇所を

示す。

⑫雑劇

テキストは『全元戯曲』全十二巻（人民文学出版社 一九九〇年一月—一九九九年二月）に拠った。引用の際は巻数・頁数を示す。

⑬『花関素伝』

テキストは井上泰山〔他〕著『花関素伝の研究』（汲古書院 一九八九年一月）所収の影印（二三五—三三四頁）に拠った。引用の際は集名（前集・後集・続集・別集）・葉数を示す。

第一部 『三国志演義』における伝説の受容

## 小序

第一部では、『演義』が如何に伝説を受容しているかという観点から『演義』テキストの生成について考察する。かつて、小川環樹は次のように指摘した。

「断橋」の題目は同じであっても、張飛の高音に橋がくずれおちたという（『平話』）のと、敵をいったん追い返したあとで、その追撃を少しでもおくらせるために橋を切りおとしたという（『演義』）のは、大きなちがひがある。前者が張飛の武勇をあまりにも誇張しすぎているのに対し、後者とても、曹操軍の退却はちょっとありえないような話ではあるが、よほど合理化されている。が、それほど不合理ではあっても元の時代の人々はそれで満足していたらしい。<sup>〔一〕</sup>

小川の言説の中心は『平話』を評することにあるが、ここでは『演義』をして「合理化」されると述べていることに注目したい。何故なら、「合理化」こそが『演義』テキストを特徴づける一大要因だからである。小川が例示した「断橋」の故事は史書に見えるものであり<sup>〔二〕</sup>、『演義』は、『平話』に比べて史実に接近しただけのように見える。しかし、『演義』を仔細に検討してゆくと、「伝説（非史実）」をも、『演義』は「合理化」していることが窺える。『平話』や雑劇などでは餘りにも荒唐無稽で露骨に「伝説」の様相を見せている挿話が、『演義』では一見しただけでは伝説と判らない形で語られるのである。つまり、『演義』は、『平話』などに比べて単純に史実に接近するのではない。場合によっては『平

話』以上に伝説を取り込みながら、その伝説を合理化して巧妙に史実と整合させてしまっているのである。

ここでは、呂布（第一章）、諸葛亮と司馬懿（第二章）という人物に注目し、『演義』における伝説の受容と、受容した伝説に対する「合理化」の様相を、具体的に分析してゆきたい。

〔註〕

〔一〕『三國演義』の発展のあと（『小川環樹著作集』第四卷「筑摩書房 一九九七年四月」

三五―五四頁所収）三七頁

〔二〕『三國志』蜀書・張飛伝（第四冊卷三六第九四三―九四四頁）参照。

# 第一章 劍と馬―呂布

本章では、『演義』前半の物語で異彩を放つ呂布という人物を探り上げ、彼の形象に隠された伝説について論じてみたい。

## 第一節 『演義』の呂布の形象

まず、『演義』における呂布の形象の基調を確認しておくべきだろう。『演義』での呂布の形象に大きな影響を及ぼしていると思われるのは、彼の最期の場面である。

曹操と劉備の連合軍に敗れた呂布は、曹操の前に引き出される。曹操の傍らには、呂布のかつての同盟者、劉備の姿があった。

布哀告玄德曰、「公為坐上客、布為階下虜、何不発一言而相寛乎」。玄德點頭。操知其意、令人押過呂布來。布曰、「明公所患不過于布。布今已服、天下不足憂矣。明公為步將、布為騎將、天下不足定矣」。操回顧玄德曰、「目布欲如何」。玄德答曰、「明公不見布之事于建陽・董卓乎」。操頷之。布目視玄德曰、「是兒、最無信者」。操令牽下樓楹之。布回首曰、「大耳兒、不記轅門射戟時耶」。操大怒。忽一人大叫曰、「呂布匹夫、何懼死也」。視之、衆刀斧手擁張遼至。操教縊死呂布、然後梟首。<sup>二</sup>

(呂布は玄徳に哀れみを請う。「御身は坐上の客となり、呂布は階下で捕われの身だ。どうして一言ぐらい寛恕を請うてくれないのか」。玄徳は頷いた。曹

操は玄徳の意を知り、命じて呂布を引き出させた。呂布が言う。「閣下が最も憂えておられたのはこの呂布のはず。今、それがしが降伏した以上、天下に憂えることなどありません。閣下が歩兵の大將となり、呂布が騎兵の大將となれば、天下は瞬く間に定まることではありません」。曹操は玄徳の方へ振返って言った。「呂布めをどうしたものであろう」。玄徳が答える。「閣下には呂布が丁建陽と董卓に仕えたのを御覧になっていませんか」。曹操は頷いた。呂布が玄徳を見て言う。「こやつが最も信用ならんのだ」。曹操は命じて櫓から引き下ろしくびり殺させようとした。呂布は振り返って言う。「みみずくどの、轅門で戟を射てやった時のことを覚えておらんのか」。曹操が大いに怒る。突然、一人が大声でよばわった。「匹夫呂布、どうして死ぬのを恐れるか」。見ると、刎刑人たちが張遼を連れてやってきたのであった。曹操は呂布をくびり殺し、その首をさらすように命じた。

状況に少しく解説が必要であろう。劉備が曹操に答えた「明公不見布之事于建陽・董卓乎」の語は、この二人（丁建陽・董卓）がともに部下である呂布に殺されたことを示唆している<sup>三</sup>。劉備は、主君を裏切つて殺すような人間を用いてはならないと曹操に進言したのである。また、「轅門射戟」とは劉備と袁術が争った際、轅門に立てた戟を矢で射当てることで、呂布は両者を仲裁したことを指す<sup>四</sup>。呂布は自分が劉備の恩人であると主張したわけであるが、もともと自分の根拠地であった徐州を呂布に奪われた劉備が、そのような主張を認めるわけもなかった。つまり、呂布の言は身勝手なものであり、ひたすら自己保身に努めて

いるだけなのである。この挿話の前後において彼の部下であった陳宮と張遼の硬骨漢ぶりが強調されているだけに、ここでの呂布の形象は極めて否定的であると言わざるを得まい。毛本もほぼ同じような記述であり、加えて呂布の「公為坐上客、布為階下囚、何不発一言而寛乎」という発話（セリフ）の後に次のような評が見える。

宮何硬、布何軟。<sup>〔四〕</sup>

（陳宮の何と硬骨なことよ、呂布の何と軟弱なことよ。）

この場面における呂布像を集約した語と言えよう。

ところで、この『演義』に描かれる呂布の最期は史書に由来を求めることが出来る。『通鑑』に拠つて示そう。

布見操曰、「今日已往、天下定矣」。操曰、「何以言之」。布曰、「明公之所患不過布、今已服矣。若令布將騎、明公將歩、天下不足定也」。顧謂劉備曰、「玄德、卿為坐上客、我為降虜、繩縛我急、独不可一言邪」。操笑曰、「縛虎不得不急」。乃命緩、劉備曰、「不可。明公不見呂布事丁建陽・董太師乎」。操領之。布目備曰、「大耳兒、最叵信」。<sup>〔五〕</sup>

（布 操に見えて曰く、「今日 已に往く、天下 定まれり」と。操曰く、「何を以て之を言うや」と。布曰く、「明公の患うる所 布に過ぎず、今 已に服す。若し布をして騎を將いしめ、明公 歩を將いれば、天下 定むるに足らざるなり」と。顧みて劉備に謂いて曰く、「玄德、卿 坐上の客と為り、我 降虜と為り、繩 我を縛ること急、独だ一言するべからざらんや」と。操 笑いて曰く、「虎を縛るに急ならざるを得ず」と。乃ち緩やかなるを命ず。劉備曰く、「不可なり。明公 呂布の丁建陽・董太師に事えしを見ずや」と。操

之に領く。布 備を目して曰く、「大耳兒、最も信すべからず」と。）

このような呂布の言動は、当然史家の彼に対する評価に直結する。『三国志』魏書・呂布伝の評に言う。

評曰、呂布有虓虎之勇、而無英奇之略、輕狡反覆、唯利是視。自古及今、未有若此不夷滅也。<sup>〔六〕</sup>

（評に曰う、呂布 虓虎の勇有りて、英奇の略無く、輕狡反覆、唯だ利のみ是れ視る。古より今に及ぶまで、未だ此くの若く夷滅せざるは有らざるなり。）

また、『後漢書』呂布伝の贊に言う。

術既叨貪、布亦翻覆。<sup>〔七〕</sup>

（哀）術 既に叨貪し、〔呂〕布 亦た翻覆す。）

『演義』は、これらの評や贊を継承し、しばしば呂布を指して「無義之輩」「無恩之人」と評する。一例のみ挙げよう。

玄德告訴呂布之事、操曰、「布乃無義之輩、吾与賢弟併力誅之」。<sup>〔八〕</sup>

（玄德が呂布のなしたことを告げると、曹操は言った。「呂布は義ということを知らぬ奴だ。私は賢弟〔劉備を指す〕と力を併せて彼奴を誅してくれようぞ」。）

周知の通り、『演義』の眼目の一つとして忠義を称揚することがあるのだから、「無義」と形容される呂布が敵役となるのは当然であろう。

しかし、呂布の形象は単なる「無義之輩」ではない。それは、呂布を評する次のような語を見れば明瞭であろう。

儒曰、「此丁原義児呂布、勇不可当也」。<sup>二〇</sup>

(李儒が言う。「これは丁原が養子の呂布でござって、その勇、万夫不当の者であります」。)

紀靈曰、主公不可造次。呂布当世英雄、兼有徐州之地。<sup>二一</sup>

(紀靈が言う。「わが君、軽はずみはお止めください。呂布は当世の英雄であって、おまけに徐州を領しております。……」)

いずれも呂布の武勇を評価する点で共通する。またこのような評語に頼るまでもなく、関羽と張飛という『演義』における武の象徴たる二人と、しばしば一騎打ちをし、互角以上に渡り合う呂布の武勇も尋常一様のものであるはずがない<sup>二二</sup>。

ところで、ここに問題がある。関羽・張飛の武勇が多分に(史実ではないという意味で)伝説的なものであることは、これまでに指摘されている<sup>二三</sup>。だとすれば、『演義』にあつて、たびたび関張と矛を交えることになる呂布の武勇も、単純に史実に基づくものではなく、伝説による潤色が大いに施されているはずであろう。そこで、次節以降、呂布が所有する二つのアイテム、すなわち方天画戟と赤兔馬に注目して、『演義』が如何に伝説を受容したかを見てゆきたい。

## 第二節 方天画戟

『演義』にあつて、関羽が青龍偃月刀を持ち、張飛が一丈八尺の蛇矛を持つというように、しばしば英雄には固有の武器が与えられる。当然、これは『演義』に限ったことではなく、古今東西、普遍的な現象だと言つて良い。例えば、ブリテンのアーサー王はエクスカリバーを得、犬塚信乃が村雨を受け継ぐといったように。そして呂布にも固有の武器<sup>二四</sup>、すなわち方天画戟が与えられる。

具体的な記述を示そう。呂布が初めて登場する第三回後において、彼は已に方天画戟を携えている。

時李儒見丁原背後一人、身長一丈、腰大十围。弓馬閑熟、眉目清秀。

五原郡九原人也、姓呂、名布、字奉先、官拜執金吾。自幼随従丁原、拜為義父。当日、布執方天画戟、立於丁原之後。<sup>二五</sup>

(そのとき李儒の目に入ったのは、丁原のうしろに立つ一人の男、身のたけ一丈、腰まわりは十围もあり、弓馬に熟達し、眉目すずやかな者、五原郡九原の人で、姓は呂、名は布、字を奉先といい、執金吾の官にあり、幼いときより丁原に付き従い、義父と拜して仕えている者であった。この日、呂布は方天画戟を携えて、丁原の後に佇立していたのである。)

そして、この後、彼は戦に赴くに当たつて、常に方天画戟を執り、縦横無尽に戦場を駆け巡る。

王匡……見呂布出陣、頭帶三叉束髮紫金冠、体掛西川紅錦百花袍、身披獸面吞頭連環鎧、腰繫勒甲玲瓏獅蛮帶、弓箭隨身可体、手持画桿方天戟、坐下嘶風赤兔馬、果然是人中呂布、馬中赤兔。人馬之中、漢



末両絶。二六

(王匡が、……呂布の出陣するを見るに、そのいでたちは、頭には三叉の束髮紫金の冠をいただき、体には西川でできた紅錦の百花の袍をつけ、身に獸面呑頭の模様の連環の鎧を着込み、腰に鎧おさえの玲瓏たる獅蛮の帯をしめ、弓矢を身につけ、手には画桿の方天戟を持ち、跨るは風にいななく赤兔馬、まこと、これこそ人中の呂布、馬中の赤兔と言うのもむべなるかな。人馬ともに、漢末に冠たるものであった。)

右は、『演義』にあつて、呂布の軍装を最も精緻に描写したものと云つて良い。呂布は戦場で、方天画戟を武器として活躍する。また、呂布の跨る赤兔馬にも、当然注目すべきであるが、これについては後述することとして、方天画戟に焦点を絞ることにしよう。

まず、方天画戟とは如何なる武器であるのかを、確認しておかねばなるまい。この武器は方天戟とも称され、「穂先に鋼鉄の槍のような尖つた刃に加えて、その横に」一對の「三日月状の『月牙(げつが)』と呼ばれる刃を付けた」<sup>二七</sup>武器だという。問題となるのは、その発生の歴史であろう。この方天画戟に類する武器は、文献の上では、宋代以降にしか現れず、北宋の康定年間に編まれた『武経总要』に、「戟刀」という名で記載されるのが、最も古い記録とされる。

とすれば、実際の呂布が、方天画戟を使ったはずがない。方天画戟が、後世になって呂布に賦与されたのは明白である。ならば、何故に呂布は方天画戟を持つことになったのか。

実のところ、この疑問に答えるのは、ほぼ不可能であろう。と言うのも、「方天戟」という名称そのものが文献にあらわれるのは、管見の及ぶ限り、元代に入ってからなのだが、それは『三国志平話』においてで

あり、しかも持っているのは呂布なのである。

布騎赤兔馬、身披金鎧、頭帶獬豸冠、使丈二方天戟、……<sup>二八</sup>  
(呂布は赤兔馬に乗り、身には金の鎧をまとい、頭には獬豸の冠をかぶり、一丈二尺の方天戟を使う、……)

右の表現が、先に示した『演義』における呂布の描写と類似することは指摘するまでもなからう。ともかく、最も古く方天戟を持たされた人物が呂布である以上、その来歴を探ることは不可能である。

ゆえに、ここでは視点を交えることにしよう。呂布以外に、方天画戟を持つことになった英雄に着目するのである。

### 第三節 呂布と薛仁貴

呂布と並んで、方天画戟を持つ英雄として知られているのは、唐代に活躍した薛仁貴であろう。清代に成った『説唐後伝』(全五十五回)に拠つて、その描写を確認したい。第十五回「龍門県将星降世 唐天子夢擾青龍」において、唐の太宗が見た夢の中に(この時点では名を明らかにされないが)薛仁貴が登場する。

那晚後面又來了一人、頭上粉白將巾、身上白綾戰襖、坐下白馬、手提方天戟、……<sup>二九</sup>

(あにはからんや、後ろからもう一人やって来た。「その姿を見ると、」頭には白い頭巾、身には白いあやぎぬのひたたれを付け、白馬に跨り、手に方天

戟を持っていた。……)

唐代の武将である薛仁貴も、呂布と同様、実際に方天画戟を使ったはずがない。しかし、(この点でも呂布と同じく)薛仁貴は、かなり早い時期から方天戟を持たされている。『永樂大典』(一四〇八年に成立)巻五千二百四十四に収める「薛仁貴征遼事略」(以下「事略」と略す)に次のようにある。

向山脚一壁転過一騎馬來、馬上一箇年少將軍、素袍瑩鎧、赤馬朱纓、  
擲轉方天戟、取弓箭在手、一箭射莫離支墜馬。<sup>三〇</sup>

(山の麓から一騎の馬が現れた。馬上には一人の年若い將軍が、白い袍ときらめく鎧をまとい、跨る赤い馬には朱の飾りひもをつけていたが、持っていた方天戟をしまうと、弓矢を取り出し、一矢で莫離支を馬から射落とした。)

この「事略」は、方天(画)戟の名が現れる例として、ごく初期のものであることは間違いない。つまり、現存する文献に拠る限り、呂布と薛仁貴は、方天画戟を持つ最も早い時期の英雄と言える。換言すれば、呂布と薛仁貴は、ともに「方天戟の使い手」という伝説を賦与されているわけである。ならば、方天戟を共通項として、この二人は併称されていることになりはしないか。

この観点に立って、呂布または薛仁貴の現れるテキスト(この場合、史書を除く小説・戯曲など)を検討すると、興味深い事実にゆきあたる。この二人に対して、それぞれ特定の人物が組み合わされているのである。

呂布の場合、しばしば李肅(宿)という人物が組み合わされる。例えば、先に引用した『平話』において、呂布の軍装が述べられる部

分の直後には、この李肅の軍装が対になる形で語られる(詳細は後述)。さらに続けて、『平話』は次のように云う。

用文者、有大夫李儒、用武者、有呂布、李宿、三人補佐董卓。<sup>三一</sup>  
(文を用いる者には大夫の李儒が、武を用いる者には呂布と李宿がいて、この三人が董卓を補佐しているのであった。)

ここでは呂布と李宿が文字通り並称されており、『平話』が李宿(肅)を重要視していることが窺える。

さらに、雑劇にあっても、李肅は呂布の配下として、しばしば登場する<sup>三二</sup>。また、『演義』では、李肅は董卓の配下として登場し、呂布に赤兔馬をもたらししている<sup>三三</sup>。すなわち、李肅は、しばしば呂布に伴われる形で現れると言えよう。

一方、薛仁貴に組み合わされるのは、葛蘇文なる人物である。先に引用した「事略」の記述に拠れば、薛仁貴は「莫離支」を馬から射落としているが、この「莫離支」こそ葛蘇文であった。

葛蘇文は、薛仁貴が正末となる「賢達婦龍門隱秀」雑劇<sup>三四</sup>にも敵役として登場し、また、「薛仁貴榮帰故里」雑劇<sup>三五</sup>では、薛仁貴が「摩利支(莫離支と音通)」を撃退したという言及がある。葛蘇文が、しばしば薛仁貴と組み合わされると見ることに問題はあまい。

この李肅と葛蘇文は共に史書に名が見え、実在の人物ではある。しかし、史書が伝える二人の事績は、後代のテキストと大きく異なっている。まず、李肅について検討することとしよう。『三国志』魏書・董卓伝に次のような記述がある。

布使同郡騎都尉李肅等、將親兵十餘人、偽著衛士服守掖門。布懷詔書。卓至、肅等格卓。卓驚呼布所在。布曰「有詔」、遂殺卓、夷三族。……卓死、呂布使李肅至陝、欲以詔命誅輔。輔等逆與肅戰、肅敗走弘農、布誅肅。〔二六〕

(初平三年「一九二」四月)〔呂〕布 同郡の騎都尉李肅等をして、親兵十餘人を將い、偽りて衛士の服を著け掖門を守らしむ。布 詔書を懐く。卓の至るに、肅等 卓を格す。卓 驚きて布の在る所を呼ぶ。布は「詔有り」と曰い、遂に卓を殺し、三族を夷す。……卓の死するや、呂布 李肅をして陝に至らしめ、詔命を以て〔牛〕輔を誅さんと欲す。輔等 逆えて肅と戦い、肅 弘農に敗走し、布 肅を誅す。)

『三国志』で李肅が現れるのは董卓伝のみ、それも右に示した部分においてだけである。『後漢書』『通鑑』では董卓が掖門から入った後、「肅以戟刺之」<sup>二七</sup>と見え、その重要性は多少増してはいるが、いずれにせよ、基本的に同様の事績が記載されている。つまり、そこには、『平話』に代表される、李肅が呂布と共に活躍する場面などはない。史書と後代のテキストが一致するのは、李肅が呂布の配下であるという点だけとさえ言えよう。

一方、葛蘇文の原型は、史書に見える蓋蘇文という人物に求められる。蓋蘇文の名は『旧唐書』『新唐書』の東夷伝などに見え、貞観年間に高麗王の高建武を殺し「莫離支」の職についたという事績が伝えられている<sup>二八</sup>。ただし、『旧唐書』『新唐書』『通鑑』に拠る限り、蓋蘇文が薛仁貴と戦ったという記述はない。「事略」や雑劇に現れた薛仁貴と葛蘇文(摩利支)の関係は後代に創作されたものである。

すなわち、李肅が呂布とともに戦場で活躍したり、葛蘇文が薛仁貴と

戦ったりするのは、明らかに後世の創作、つまり伝説なのである。ならば、このような伝説が附された意図は何処にあるのか。それを考える場合、後世のテキストに現れた、李肅と薛仁貴の姿が手懸かりになると思われる。

先に指摘した通り、『平話』では、呂布の軍装に続けて李肅のそれが細かく描写されている。重複する部分もあるが引用しておく。

当日、太師領軍兵五十餘万、戰将千員、左有義兒呂布。布騎赤兔馬、身披金鎧、頭帶獬豸冠、使丈二方天戟、上面挂黃幡豹尾、步奔過騎為左將軍。右辺有漢李広之後李肅、戴銀頭盔、身披銀鎖甲白袍、使丈五倒須悟鈎槍、又弓帶箭。〔二九〕

(その日、太師は兵五十餘万、武將千人を率いており、その左には養子である呂布がいた。呂布は赤兔馬に乗り、身には金の鎧をまとい、頭には獬豸の冠をかぶり、一丈二尺の方天戟を使い、上方には黄色の幟と豹の尾の飾りものをかけ、歩みはやく来りて「?」、左將軍の任につく。右側には漢の李広の裔たる李肅がいて、銀の兜をかぶり、身には銀の鎖帷子と白い袍をつけ、一丈五尺の倒須悟鈎の槍を使い、弓をたばさみ矢を帯びていた。)

注目すべきは、李肅の纏う「白袍」であろう。前述のように、李肅に関する史書の記述は極めて少なく、その中に李肅が「白袍」を身に付けていたなどという記述はない。ならば、白袍を纏う李肅というイメージが、後代に創作されたものであることは間違ひなからう。そして、中国史上にあって、戦場で「白」を纏った人物として、真っ先に想起されるのは他ならぬ薛仁貴なのである。薛仁貴が戦場で白い衣を纏っていたという記述は、早くも『旧唐書』薛仁貴伝に見える。

仁貴自侍驍勇、欲立奇功、乃異其服色、着白衣、握戟、腰韃張弓、大呼先入、所向無前、賊尽披靡卻走。<sup>三〇一</sup>

(仁貴は自ら驍勇を待<sup>た</sup>み、奇功を立てんと欲し、乃ち其の服色を異にし、白衣を著<sup>つ</sup>け、戟を握り、腰韃には「一」張りの弓、大呼して先に入り、向かう所に前<sup>す</sup>む無く、賊は尽<sup>つく</sup>く披靡し卻走す。)

『新唐書』にも同様の記述が見え<sup>三〇二</sup>、薛仁貴が白い衣を着ていたのは史実と見て差し支えなからう。また、先に挙げた「事略」や『説唐後伝』の薛仁貴も、史書を踏襲して白い袍を身に付けている。

李肅と薛仁貴が共に「白」を纏っているのは、決して偶然ではあるまい。おそらく、後代のテキストが李肅に対して附加した「白」のイメージの源流は、薛仁貴に求められるはずである<sup>三〇三</sup>。

筆者がそう考える根拠は、「事略」などに描かれる葛蘇文の容貌にある。「事略」に拠れば、葛蘇文は以下のような容貌であったと云う。

陣前捧一員将、頂三叉紫金冠、披絳獅服、横一柄大棹刀、跨赤虬馬、左右带兵器両韃弓、身背飛刀五口、陣前耀武自言、「吾乃莫離支葛蘇文也」。<sup>三〇四</sup>

(陣前におし立てられた一人の将、三叉の紫金の冠をいただき、絳き獅服をまとい、一振りの長柄の大刀をよこたえ、跨るは赤虬馬、左右の腕には共に弓をとり、五振りの飛刀を背負っていた。陣前で武をひらめかせて自ら言うには、「我は莫離支葛蘇文なり」。)

李肅と異なり、葛(蓋)蘇文の容貌については、史書にも言及がある

のだが、右に示した「事略」のそれとは隔たりがある。『旧唐書』東夷伝は、蓋蘇文について次のように記す。

蘇文、姓泉氏、鬚貌甚偉、形体魁傑、身佩五刀、左右莫敢仰視。<sup>三〇五</sup>  
(蘇文、姓は泉氏、鬚貌は甚<sup>はな</sup>だ偉にして、形体は魁傑、身には五刀を佩<sup>お</sup>び、左右敢えて仰ぎ視る莫<sup>な</sup>し。)

「事略」も、この描写を一応踏まえてはおり、例えば「事略」の「身背飛刀五口」という描写は、『旧唐書』の「身には五刀を佩び」という記述に倣うものと言える。

しかし、「事略」に描かれた葛蘇文の姿については、史書に見えない要素が大半を占める。そして、そのほとんどが『演義』や『平話』における呂布と符合することは注目に値しよう。葛蘇文は方天画戟こそ持たないが、「三叉紫金冠」をかぶり、『演義』の呂布は「三叉束髮紫金冠」をかぶる、「絳獅服」を身にまとい(呂布は「西川紅錦百花袍」及び「獅鬚帶」をつける)、「赤虬馬」に乗る(呂布は「赤兔馬」に乗る)のである。葛蘇文が、呂布と類似した姿に描かれているのは疑いのないところであろう。

つまり、史書には見えない粉飾を施されて、『平話』の李肅は薛仁貴に、「事略」の葛蘇文は呂布に準えられている。ならば、『平話』に現れる呂布と李肅という対も、「事略」に描かれる薛仁貴と葛蘇文という対も、意味するところは同じであろう<sup>三〇六</sup>。すなわち、双方とも、呂布と薛仁貴を組み合わせることが必要だったのである。しかし、活躍した時代を異にする二人の英雄をそのまま同じ舞台に立たせることは不自然であり、そのため李肅もしくは葛蘇文という代替物を用意したのであろう。

別言すれば、このような強引な操作をしなければならぬまでに、呂布と薛仁貴という組み合わせは強固なものなのである。

それが証拠に、李肅、葛蘇文という代替物を使わず、もっと直截に呂布と薛仁貴を併称するテキストも存在する。すなわち、『水滸伝』<sup>三三六</sup>である。

『水滸伝』第三十五回「石將軍村店寄書 小李広梁山射雁」に、次のような挿話がある。

青州より梁山泊に向かう道中、对影山にさしかかった宋江と花榮は二人の好漢に遭遇する。

宋江と花榮兩個、引了二十餘騎軍馬向前探路。至前面半里多路、早見一簇人馬、約有一百餘人、前面簇擁着一個騎馬的少壯士。怎生打扮、但見、

頭上三叉冠、金圈玉鈿。身上百花袍、錦織团花。甲披千道火龍鱗、帶束一条紅瑪瑙。騎一疋胭脂抹就如龍馬、使一条朱紅画桿方天戟。背後小校、尽是紅衣紅甲。

那個壯士穿一身紅、騎一疋赤馬、立在山坡前、大叫道、「今日我和你比試、分個勝敗、見個輸贏」。只見对過山岡子背後、早擁出一隊人馬來、也有百十餘人、前面也捧着一箇年少騎馬的壯士。怎生模樣、但見、

頭上三叉冠、頂一團瑞雪。身上鑲鉄甲、披千点寒霜。素羅袍光射太陽、銀花帶色欺明月。坐下騎一疋征駝<sup>三三七</sup>玉獸、手中輪一枝寒戟銀蛟。背後小校、都是白衣白甲。

這個壯士穿一身白、騎一疋白馬、手中也使一枝方天画戟。<sup>三三八</sup>  
(宋江と花榮のふたりは、二十餘騎の人馬をひきつれて斥候に出た。半里ほ

どゆくと、早くも一群の人馬が見え、総勢一百餘人、その先頭におし立てられたのは一人の年若い騎馬の勇士であった。そのいでたちはと見れば、

頭上の三叉の冠は、金を圍らし玉を鈿め、身上の百花の袍は、錦も織り团花あり。甲は千道の火龍の鱗を披、帯は一条の紅の瑪瑙を束ぬ。騎するは一疋の胭脂もて抹り就せる龍の如き馬、使うは一条の朱紅の画桿の方天戟。背後の小校は、尽く是れ紅衣紅甲なり。

その勇士は全身に紅をまとい、一疋の赤い馬に乗り、山の斜面の前に立って、大声で呼ばわって言った。「今日こそ俺と貴様で腕試しをして、勝負を付け、白黒を決めようじゃないか」。すると、向かいの山の背後から、どっと一隊の人馬がくりだしてきた。同じく総勢百十餘人、その先頭におし立てられたのは、やはり年若い騎馬の勇士。そのいでたちはと見れば、

頭上の三叉の冠は、一團の瑞雪を頂き、身上の鑲鉄の甲は、千点の寒霜を披る。素羅の袍は光太陽を射、銀花の帯は色明月を欺く。坐下に騎するは一疋の征駝玉獸、手中に輪わすは一枝の寒戟の銀の蛟。背後の小校は、都て是れ白衣白甲なり。

こちらの勇士は一身に白をまとい、一疋の白い馬に乗り、手には、やはり一枝の方天画戟を執っていた。

この後、宋江と花榮の眼前で二人は一騎打ちを始めるが、なかなか決着がつかない。数十合も斬り結ぶうちに、二人の方天画戟の穂がからまつてほどけなくなってしまう。それを見た花榮は弓で戟の穂を射抜き、二人の争いを仲裁する。

二人の好漢のうち、紅をまとうのが「小温侯」呂方、白をまとうのが「賽仁貴」郭盛である。「温侯」が呂布の爵位、「賽仁貴」が「薛」仁貴に比肩する」の意であることから、また、呂方(三叉冠、百花袍、

赤馬、方天画戟」と郭盛（素羅袍、方天画戟）の容姿からも、この二人が呂布と薛仁貴になぞらえられているのは明らかであろう。裏を返せば、呂方と郭盛の存在は、呂布と薛仁貴を併称する意識を如実に表すと云える。『水滸伝』は、生きた時代を異にする呂布と薛仁貴を本来の時代（呂布であれば後漢末、薛仁貴であれば初唐）から引き剥がし、同時代（この場合は北宋末）に転生させることによって、この二人を明確に対にするのである。

さて、ここに至って、根本的な疑問に突き当たらざるを得ない。何故、呂布と薛仁貴は対にされるのか。

#### 第四節 英雄の祖型

この疑問に明確に答えることは難しいであろう。しかし、一つの手がかりは示し得るように思う。葛蘇文が呂布の影であり、李肅が薛仁貴の影であるのと相似形を描くように、実は、呂布と薛仁貴も一人の英雄の影に過ぎないのである。

その英雄の名を李広という。

『三国志』魏書・呂布伝は、呂布が武術に優れていたことを次のように表現する。

布便弓馬、膂力過人、号為飛将。<sup>三九</sup>

（呂）布は弓馬に便にして、膂力は人に過ぎ、号して飛将と為す。）

この「飛将」という号は、李広がその祖なのである。『史記』李將軍列

伝に言う。

広居右北平、匈奴聞之、号曰、「漢之飛將軍」、避之數歲、不敢入右北平。<sup>四〇</sup>

（李）広の右北平に居るに、匈奴之を聞きて、号して漢の飛將軍と曰い、之を避くこと數歲、敢えて右北平に入らず。）

李広以後、呂布の他にも飛将と号される人物はいるが、いずれにせよ武勇、特に弓の技に優れていたのを李広に比されている。

薛仁貴の場合、「飛将」と号されていた史実はない。しかし彼もまた弓術に非常に巧みな人物であった。『旧唐書』薛仁貴伝に次のような挿話が見える。

時九姓有衆十餘万、驍健數十人逆来挑戰、仁貴發三矢、射殺三人、自餘一時下馬請降。仁貴恐為後患、並坑殺之。……軍中歌曰、「將軍三箭定天山、戰士長歌入漢關」。九姓自此衰弱、不復更為後患。<sup>四一</sup>

（時に九姓に衆十餘万有り、驍健數十人をして逆え来りて戦いを挑ましむるに、仁貴三矢を發し、三人を射殺し、自餘一時に下馬して降を請う。仁貴後患と為るを恐れ、並せて之を坑殺す。……軍中に歌いて曰く、「將軍三箭もて天山を定め、戰士長歌して漢關に入る」と。九姓は此れ自り衰弱し、復た更に後患と為らず。）

「三箭もて天山を定む」は薛仁貴の武勇を語る有名な語で、変型して先述した雑劇「薛仁貴榮歸故里」などでも用いられる。

ところで、同じような挿話が『史記』李將軍伝にも見える。

匈奴大入上郡、天子使中貴人從廣勸習兵擊匈奴。中貴人將騎數十縱、見匈奴三人、与戰。三人還射、傷中貴人、殺其騎且尽。中貴人走廣。廣曰、「是必射雕者」。廣乃遂從百騎往馳三人。三人亡馬步行、行數十里。廣令其騎張左右翼、而廣身自射彼三人者、殺其二人、生得一人。果匈奴射雕者也。〔四三〕

(匈奴 大いに上郡に入り、天子 中貴人をして廣に従いて兵を勸習し匈奴を撃たしむ。中貴人 騎數十を將いて縱いままにし、匈奴三人を見て、与に戦う。三人還りて射、中貴人を傷つけ、其の騎を殺すこと且に尽くさんとす。中貴人 廣に走る。廣曰く、「是れ必ず雕を射る者なり」。廣 乃ち遂に百騎を從えて往きて三人を馳う。三人 馬を亡いて歩行し、行くこと數十里なり。廣 其の騎をして左右の翼を張らしめ、而して廣は身自ら彼の三人の者を射、其の二人を殺し、一人を生得す。果たして匈奴の雕を射る者なり。)

ともに異民族を敵とし、優れた弓術によって三人の敵を射落とすなど、類似した状況が描かれる。これは偶然の一致ではあるまい。薛仁貴の弓の技を語るのに、李広のそれを下敷きにしたと推論できよう。と言うのも、薛仁貴と李広のように、一人の英雄を語る際、それ以前の英雄を祖型として用いる例は、正史・伝説を問わず、多くの例を見出すことができるからである。

呂布や薛仁貴と同じく李広を祖型とする人物に、北宋の向宝がいる。『宋史』向宝伝に云う。

嘗至太原。梁適射弩再中的、授宝矢射之、四発三中。適曰、「今之飛将也」。神宗称其勇、以比薛仁貴。〔四三〕

(向宝は)嘗て太原に至る。梁適 弩を射て再び的中に中り、宝に矢を授けて之を射しむるに、四たび発して三たび中る。適曰く、「今の飛将なり」と。神宗 其の勇を称えて、以て薛仁貴に比す。

この挿話の雛形を、前述した李広、薛仁貴の挿話に求めることに異論はなからう。弓術に巧みな者を記す際、李広を祖型として挿話が形成されるわけである。さらに、この挿話には、李広と薛仁貴を同種の英雄と見なす意識が明らかに存在し、李広が薛仁貴より古い時代の英雄であることを勘案すれば、薛仁貴の祖型が李広にあることを示す傍証となりうる。ただし、元から明にかけての戯曲や小説において、李広は決してメジャーな存在ではない。李広が登場する作品としては、僅かに清平山堂刊『欽枕集』に収める「漢李広世号飛将军」が確認できるのみなのである。対して、呂布や薛仁貴は雑劇にしばしば登場し、見てきたとおり、小説でもしばしば採り上げられる。ならば、呂布や薛仁貴に、よりマイナーな李広の影を認めることは、些か牽強の謗りを受けるかも知れない。しかし、前述したように、史書において李広が英雄の祖型として機能しているのは確実であり、むしろ、雑劇や小説でさえも無視できぬほどに、史書に現れた李広の影が巨大であったと考えるべきであろう。また、ある祖型を基にして、英雄の挿話が語られるというパターンは、李広の系譜以外にも存在する。

例えば、『太平御覽』卷二百九十一に引かれる袁希之『漢表伝』〔四四〕は、諸葛亮について、以下のような事績を記す。

丞相亮出軍困祁連山、始以木牛運糧。魏司馬宣王・張郃救祁連山。夏六月、亮粮尽軍還、至于青封木門。郃追之。亮駐軍、削大樹皮、題曰、

「張郃死此樹下」。豫令兵夾道、以數千強弩備之。郃果自見、千弩俱發射郃、而死。〔四五〕

(丞相亮 出軍して祁連山を囲み、始めて木牛を以て糧を運ぶ。魏の司馬宣王・張郃 祁連山を救わんとす。夏六月、亮の糧尽きて軍は還り、青封木門に至る。郃 之を追う。亮 軍を駐めて大樹の皮を削り、題して曰く、「張郃此の樹の下に死せん」と。豫め兵をして道を夾み數千の強弩を以て之に備えしむ。郃 果たして自ら見われ、千弩 俱に發して郃を射、而して死す。)

この挿話を見て、即座に想起されるのは『史記』孫子呉起列伝に見える次の挿話である。

馬陵道陝、而旁多阻隘、可伏兵。乃斫大樹白而書之曰、「龐涓于此樹之下」。於是令齊軍善射者万弩、夾道而伏、期曰、「暮見火举而俱發」。龐涓果夜至斫木下、見白書、乃鑽火燭之。誦其書未畢、齊軍万弩俱發、魏軍大乱相失。龐涓自知智窮兵敗、乃自刎、曰、「遂成豎子名成」。〔四六〕

(馬陵 道 陝くして、旁らは阻隘多く、兵を伏すべきところなり。〔孫子〕乃ち大樹を斫りて白げて之に書して曰く「龐涓此の樹の下に死せん」と。是に於いて齊軍の善く射る者の万弩をして、道を夾みて伏せしめ、期して曰く、「暮れに火の挙ぐるを見れば、俱に発せよ」と。龐涓 果たして夜に斫木の下に至りて白書を見んとし、乃ち火を鑽して之を燭らす。其の書を読むこと未だ畢らざるに、齊軍万弩 俱に發し、魏軍 大乱して相失う。龐涓 自ら智の窮まりて兵の敗るるを知り、乃ち自刎す、曰く、「遂に豎子の名を成さしむ」と。)

『漢表伝』の表記は、『史記』を原型にしていると言うより、もはや

剽窃に近い。ともかく、孫子(贖)を祖型として、軍師としての諸葛亮が語られるわけである。

別の例を挙げよう。『新五代史』前蜀世家において、王衍の容貌は次のように記される。

衍為人、方頤大口、垂手過膝、顧目見耳、……〔四七〕  
(衍の人と為り、方頤にして大口、手を垂らさば膝を過ぎ、顧みれば耳を目見す、……)

王衍の容姿は、三国蜀の劉備のそれと酷似する。『三国志』蜀書・先主伝に拠れば、劉備の容貌は次のようであったと言う。

先主……身長七尺五寸、垂手下膝、顧自見其耳。〔四八〕  
(先主……身長七尺五寸、手を垂らさば膝を下り、顧みれば自ら其の耳を見らる。)

劉備と王衍の容貌が酷似することを、如何に考えるべきであろうか。無論、偶然にも二人の姿が似通っていた可能性は否定できない。しかし、この二人が、共に蜀の地に盤踞していた地方政権の主であることを勘案すれば、単なる偶然である可能性は極めて低い。王衍の境遇と、劉備のそれとは相似形を描くのであり、想像を逞しくするならば、劉備との相似を強調するために、王衍やその周囲の手によって、王衍の容貌は「創作」されたとも考えられよう。すなわち、王衍は劉備をその祖型とするのである。

そして、劉備を祖型とする人物は、ひとり王衍のみにとどまらない。



劉備と似たような境遇に置かれた者、すなわち地方政權の主は、多く劉備と似たような容貌、性格を持っていたように記録されている。その傾向は、特に『晋書』の載記に収められた者に、顕著である。苻堅載記は「臂 垂れば膝を過ぐ<sup>五〇</sup>」と記し、慕容垂載記にも「手 垂れば膝を過ぐ<sup>五〇</sup>」とある。また、呂光は「読書を樂しまず、唯だ鷹馬を好み、喜怒は色に形れ<sup>五二</sup>」なかつたとされるが、この描写は、劉備が「甚だしくは読書を樂しまず、狗馬、音楽、美衣服を喜<sup>五三</sup>」び、「喜怒は色に形れ<sup>五二</sup>」なかつたとされるのと完全に重なり合う。このように、多くの人物が劉備を祖型として語られるのである。

この現象をもって、英雄は転生する、と言っても良からう。

そして、テキスト（史書でも小説でも構わないが）の受容者の一部は、このような英雄の祖型や、英雄の転生ということを確認に意識していたはずである。その証拠は先に示した、『水滸伝』第三十五回の挿話に現れている。一騎打ちをする呂方（呂布）と郭盛（薛仁貴）であったが、斬り結ぶうちに二人の方天画戟の穂が絡まってほどけなくなってしまう。そこを傍観していた花榮が一矢で射抜き、二人を仲裁するわけだが、この仲裁者たる花榮は、その渾名を「小李広」というのである。李広の影である呂布と薛仁貴の争いは、本家李広によって収められたのであった。

ここまでの議論を呂布に帰納させれば次のように言えるだろう。『演義』の呂布は方天画戟を持つ。それは薛仁貴との対を意識させるものであり、引いては呂布の祖型に李広を置くものと考えられる。これは、『演義』の呂布が、『演義』以前の伝説を受容していることを示しているように。更に、李肅を史実から逸脱させて呂布と関係づけられることから、呂

布と薛仁貴という対を『演義』が意識していることは示唆される。ただし、その語られ方は、『平話』や『水滸伝』のように露骨に史実を逸脱するのではなく「合理化」されており、あたかも史実であるかのように語られるのであった。

## 第五節 呂布と赤兔馬

本節以下では、呂布に与えられた今一つのアイテムである赤兔馬に視点を転じよう。

呂布が赤兔馬に所有していたことは、史実である。『三国志』魏書・呂布伝に云う。

布有良馬曰赤兔。<sup>五三</sup>

（布 良馬有りて赤兔と曰う。）

裴松之はこの部分の注釈として、『曹瞞伝』を引く。

時人語曰、「人中有呂布、馬中有赤兔」。<sup>五四</sup>

（時人語りて曰く、「人中に呂布有り、馬中に赤兔有り」と。）

三国時代において、呂布の武勇が傑出したものとして語られていたことが、確認できよう。

また、『後漢書』呂布伝は赤兔馬の「良馬」ぶりを次のように描く。

布常御良馬、号曰赤莛、能馳城飛塹、……〔五五〕

(布常に良馬を御し、号して曰く赤莛、能く城を馳せ塹を飛ぶ、……)

『後漢書』の成書した六朝の頃には、早くも赤兔馬が呂布の乗馬として、伝説化されつつあったことが窺える。

そして、後代のテキストにおいても、呂布は赤兔馬に乗って現れる。

『演義』と『平話』については、已に第二節に示したので、ここでは雑劇の例を引こう。

「関雲長単刀劈四寇」雑劇の第一折で、正末たる呂布は次のように唱う。

【混江龍】更有那千斤勇力。馬中赤兔似風疾。我是那人中呂布。容貌威儀。仗武藝能敵英勇將。……〔五六〕

〔混江龍〕更に千斤さえ持ち上げるあの勇力があり、馬に冠たる赤兔は疾風のように走る。我は人に冠たる呂布、姿には威厳があり、武藝によって勇ましい大将と戦うことができる。……)

『平話』『演義』そして雑劇と、三国故事を語る代表的なテキストにおいて、呂布と赤兔馬は常に組み合わされることが確認される。

しかし、一方で、史書が語らない要素が、後代のテキストには附加されている。それは、呂布が主君を殺して赤兔馬を盗んだ、あるいは赤兔馬を得るために主君を殺したというものである。

『平話』巻上には次のような挿話がある。

董卓は皇帝の命を受けて西涼府の黄巾賊を討つことになり、出立し

ようとしたところ、城内で暴れている者があった。その者は丁建陽の家奴で、主人を殺して馬を奪ったと人々は言う。董卓が尋問すると、その者は呂布という名であると答えた。丁建陽の家来は、呂布が丁の持つ名馬、赤兔を奪うために丁を殺したのだと告発する。呂布はそうではなく、丁建陽がしばしば呂布を辱めたのに憤って、彼を殺したのだと反論した。董卓は呂布の姿が非凡であり、また武勇に優れているのを見て、呂布を赦し自らの配下とした。〔五七〕

また、「莽張飛大鬧石榴園」雑劇の第三折にあって、曹操は云う。

〔曹操云〕住者。他怎生做的英雄好漢。想呂布先拜丁建陽為父、令他濯足、丁建陽左足生一痣必貴。呂布暗思「某足生双痣、将某家奴看之」。呂布大怒、綽金盆在手、打死了丁建陽、盜了赤兔馬、後拜董卓為父。〔五八〕

〔曹操が云う〕やめろ。奴がどうして英雄好漢であろうものか。思えば、呂布は先に丁建陽を拜して父と仰いだ。そして、〔丁建陽が〕奴に足を洗わせた時、丁建陽の左足に痣が一つあり、〔丁建陽が〕これはきつと貴人になる印だとした。すると、呂布は「俺の足には二つ痣があるのに、丁建陽は俺を家奴として扱いやがる」とひそかに思った。そこで呂布は激しく怒って、金盥を手につかんで、丁建陽を打ち殺し、赤兔馬を盗んで、その後、董卓を拜して父と仰いだのだぞ。)

呂布が丁建陽を殺し、赤兔馬を奪ったという描写は、『平話』と共通している。さらに、『演義』もまた、赤兔馬のために呂布が丁原(建陽)を殺したとするのである。その挿話は、第三回に描かれる。以下に大略

を示す。

少帝（劉辯）が暗愚なのを見た董卓は、陳留王（劉協）を立てようと考え群臣に諮る。これに対し、荊州刺史の丁原は君臣の分を越えるものとして反対し、他にも反対者が出た。董卓は、自らの意志に賛同しなかった者に腹を立て害意を抱く。その夜、丁原の軍が董卓に戦いを挑み、董卓軍は呂布の武勇の前に散々に敗れる。呂布の武勇に恐れをなした董卓は腹心の李儒のすすめに従って、赤兔馬を呂布に贈り、彼を寝返らせようとする。その使者に選ばれたのは呂布と同郷の李肅であった。赤兔馬の素晴らしさと李肅の辯説に呂布は心を動かされ、ついに丁原を殺して董卓に投降する。

ここでは、赤兔馬を直接奪うわけではないが、赤兔馬を手に入れるために呂布が主君の命を奪うという構図は、『平話』と一致する。

『平話』「莽張飛大鬧石榴園」「演義」のいずれにおいても、呂布が赤兔馬を手に入れるには、主君たる丁原（建陽）の命を奪う行為が付随する。換言すれば、主君を殺すという犠牲を払わねば、呂布は赤兔馬を得られなかった。このような記述は史書には見えず、明らかに後代に創作されたものである。ならば、何故にこのような記述を加えたのか。

一つには、この挿話に加えられた結果、呂布が丁原を殺す理由が明らかとなる。『三国志』魏書・呂布伝は、呂布の丁原殺しを以下のように記述する。

卓以布見信于原、誘布令殺原。布斬原首詣卓、卓以布為騎都尉、甚愛信之、誓為父子。<sup>〔五九〕</sup>

〔董〕卓は〔呂〕布の〔丁〕原に信ぜらるるを以て、布を誘いて原を殺さしむ。布は原の首を斬りて卓に詣り、卓は布を以て騎都尉と為し、甚だ之を愛信し、誓いて父子と為る。<sup>〔六〇〕</sup>

この部分には註も施されず、詳しい事情は何も判らない。そこで、後代のテキストは赤兔馬を媒介として、呂布が丁原を殺した理由を説明するのである。

そして、この挿話によって、呂布の人物形象も或る程度決定される。すなわち、第一節で述べた如く、彼は「無義之輩」「無恩之人」という側面を強調されることになる。

だが、右記のような結果は、おそらく副次的なものに過ぎまい。呂布が赤兔馬のために主君を殺すという挿話が存在する最大の理由は、呂布から赤兔馬の正当な所有者という地位を剥奪することであろう。史書において、呂布はもともと赤兔馬を所有していたのだが、後世の挿話はこれを奪ったものとし、呂布が赤兔馬に跨ることを、正当なものとは認めないのである。そして、奪ったものである以上、奪われる可能性が発生する。

事実、『平話』と『演義』において、呂布は赤兔馬を奪われた後、死に至る。

まず、『平話』において、呂布が赤兔馬を奪われる箇所を引用する。

前後三日、衆官尚自不捨、侯成帶酒罵呂布。当夜直至後院、見喂馬人大醉。侯成盜馬至於下邳西門、見健將楊奉言、「侯成盜馬」。被侯成殺了楊奉、奪了門、浮水而過。約至四更、関公巡綽侯成、得其馬。天明、見曹操、具說其事。曹相大喜。<sup>〔六〇〕</sup>

(三日ほど経ったが、諸将は未だに釈然とせず、侯成は酒を飲んで呂布を罵っていた。その夜〔侯成が〕まっすぐ裏庭へゆくと、馬番が泥酔していた。侯成は馬を盗んで下邳城の西門まで行くと、健将の楊奉が「侯成が馬を盗んだ」と言っている。〔そこで〕侯成は楊奉を殺し、「侯成は」門を突破して、水を泳いで逃げていった。およそ四更に至ったところ、巡察に出ている関公が侯成と出会い、その馬を手に入れた。夜が明けると、曹操にまみえ、つぶさに事情を語った。曹丞相は非常に喜んだ。)

こうして侯成は、呂布の馬を盗み出して敵方へ奔り、結果、その馬は関羽の所有となる(関羽と呂布の関係については後述)。その後、曹操・劉備連合軍は呂布の籠る下邳城に総攻撃をしかける。呂布は自ら出陣し応戦するが、ついに捕らえられ、刑死することとなる。

また、『演義』第十九回後において、呂布は以下のような経緯で死に至る。

曹操・劉備軍によって徐州を逐われた呂布は下邳の城に立て籠る。これを囲んだ曹・劉の軍は沂水と泗水を下邳城にそそぎかけ、水浸しにしてしまう。すっかりふさぎ込んだ呂布は城内で酒色に溺れる日々を過ごしていたが、ある日、自分のやつれ衰えた姿を見て驚き、禁酒の令を出す。

城内から馬を盗み出して劉備軍に降ろうとした者が出た。これに気づいた呂布方の大将、侯成はこれを追って討ち果たし、馬を取り戻す。そして諸将とその祝いをしようと、酒と肉を準備し、一部を呂布に献上する。呂布はこれを禁酒の例を破るものとして激怒し、逆に侯成を鞭打ちに処してしまう。侯成はこの仕打ちを怨み、宋憲・魏統らと謀

り、曹・劉軍に投降することにする。

まず、侯成が呂布の愛馬、赤兔を盗み、曹操のもとへ奔った。城内の事情を知った曹操は総攻撃をかけ、呂布はこれに自ら応戦する。その後、曹操軍が一時後退し、呂布は休息をとるうちにいつしか眠ってしまう。隙をうかがっていた宋憲・魏統は呂布の画戟を盗み出した後、呂布を縛り上げる。そして城外の曹操軍に投降しようとするが、曹軍はなかなか信じない。そこで、宋憲は呂布の画戟を城外に投げ下ろして、呂布を捕らえた証としたのであった。そして、呂布は曹操の前に引き出され縊り殺されることになる。

ここに描かれた呂布の最期が、『平話』と同工異曲であることに異論はなからう。そして、『平話』『演義』に描かれる呂布の最期は、基本的に史書を下敷きとするものだが、大きな相異も存在する。試みに『資治通鑑』巻六十二に拠って、呂布が捕縛される場面を確認しておく。

布将侯成亡其名馬、已而復得之、諸将合礼以賀成。成分酒肉先入獻布。布怒曰、「布禁酒而卿等醞釀、為欲因酒共謀布邪」。成忿懼、十二月、癸酉、成与諸将宋憲・魏統等共執陳宮・高順、率其衆降。布与麾下登白門樓。兵困之急、布令左右取其首詣操、左右不忍、乃下降。(六)  
(布の將の侯成 其の名馬を亡い、已にして復た之を得、諸将 合礼して以て成を賀す。成 酒肉を分かち先に入りて布に獻す。布 怒りて曰く、「布の禁酒するも卿等醞釀す、酒に因りて共に布を謀らんと欲するが為なるか」と。成 忿懼す。十二月、癸酉、成 諸将宋憲・魏統等と共に陳宮・高順を執り、其の衆を率いて降る。布 麾下と白門樓に登る。兵の之を困むに急たり、布 左右をして其の首を取り操に詣らしめんとするも、左右忍びず、乃ち下降

す。

この挿話は、おそらく『三国志』魏書・呂布伝の裴註が引く『九州春秋』をもとにしているであろう<sup>〔六三〕</sup>。侯成が馬盗人を捕らえた後、酒を醸して呂布の怒りを買ったことは、『平話』『演義』と共通する。しかし、侯成が赤兔馬を盗み出すという記述はなく、それが後世に追加されたものであることは疑いない。

議論を整理しよう。史書においては、呂布が赤兔馬を所有することに何ら説明は加えられない。いわば自明の理、前提条件のように呂布は赤兔馬に乗る。対して、後代のテキストは、呂布が主君を殺して赤兔馬を手に入れるという来歴を用意する。そして、奪ったものであるために、奪われるべき運命ともなり、呂布は赤兔馬を失って死ぬ。

これらの創作された挿話の意図は、おそらく一点に集約される。すなわち、呂布の所有であった赤兔馬を、別の人物に継承するために、これらの挿話は必要だったのである。

その赤兔馬を継承すべき人物とは、言うまでもなく、関羽である。

## 第六節 関羽と赤兔馬

『演義』読者が、赤兔馬の所有者と聞いてまず想起するのは、実のところ、呂布ではなく、関羽であろう。そこで、『演義』における関羽と赤兔馬の関係の深さについて確認しておく。

『演義』第二十五回後に、次のようにある。

公上赤兔馬、手提青龍刀、引従者数人、直至白馬、来見曹操。<sup>〔六三〕</sup>  
(関公は赤兔馬に跨り、手に青龍偃月刀を引っさげ、数人の従者を連れ、ひたすら馳せて白馬に着くと、曹操に面会した。)

同じく『演義』において、関羽が死んだ後、赤兔馬は関羽に殉ずるかのように死んでゆく。第七十七回前で、赤兔馬の最期は次のように語られる。

関公父子自帰神之後、坐下赤兔馬被馬忠所獲、獻与孫権。権就賜馬忠騎坐、刀賜与潘璋。其馬数日不食草料而死。<sup>〔六四〕</sup>

(関公父子が神と化してのち、乗っていた赤兔馬は馬忠が手に入れたのを孫権に献上したが、孫権はその場で馬忠に乗馬として下げ渡し、青龍偃月刀は潘璋に賜った。その馬は、数日の間まぐさを食おうとせず死んでしまった。)

赤兔馬は馬忠の所有となることを拒み、いわば関羽に忠節を尽くした形で死ぬ。この二例でも解るとおり、『演義』において、関羽と赤兔馬とは不可分の関係にある。

しかし、前節で述べた如く、赤兔馬はそもそも呂布の所有であったのだから、『演義』の関羽が、初めからそれを所有しているわけではない。彼が赤兔馬を手に入れるのは、第二十五回後においてである。概略を示そう。

曹操と敵対関係に陥った劉備は、徐州で曹操に大敗し、ひとり冀州に逃れる。劉備の妻子を下邳城で守っていた関羽は、曹操の計によって城を落とされ、斬り死にの覚悟を固めるが、張遼の説得で一時的に

曹操のもとに降る。何とか関羽を己の配下としたい曹操は関羽を厚遇するが、関羽は一切の財宝・美女に関心を示さなかった。ある時、曹操は、関羽の馬が瘦せているのを見て、以前に破った呂布の愛馬、赤兔を関羽に与え、関羽は初めて感謝の意を示す。曹操がその理由を尋ねると、関羽は、一日千里を走るといふこの名馬があれば、いつでも劉備のもとに帰参できると答えたのであった。

「二君に見えず」という関羽の節義が、端的に現れた挿話と言えよう。ともかく、それ以後、赤兔馬は関羽の愛馬となる。

このように、『演義』では当然のように結びつけられる関羽と赤兔馬であるが、他のテキストではどうであろうか。

『演義』以外で、関羽と赤兔馬がはっきりと結びつけられるテキストに、『花関索伝』が挙げられよう。別集において、関羽が出陣する場面で、「槽頭牽過赤兔馬（馬小屋より赤兔馬を引き出し）」の文字が見える〔六五〕。また、同じく別集において、関羽が死ぬ際、次のような光景が語られる。

関公等了多時、只見小軍報道、「周倉死了」。関公道、「他如何死」。小軍道、「他為主公無食、腿上一割肉、虚運死了」。関公叫苦、「怎地是好」。只見赤兔馬拖刀跳入河中去、刀落在水中。〔六六〕

（関公がしばらく待っていると、ふと小者が現れて、「周倉が死んだ」と告げた。関公が「なぜ死んだのか」と問うと、小者は「周倉は主公が何も食べておられないために、自分の腿の肉を割い（て、食べさせようとし）たが、氣絶して死んでしまった」と言う。関公は「どうしたらよいのだ」と悲しんで言った。見れば、赤兔馬が刀を引きずって河の中に躍り入り、刀は水中へと

沈んでいった。）

ここでは、具体的な関羽の死への言及はない。しかし、この記述を最後に、生身の関羽は物語から姿を消す（亡霊という形で現れることはあるが）のであるから、「赤兔馬が刀を引きずって河の中に躍り入る」という描写が、関羽の死を象徴的に表したものであることは疑いない〔六七〕。すなわち、『演義』とは大きく異なるものの、『花関索伝』でも関羽と赤兔馬の関係が確認される。

また『平話』巻上には、第五節で述べたとおり、呂布の馬を関羽が手に入れるという記述があり、曹操の仲介こそ経てはいないものの、その構図は『演義』と相似形をなす。ただし、侯成が盗んだのは「馬」と記されるばかりで、それが赤兔馬であるのかどうか、すなわち、関羽が赤兔馬を手に入れたのかは判然としない。しかも、『平話』にあって、この後、関羽と赤兔馬の関係については言及されない（赤兔馬の名さえ現れない）。しかし、『平話』にあって呂布の乗馬と言えは赤兔馬であるから、おそらく関羽が手に入れたのも赤兔馬であろう。『演義』や『花関索伝』に比べれば、相当に希薄ではあるが、『平話』でも関羽と赤兔馬の関係が現れるわけである。

次に、雑劇について検討してゆく。関羽が神として北宋時代に降臨する、「関雲長大破蚩尤」雑劇があり、その第三折では、正末たる関羽が次のように唱う。

【二煞】快打磨伏紅纓青龍偃月刀頭刃、教関平扞綽了綠絨擐鎖子黃金甲上塵。把赤兔忙牽、……〔六八〕

（二煞）赤い紐を飾った青龍偃月刀の刃を鋭く研ぎ上げ、関平に緑の陣羽織

と身にまとう黄金造りの鎖帷子の塵を払わせる。急ぎ赤兔馬を引いて、……)

このように、雑劇でも関羽と赤兔馬を結びつける描写が存在する<sup>『平話』</sup>。ただし、雑劇において、関羽と赤兔馬を結びつける話は、一般的に見られるわけではない。『演義』の脈絡から言えば当然登場するであろう部分に、赤兔馬が現れないことがある。

「関雲長千里独行」雑劇を例に採ろう<sup>『平話』</sup>。これは、劉備・関羽・張飛が徐州で曹操軍に敗れて三人は離散し、劉備の妻子を守るため曹操に降った関羽が劉備の行方をつきとめ、兄弟三人が再会を果たすまでを物語である。『演義』では、第二十四回後から第二十八回後までに当たる。

この雑劇中で、関羽は曹操が自分を厚遇する様子を、「我上馬一提金、下馬一提銀（私が馬にまたがるたびに金を差し出し、馬から降りるたびに銀を差し出す）」と言い、「我三日一小宴、五日一大宴（私のために三日ごとに小宴会をし、五日ごとに大宴会をした）」と言うが<sup>『平話』</sup>、これは、『演義』で曹操が関羽を遇する部分と、正確に符合する。第二十五回前に次のような記述がある。

関公自到許昌、操待之甚厚、小宴三日、大宴五日、上馬一提金、下馬一提銀、及美女十人以待之。<sup>『平話』</sup>

（関公が許昌に到着してからというもの、「曹」操は関公を非常に手厚くもてなした。その様子は小宴会を三日ごと、大宴会を五日ごとに開き、「関公が」馬にまたがるごとに金を、馬から降りるごとに銀を渡すといったふうであり、「また」美女十人を関公の側近くに仕えさせた。）

また、この「千里独行」雑劇には、関羽が曹操の元を去る際に曹操が袍

を贈ろうとする挿話や、関羽が張飛の疑念を晴らすために三鼓を打つ間に蔡陽を斬る挿話が見え、多くの部分が『演義』と一致する。にもかかわらず、赤兔馬は登場しない。

また、「千里独行」以外にも三国故事を扱う雑劇は多く存在し、その中でも、関羽はしばしば登場する。しかし、先に挙げた「大破蚩尤」を除けば、管見の限り、「赤兔馬」の名を明示して、関羽と結びつける雑劇は見あたらない。

この結果のみを見るならば、雑劇において、関羽と赤兔馬を組み合わせるものが一般的であったとは言いがたい。ただし、雑劇の場合、散逸した作品も数多くあり、現存するテキストだけを見て、結論を出すのは早計であろう。本論では、雑劇における関羽と赤兔馬の関係については留保しておく。

ともかく、『演義』と『花関索伝』は関羽と赤兔馬を明確に結びつけ、『平話』も明言はしないが、暗示的に両者を結びつけると見て良からう。つまり、『演義』以前（『平話』）もしくは同時代のテキスト（『花関索伝』）でも、関羽と赤兔馬は関係づけられるのであって、『演義』だけに特異な描写ではない。

しかし、史書において関羽が赤兔馬を所有していたわけではないことを忘れてはならないだろう。史書では、赤兔馬の所有者はあくまで呂布である。すなわち、『演義』や『花関索伝』などで語られる関羽と赤兔馬の関係は、疑いなく伝説（非史実）なのである。議論を『演義』に還元すれば、ここでもまた、『演義』は伝説を受容している。そして、『平話』では関羽と赤兔馬の関係が明示されないことを考えれば、こと関羽と赤兔馬について、『演義』はより積極的に伝説を語るテキストと言いうるのである。

## 第七節 呂布と関羽

さて、『演義』をはじめとする後代のテキストにおいて、関羽は、本来の所有者である呂布から、赤兔馬を継承する形となっている。それでは、この名馬（赤兔馬）の継承という話型から、如何なる意味を見出すことができるだろうか。

古来、英雄は、しばしば特定の馬（名馬）を所有する。『演義』に限っても、その例は枚挙に暇がない。例えば、曹操は「絶影」に乗り<sup>〔七三〕</sup>、劉備は「的盧」に跨って危地を脱している<sup>〔七四〕</sup>。では、所有する名馬は、英雄にとって、どのような意味を持つのか。実例に即して、検討してゆきたい。

まず、例示した、『演義』における劉備と「的盧」の挿話を確認しておこう。

曹操に敗れた劉備は、荊州の劉表のもとへ身を寄せ、劉表は劉備を厚く遇していた。しかし、ある時に劉表の後継者について助言をしたために、劉備は劉表の夫人、蔡氏とその弟である蔡瑁の恨みを買ってしまう。そして、蔡姉弟は、慰勞の宴にかこつけて劉備を襄陽に呼び出し暗殺しようと謀り、断りきれなかった劉備は襄陽へ赴くことになる。

宴席において、蔡瑁は劉備を殺そうと隙をうかがうのだが、その後、趙雲の目が光っているため手が出せない。そこで、蔡瑁は、まず趙雲を別室に分け、いよいよ劉備を殺さんとするのだが、危険を察し

た劉備は的盧に跨って城外へと逃れ去る。そして、的盧は行く手を阻む奔流（檀溪）を渡り切り、劉備を危機から救うのである。

この挿話の典拠は、『三国志』蜀書・先主伝の裴松之註が引く『世語』に求められ、かなり古くから伝えられてきたものと言えよう<sup>〔七五〕</sup>。

さて、この挿話にあって、的盧は劉備を救うための「力」となっている。つまり、馬は英雄にとって何らかの力を示す存在と言い得るのではないか。

例えば、『史記』項羽本紀に見える、以下のような記述も、馬が英雄にとって「力」を示す存在たることを象徴していよう。

有美人名虞、常幸従。駿馬名騅、常騎之。於是項王乃悲歌忼慨、自為詩曰、「力拔山兮氣蓋世。時不利兮騅不逝。騅不逝兮可奈何。虞兮虞兮奈若何」。歌數闋、美人和之。……乃謂亭長曰、「吾知公長者。吾騎此馬五歲、所當無敵、嘗一日行千里、不忍殺之、以賜公。」<sup>〔七六〕</sup>

（「項羽に」美人の名は虞という有り、常に幸せられ従う。駿馬の名は騅、常に之に騎す。是に於いて項王は乃ち悲歌忼慨し、自ら詩を為りて曰く、「力は山を抜き氣は世を蓋う。時に利あらずして騅逝かず。騅逝かざれば奈何すべき。虞や虞や若を奈何せん」と。歌うこと數闋、美人之に和す。……「項羽は」乃ち亭長に謂いて曰く、「吾、公の長者たるを知る。吾、此の馬に騎すること五歲、当たる所に敵無く、嘗て一日に行くこと千里、之を殺すに忍びず、以て公に賜う」と。）

項羽の歌う「騅逝かず」の語は、凋落した項羽を象徴するものであり、同時に馬が英雄に力を与えていたとも読める。また、項羽が亭長に言っ



た「当たる所に敵無く、嘗て一日に行くこと千里たり」という語は、直截に「離」が、項羽にとって武力の源泉であることを表している。

馬が武将にとって「力」を表す存在であるならば、馬の継承とは、「力」の継承にほかならない。そして、『花関索伝』に、そのことを端的に現した挿話がある。

『花関索伝』後集では、花関索は、関羽の胭脂馬を借り、廉句と戦ってこれを倒している<sup>〔七七〕</sup>。また、『花関索伝』続集では、王志と戦う際に赤兔馬を借りているのである<sup>〔七八〕</sup>。これらの挿話が語られる時点で、関羽は未だ死んでいないので、敵密な意味で「馬の継承」とは言い難いが、関羽の馬を借りるという行為が、関羽の力を借りることを意味していることに異論はなからう。そして、新たな力を得た花関索は強敵を破るのである。ならば、『平話』や『演義』で記される、呂布から関羽への赤兔馬の継承という挿話は、呂布から関羽への力の継承を意味していると解釈できるであろう。

だが、『演義』の読者にとって、呂布と関羽を一括りに考えることは、突飛なことに思えるかも知れない。『演義』にあって、関羽が忠義の権化のように描かれるのに対し、「無義之輩」の言葉が示すように、呂布はいわば不忠の権化とでも言うべき存在であり、ある意味で対極に位置するからである。そして、忠義を称揚する『演義』にあって、呂布は否定的に描かれざるをえない。

しかし、『演義』が一方で呂布の勇を書いていることを見落としてはなるまい。第五節で見たように、呂布を描く際、『演義』は「人中呂布、馬中赤兔」の表現を用いることがあり、この語が呂布の傑出した勇を示すものであることは間違いない。また、前述したように、『演義』には敵を蹴散らし、関羽や張飛などの勇将と互角以上に渡り合う呂布の「勇」

を描く場面は数多く存在する。

附言すれば、『演義』における呂布の死の描写は、『演義』や他のテキストに描かれた関羽の死の場面と、ある類似性を持っている。

関羽の死が語られる際、しばしばその剣(刀)を失う描写を伴う。早い例としては、六朝梁の陶弘景『古今刀劍録』が挙げられる。

関羽為先主所重、不惜身命、自採都山鉄為二刀、銘曰万人。及羽敗、羽惜刀投之水中。<sup>〔七九〕</sup>

(関羽は先主の重んずる所と為り、身命を惜まず、自ら都山の鉄を採りて二刀を為り、銘して万人と曰う。羽の敗るるに及んで、羽 刀を惜んで之を水中に投ず。)

別の例としては、前節に挙げた『花関索伝』がある。ここでは、赤兔馬が刀を引きずって河に跳び込むことによって、関羽の死が語られている。

また、ある『演義』の版本でも、関羽は刀を失って死ぬ。嘉靖本の重刻本(涵芬楼藏本<sup>〔八〇〕</sup>)が、それである。その巻十六第三則「玉泉山関公顯世」に云う。

正走之間、喊声举処、伏兵又起。背後朱然・潘璋精兵掩至、公与潘璋部将馬忠相遇。忽聞空中有人叫曰、「雲長久住下方也、茲玉帝有詔、勿与凡夫較勝負矣」。関公聞言頓悟、遂不恋戰、棄却刀馬、父子帰神。

(逃走していると、関の声が起り、伏兵がまた現れた。背後より朱然・潘璋が率いる精兵が押し迫り、公は潘璋の部将馬忠と遭遇した。突然、空中よ

り叫ぶ者があり、曰く、「雲長は久しく下界に住んでおったが、ここに玉帝の詔が下ったぞ。凡夫と争うことはまかりならぬ」と。関公はその言葉を聞くと頓悟し、戦いに恋々とせず、刀と馬を棄てて、父子ともども神と化した。）

右に示したような関羽の死に様は、ある英雄が剣を得、それを自らの死に臨んで神に返還する、もしくは奪われるという話形に分類されるものである。そして、この話形が、洋の東西を問わずに見出せるものであることには、多くの指摘がある<sup>〔八三〕</sup>。最も典型的であり、最も有名なものはアーサー王の伝説であろう。

アーサー王の剣、エクスカリバーは湖の姫より授けられたものであった。のちにアーサーは自分の死が近いことを自覚したとき、部下のベディヴィアに命じてエクスカリバーを湖中に投げしめ、死に赴くことになる。<sup>〔八四〕</sup>

この伝説と、例示した関羽の死を描く三つの記述とが、同じ話形として分類されることに異論はあるまい。すなわち、関羽の死は、典型的な（しばしば「剣神」と称される）英雄の死と言い得る。そして、英雄が剣を失って死ぬという挿話が、英雄が英雄たり得る力を喪失することを意味していることも、言を俟たないであろう。

ならば、先述したとおり、馬も英雄の力を象徴するものとして看做せるのであるから、馬と剣は同じ役割を持っていると考えられよう。それを証するが如く、『演義』の涵芬楼蔵本にあって、自らの最期に臨んだ関羽は、剣のみならず馬をも棄てていることに注目したい。また、『花関索伝』では、赤兔馬が刀を引きずって河中に入るのであるから、ここ

でも関羽は剣と馬の二つを失って死んでいるのである。

ところで、『演義』の呂布もまた、剣と馬を失って死ぬのであった。前節で見たように、呂布は侯成に赤兔馬（馬）を盗み出され、魏統と宋憲に方天画戟（剣）を奪われた後に縛り上げられる。この描写に関羽の死との共通点を見出すことは容易であろう。そして、関羽の最期が「英雄の死」であるのなら、呂布の最期もまた「英雄の死」であると言い得る。すなわち、この二人は、英雄であるという点で一致する。

ここにおいて、『演義』や『平話』で、赤兔馬が呂布から関羽へと継承される意味は明白となる。赤兔馬は、英雄たる呂布の「力」を象徴するのであり、関羽は、その「力」を受け継ぐのである。逆に言えば、英雄たる呂布が乗っていた馬だったからこそ、英雄たる関羽の乗馬として、赤兔馬が選ばれたのであろう<sup>〔八五〕</sup>。

やや議論が煩瑣になってしまったように思う。ここで、『演義』の呂布について再び検討することで本章を締め括りたい。

『演義』は、呂布を否定することを基調とする。『演義』が忠義を称揚する以上、「無義之輩」呂布を指弾するのは当然のことであろう。問題は、否定的な記述の一方で、呂布の武勇がしばしば顕在化することにある。

呂布には方天画戟と赤兔馬が与えられる。二者の内、呂布が方天画戟を持つことは後世に賦与された伝説であることが明らかであり、その背後には呂布と薛仁貴を対にするという更なる伝説があった。『演義』は方天画戟の伝説を受容し、呂布と薛仁貴という対に関しても、極めて変型（合理化）させた形で受容する。

一方、赤兔馬は史実にあっても呂布の所有物であった。しかし、後世

に至って呂布は赤兔馬を奪う者とされ、その死に至って赤兔馬を奪われるという伝説が生まれた。そして、その赤兔馬は関羽に継承される。呂布から関羽へと「馬」がわたる伝説は『平話』にあり、関羽と「赤兔馬」の関係は『花関索伝』で強調される。しかし、呂布から関羽へと「赤兔馬」が渡り、関羽がそれに跨って活躍するのは唯一『演義』のみである。すなわち、この点において、『演義』は最も積極的に伝説を語るテキストなのである。

『演義』の呂布はその「無義」を指弾される一方で、その武勇をも語られるという二律背反的な性質を持つ。それは『演義』テキストが史実と伝説をともに語るが故に起きることだと結論できよう。

〔註〕

- 〔一〕 呉観明本第十九回後／一三葉 a b。
- 〔二〕 呂布が丁建陽（丁原。建陽は字）を殺すのは『演義』第三回後においてであり、董卓を殺すのは第九回前においてである。
- 〔三〕 この挿話は『演義』第十六回前において語られる。
- 〔四〕 毛本第十九回／二四二頁。
- 〔五〕 『通鑑』第五冊／卷六二／二〇〇六—二〇〇七頁。
- 〔六〕 『三国志』第一冊／卷七／二三七頁。
- 〔七〕 『後漢書』第九冊／列伝第六十五／二四五二頁。
- 〔八〕 呉観明本第十六回後／九葉 a。
- 〔九〕 小川環樹『三国志演義』の発展のあと（『小川環樹著作集』第四卷「筑摩書房 一九九七年四月」三五—五四頁所収）参照。

- 〔一〇〕 呉観明本第三回後／一〇葉 a。
- 〔一一〕 呉観明本第十六回前／五葉 a。
- 〔一二〕 呉観明本第五回後「虎牢関三戦呂布」や第十六回後「曹操與兵擊張繡」などを参照。
- 〔一三〕 註「八」所掲『三国志演義』の発展のあと」の他、金文京『三国志演義の世界』（東方書舎 一九九三年十月）一四九—一六〇頁や井波律子『三国志演義』（岩波新書 一九九四年八月）八五—一三三頁などを参照。
- 〔一四〕 一振しか存在しないエクスカリバーと武器の種類を表す方天画戟とを同列に論じることに、違和感があることは免れないが、本稿では「英雄に賦与される特定の武器」という認識のもとに同類のものと考えことにしたい。
- 〔一五〕 呉観明本第三回後／九葉 a b。
- 〔一六〕 呉観明本第五回後／一一葉 b。
- 〔一七〕 『Tales in Fantasy』第一三巻・篠田耕一著『武器と防具 中国編』（新紀元社 一九九二年）九五頁より引用。
- 〔一八〕 『平話』巻上／一五葉 b。
- 〔一九〕 『説唐後伝三伝』（中国古典小説名著百部）「華夏出版社排印本 一九九五年一月」所収）八〇頁。
- 〔二〇〕 『永楽大典』のテキストは、『古本小説叢刊』第二六集第一冊（中華書局 一九九一年）所収の影印に拠った。巻五千二百四十四／十一葉 a。
- 〔二一〕 『平話』巻上／一五葉 b。
- 〔二二〕 「虎牢関三戦呂布」雑劇（『全元戯曲』第四巻／三九五—四三六頁所収）や「関雲長 単刀劈四寇」雑劇（同第七巻／五七七—六三九頁所収）などを参照。
- 〔二三〕 呉観明本第三回後。
- 〔二四〕 『全元戯曲』第八巻／一五六—一七九頁所収。
- 〔二五〕 『全元戯曲』第四巻／二六五—三〇二頁所収。ただし、この雑劇には二種のテキスト（元刊本・元曲選本）があり、内、古態の元刊本には摩利支の名は見えず、『元

曲選」本のみに見えることを附言しておく。

〔二六〕『三國志』第一冊／巻六／一七九—一八一頁。

〔二七〕『後漢書』第八冊／列伝第六十二／二三三—三三三頁および『通鑑』第五冊／巻六十／一九三—三三三頁参照。

〔二八〕『旧唐書』（中華書局排印本 一九七五年五月）第二六冊／巻一九九／五三三—五三三—五

三三七頁、『新唐書』（中華書局排印本 一九七五年二月）第二〇冊／巻二二〇／六

一八七—一八八頁参照。

〔二九〕『平話』巻上／一五葉b。

〔三〇〕註〔二八〕所掲『旧唐書』第八冊／巻八三／二七八〇頁。

〔三一〕註〔二八〕所掲『新唐書』第一三冊／巻一一一／四一四〇頁。

〔三二〕附言すれば、薛仁貴と李肅は雜劇が上演される際、ほぼ同じ装束をまどっていたようである。

明の宮廷における雜劇の上演用テキスト（内府本）は、原則的に役者の衣装を指定するリストというべき、「穿関」を付す。それに拠ると、薛仁貴と李肅の装束は以下の通りである。

薛仁貴（賢達婦龍門隱秀）雜劇第三折）

鳳翅盔 玉色膝襦曳撒 玉色袍 項帕 直纏 搭膊 帶 帶劍 三髯髯

李肅（関雲長單刀劈四寇）雜劇）

鳳翅盔 玉色膝襦曳撒 玉色袍 項帕 直纏 搭膊 帶 帶劍 三髯髯

薛仁貴が「玉色膝襦曳撒」である所が、李肅では「膝襦曳撒」と変わっているだけで、後はすべて一致する。

他の穿関を見ると、同じような役どころであれば、衣装の組立は原則として同じであることが解る。武将役を例にとると、多く「膝襦曳撒」「項帕」「直纏」「搭膊」などとい

ったものを共通して身につけている。異なるのは、かぶりもの（鳳翅盔、三叉冠など）と一番上に着る袍（袍、玉色袍、紅袍など）の場合がほとんどである。薛仁貴と李肅は、この二つ（鳳翅盔と玉色袍）が一致する。この内、「鳳翅盔」に関しては「関雲長單刀劈四寇」雜劇において、多くの武将（李肅の他、張遼・何蒙・曹仁・許褚など）が身につけていることから、李肅と薛仁貴に固有のものとは言い難い。対して「玉色袍」は薛仁貴と李肅に特徴的なものと言えよう。このことは、李肅の姿が薛仁貴の投影である証拠の一つだと筆者は考える。

〔三三〕註〔二〇〕所掲『永樂大典』巻五千二百四十四／十葉b。

〔三四〕註〔二八〕所掲『旧唐書』第一六冊／巻一九九上／五三三—三三三頁。

〔三五〕もっとも、呂布と李肅が味方同志であるのに対し、薛仁貴と葛蘇文は敵対しているのであるから、前者の相互関係は後者の相互関係と全く同一なわけではない。しかし、ともに一対の存在であるとは言えるであろう。参考までに言えば、後述する呂方と郭盛は、敵対関係から味方同士へと移行するが、常に一対の存在であることは異論をささむ余地がない。

〔三六〕『水滸伝』のテキストは、『容与堂本』水滸伝（百回本。上海古籍出版社排印本

一九八八年十一月）に拠った。

〔三七〕百二十回本などは、この字を「宛」に作る。その場合、「宛に征する玉獸」とすべきであろう。

〔三八〕註〔三六〕所掲『容与堂本』水滸伝』第三十二回／五〇—一五〇二頁。

〔三九〕『三國志』第一冊／巻七／二一九頁。

〔四〇〕『史記』（中華書局排印本 一九八二年十一月第二版）第九冊／巻一〇九／二八七一頁。

〔四一〕註〔二八〕所掲『旧唐書』第八冊／巻八三／二七八—一頁。

〔四二〕註〔四〇〕所掲『史記』第九冊／巻一百九／二八六—八頁。

〔四三〕『宋史』（中華書局排印本 一九七七年十一月）第三〇冊／巻三三三／一〇四六—八頁。

〔四四〕袁希之の事蹟は未詳。「漢表伝」自体は「漢表」の名で、「旧唐書」経籍志と「新唐書」藝文志に収められる。また、清代の趙一清『三国志注補』や張澍輯「諸葛亮集」では、「漢末伝」の書名で引かれており、テキストにも異同がある。

〔四五〕『太平御覧』（中華書局影印本 一九六〇年二月）第二冊／卷二九一（兵部二）／料敵（下）／五葉b。

〔四六〕註〔四〇〕所掲『史記』第七冊／卷六五／二二六四頁。

〔四七〕『新五代史』（中華書局排印本 一九七四年十二月）第三冊／卷六三／七九一頁。

〔四八〕『三国志』第四冊／卷三三／八七一―八七二頁。

〔四九〕『晋書』第九冊／卷一一三／二八八三頁。

〔五〇〕『晋書』第一〇冊／卷一一三／三〇七七頁。

〔五一〕『晋書』呂光載記 第一〇冊／卷一一三／三〇五三頁。

〔五二〕『三国志』蜀書・先主伝 第四冊／卷三二／八七一頁。

〔五三〕『三国志』第一冊／卷七／二〇頁。

〔五四〕同右。

〔五五〕『後漢書』第九冊／列伝第六五／二四四五頁。

〔五六〕『全元戯曲』第七卷／五八二頁。

〔五七〕『平話』卷上／一五葉a、b。

〔五八〕『全元戯曲』第七卷／六三四頁

〔五九〕『三国志』第一冊／卷七／二一九頁。

〔六〇〕『平話』卷上／二四葉b。

〔六一〕『通鑑』第五冊／卷六二／二〇〇六頁。

〔六二〕『九州春秋』を引用しておく。（『三国志』第一冊／卷七／二二八頁）

『九州春秋』曰、初、布騎將侯成遣客牧馬十五匹、客悉驅馬去、向沛城、欲歸劉備。成自將騎逐之、悉得馬還。諸將合札賀成、成釀五六斛酒、飢得十餘頭豬、未飲食、先持半豬五斗酒自入詣布前、跪賀、「聞被將軍恩、逐得所失馬、諸將來相賀、自

釀少酒、飢得豬、未敢飲食、先奉上微意」。布大怒曰、「布禁酒、卿釀酒、諸將共飲食作兄弟、共謀殺布邪」。成大懼而去、棄所釀酒、還詣將札。由是自疑、会太祖困下邳、成遂傾衆降。

〔六三〕吳觀明本第二十五回／一〇葉b。

〔六四〕吳觀明本第七十七回／四葉a、b。

〔六五〕『花関索伝』別集／一葉b。

〔六六〕『花関索伝』別集／四葉a。

〔六七〕『花関索伝』における関羽の死については、中川論「嘉靖本『三国志通俗演義』における「関羽の最期」の場面にについて」（東北大学文学会『文化』第五十四巻第一・二号 一九九〇年九月）参照。

〔六八〕『全元戯曲』第七冊／七八一頁。

〔六九〕例示した「関雲長大破蚩尤」の他に、「寿亭侯怒斬關平」（『全元戯曲』第七卷／七四三―七六七頁所収）では、関羽の乗馬が「顔色似火炭赤」であるとされ、これは赤兔馬のイメージに重なるであろう。ただし、この雜劇では赤兔馬の名は明示されない。

〔七〇〕『全元戯曲』第六卷／七〇七―七三四頁所収。

〔七一〕『全元戯曲』第六卷／七三三―七三四頁。

〔七二〕吳觀明本第二十五回／五葉b。

〔七三〕吳觀明本第十六回後を参照。

〔七四〕吳觀明本第三十四回後を参照。

〔七五〕『世語』を引用しておく。（『三国志』第四冊／卷三二／八七六―八七八頁）

『世語』曰、備屯樊城、劉表札焉、憚其為人、不甚信用。嘗請備宴會、蒯越・蔡瑁欲因会取備、備覺之、偽如廁、潛遁出。所乘馬名的盧、騎的盧走、墮襄陽城西檀溪水中、溺不得出。備急曰、「的盧、今日厄矣、可努力」。的盧乃一踊三丈、遂得過、乘梓渡河、中流而追者至、以表意謝之、曰、「何去之速乎」。

〔七六〕註〔四〇〕所掲『史記』第一冊／卷七／三三三―三三六頁。

〔七七〕『花関索伝』後集／六葉b―八葉b。

〔七八〕『花関索伝』続集／七葉a b。

〔七九〕『古今刀劍録』のテキストは『百川学海』所収のものに拠った。

〔八〇〕嘉靖本重刻本と初刻本を比較すると、後者は卷十六第十九葉を缺く。つまり、本文中に挙げた引用の末一句「父子婦神」の上二字「父子」で第十八葉が終わり、第二十葉の「婦神」へと続く。しかし、本文の引用を一目すれば解るように、第十九葉を缺いているにもかかわらず、意味は矛盾無く通ずるのである。これは、第十八葉に対して改刻が施されているからである。この重刻本に関する問題については、大塚秀高「小説と物語―劍神説話を端緒として―」（『中国古典小説研究動態』第四号「一九九〇年十月」三三―六九頁）の第十六節（五八―六〇頁）、および註〔六七〕所掲「嘉靖本『三国志通俗演義』における「関羽の最期」の場面について」に詳しい。

〔八一〕嘉靖本（重刻本）卷十六／十八葉b・二十葉a。

〔八二〕金文京「関羽の息子と孫悟空（上・下）」（『文学』第五十四巻第五号「一九八六年六月」）七六―八八頁、および同第八号「同年九月」八二―九二頁）や註〔八〇〕所掲「小説と物語―劍神説話を端緒として―」などを参照。

〔八三〕アーサー王の伝説については、井村君江『アーサー王の死』（ちくま文庫『中世文学集I』一九八六年九月）を参照した。

〔八四〕但し、この論は『演義』が一貫したストーリーの元に生成されていることが条件となる。ところが、こと関羽に関する限り、多少の留保条件を付ける必要がある。例えば、『演義』七十四回から七十七回に至る挿話では、関羽はほとんど主人公と言って良い存在である。しかし、この箇所では赤兔馬が登場するのは関羽の死の場面のみであり、他には登場しない。それ以前ではしばしば登場していたのだから、これは餘りにも不自然であろう。この事実を、『演義』が拠った先行テキストに、関羽と

赤兔馬を関係づけるものとそうではないものがあつたことを示唆しているかも知れない。だが、この問題については稿を改めることにしたい。少なくとも、『演義』に関羽と赤兔馬を結びつける箇所があり、その箇所における結びつけ方が「平話」などよりも強固なのは確かである。

## 第二章 対偶の創出と受容―諸葛亮と司馬懿

本章では、前章に引き続き、『演義』における伝説の受容について検討を加えてゆく。対象とするのは、三国故事の中でも傑出した存在の諸葛亮（孔明）と、しばしばその後半の敵手と目される、司馬懿（仲達）である。

### 第一節 諸葛亮と司馬懿

死諸葛走生仲達。

（死せる諸葛、生ける仲達を走らす。）

この語が、三国時代に材を採った俚諺の中、最も人口に膾炙したものであることは疑いない。そして、この語に接した者が、諸葛亮と司馬懿を一对の存在として意識するのもごく自然のことであろう。

「死諸葛走生仲達」の語は、『三国志』蜀書・諸葛亮伝の裴註が引く『漢晋春秋』を典拠とする。

『漢晋春秋』曰、楊儀等整軍而出、百姓奔告宣王、宣王追焉。姜維令儀反旗鳴鼓、若將向宣王者、宣王乃退、不敢逼。於是儀結陳而去、入谷然後發喪。宣王之退也、百姓為之諺曰、「死諸葛走生仲達」。或以告宣王、宣王曰。「吾能料生、不便料死也」。

（『漢晋春秋』曰く、楊儀等 軍を整えて出するに、百姓 奔りて宣王に告げ、

宣王 焉を追う。姜維 儀をして旗を反し鼓を鳴し、將に宣王に向かう若くせしむ、宣王 乃ち退き、敢えて逼らず。是に於いて儀 陳を結びて去り、谷に入り然る後に喪を發す。宣王の退くや、百姓之を諺に為りて曰く、「死せる諸葛 生ける仲達を走らす」と。或るひと以て宣王に告げ、宣王曰く。「吾れ能く生けるを料るも、死せるを料るに便ならざるなり」と。）

『漢晋春秋』は已に逸書となっているが、『三国志』裴註にしばしば引かれるため、断片を知ることができる。『晋書』卷八十二の習鑿齒伝によれば<sup>三三</sup>、篡奪の意志を持っていた桓温に対し、幕僚であった習鑿齒がその意を正すために著したのであるという。桓温が薨じたのは寧興元年（三七三）であるから、それ以前の成書である。

さて、「死諸葛」と言うのだから当然ではあるが、「死諸葛走生仲達」の語が諸葛亮の臨終直後の挿話より出たことは注意されてよい。更に言えば、この挿話は、「漢復興」の宿願を達成するために、諸葛亮が行った北伐の掉尾を飾るものであったことも意識すべきであろう。何となれば、後世にあって、諸葛亮と司馬懿が同時に登場するテキストは、その時間を北伐に設定するものが殆どだからである。

幾つか例を挙げよう。まず、『漢晋春秋』と同時期のものとして、東晋の裴啓撰『語林』を引用する。該書は『隋書』経籍志では小説家に分類され、「世説新語の先驅となった書」<sup>三三</sup>だとされる。『語林』そのものは已に亡逸しているので、『藝文類聚』卷六十七「巾帽」に拠って引用する。

語林曰、諸葛武侯与宣皇在渭濱、將戰。宣皇戎服莅事。使人視武侯、乘素輿、葛巾毛扇、指麾三軍、皆隨其進止。宣皇聞而歎曰、「可謂名士矣」。<sup>四</sup>

(語林曰く、諸葛武侯と宣皇と渭濱に在りて、將に戰わんとす。宣皇戎服もて事に莅み、人をして武侯を視しむるに、素輿に乗り、葛巾・毛扇、三軍を指麾し、皆な其の進止に隨う。宣皇聞きて歎じて曰く、「名士と謂う可し」と。)

この挿話は相当に有名だったらしく、『藝文類聚』の他、『北堂書鈔』『太平御覽』など数多くの類書に収められる。また、『旧唐書』及び『新唐書』の薛登伝にこの挿話に則った記述があるという。<sup>五</sup>

この挿話が、時間を何時に設定しているかを考証しておこう。『語林』は諸葛亮と司馬懿が「渭濱」で対峙したとする。ひるがえって『三国志』蜀書・諸葛亮伝を閲すると、次のようにある。

十二年春、亮悉大衆由斜谷出、以流馬運、拋武功五丈原、与司馬懿王対於渭南。亮每患糧不繼、使己志不申、是以分兵屯田、為久駐之基。耕者雜於渭濱居民之間、而百姓安堵、軍無私焉。<sup>七</sup>

(建興)十二年(二三四)春、亮大衆を悉くして斜谷より出で、流馬を以て運び、武功五丈原に拋り、司馬懿王と渭南に對す。亮毎に糧の繼がずして、己の志をして申べざらしむるを患い、是を以て兵を分けて屯田し、久駐の基と為す。耕者渭濱居民の間に雜り、而して百姓安堵し、軍私無し。)

『語林』と同じく「渭濱(渭水の濱)」の語が見え、「渭南(渭水の南)」

もほぼ同じ地域を指すのは明らかであろう。とすれば、『語林』の挿話は、『漢晋春秋』における「死諸葛走生仲達」と同じ戦いを舞台にしていることになる。

次に唐代の例を挙げよう。晩唐の胡曾が多く詠史詩を残したのはよく知られているが、その中に「五丈原」と題するものがある。題名から察せられるように、諸葛亮の死を悼むものである。

その胡曾の詠史詩には、幾つかの註が現存している。最初期に当たるものに、晩唐の陳蓋が施した註があるが、そこに司馬懿が登場する。胡曾の詩と併せて引用する。

#### 五丈原

蜀相西驅十萬來 蜀相 西のかた十萬を驅りて來るも

秋風原下久裴回 秋風 原下 久しく裴回す

長星不為英雄住 長星 英雄の爲に住まらず

半夜流光落九垓 半夜 流光 九垓に落つ

志云。武侯諸葛亮將蜀軍、曰北伐魏。魏明帝遣司馬懿拒之。仲達

・蜀軍於五丈原下營。即死地也。遂関城不出戰。武侯患之、居歲。

夜有長星墜落於原、武侯病卒而歸。臨終為□□□□曰、「吾死之後、

可以米七粒并水於口中。手把筆并兵書。心前安鏡。□□下以土。明燈其

頭」。坐昇而歸。仲達占之云、「未死」。有百姓告云、「武侯已死」。仲

達又占之云、「未死」。竟不敢趁之。遂全軍歸蜀也。夫諸葛孔明者佐時

國、国立事持名、有金石不朽之功、實鐘鼎名勲之望。而又威揚四海、

責盛而朝、數尽善終。可謂美也。<sup>八</sup>

(志に云う。武侯諸葛亮蜀軍を將いて魏を北伐すと曰う。魏明帝司馬仲



達を遣りて之を拒がしむ。仲達・蜀軍 五丈蜀原に下營す。即ち死地なり。遂に城を闚して出戦せず。武侯 之を患い、居ること歳たり。夜 長星有りて原に墜落し、武侯 病卒して歸す。臨終に□□□□を爲して曰く(？)、「吾が死の後、米七粒を以て水を口中に并すべし。手に筆並びに兵書を把り、心前に鏡を安じ、□下に土を以てし、其の頭を明燈すべし」と。坐るに昇して歸す。仲達 之を占いて云う、「未だ死せず」と。百姓有りて告げて云う、「武侯 已に死す」と。仲達 又た之を占いて云う、「未だ死せず」と。竟に敢えて之を趁わず。遂に全軍 蜀に歸る。夫れ諸葛孔明は時国を佐け、国事を立て名を持ち、金石不朽の功有り。実に鐘鼎名勲の望あり。而して又た四海を威揚し、盛を責して朝す。数 尽きて善く終る。美と謂うべきなり。」

陳蓋の註に見える、諸家亮の死を占いで知ろうとする司馬懿とそれを欺く諸葛亮という叙述は、正史はおろか、先述した『漢晋春秋』や『語林』など所謂「小説」にも見えないものである。また、この叙述が史実を離れ、伝説の域に達していることは言うまでもないであろう。

そして、陳蓋の記述は決して彼の独創になるものではない。屢々指摘されるように、類似の挿話を収める先行テキストが存在する<sup>〔九〕</sup>。見易いのは、『四分律行事鈔簡正記』(以下、『簡正記』<sup>〔一〇〕</sup>)であろう。これは、唐代に広く流布した『四分律刪繁補闕行事鈔』(以下、『行事鈔』<sup>〔一一〕</sup>)の註釈書だが、その「僧像致敬篇第二十二」に以下のような記述がある。

「劉氏重孔明」者、三国時蜀主劉備也。孔明即諸葛亮之字也、襄陽人也。為蜀主之所重、自三往召之、方出。次亮為丞相。備常云、「寡人得孔明、如魚得水」。後令孔明領兵伐魏、因得病垂死、語諸軍曰、「主弱將強、為彼所難。若知吾死、必遭彼伐。可將伐盛土、安吾足下、取

鏡照吾面」。言訖而終。置相營内、依語為之。至半夜抽軍歸蜀。經月餘日、魏王有將司馬仲達、善卜、卜云、「未死。何以知之。踏土照鏡、故知在也」。不敢進兵。至後方委卒。時人曰、「死諸葛怖生仲達」。此舉俗賢、反況於道聖也。<sup>〔一二〕</sup>

(劉氏 孔明を重んずる)は、三国の時の蜀主劉備なり。孔明 即ち諸葛亮の字なり、襄陽の人なり。蜀主の重んずる所と為り、自ら三たび往きて之を召し、方く出づ。次いで亮 丞相と為る。備 常に云う、「寡人の孔明を得るは、魚の水を得るが如し」と。後に孔明をして兵を領して魏を伐たしむるも、病を得るに因りて死に垂<sup>なんなん</sup>とし、諸軍に語りて曰く、「主弱く將強きは、彼の難ずる所為り。若し吾が死を知れば、必ず彼の伐つに遭わん。伐を將つて土を盛り(？)、吾が足下に安じ、鏡を取りて吾が面を照らすべし」と。言ひ訖えて終る。相を營内に置きて、語に依りて之を為す。半夜に至りて軍を抽きて蜀に歸る。月餘日を経て、魏王に將 司馬仲達有り、卜を善くす、卜いて云う、「未だ死せず。何を以てか之を知る。土を踏みて鏡を照らす、故に在るを知るなり」と。敢えて兵を進めず。後に至りて方く卒するに委ぬ。時人曰く、「死せる諸葛 生ける仲達を怖じけさす」と。此れ俗賢を挙げ、反つて沉んや道聖に於いてをや。<sup>〔一三〕</sup>

「鏡」「土」「燈」という道具立て、また偽装による占卜の混乱という筋立てを見れば、『簡正記』と陳蓋註が極めて近い関係にあるのは一目瞭然であろう。また、諸葛亮の敵手として司馬懿を置き、時間と空間の設定を五丈原での戦いに置く(『簡正記』では明示されないが)という挿話の基本構想においても、両者は一致する。そして、ここに示された人物関係及び時間と空間の設定は、確かに『漢晋春秋』『語林』の延長線上にある。

斯くの如く、五丈原の戦いにおける諸葛亮と司馬懿を対偶関係と看做すことは、かなり普遍的であつたと言えるであらう。

ただし、例外が存在しないわけではない。『簡正記』と同じく『行事鈔』の注釈書であり、かつ『簡正記』に先行するテキストとして、『四分律行事鈔批』(以下、『鈔批』<sup>二二</sup>)というものが存在する。そして、『鈔批』もまた、諸葛亮の故事を述べるのであり、その内容は『簡正記』に極めて近い。そもそも、『簡正記』はその序に述べるが如く、数多くの『行事鈔』注釈書を校合・整理したものであつたから<sup>二二</sup>、『鈔批』も参したはずであり、記述が似るのは当然であらう。しかし、司馬懿の扱ひにおいて両者には微妙な差異がある。

注云、「似劉氏重孔明」者、劉備也。意三国時也。謂魏主曹丕都鄴、今相州是也、昔号魏都、吳主孫權都江寧、昔号吳都、劉備都蜀、昔号蜀都。世号三都鼎足而治。蜀有智將。姓諸葛、名高、字孔明、為王所重。劉備每言曰、「寡人得孔明、如魚得水」。後乃劉備伐魏、孔明領兵入魏、魏国与蜀戰。諸葛高于時為大將軍、善然謀策。魏家唯懼孔明、不敢前進。孔明因致病垂死、語諸人曰、「主弱將強、為彼所難。若知我死、必建彼我。吾死已後、可將一帛土、置我脚下、取鏡照我面」。言已氣絶。後依此計、乃將孔明置於營内、於幕圍之、劉家夜中領兵還退歸蜀。彼魏国有善卜者、意転判云、「此人未死。何以知之。場土照鏡、故知未死」。遂不敢交戰。劉備退兵歸蜀。一月餘日、魏人方知尋往看之、唯見死人、軍兵尽散。故得免難者、孔明之策也。時人言曰、「死諸葛怖生仲達」。仲達は魏家之將也、姓司馬、名仲達。亦云、「死諸葛走生仲達」。其孔明有志量、時人号為臥龍、甚得劉氏敬重。<sup>二五</sup>

(注に云う、「劉氏の孔明の重んずるに似る」は、劉備なり。意 三国の時な

り。謂うところは魏主曹丕 鄴に都し、今の相州 是れなり、昔 魏都と号し、吳主孫權 江寧に都し、昔 吳都と号し、劉備 蜀に都し、昔 蜀都と号す。世に三都鼎足して治むと号す。蜀に智將有り。姓を諸葛、名を高〔亮〕、字を孔明、王の重んずる所と為る。劉備 毎に言いて曰く、「寡人の孔明を得るは、魚の水を得るが如し」と。後に乃ち劉備 魏を伐ち、孔明 兵を領して魏に入り、魏国 蜀と戦う。諸葛高〔亮〕 時に大將軍たり、謀策を善然す。魏家 唯だ孔明を懼れ、敢えて前進せず。孔明 病を致すに因りて死に垂とし、諸人に語りて曰く、「主弱く將強きは、彼の難ずる所と為る。若し我が死を知らば、必ず彼の我〔伐〕つに建〔遣〕わん。吾れ死して已後、一帛の土を將つて、我が脚下に置き、鏡を取りて我が面を照らすべし」と。言ひ已みて氣絶す。後に此の計に依り、乃ち孔明を將つて營内に置き、幕に之を囲み、劉家 夜中に兵を領して還り退きて蜀に歸る。彼の魏国に善く卜う者有り、意 転じて判じて云う、「此の人 未だ死せず。何を以てか之を知る。土を場み鏡を照らす、故に未だ死せざるを知る」と。遂に敢えて戦いを交えず。劉備 兵を退きて蜀に歸る。一月餘日、魏人 方に知り尋ね往きて之を見るに、唯だ死人を見、軍兵 尽く散る。故に難を免るを得るは、孔明の策なり。時人 言いて曰く、「死せる諸葛 生ける仲達を怖じけさす」と。仲達 是れ魏家の將なり、姓は司馬、名は仲達。亦た云う、「死せる諸葛生ける仲達を走らす」と。其れ孔明 志量有り、時人 号して臥龍と為し、劉氏の敬い重んずるを得る。)

「死諸葛走(怖)生仲達」の語が引かれることから、このテキストも諸葛亮と司馬懿という対偶を意識してはいる。ただし、『簡正記』では占いを行ったのを司馬懿だと明示するのに対し、『鈔批』は「善卜者」と述べるばかりで、それが司馬懿であるかは明言されない。そして、この

文章では、ほぼ名のみしか現れない司馬懿ではなく、「善卜者」こそ諸葛亮の敵手であると捉えるのが妥当であろう。すなわち、『鈔批』は、『漢晋春秋』『簡正記』などと比すると、司馬懿と諸葛亮という対偶を認めるのに、それほど積極的ではない。

つまり、司馬懿を諸葛亮の敵手とする観点を共通して採っていても、その強固さの点において、各テキスト間に濃淡が存していたわけである。しかし、『鈔批』の存在も諸葛亮と司馬懿という対偶そのものは認めるわけであるから、この対偶関係が普遍的であったことは疑いない。

そして、先述の通り、多くのテキストが時空を諸葛亮臨終に設定する。そこで、次節では、正史を参照しつつ、その理由について考えてゆきたい。

## 第二節 北伐(一) — 正史

よく知られているように、諸葛亮は五丈原にて陣没した。多くの説話が、それに材を採っていることは、前節で見たとおりである。

ところが、正史を一読すれば判ることだが、諸葛亮は魏に対する攻撃、所謂「北伐」を、複数回行っている。ならば、前節で見た説話群は、何故、諸葛亮臨終の戦いのみを採り上げるのか。

無論、「諸葛亮が死ぬ」という大事件が発生したから、との理由が最も大きいであろう。しかし、『語林』は諸葛亮の死を扱わないにも関わらず、同じ戦闘の場面に時空を設定している。その他の理由も考えるべきではないか。

そのために、まず、諸葛亮の北伐の実際を整理しておく。

『三国志』蜀書・諸葛亮伝を閲すると<sup>二六</sup>、建興五年(二二七)に彼が「出師表」を上表した後、五丈原にて没する(二三四)までに、六次にわたる蜀と魏の軍事的衝突があったことが判る。以下に概略を示す(年紀は蜀のものに拠った)。

### 第一次 建興五年(二二七)〜翌六年(二二八)春

漢中まで軍を進めた諸葛亮は、翌年斜谷より祁山に出撃し、曹真、張郃らと戦う。蜀に内応した新城太守の孟達はその動きを敏感に察知した司馬懿に討たれ、また諸葛亮本隊も軍令に背いた馬謖が街亭で張郃に大敗したため退却する。

### 第二次 建興六年(二二八)冬

諸葛亮は陳倉を包囲するも曹真がこれを防いだため陥落させられず、兵糧尽きて退却する。退却の際、諸葛亮は追撃する魏の王双を斬り殺す。

### 第三次 建興七年(二二九)秋

諸葛亮は陳式を派遣して武都、陰平の二郡を攻撃させた。魏の雍州刺史郭淮がこれを討とうとしたので、諸葛亮は自ら出撃して二郡を平定した。

### 第四次 建興八年(二三〇)秋

魏の明帝は、曹真、司馬懿、張郃の三名に三路より漢中を攻めさせる。諸葛亮は赤阪で待ち受けるが、魏軍は長雨に遭い退却を余儀なくされる。

第五次 建興九年（二三一）

諸葛亮は祁山に出撃し「木牛」を使って輸送を行うが、兵糧が尽きて撤退する。この戦いで魏の將軍張郃を射殺する。

第六次 建興十二年（二三四）春

斜谷より進軍し、五丈原に陣を敷き渭南で司馬懿と相對した。諸葛亮は長期戦に備えて屯田制を実施。対峙は百日余りに及ぶが、八月に諸葛亮が陣没し蜀軍は退却する。

第四次は魏軍が蜀を攻めたのであり、蜀の方から攻め込んだ他の軍事行動とは、明らかに性質が異なることに注意を喚起したい。

また、已に陳翔華の指摘するところであるが<sup>二七</sup>、諸葛亮伝に記載されない軍事行動が存する。『三国志』蜀書・魏延伝を引用しておく。

八年、使延西入羌中、魏後將軍費瑤・雍州刺史郭淮与延戰于陽谿、延大破淮等、遷為前軍師征西大將軍、假節、進封南鄭侯。<sup>二八</sup>

（建興）八年（二三〇）、延をして西のかた羌中に入らしめ、魏後將軍費瑤・雍州刺史郭淮 延と陽谿に戦し、延 淮等を大いに破り、遷りて前軍師征西大將軍と為り、節を假り、進みて南鄭侯に封ぜらる。）

同じ建興八年ではあるが、諸葛亮伝に記された軍事行動（第四次）とは明らかに異なる。

ともあれ、当然のことではあるが、史実における諸葛亮の行動は複雑であり、軽々しく「諸葛亮は何度魏に攻め込んだ」などと言えるもので

はない。これも陳翔華の指摘に拠れば、諸葛亮の北伐が何次にわたったかということに関しては、六次説（諸葛亮伝に記されたものを数える）・五次説（先に示したもののうち、第四次を含めない）・四次説（第三次・第四次を含めない）に三分されるという<sup>二九</sup>。

右に示した北伐の概略を見ると、あることに気付く。前節で、多くの説話が諸葛亮と司馬懿を対偶関係として捉えていることを確認したわけだが、その司馬懿の名が第一次と第四次、第六次の戦闘にしか見えないのである。しかも、第一次の戦闘で司馬懿が戦ったのは、孟達という人物であり、諸葛亮軍と直接に戦ったわけではない。

無論、諸葛亮伝に見えなくとも、司馬懿が北伐に際して出陣した可能性はあるので、『晋書』宣帝紀をも確認しておこう。

すると、太和元年（二二七）に荆・予（現在の河南省及び湖北省一帯）の軍事を任され、宛（現在の河南省南陽市）に駐屯した司馬懿は、翌年、蜀の進攻に呼応した孟達を討っている。しかし、その後は対蜀戦線に身を投じない。当時の司馬懿にとって、優先すべき事は他にあったからである。孟達を討った後、次のような記述がある。

又問二虜宜討、何者為先。对曰、「呉以中国不習水戰、故敢散居東関。凡攻敵、必拒其喉而搯其心。夏口・東関、賊之心喉。若為陸軍以向皖城、引權東下、為水戰軍向夏口、乘其虚而擊之、此神兵從天而墮、破之必矣」。天子並然之、復命帝屯於宛。<sup>三〇</sup>

（又二虜を宜しく討つべき、何れを先と為すかを問う。对えて曰く、「呉中国の水戰を習わざるを以て、故に敢えて東関に散居す。凡そ敵を攻むるに、必ず其の喉を扼して其の心を搯く。夏口・東関、賊の心喉なり。若し陸軍以て皖城に向かうと為さば、權を引きて東下させ、水戰軍 夏口に向かうと

為さば、其の虚に乗じて之を撃つ、此れ神兵の天従り墮つ、之を破ること必ずなり」と。天子並びに之を然りとし、復た帝に命じて宛に屯せしむ。

司馬懿は二虜（蜀・呉）のいずれを先に討つべきかという明帝の問いに対し、呉を優先することを説く。そして、その言葉を実践するが如く、この時（太和二年、二二八）は宛（対呉の最前線）に留まるのである。司馬懿が対蜀戦線に移るには、更に二年の歳月が必要であった。先に引用した記述に続けて、『晋書』宣帝紀は次のように記す。

四年、遷大將軍、加大都督・假黃鉞、与曹真伐蜀。〔三三〕  
〔太和〕四年〔二三〇〕、大將軍に遷り、大都督を加えられ、黃鉞を仮り、曹真と与に蜀を伐つ。

魏の太和四年は、蜀の建興八年に当たるから、ここで言う「伐蜀」とは先に示した戦闘の中、第四次に相当する。ならば、第二次、第三次の合戦に司馬懿は関係しなかったことになる。そこで、魏書・明帝紀を見ると、次のようである。

十二月、諸葛亮困陳倉、曹真遣將軍費耀等拒之。〔三三〕  
〔太和二年〕十二月〔二二八〕、諸葛亮 陳倉を囲み、曹真 將軍費耀等を遣りて之を拒ぐ。

また、蜀書・諸葛亮伝は次のように記す。

七年、亮遣陳式攻武都・陰平。魏雍州刺史郭淮率衆欲擊式、亮自出

至建威、淮退還、遂平二郡。〔三三〕

〔建興〕七年〔二二九〕、亮 陳式を遣りて武都、陰平を攻む。魏雍州刺史郭淮 衆を率いて式を撃たんと欲し、亮自ら出でて建威に至り、淮は退き還り、遂に二郡を平らぐ。

前者は第二次、後者は第三次の戦闘に関する記述であるが、ともに司馬懿の名は見えない。司馬懿がこの二回の戦いに直接関与しなかったのは、ほぼ確かと言えよう。また、何故か『晋書』宣帝紀は記さないのだが、孟達を破った同年（太和二年）に、司馬懿は曹休とともに呉に攻め入っている。

魏書・曹休伝に云う。

太和二年、帝為二道征呉、遣司馬宣王從漢水下、諸軍向尋陽。賊將偽降、休深入、戰不利、退還宿石亭。軍夜驚、士卒乱、棄甲兵輜重甚多。休上書謝罪、帝遣屯騎行為楊暨慰諭、礼賜益隆。休因此癡発背薨、諡曰壮侯。子肇嗣。〔三四〕

〔太和二年〕〔二二八〕、帝 二道より呉を征さんと為し、司馬宣王を遣りて漢水従り下らせ、〔休〕諸軍〔を督して〕尋陽に向かう。賊將 偽り降り、休 深く入りて、戦 利あらず、退き還りて石亭に宿る。軍 夜に驚き、士卒 乱れ、甲兵輜重を棄つること甚だ多し。休 書を上りて謝罪し、帝 屯騎行為楊暨を遣りて慰諭し、礼賜 益ます隆し。休 此れに因りて癡 背に発して薨じ、諡 して壮侯と曰う。子の肇 嗣ぐ。

この記述のみだと、太和二年の何時かが判然としないが、呉書・呉主伝に拠ると同年の五月から八月にかけてのことであるらしい。

夏五月、鄱陽太守周魴偽叛、誘魏將曹休。秋八月、權至皖口、使將軍陸遜督諸將大破休於石亭。<sup>〔二五〕</sup>

〔黃武七年、二二八〕夏五月、鄱陽太守周魴 偽り叛き、魏將曹休を誘く。

秋八月、權 皖口に至り、將軍陸遜をして諸將を督せしめ大いに休を石亭に破る。

また、魏書・明帝紀は次のように云う。

秋九月、曹休率諸軍至皖、与呉將陸議戰於石亭、敗績。……庚子、

大司馬曹休薨。<sup>〔二六〕</sup>

〔太和二年、二二八〕秋九月、曹休 諸軍を率いて皖に至り、呉將陸議と石亭に戦し、敗績あり。……庚子、大司馬曹休 薨す。

整理すれば、正月に司馬懿は孟達を討った後、引き続き宛に駐屯し、五月、呉へ攻め込んだのである。すなわち、前節でも指摘した如く、太和元年当時の司馬懿の主任務は、どちらかと言えば対呉戦略にあったと捉えるべきであろう。このことから、司馬懿が第二次（太和二年、二二八）、第三次（太和三年、二二九）の戦闘に関わらなかったことは、ほぼ確かである。彼が対蜀戦線に投じるのは、あくまで第四次からなのであった。

そして、対蜀戦線に移ってからも、司馬懿の立場は微妙に変化する。第四次、すなわち太和四年（二三〇）の戦闘においては、総大将は曹真であった。しかし、曹真が翌年三月に病没することもあって、司馬懿は雍州・涼州の軍事を総督し、第五次、第六次の戦闘では総司令官となっ

て指揮を執る事になるのである。

まとめると、正史に拠れば、司馬懿が蜀軍との合戦に従軍したのは三回である。しかも、第四次の合戦は長雨によって軍を返しており、実際に蜀と交戦したわけではない。

これは、諸葛亮と司馬懿の対偶関係を説話化しようとした場合、時空は必然的に第五次と第六次に限定されることを意味している。前節で示した説話群が、場面設定を諸葛亮臨終（五丈原、渭濱）に置くのは、史実において、その場面しか諸葛亮と司馬懿が関わらないからなのである。

議論を整理すると次のようになるであろう。東晋代からすでに、諸葛亮と司馬懿を対偶関係と看做す伝説が存在していた。その発生の理由については措く。憶測は可能でも、論証することは困難だからである。ともかく、その伝説は広く流布し、数多くの説話に見られることとなった。そして、それらの説話は、時空を諸葛亮臨終の場面に設定する。それは史実を踏襲すると、諸葛亮と司馬懿は、その場面でしか関わらないからであった。

ここまでは、正史から晩唐に至るテキストについて、議論をすすめてきた。ところで、時代が下ると、網羅的三国故事、すなわち一人の人間に着目するのではなく、三国時代全体を語るテキストが出現する（史書を除く）。その中では、無論、諸葛亮の北伐も複数回にわたって扱われる。言うまでもなく、『平話』と『演義』がその代表である。それらの中では諸葛亮と司馬懿の関係はどのように描かれるのだろうか。次節以下では、この問題について論じてみたい。

### 第三節 北伐(二) — 『平話』

まず、『平話』の方から論じよう。

『平話』は、諸葛亮の北伐を指して「六出祁山」と称する。後代においては諸葛亮の北伐の代名詞ともなる語だが、管見の限り、『平話』が初出であろう。一方、前節で確認したとおり、史実で諸葛亮が祁山に出陣したのは二度(第一次と第五次)である。更に言えば、第四次は魏から蜀への攻撃であり、諸葛亮の立場からすれば防衛戦であった。「出」という物言いは不適當であろう。つまり、「六出祁山」という語からして、多分に史実から離れた伝説的要素を孕んでいるのである。そして、内容を一瞥すれば、史実からの乖離は一目瞭然である。

従来、『平話』の北伐については述べられる事もほとんどなかったもので、ここで概容をまとめておく。<sup>[27]</sup>

#### 第一次

魏の青龍四年(二三六)に魏に降伏していた孟達が劍閣(閣?)にやって来て再び蜀に仕えようとする。これを聞いた明帝は司馬懿を劍閣に差し向ける。孟達は諸葛亮に救援を求めると諸葛亮は来ず、孟達は自ら首を縊って死ぬ。司馬懿と諸葛亮は半月ほど対峙するが、明帝が崩御して弟の曹芳が即位し正始元年(二四〇)と改元した旨の使者が来たので、司馬懿は軍を返す。その後、諸葛亮は関西を取らんと欲して劍閣より祁山に出る。そして、秦川に入ると姜維の計により全ての草木が刈り取られていた。これでは兵糧の補給が続かず諸葛亮は軍を返す。

#### 第二次

木牛流馬と共に祁山に出た諸葛亮は姜維を降伏させる事に成功する。その直後に成都より宦官の黄皓が権力を牛耳っている旨の書簡が届き、諸葛亮は姜維に後を任せ成都に帰還する。姜維は追撃をかけて来た夏侯惇を大敗させる。

#### 第三次

黄皓を処罰した諸葛亮は三たび祁山に出、街亭を奪取する。魏は司馬懿を元帥と為して出陣させる。司馬懿はこの時、諸葛亮の事を殆ど知らず、関平、呂凱を立て続けに敗ると諸葛亮を侮るようになる。しかし、その後司馬懿は諸葛亮に誘いこまれ大敗を喫する。そこで司馬懿は成都に「諸葛亮謀反」の偽情報を流し、諸葛亮を召還させる事に成功する。

#### 第四次

祁山に出た諸葛亮は馬謖が街亭を失ったという報を受ける。諸葛亮は馬謖を斬ると司馬懿と半年余り対峙する。これに焦れた魏の皇丈(皇后の父)、張郃は諸葛亮の誘引の計にかかり射殺される。数日後、諸葛亮は呉王孫権が死んだとの報を受け成都に帰還。呉に弔問の使者を送る。

#### 第五次

諸葛亮は五たび祁山に出る。司馬懿は蜀の周倉の木牛流馬を奪うが、動かす事が出来ない。そこに周倉が投降してくる。周倉は司馬懿に使い方を教えた上、更に蜀の陣より多くの木牛流馬を献上すると約束。

喜んだ司馬懿は周倉に金銀良馬を与える。しかし、周倉は戻って来ず、諸葛亮の司馬懿を嘲る書簡が届いたばかりであった。蜀の延熙十七年（二五四）諸葛亮は少主（劉禪）に召還される。

## 第六次

諸葛亮は宮廷の無用の物を売却して兵糧を確保する。また呉への備えとして鉄鎖渠塘（所謂「八陣図」の変型であろうか）を作る。諸葛亮は少主に謁見し出陣を告げるが、この際血を吐いて昏倒する。しかし、病をおして諸葛亮は六たび祁山に出る。司馬懿は緒戦で大敗を喫するが驟雨に遭い追撃を免れる。その後、諸葛亮の前に仙女が現れ、その死期が近いことを告げる。予言通り、諸葛亮の病は次第に重くなり陣没する。その死を知った司馬懿は諸葛亮の屍を奪わんと攻撃をかけるが、姜維の計にかかって敗れ、陣に立て籠もる。長安の人々は、それを指して「死せる諸葛 能く活ける仲達を走らす」と言った。

以上が、『平話』における北伐のあらましである。史実との差異は、々挙げたらきりがなが、大きなものだけ指摘しておく。

そもそも年代の設定からして、かなり異様である。史実の北伐は蜀の建興六年（二二八）から建興十二年（二三四年）にかけて行われたのに対して、『平話』では魏の青龍四年（二三六）から蜀の延熙十七年（二五四）と設定されている。『平話』で北伐の始まった青龍四年には、既に諸葛亮は死亡しており、北伐の終わる延熙十七年には司馬懿すらも死んでいるのである。

その他にも史実との違いは数多い。例えば、史実では曹操と相前後して死亡した夏侯惇が登場したり、史実では第一次北伐の時の出来事であ

る「孔明揮淚斬馬謖（泣いて馬謖を斬る）」が第四次の出来事になっていたりしていることがそれである。これらの事は『平話』の作りの粗雑さを露呈していよう。

しかし、史実と異なる部分こそが『平話』の本領であろう。そして、これまで議論してきたとおり、諸葛亮と司馬懿の關係に注目すると、あることに気付かざるを得ない。すなわち、史実と比した場合、司馬懿の登場回数が格段に多いのである。

『平話』において、司馬懿と諸葛亮が戦わないのはただ一度、第二次の戦闘においてだけである。史実では、実際に交戦しなかった第四次を含めても、後半の三次のみしか、諸葛亮と司馬懿は矛を交えていないのだから、その差は歴然としている。何故、このような操作が加えられたのか。

これは、次のように分析すべきであろう。まず、諸葛亮と司馬懿という対偶が意識される。次に、前節で見たように、東晋より晩唐にかけては、史実において諸葛亮と司馬懿が戦った第六次北伐を舞台として、説話が語られていた。別言すれば、この段階において、第六次北伐を舞台とすることは守られるべき制約であった。しかし、それらの説話は、結果として、諸葛亮と司馬懿という対偶を、より強く意識させる効果があったはずである。前節で見たように、二人を対偶として扱う説話が数多く残っていることが何よりの証拠であろう。そして、説話によって産み出された意識は、第六次北伐に限るといふ制約を解除するという、逆転現象を起こしたのではないか。ゆえに、複数回の北伐において、諸葛亮と司馬懿の關係を強調するために、司馬懿の登場回数が増補されたのであろう。

ここで、もう少し視野を広げてみよう。北伐以外の場面において、『平



話』は諸葛亮と司馬懿という対偶を語ることはないのだろうか。

『平話』における司馬懿の登場は早く、何と冒頭部分にその名が見える。ただし、少々特殊な立場にあると言えるであろう。『平話』が冒頭に、荒唐無稽とすら言える転生譚を置くのは有名な話だが、司馬懿の名はその中に現れるのである。以下に、その転生譚の概略を記そう。<sup>二八</sup>

後漢光武帝の時代、司馬仲相という書生が酒を飲みながら歴史書を読んでみると、五十人あまりの役人が現れ、仲相を連れ去る。着いた所は黄泉の裁判所（陰司）、「報冤之殿」であった。仲相はそこで死者を裁く事になる。そこへ現れたのが、血まみれになった漢の功臣、韓信、彭越、英布であった。三人は無実の罪で殺された事を口々に訴える。それを聞いた仲相は劉邦と呂后、そして証人として蒯徹（韓信の軍師）を呼び、裁決を天帝に上奏する。天帝はそれを受けて裁断した。その結果として、韓信は曹操、彭越は劉備、英布は孫権に転生し、漢の天下を三分することになり、劉邦は猷帝、呂后は伏皇后となって曹操より復讐を受けることとされる。また、蒯徹は諸葛亮に生まれ変わって、劉備の補佐に当たる。そして、司馬仲相は司馬仲達となって、三分された天下を一つにまとめ上げる役割を与えられた。

『平話』冒頭においては、司馬懿は司馬仲相の転生と設定され、天下を統一すべき人物と定義されるのである。

ただし、この場面を殊更に強調するには不安が残る。そもそも、この転生譚は『平話』本体から独立している可能性が指摘されている<sup>二九</sup>。

そして、それを裏書きするように、司馬懿は『平話』全編にわたって活躍するわけではない。天下統一という重要な役割を負いながら、彼が次

に登場するのは、諸葛亮の第一次北伐の時なのである。しかも、『平話』は、三国故事の前半、すなわち英雄豪傑（なかならず張飛であるが）の活躍を描くことに重点があり、北伐は最終盤に置かれる。『平話』における司馬懿の登場は、北伐からだとは判断するのが妥当であろう。すなわち、『平話』の、諸葛亮と司馬懿の関係は北伐に至って初めて現れるのである。（なお、『平話』冒頭の転生譚については、第五章で再び論ずる。）

そして、「死諸葛能走活仲達」が語られた後、『平話』は次のような挿話を述べる。

却說司馬懿引軍看諸葛營寨、嘆曰、「天下奇才也」。遂誅而祭之。至当夜、狂風過処、見一神人言、「軍師令我來送書」。司馬接看、書中之意略云、

吾死、漢之天命尚有三十年、若漢亡、魏亦滅、吳次之。爾宗必有一統。若爾執迷妄拳、禍及爾也。

司馬看罷、有不從之意。神人大喝。司馬喏喏言曰、「願從軍師之令」。神人遂推司馬倒地、叫声不迭、覺來却是一夢。以此司馬各立邊疆、不与漢爭鋒、還朝。<sup>三〇</sup>

（さて司馬懿は軍を率いて諸葛の築いた陣地を見、感嘆して、「天下の奇才である」と言った。そこで誅を作り、諸葛亮を祭った。夜になると、一陣の大風が吹き抜け、一人の神人が現れて言った。「軍師が某に書状を送らせたのである」。司馬がそれを受け取って見ると、書状には次のような事が書いてあった。

私が死んだ後、漢の天命はなお三十年残っている。もし漢が滅べば、魏もまた滅び、呉もこれに続く。そなたの家が必ず天下を統一するであろうが、もし、そなたに迷妄の拳があれば、災いはおそなた自身に及ぶ

であろう。

司馬は読み終えると、不服の意をあらわす。すると神人が大喝した。司馬は唯々諾々と言った。「軍師の命令に従いましょう」。神人はそこで司馬を地面に突き倒した。「司馬懿は」叫ぼうとしたが間に合わず、目が覚める。なんと夢だったのであった。この後、司馬は国境を区切り、漢とは戦わぬこととし、朝廷に戻った。

諸葛亮の遺言(?)を聞くのは、蜀漢の部下たちではなく、司馬懿であった。『平話』において、諸葛亮と司馬懿を強く関連づけている、明白な証拠であろう。

ともあれ、『平話』は、以前よりあった諸葛亮と司馬懿を対偶と看做す視点を継承し、その関係を強調するために、明らかに史実ではない挿話を数多く語るのである。この、「史実とは明らかに異なる」という点は強調しておきたい。何故ならば、この一点こそが、『平話』と『演義』を分かつ分水嶺だからである。

#### 第四節 北伐(三) — 『演義』

それでは、『演義』における北伐を見ておくことにしよう。まず、概略を示す。

第一次北伐 建興六年(二二七)春

『演義』九十一回後「孔明初上出師表」

〳九十五回後「孔明智退司馬懿」

南征から帰った諸葛亮は、後主に「出師表」を上表する。そして、漢中より出陣、連戦連勝する。また魏将孟達が蜀に寝返りを約束する。事態を憂慮した魏朝は左遷していた司馬懿を復職させ、司馬懿は孟達の裏切りを察し即座にこれを滅ぼした。その後、蜀軍と対峙した司馬懿は、街亭にて馬謖を大敗させるが、諸葛亮の「空城計」にかかり、蜀軍に決定的なダメージを与えるには至らなかった。

対呉戦 建興六年(二二七)五月〳九月

『演義』九十六回後「陸遜石亭破曹休」

司馬懿は、曹休とともに呉に侵攻する。しかし、曹休が呉の計略にかかり大敗したため、司馬懿は一戦も交えずに退却した。

第二次北伐 建興六年(二二九)冬

『演義』九十七回後「諸葛亮二出祁山」

〳九十八回前「孔明遺計斬王双」

再び「出師表」を上った後、諸葛亮は出陣し、陳倉城を包囲する。しかし、魏将郝昭に阻まれて陥落させられず、兵糧が尽きて退却した。それを追撃する中、魏の総大将曹真は副将の王双を失う。この戦闘に司馬懿は参加していないが、蜀軍の食糧事情を見抜いた上で、敢えて追撃を戒めていた。

第三次北伐 建興七年(二二九)

『演義』九十八回後「諸葛亮三出祁山」

〳九十九回前「孔明智敗司馬懿」

蜀軍の勢いは強く、司馬懿は持久戦の構えを採りそれに備える。し

かし、魏の諸将は納得しなかったため、司馬懿は終に折れて出撃を許可する。結果、魏軍は大敗を喫し、司馬懿は益々守りを固める。その後、諸葛亮が陣中で病を発し、蜀軍は退却する。

#### 第四次北伐 建興八年（二三〇）

『演義』九十九回後「仲達興兵寇漢中」

↳百回後「孔明祁山布八陣」

曹真・張郃とともに蜀へ進攻するが、長雨に遭いやむなく撤退する。魏軍が撤退すると、今度は諸葛亮が軍を二手に分けて出陣する。一方には曹真が当たり、他方は司馬懿が迎え撃った。油断していた曹真は蜀軍に大敗し、その衝撃に因り彼は病没する。魏の総指揮を執ることになった司馬懿は諸葛亮と対峙し、陣法を競うことになるが、司馬懿は諸葛亮の陣に敗れる。

その後、諸葛亮に譴責された蜀将苟安が魏に寝返った。司馬懿は彼を蜀の朝廷に向かわせ、諸葛亮に謀反の意ありと讒言させる。それを信じた朝廷は諸葛亮を召還したため、諸葛亮は退却を余儀なくされた。退却の際して、諸葛亮は「増竈の計」によって司馬懿を欺き、見事に退く。

#### 第五次北伐 建興九年（二三一）

『演義』百一回前「諸葛亮五出祁山」

↳百一回後「木門道弩射部」

諸葛亮は隴西に出、兵糧を確保しつつ魏への進攻を図る。司馬懿はその策を看破するが、諸葛亮に先手を取られて破れ、持久戦の構えへと移った。その後、幾度か攻撃をかけたが、いずれも敗北に終わった。

結局、兵糧補給が続かず蜀軍は退却する。その際、魏の諸将は追撃することを主張したが、司馬懿はなかなか許可しなかった。そして、その制止を押し切って出撃した張郃は姜維の策に嵌り、戦死する。

#### 第六次北伐 建興十二年（二三四）

『演義』百二回前「諸葛亮六出祁山」

↳一百四回後「死諸葛走生仲達」

諸葛亮は五丈原に出て、司馬懿を幾度か破る。それに懲りた司馬懿は、守備を固め諸葛亮の挑発に決して乗らないようにした。しかし、諸将の不満は大きく、再三司馬懿に出陣を要請する。それを抑えるため、司馬懿は都に奏して出撃禁止の詔を請う。その後、天文を見て諸葛亮が死んだことを知り攻撃をかけるが、蜀軍の押し立てた諸葛亮の木像を見て仰天し、退却する。

『平話』の北伐に比べ、『演義』のそれは史実に相当近づいている。まず、年代は史実と完全に一致する。また、「孔明揮淚斬馬謖」は第一次に、張郃の死は第五次にと、『平話』では史実と異なる配置をされていた故事が、史実通りに配置される。

すなわち、第一章で指摘した如く、『演義』におけるテキストの「史実化」が、北伐をめぐることも確認できるのである。一方で、全く史実に則るわけではなく、伝説を受容する点でも、呂布の場合と一致する。

見易いのは、標題で繰り返される「諸葛亮〇出祁山」という言い方であろう。「六出祁山」の語が『平話』にもあり、且つ史実とは一致しないことは已に確認した。『演義』は「〇出祁山」という言い方を踏襲するのだから、『平話』で確認される伝説を受容していることになる。

ところで、本節での焦点である諸葛亮と司馬懿に目を転じると、そこでも伝説が受容されていることが判る。『演義』での司馬懿は、第二次北伐を除く全ての戦闘に参加している。これが史実と反することは前節に述べたとおりである。一方、『平話』と比較した場合、五度という対蜀戦線への従軍回数で一致するばかりか、第二次にのみ参加していないという、細かい点においてさえ一致するのである。すなわち、『演義』は諸葛亮と司馬懿をめぐる伝説（非史実）を排除するのではなく、むしろ積極的に受容すると見てよからう。ただ、『演義』は、伝説を加工して史実らしく読ませる点において、史実を無視することの多い『平話』とは異なるに過ぎない。

ところで、『演義』のテキストを詳細に見てゆくと、実に数多くの伝説を受容していることが判る。そこで、節を改めて、伝説の受容について論じてみたい。

## 第五節 伝説の受容

正史において、司馬懿が諸葛亮と戦ったのは第五次、第六次のみであるから、『演義』の描く、第一次、第三次、第四次北伐における司馬懿と諸葛亮の対決は史実ではない。故に、この部分は必然的に史書に依らず、伝説を受容することが多くなる。以下、具体的に三つ例を挙げよう。

### 甲 空城計

第一次北伐において、街亭を失った諸葛亮は、窮地に追い込まれる。一方、勢いに乗った司馬懿は、蜀軍の兵糧を貯蔵する西城に迫る。兵数

が絶対的に少ない諸葛亮は「空城計」を用いた。すなわち、兵士に身を隠させ、旗指物も下ろし、城門を開け放ち、自らは城楼の上で琴を弾いて見せたのである。それを見た司馬懿は、埋伏の軍があることを恐れ、一旦、兵を引く。その間隙に諸葛亮は漢中へと帰陣したのであった。<sup>〔三〕</sup>この「空城計」自体は、蜀書・諸葛亮伝が引く『蜀記』に見える。些か長くなるが該当部分を引こう。

郭冲三事曰、亮屯於陽平、遣魏延諸軍并兵東下、亮惟留万人守城。晋宣帝率二十万衆拒亮、而与延軍錯道、径至前、当亮六十里所、偵候白宣帝說亮在城中兵少力弱。亮亦知宣帝垂至、已与相偪、欲前赴延軍、相去又遠、回迹反追、勢不相及、将士失色、莫知其計。亮意气自若、敕軍中皆臥旗息鼓、不得妄出菴幔、又令大開四城門、埽地卻洒。宣帝常謂亮持重、而猥見勢弱、疑其有伏兵、於是引軍北趣山。明日食時、亮謂參佐拊手大笑曰、「司馬懿必謂吾怯、将有疆伏、循山走矣」。候邏還白、如亮所言。宣帝後知、深以為恨。<sup>〔三三〕</sup>

（郭冲が三事に曰く、亮、陽平に屯し、魏延諸軍をして兵を并せて東下せしめ、亮、惟だ万人を留めて城を守る。晋の宣帝、二十万の衆を率いて亮を拒ぐに、而して延が軍と道を錯えて、徑ちに至り前み、亮の六十里の所に当たり、偵候、宣帝に白して亮の城中に在りて兵少なく力弱きを説く。亮、亦た宣帝の至るに、垂として、己に与に相偪るを知り、前みて延の軍に赴かんと欲すれば、相去ること又遠く、迹を回して反し追わんとすれば、勢、相及ばず、将士、色を失い、其の計を知ること莫し。亮、意气自若たり、軍中に、敕むるは皆な旗を臥せ鼓を息め、妄りに菴幔を出づるを得ず、又大いに四城門を開きて、地を埽き卻つて洒わしむ。宣帝、常に亮、持重すと謂い、而も猥りに勢の弱きを見て、其の伏兵有るを疑い、是に於いて軍を引き北のかた山

に趣く。明日食時に、亮 参佐に謂い手を拊ちて大いに笑いて曰く、「司馬懿 必ず吾が怯を謂いて、將に彊伏有らんとし、山に循いて走らん」と。候還して白すは、亮が言う所の如し。宣帝 後に知りて、深く以て恨みを為す。

『蜀記』の記述に従えば、晋初に扶風王であつた司馬駿が配下と共に諸葛亮を論じたところ、ただ金城の郭沖のみが五つの事跡を挙げて諸葛亮を称え、扶風王はその言を是としたという。ここに引いたのは、郭沖が挙げた五つの事跡の中の第三である。

郭沖のこの言は、恐らく史実ではない。そもそも、註として『蜀記』を引いた裴松之自身が批判しているのである。

難曰、案陽平在漢中。亮初屯陽平、宣帝尚為荊州都督、鎮宛城、至曹真死後、始与亮於関中相抗禦耳。魏嘗遣宣帝自宛由西城伐蜀、值霖雨、不果。此之前後、無復有於陽平交兵事。就如沖言、宣帝既率二十萬衆、已知亮兵少力弱、若疑其有伏兵、正可設防持重、何至便走乎。案魏延傳云、「延每随亮出、輒欲請精兵萬人、与亮異道会于潼関、亮制而不許。延常謂亮為怯、歎己才用之不尽也」。亮尚不以延為萬人別統、豈得如沖言、頓使將重兵在前、而以輕弱自守乎。且沖与扶風王言、顯彰宣帝之短、对子毀父、理所不容、而云「扶風王慨然善沖之言」、故知此書拳引皆虛。

(難じて曰く、案ずるに陽平は漢中に在り。亮 初めて陽平に屯するとき、宣帝 尚お荊州の都督たりて、宛城を鎮し、曹真 死して後に至りて、始めて亮と関中に相抗禦するのみ。魏 嘗て宣帝をして宛自り西城に由りて蜀を伐たしむるに、霖雨に値い、果さず。此の前後、復た陽平に兵を交うる事有

ること無し。就し沖が言の如くんば、宣帝 既に二十萬の衆を挙げ、己に亮の兵少なく力弱きを知る、若し其の伏兵有るを疑わば、正に防を設け持重すべし、何ぞ至りて便ち走らんや。案ずるに魏延傳に云く、「延 亮に隨いて出ずる毎に、輒ち精兵萬人を請いて、亮と道を異にして潼関に会せんことを欲するも、亮 制して許さず。延 常に亮を謂いて怯と為し、己が才用の尽くさざることを歎くなり」と。亮 尚お延を以て萬人の別統と為さず、豈に沖が言の如く、頓りに重兵を將つて前に在らしめ、而して輕弱を以て自ら守ることを得んや。且つ沖 扶風王と言いて、宣帝の短を顯彰するは、子に對して父を毀る、理の容れざる所、而も云く、「扶風王 慨然として沖の言を善しとす」と、故に此の書の拳引するは皆な虚なることを知る)

裴松之の批判は、第二節での考証を裏書きしているが、それは措く。ともあれ、郭沖の述べる「空城計」は史実というより、伝説の範疇に属するものである。そして、伝説であるからこそ、『演義』が、この「空城計」をそのまま受容していることは重視すべきであろう。史書に収録される伝説という性格である郭沖の言は、史実らしく伝説を語る『演義』にとって格好の材料であり、この挿話を採用しているという事実には、『演義』のテキストの性格が如実に現れている。

#### 乙 第四次北伐

繰り返しになるが、第四次、すなわち蜀の建興八年(二三〇)に起こった戦闘は、魏が蜀に攻め込んだのであり、史書の上では「北伐」ではない。ところが、『演義』は史書に則って魏の蜀進攻及び退却を記した後、諸葛亮に北伐を行わせるのである。別言すれば、第四次北伐は、もつとも史実から乖離した北伐であると考えられよう。そして、その戦い

において、諸葛亮と司馬懿は陣立てを競う。概略を示せば、次のようになる。

魏軍が長雨で退却したのを見て、諸葛亮は二路より魏に進攻する。

これに対し、魏では曹真と司馬懿が防衛の任に当たった。しかし、油断していた曹真は諸葛亮の計に当たって大敗し、ついには憤死してしまふ。続いて諸葛亮は軍勢を涪濱に移し、司馬懿と対峙する。そして、陣法を競うことになり、まず司馬懿が陣を布くが、諸葛亮は、それが「混元一氣陣」だと言いつける。次に諸葛亮が陣を布く。司馬懿はそれを「八卦陣」だと見破るが、諸葛亮はそれを破るように挑発する。そこで、司馬懿は配下に計を授けて出陣させるが、諸葛亮の方が上手であり、その陣を破るところか兵の大半を失う。怒った司馬懿は総攻撃をかけるが、伏兵に囲まれ魏軍は敗走する。陣に逃げ戻った司馬懿は、守備を固め出陣しようとはしなかった。<sup>〔三四〕</sup>

戦場に「涪濱」を設定していることから、『語林』などの先行する説話から影響を受けていることを指摘できよう（無論、直截に受けているというのではない）。さらに、諸葛亮と司馬懿が陣法を競うことについて、上屋文子は次のように述べる。些か長くなるが、当を得た分析なので引用しよう。

また、『演義』においても、司馬懿と諸葛亮が陣法を戦わせる場面が登場する。……（引用略）……ここでの司馬懿は、一方的に諸葛亮に翻弄されるのみだが、やはり基本的には同一のステージにいると見てよからう。多くの説話に登場する奇怪な陣形のヴァリエーションに

みられるように、陣法はそれ自体、一種神秘的な力をもつものと考えられており、従って陣法駆使の能力は、現実の将帥の職能であると同時に、説話中においては軍師の異能の一部でもあった。なお、現代民話においては、司馬懿は諸葛亮の同門とされることがある。

つまり司馬懿は元来、諸葛亮と対等の軍事的異能者と見なされており、両者の対決は本来的に、異能者同士のものであったと推察される。

〔三五〕

土屋の指摘は、陣法を競うという行為そのものが、多分に説話的要素を含むことも意味している。『演義』の第四次北伐に対しては、現在のところ、直接の淵源を指摘することはできないけれども、この部分が伝説的要素を受容して、初めて成立し得ることは間違いないであろう。

### 丙 張郃をめぐる

再び史実に戻って諸葛亮の北伐を検証すると、司馬懿の他に主な敵手と呼び得る人物として、曹真・郭淮・張郃の名が挙げられるであろう。そして、『演義』や『平話』では、諸葛亮と司馬懿の対偶が強調される余りに彼らは矮小化される傾向が強い。就中、最も割を食ったと思われるのは、張郃である。

『演義』における張郃は、微妙なイメージで描かれている。敢えて言えば、知勇兼備の将であるが、やや勇に傾いているところか。

この勇に傾くというイメージの一因として、諸葛亮の第三次、第五次北伐において執拗に追撃にこだわったことが挙げられよう。そして、第五次北伐において蜀軍を深追いた張郃は、諸葛亮の計にかかり射殺されるのであった。血気にはやった張郃が自らの死を招いたと『演義』は

描くわけである。そして、司馬懿は張郃の死を、出撃を許可した自らの過ちであったと悼む。

魏兵回見司馬懿、細告前事。懿悲傷不已、仰天嘆曰、「張雋義身死、吾之過也」。乃収兵回洛陽。魏主聞知大哭不已、衆官再三勸解、方纔休息。（二六）

（魏兵は退却して司馬懿に謁見し、つぶさに様子を告げた。司馬懿は悲しんで止まず、天を仰いで嘆く。「張雋義〔三七〕が死んだのは、わしの過ちである」。そこで兵を収めて洛陽に戻った。魏主は聞き知ると大いに嘆き悲しんで留まることを知らず、百官が再三慰めて、ようやく静まったのであった。）

しかし、正史に見える張郃にはこのような猪突猛進の姿はない。そもそも、張郃は司馬懿の配下の武将と言うよりは、当時の魏の都督の一人だったのである。正史によって張郃の生涯の概略を追い、『演義』との比較を交えて、その事を確認してゆきたい。

張郃、字は雋乂、河間鄭の人である。彼は最初、曹操と河北で覇を争った袁紹の配下であった。だが、官渡の戦いにおいて讒言を受け、そのため曹操のもとへ帰順する。その後、魏軍にあって武功を重ね、北伐が始まる時には左將軍にまで進んでいた。

諸葛亮の第一次北伐における彼の事績を、『三国志』魏書・張郃伝は次のように記述する。

諸葛亮出祁山。加郃位特進、遣督諸軍、拒亮將馬謖於街亭。謖依阻南山、不下拋城。郃絶其汲道、擊、大破之。南安・天水・安定郡反応亮、郃皆破平之。〔三八〕

（諸葛亮 祁山に出づ。郃に位は特進を加え、諸軍を督し、亮の將馬謖を街亭に拒がしむ。謖 南山に依阻し、下りて城に拋らず。郃 其の汲道を絶ち、擊ちて、大いに之を破る。南安・天水・安定郡反して亮に応ずるも、郃皆な破りて之を平らぐ。）

要所に陣取っていた馬謖を破り、謀反した三郡を平らげたのであるから、この勝利は張郃に因ってもたらされたとしか言いようがない。しかし、『演義』の張郃は、史実では従軍さえしていない司馬懿に命じられて街亭を攻める、という役割に甘んじている。さらに、魏の明帝は三郡を取り戻した功は、司馬懿のものだと讃える。

懿悔之不及、仰天歎曰、「吾不如孔明也」。遂按軍法、安撫了諸処官民、引軍逕還長安、朝見魏主。叡曰、「今日復得隴西諸郡、皆卿之功也」。懿奏曰、「今蜀兵皆在漢中、未盡勦滅。臣乞天下之兵、併力収川、以報陛下。叡大喜、令懿即便興兵。……〔三九〕

（司馬懿は後悔したが及ばず、天を仰いで嘆いた。「わしは孔明には及ばぬ」。そこで軍法に照らし、諸処〔三郡を指す〕の官民を慰撫した。その後、軍を長安に返し、魏主に謁見した。曹叡が言う。「今日、隴西の諸郡を再び得たのは、すべて卿の功績である」。司馬懿は上奏した。「今、蜀兵はすべて漢中におり、いまだ滅し平らげるには至っております。臣は天下の兵を預らせていただき、その力を併せて西川を収め、以て陛下の御恩に報いる所存であります」。曹叡は大いに喜び、即座に司馬懿に兵を興させようとした。……）

第二次北伐には援軍として赴く。再び、張郃伝に拠り、彼の事績を追ってみる。

諸葛亮復出、急攻陳倉、帝、馭馬召郃到京都。帝自幸河南城、置酒送郃、遣南北軍士三万及分遣武衛・虎賁使衛郃、因問郃曰、「遲將軍到、亮得無已得陳倉乎」。郃知亮縣軍無穀、不能久攻、对曰、「比臣未到、亮已走矣。屈指計亮糧不至十日」。郃晨夜進至南鄭、亮退。詔郃還京都、拜征西車騎將軍。<sup>〔四〇〕</sup>

(諸葛亮 復た出で、急に陳倉を攻め、帝 馭馬をして郃を召し京都に到らしむ。帝 自ら河南城に幸し、置酒して郃を送り、南北の軍士三万を遣わし及び武衛・虎賁を分かち遣わし郃を衛らしめ、因りて郃に問いて曰く、「遅く將軍 到れば、亮 已に陳倉を得ること無きを得んや」と。郃 亮の軍を縣へだてて殺無く、久しく攻むる能わざるを知り、对えて曰く、「臣の未だ到らざる比、亮 已に走らん。指を屈して計るに亮が糧 十日に至らず」と。郃 晨夜進みて南鄭に至り、亮 退く。郃に詔して京都に還らしめ、征西車騎將軍を拜す。)

このとき諸葛亮の侵攻を憂える明帝に対し、張郃は「指を屈して計るに亮の糧は十日に至らず」と蜀軍の食糧事情を喝破してみせた。果たして彼の予言通り、張郃の軍が到着すると諸葛亮は退却している。

ところが、前節で見たように『演義』において蜀軍の食糧事情を見抜くのは司馬懿である。張郃は曹真とともに諸葛亮と対峙し翻弄されている。正史における張郃の行動は司馬懿のそれとして描かれるわけである。

この戦いの後、張郃は征西車騎將軍に任じられる。そして、正史の張郃は、第三次北伐の戦いには参加していない。逆に『演義』では参加していない魏の蜀侵攻(『演義』では第四次北伐につながる)に、正史においては従軍している。『三国志』蜀書・後主伝を引用しておこう。

八年秋、魏使司馬懿由西城、張郃由子午、曹真由斜谷、欲攻漢中。丞相亮待之於城固・赤阪、大雨道絶、真等皆還。<sup>〔四二〕</sup>

(建興)八年(二三〇)秋、魏 司馬懿を西城由り、張郃を子午由り、曹真を斜谷由りして、漢中を攻めんと欲す。丞相亮 之を城固・赤阪に待つも、大いに雨ふりて道絶え、真等皆な還る。)

これを見ても、張郃が曹真や司馬懿に準じた地位にあった事が推測される。

そして、この章の冒頭で述べたように、第五次北伐の戦闘に従軍した際、彼は蜀軍に射殺される。『演義』では張郃が執拗に司馬懿に追撃の許可を迫り、折れた司馬懿が許可したその追撃戦の最中に命を落とすのである。しかし、正史の裴註には、むしろ司馬懿の方が積極的であり、張郃は追撃に否定的であったという記述が見える。張郃伝に引く『魏略』に云う。

『魏略』曰、亮軍退、司馬宣王使郃追之、郃曰、「軍法、圉城必開出路、歸軍勿追」。宣王不聽。郃不得已、遂進。蜀軍乘高布伏、弓弩乱発、矢中郃髀。<sup>〔四三〕</sup>

(『魏略』曰く、亮の軍 退き、司馬宣王 郃をして之を追わしむ。郃曰く、「軍法に、城を囲めば必ず出路を開き、歸軍は追う勿れとあり」と。宣王聽かず。郃 已むを得ず、遂に進む。蜀軍 高きに乗じて布伏し、弓弩 乱発し、矢 郃の髀に中る。)

以上が、張郃の生涯の概略である。何度も言及したように、正史では



張郃が行った事績の多くが、『演義』では司馬懿の行ったこととされる。それも、戦略上の炯眼であるとか、反乱した郡の平定であるとか、將軍としてプラスに評価されることばかりである。『演義』が司馬懿の重要度を増し、諸葛亮と匹敵する人物に描き出そうとして、このような操作を行ったことは明白であろう。

ただし、右の如く、張郃を貶めて司馬懿を称える操作は、『演義』独自のものではない。『平話』にも、類似する記述がある。

行日、探事人告、「皇丈上辺」。司馬懿急引衆官接入城、乃魏將皇丈張郃。筵会半月。一日、武侯引三千軍、輕弓短箭、善馬熟人、軍師素車一輛、令人罵司馬懿。有張郃言、「爾乃魏之名將、諸葛罵怒、衆官無人敢出」。司馬言曰、「諸葛無人可当」。張郃帶酒、引軍三万出城。司馬懿告、「太師老矣」。張郃言、「奉聖旨来与諸葛搦戰、元帥不出、弱了魏家威風」。衆官勸不住、出与武侯对阵。武侯大敗、張郃趕到數里、見漢軍皆散。張郃在軍前、武侯偃身回見。【百箭射殺張郃】張郃死在軍前、司馬相殺武侯、旬後有楊儀使計奪了街亭。司馬懿西北六十里下寨、虎視街亭。（四三）

（ある日、探索の兵が「皇丈（皇妃の父）がいらっしやいます」と報告した。司馬懿が慌てて百官を率いて迎え、城へと案内したのは、魏の大將で皇丈の張郃であった。そして歓迎の宴が半月にわたって開かれる。またある日、武侯は三千の軍を率いて攻め寄せた。兵は輕弓に短い矢を備え、良馬に熟達の兵が揃っていた。軍師はといえば、武装をしない車に乗り、周囲の兵が司馬懿を罵る。張郃が言う。「そなたは魏の名將ではないか。諸葛がそなたらを罵っているというのに、百官の中、一人でも出撃する者はおらんのか」。司馬が答える。「諸葛には何人も敵し難いのです」。張郃は酒に酔い、三万を率いて

出陣しようとする。司馬懿が言う。「太師は老いておられます」。張郃が言う。「聖旨を奉じて来たり、諸葛に戦いを挑もうというのだ。元帥が出撃しなければ、魏朝の威風を損なうことになる」。百官は諫めるが止められず、「張郃は」出撃して武侯と対峙した。武侯は大敗し、張郃は追撃して數里を進む。見ると漢軍は皆散り散りとなっている。張郃は陣頭に進む。そこへ武侯が身を伏せて（？）振り返ると、無数の矢が放たれて張郃を射殺した。張郃が陣頭に死すと、司馬が武侯と戦うが、戦場の背後には楊儀がおり計を用いて街亭を奪った。司馬懿は西北六十里を退いて砦を築き、街亭を狙う。）

張郃を「皇丈」としていることなど、『平話』独特の史実からの逸脱はあるものの、挿話の形は、『演義』に描かれる張郃の死と酷似する。特に、史実では慎重派であった張郃が、無謀な出陣をして自らの死を招くというように人物形象を改変される点が、『演義』と『平話』で共通することに注目したい。これは両者が同根の淵源に基づき、かつ、それは史書ではあり得ず、伝説と呼ぶべきものであることを示唆している。換言すれば、『演義』の北伐における張郃の人物形象は、伝説を受容した結果、作り上げられたものなのである。

## 第六節 伝説受容の準備

『演義』は、北伐において諸葛亮と司馬懿を対偶と看做す伝説を受容していた。そして、ごく大雑把に言って、当初、第六次北伐に限られていたこの対偶が、『平話』に至って北伐全般に拡大していたのは、第三節で見たとおりである。逆に言えば、『平話』において、両者の対偶は

北伐に限定されていたとも言える。ならば、この限定は『演義』にも共通するのであろうか。つまり、諸葛亮と司馬懿は、それ以外の場面で対偶とは看做せないであろうか。

結論を先に言ってしまうえば、そうではない。『演義』は北伐以前から、諸葛亮と司馬懿という対偶を強く意識しているのである。また、その語られ方は、極めて『演義』らしく合理化されたもので、一見しただけでは虚構とは気付かないのではなからうか。そこで、以下、三項にわたり具体例を挙げて、論じてみたい。

なお、諸葛亮は『演義』後半の主人公とも言うべき人物であるから、彼の事績に関する記述は、司馬懿に関するそれと比して圧倒的に多い。それゆえ、前者を中心に論を進めると、焦点がぼやけてしまう恐れがある。そこで、焦点を司馬懿に絞って、論を進めてゆく。

#### 甲 司馬懿登場

司馬懿が『演義』に初めて登場するのは、第三十九回前である。以下にその登場場面を引用する。

却説曹操罷三公之職、自為丞相、以毛玠為東曹掾、崔琰為西曹掾、司馬朗為主簿。朗字伯達、河内温人也、潁川太守司馬雋之孫、京兆尹司馬防之子。弟兄八人、次子司馬懿、字仲達、操命為文學掾、並掌典選舉之職。〔四四〕

（さて曹操は三公の職を廃止し、自らが丞相と為り、毛玠を東曹の掾とし、崔琰を西曹の掾とし、司馬朗を主簿とした。朗は字を伯達といい、河内温県の人であり、潁川太守司馬雋の孫、京兆の尹司馬防の子である。兄弟は八人おり、次男の司馬懿は字は仲達といい、曹操は命じて文學の掾とし、併せて

選舉の職を任せた。）

この後、曹操は劉備、諸葛亮の駐屯する新野に夏侯惇を派遣する。つまり内政の体制を固めた後、劉備軍を攻めるといふ文脈になっている。次に『通鑑』と『綱目』の建安十三年（二〇八）の条を引く。

夏、六月、罷三公官、復置丞相・御史大夫。癸巳、以曹操為丞相。操以冀州別駕從事崔琰為丞相西曹掾、司空東曹掾陳留毛玠為丞相東曹掾、元城令河内司馬朗為主簿、弟懿為文學掾、冀州主簿盧毓為法曹議令史。毓、植之子也。〔四五〕

（建安十三年、二〇八）夏、六月、三公の官を罷め、復た丞相・御史大夫を置く。癸巳、曹操を以て丞相と為す。操以て冀州別駕從事崔琰を丞相西曹掾と為し、司空東曹掾陳留毛玠を丞相東曹掾と為し、元城令河内司馬朗を主簿と為し、弟懿を文學掾と為し、冀州主簿盧毓を法曹議令史と為す。毓、植の子なり。）

夏、六月、罷三公官、曹操自為丞相。

操以崔琰為西曹掾、毛玠為東曹掾、司馬朗為主簿、弟懿為文學掾。琰・玠並典選舉、其所舉用皆清正之士。……〔四六〕

（建安十三年、二〇八）夏、六月、三公の官を罷め、曹操 自ら丞相と為る。操 崔琰を以て西曹掾と為し、毛玠を東曹掾と為し、司馬朗は主簿と為し、弟懿を文學掾と為す。琰・玠は並びに選舉を典じ、其の舉用する所は皆清正の士なり。……）

『演義』が両者、とりわけ『綱目』の記述に近いことは明らかである

う（『演義』では選挙を掌ったのは司馬懿となっているが、これは誤説であろうか）。ただ『演義』の方は毛玠、崔琰に比べ司馬朗、懿の兄弟に関する記述が詳しい。また、正史では役職の異動がかなり頻繁に記されるのに対して、『演義』においてそれらが記されることはあまりない。特に三公九卿や、將軍といった重要な役職以外の異動は滅多に書かれない。にも関わらず、『演義』でもこの人事は記されている。これはやはり、この人事に司馬懿が絡んでいる事に原因を求めべきであろう。後半で重要な役割を演じる司馬懿の初登場だからこそ、この人事異動を記したのである。毛本になるとその傾向は一層顕著となる。

却説曹操罷三公之職、自以丞相兼之。以毛玠為東曹掾、崔琰為西曹掾、司馬懿為文學掾。懿字仲達、河内温人也、潁川太守司馬

雋之孫、京兆尹司馬防之子、主簿司馬朗之弟也。<sup>〔四七〕</sup>

（さて、曹操は三公の職を廃止し、自ら丞相となってこれを兼任した。毛玠を東曹の掾と為し、崔琰を西曹の掾と為し、司馬懿を文學の掾と為した。懿は字を仲達、河内温県の人である。潁川太守司馬雋の孫、京兆の尹司馬防の子、主簿司馬朗の弟である。）

呉観明本ではまず司馬朗を紹介した後司馬懿が登場するのだが、毛本では司馬懿を紹介することに終始している。挿話の重点が司馬懿に移っているのは明らかであろう。別言すれば、この挿話の主目的は司馬懿を登場させることにあるのである。

それでは、何故ここで司馬懿を登場させているのか。正史に見えるからと言ってしまえばそれまでであるが、一考の価値はあろう。何故ならば、司馬懿が次に姿を見せるのは第六十七回であり、物語上での時間経

過において些かの懸隔があるからである。しかも、第三十九回での司馬懿は、ただ官職に就いたことを記されるだけで別段何をするわけでもない。いかにも唐突であり、不自然である。何故、このような無理を押しつけてまで司馬懿を登場させる必要があったのか。

この問題は、諸葛亮の登場と関係づけて考えるべきであろう。諸葛亮は「三顧之礼」によって劉備の陣営に迎えられるのであるが、この有名な挿話は『演義』第三十七回に見える。つまり、諸葛亮は司馬懿登場の直前に、登場しているのである。そして、これ以後、諸葛亮は稀代の名軍師として、物語の中核を形成する人物となる。一方、その敵手たる司馬懿が本格的に表舞台に立つのは、魏文帝（曹丕）の死後であり、諸葛亮に比べて非常に遅い。翻って史実を閲すると、司馬懿が出仕したのは建安十三年（二〇八）、諸葛亮が出仕したのはその前年、と時間的に極めて近いことに気付く。これは全くの偶然であろうが、『演義』はその偶然を巧みに利用した。すなわち、『演義』中でも、史実通り二人を相前後して登場させることにより、諸葛亮と司馬懿という対偶を暗示したのであろう。

## 乙 五路進攻撃

第三十九回前で登場した司馬懿だが、その活躍が本格化する時期、すなわち諸葛亮の北伐開始に至るまでは、さして登場回数も多くない。その中で、『演義』における司馬懿の人物形象に比較的影響が大きいと思われる場面が二つある。一つは劉備の死の直後に行われた魏軍による「五路進攻撃」、いま一つは司馬懿の一時的な失脚である。

まず、「五路進攻撃」について見ておこう。この挿話は『演義』第八十五回後に見える。

魏の黄初四年（二二三）、蜀の先主劉備は白帝城にて没する。その報を受けた魏の文帝（曹丕）は好機とみて、重臣たちに蜀への進攻を諮る。参謀の賈詡はこれに反対するが、司馬懿は千載一遇の好機として五路よりの進攻を献策する。その五路とは、遼西の羌軍、南蛮の孟獲軍、呉の孫権軍、蜀より魏へ降伏した新城の孟達軍、そして、魏の大將軍曹真率いる軍である。この五軍によって五方から蜀を攻めるのが司馬懿の計であった。曹丕は喜んですぐさまこの計を実行に移す。

これに対し、諸葛亮は羌軍には馬超、孟獲には魏延、孟達にはその親友李厳を差し向け侵入を阻む。魏軍に対しては趙雲を派遣して要害を固めさせた。唯一つの気懸かりであった呉軍に対しても、鄧芝を派遣して呉と同盟を結ぶことで防いだ。結局、司馬懿の計は孔明に苦もなく破られたのである。

以上がこの「五路進攻策」の顛末である。このうち、蜀と呉が同盟を結んだ事は正史に見える。例えば、『三国志』の蜀書・後主伝には

遣尚書郎鄧芝固好於呉、呉王孫権与蜀和親使聘、是歲通好。〔四八〕

（建興元年、二二三）尚書郎鄧芝を遣りて好を呉に固め、呉王孫権 蜀と和親し使聘す、是の歲通好す。

とあり、更に詳細な経過も『蜀書』鄧芝伝、『通鑑』卷七十等に見える。ただ、この同盟は国力の勝る魏に対抗する為であって、『演義』の如く、魏の策動を制するという直接的な動機があったわけではない。

さて、右に見た蜀と呉の同盟を除くとこの挿話の内容は殆ど虚構であると言つて良い。それでは、何故このような虚構を加える必要があったのか。

虚構である「五路進攻策」によって、史実である蜀と呉の同盟が説明される。このように理由や動機がはっきりしなかったり、複雑であったりする史実を、フィクションの挿入により、解り易く説明し挿話のテーマなどを強調するのが、『演義』の常套手段であることは、已に金文京が指摘している。

#### ⑨ 史実に加えられたフィクション―呂伯奢殺し・陳宮

大きな史実の中に小さなフィクションを効果的に加えるのは、『演義』が好んで用いる手法である。これも史実の利用にはちがいないが、一連の史実のなかに一部だけフィクションを加えることによって、テーマや人物像を強調する画竜点睛的な効果をもつ。たとえば、曹操が呂伯奢を殺した話がよい例であろう。

董卓の暗殺に失敗して逃げた曹操が、身をよせた父の友人、呂伯奢の家で、疑心暗鬼からあやまって家族を皆殺しにしたうえ、わざわざ酒を買いに行っていた呂伯奢の命までもうばい、「むしろ我れをして天下の人に負かしむるも、天下の人をして我れに負かしむなかれ」とうそぶく話（第四回）は、曹操という奸雄の正体を読者の前にはじめてあばいてみせる印象的な場面である。

曹操が呂伯奢の家族をあやまって殺したことは、『三国志』の「武帝紀」の注に引く『世語』や孫盛の『雜記』に見える。しかし、その後呂伯奢までも殺したとは両書ともに書いていない。これは『演義』の創作であるが、この方が曹操の冷酷さを示すの

にはより効果的であることは言うまでもないであろう。

ちなみに、『演義』ではこの時、陳宮が同行しており、曹操の言葉を聞いて愛想を尽かしてしまうということになっているが、これもフィクションである。陳宮はもと曹操の配下であったが、のちなぜか曹操を裏切って呂布についてしまう。史書では裏切りの理由がはっきりしないので、『演義』は、曹操の正体を知りながら彼を見逃した中牟県の役人を陳宮ということにし、陳宮を曹操と同行させて呂伯奢殺しを目撃させ、呂布への寝返りを合理的に説明したのである。『演義』が史料をよく読みこんで周到に話を組み立てていることを示すよい例であろう。<sup>〔四九〕</sup>

ただし、「五路進軍策」の挿話に限って言えば、同盟を説明するだけのものにしては虚構の部分が大袈裟に過ぎ、金の言う「小さなフィクション」とは言い難い。単にテーマや人物の強調だけで解釈するのではなく、何らかの意図がはたらいていると考えた方が自然であろう。

その意図とは何かを考えるために、この挿話が劉備の死の直後であるという点と、献策を行ったのが司馬懿であるという点に着目したい。

『演義』の物語の前半は、「善」である劉備、関羽、張飛の義兄弟と「悪」の曹操の対立という図式をその根幹に置いていると一般に理解される。この四人の内、まず関羽は後漢の建安二十四年（二一九）に呉の孫権によって捕えられ斬首される。曹操は翌年に病没し、さらにその翌年、すなわち魏の黄初二年（二二二）には、張飛が部下に裏切られ殺される。そして、その二年後に劉備が白帝城で没する。劉備の死は前半の主人公たちの時代の終焉を意味しているわけである。

しかし、『演義』の物語はこれで終わるわけではない。故に「次」の

主人公が必要とされよう。「善」、すなわち蜀の側に問題は無い。希代の名軍師、諸葛亮がいるからである。だが、「悪」の側はどうか。呉はともかく、最大の敵役である魏に中心人物がない。歴史的に見れば、曹操を継いで魏の初代皇帝となった文帝（曹丕）には、魏の中心となる資格も力量も十二分にあつたであろう。しかし、彼は、曹操の没後わずか七年にして夭逝してしまい、その後を継いだのは二十歳を越えたばかりの明帝（曹叡）であつた。実戦経験もないこの皇帝では、諸葛亮の敵手としていかにも役者不足であろう。

ただし、この問題は曹叡個人とは何ら関わりがない。元来、『演義』において、主役は独りに限定されず、劉備・諸葛亮、時に関羽と分散される傾向があるのに対し、敵役の機能は曹操に集中している観がある。その他の魏の人物は「曹操の臣下」あるいは「曹操の子孫」であるから悪役なのであつて、曹操の死後、中心を担うほどの人物形象のふくらみをそもそも与えられていないのである。これは司馬懿とて例外ではなく、曹操が死ぬ段階では彼は参謀役として幾度か助言を行った端役に過ぎない。

しかし、『演義』の主要テーマである「勸善懲悪」を描くためには<sup>〔五〇〕</sup>、「善」「悪」のそれぞれに中心を置く必要があつたはずである。そして、前節までで見たとおり、『演義』以前の伝説を受容する限り、諸葛亮の敵手は司馬懿しかあり得ない。ならば、それまで端役に過ぎなかつた司馬懿の、物語における重要度を増す必要が生じよう。そして、その重要度を増すために、『演義』は黄初四年に結ばれた蜀と呉の同盟という史実を描く際、その同盟の直接的な原因として、司馬懿が献策する「五路進軍」という虚構を設定したのではないか。

### 丙 司馬懿の左遷

次に、『演義』第九十一回に描かれる、司馬懿の一时的な左遷について見ておこう。まず、概略を示す。

魏の黄初七年（二二六）、文帝（曹丕）が没し、子の曹叡（明帝）が即位する。その際、の様子は次のように記される。その後の諸葛亮の反応まで含めて、些か長くなるが引用しておく。

夏五月、丕感傷寒、百官医治不可。乃召中軍大將軍曹真、鎮軍大將軍陳羣、撫軍大將軍司馬懿。此三人乃掌國家重大之事。皆入寢宮、丕喚曹叡至、乃与曹真等曰、「今朕病已沈重、多是不痊。此子年幼、卿等三人可以輔之、勿負朕心」。三人皆告曰、「陛下何故出此言也。臣等願竭力以事陛下、千秋万歳」。曹丕曰、「今年許昌城之城門、無故自崩、乃不祥之兆、朕故知其死也」。忽征東大將軍曹休入宮問安。丕曰、「卿等四人、皆國家柱石之臣也。今已在此、朕有何慮耶」。言訖、墮淚而崩。時四十歳、没於洛陽宮嘉福殿、在位七年。後晉平陽侯陳壽評曰、……（評略）……是於曹真・陳羣・司馬懿・曹休等四人、一面拳哀、一面冊立□叡為大魏皇帝。諡父丕為文皇帝、諡母甄氏、為文昭皇后、封鍾繇為太傅、曹真為大將軍、曹休為大司馬、華歆為太尉、王朗為司徒、陳羣為司空、司馬懿為驃騎大將軍、其餘文武官僚、各各封贈、大赦天下。時雍・涼二州、無官守把、於是司馬懿上表、乞守西涼等處。曹叡從之、遂封懿提督雍・涼等處兵馬、領詔去訖。

却説細作人飛報入川、來見孔明。孔明大驚曰、「曹丕已死、孺子曹叡即位、餘皆不足掛意。但有河内温人司馬懿、此人乃世之英雄、今若總督雍涼兵馬、倘訓練成時、必為蜀中之大患。不如先起兵伐之」。

（夏五月、曹丕は体の不調を感じ、数多くの典医が治療に当たったが恢復し

なかった。そこで中軍大將軍の曹真・鎮軍大將軍の陳羣・撫軍大將軍の司馬懿を召し、この三人が國家の重大事を掌ることになったのであった。皆が寢殿に参ると、曹丕は曹叡を呼び寄せ、曹真たちに向かつて言った。「今、朕の病は甚だ重く、おそらくは治らぬ。この子は年幼いゆえ、そち等三人で補佐してやってほしい。朕の心に背かないでくれよ」。三人は答えて言った。「陛下には何故そのような事を仰いますのか。吾が力を尽くして皇帝陛下に任せ、千秋万歳の言祝ぎをすることこそ臣等の願うところであります」。曹丕「今年になって許昌の城門が故もなく自然と崩れてしまった、これは不祥の兆しである。それゆえ、朕は己が死を悟ったのだ」。突然、征東大將軍の曹休が宮中に至り、皇帝の病状を尋ねた。曹丕が言う。「そち等四人は皆、國家の柱石の臣じゃ。今ここにこうしているからには、朕には何の心配もなく」。言いは終わると涙を流し崩御した。時に年四十歳、洛陽宮の嘉福殿において、在位七年にして没したのである。後に晉平陽侯陳壽は評して言った。……（評略）……ここに曹真・陳羣・司馬懿・曹休ら四人は悲しみの声を挙げつつ、「曹」叡を大魏皇帝に立てた。「曹叡は」父の丕に文皇帝、母の甄氏に文昭皇后と、それぞれ諡し、鍾繇を太傅に、曹真を大將軍に、曹休を大司馬に、華歆を太尉に、王朗を司徒に、陳羣を司空に、司馬懿を驃騎大將軍に封じ、その他の文武の官僚もそれぞれ官を進め、天下に大赦を施した。時に雍・涼二州には、守備する総督がいなかったが、司馬懿が表を上り、西涼などの守備を願ひ出た。曹叡はこれに従ひ、司馬懿を雍・涼二州の兵馬を統括する職に封じ、「司馬懿は」詔を受けて出立した。

さて、間諜は西川に入り、孔明にこれを知らせた。孔明は大いに驚き、「曹丕は既に死んで、小僧っ子の曹叡が即位したからには私が気に掛けることは無い。ただ河内温県の人、司馬懿は世の英雄であり、今、雍・涼の兵馬を總督し、もし、兵馬の訓練が成った暁には、必ずや蜀の大患となろう。敵より

先に兵を起こして打ち破るに越した事はない。」)

そして、孔明の意を受けた馬謖は、魏の内部に「司馬懿に謀反の計画あり」との噂を流す。魏の明帝は事の真偽をはかりかね、群臣に諮る。司馬懿なら有り得るという意見と、下手に動いてかえって謀反を誘ってはならないという意見が出るが、結局、司馬懿の不用意な行動もあり、謀反の意ありとして司馬懿は職を解かれる。

こうして、司馬懿は宛（今の河南省南陽市）に閑居する。しかし、このように司馬懿が左遷されたという事実は史書に見えないのである。

『通鑑』卷七十に次のようにある。

夏、五月、帝病篤、乃立叡為太子。丙辰、召中軍大將軍曹真・鎮軍大將軍陳羣・撫軍大將軍司馬懿、並受遺詔輔政。丁巳、帝殂。陳壽評曰、……（五三）

（『黄初七年、二二六』）夏、五月、帝病篤く、乃ち叡を立てて太子と為す。

丙辰、中軍大將軍曹真・鎮軍大將軍陳羣・撫軍大將軍司馬懿を召し、並びに遺詔を受け政を輔く。丁巳、帝殂す。陳壽評して曰く、……）

十二月、以鍾繇為太傅、曹休為大司馬、都督揚州如故、曹真為大將軍、華歆為太尉、王朗為司徒、陳羣為司空、司馬懿為票騎大將軍。<sup>〔五三〕</sup>

（十二月、鍾繇を以て太傅と為し、曹休を大司馬と為し、揚州を都督せしむること故の如く、曹真を大將軍と為し、華歆を太尉と為し、王朗を司徒と為し、陳羣を司空と為し、司馬懿を票騎大將軍と為す。）

文帝の崩御からその後の人事までの『演義』の描写は、所謂『通鑑』

系の史書に拠っている。「曹丕不死」の記述の後に陳壽の評が入ることや、『演義』中で曹丕の遺詔を受けたわけではない、鍾繇や華歆の名が、人事異動を記す際には現れることは、その明確な証拠となろう。

問題は、人事異動に続く記述である。『演義』の司馬懿は自ら志願して雍・涼二州（現在の甘肅省と陝西省南部）の総督を務めることになるのだが、これはおそらく虚構である。

最も見易いのは、『晋書』宣帝紀、すなわち司馬懿の伝記であろう。

及天子疾篤、帝与曹真・陳羣等見於崇華殿之南堂、並受顧命輔政。詔太子曰、「有間此三公者、慎勿疑之」。明帝即位、改封舞陽侯。

及孫権困江夏、遣其將諸葛瑾・張霸并攻襄陽、帝督諸軍討権、走之。進擊、敗瑾、斬霸、并首級千餘。遷驃騎將軍。

太和元年六月、天子詔帝屯于宛、加督荆・豫二州諸軍事。<sup>〔五四〕</sup>

（『黄初七年、二二六』）天子の疾篤きに及び、帝曹真・陳羣等と崇華殿の南堂に見え、並びに顧命を受け政を輔く。太子に詔して曰く、「此の三公を問する者有るとも、慎みて之を疑う勿れ」と。明帝即位し、改めて舞陽侯に封ず。

孫権江夏を困み、其の將諸葛瑾・張霸を遣りて并びに襄陽を攻めしむるに及び、帝諸軍を督して権を討ち、之を走らす。進擊し、瑾を敗り、霸を斬り、并びに首級千餘あり。驃騎將軍に遷る。

太和元年（二二七）六月、天子帝に詔して宛に屯し、加えて荆・豫二州の諸軍事を督せしむ。）

引用した部分は一切省略をしていないから、これを見る限り、司馬懿は左遷されて宛に行ったのではなく、明帝に命じられて軍事を総督するために宛に行ったのである。さらに付け加えるならば、荊州は魏呉蜀の

三国が境界を接している要地であり、ここを任されるということは、司馬懿が明帝から信頼を受けていた事の証拠と言えよう。また、曹丕の死の直後に呉軍と戦い、これを破っていることから判るように、当時の司馬懿は対蜀ではなく対呉戦略を任務としていたと思われる。「荆・豫（現在の河南省・安徽省・湖北省一帯）二州の諸軍事を督」したのも当然であろう。そして、呉に対して備える將軍が、雍・涼の方面に向かうことはまずない。フィクションである可能性は極めて高い。

ならば、『演義』は何故、右のようなフィクションを用いてまで、司馬懿の左遷を描いたのであろうか。

その意図は先に引用した諸葛亮の言葉に現れていよう。彼は曹叅を「孺子」と言い切るのに対して、司馬懿をして「世之英雄」であると恐れる。既に魏の中心は皇帝である曹叅ではなく、司馬懿にあると言わんばかりである。当然、『演義』は読者にそう思わせる事を意図したのであろう。そして、一度は失脚した司馬懿が連戦連勝を続ける蜀軍に対する切り札として復帰する事で、『演義』の意図は完結する。

忽細作人報説、「魏主曹叅、一面駕幸長安。一面詔司馬懿復職、加為平西都督、起本処之兵、於長安聚會」。孔明聽畢、頓手跌足、不知所措。參軍馬謖問曰、「量曹叅何足為道。若得來長安、就而擒之、丞相何故驚也」。孔明曰、「吾豈懼曹叅耶。平生所患者、惟司馬懿一人而已。今孟達欲舉大事、若司馬懿得此大權、事必敗矣。達非司馬懿之對手、必被所擒。孟達若死、中原不易得也」。

（にわかに問謀よりの知らせがあった。「魏主曹叅は自ら長安に行幸する一方、司馬懿を復職させ、加えて平西都督と為し、その軍勢を進発させ長安にて合流させるつもりでございます」。孔明は聞き終えると、地団駄を踏み、手足の

やり場もないようであった。參軍の馬謖が不審に思って尋ねた。「思いますに曹叅など言うに足りませぬ。もし長安に來たならば、すぐさま虜とするまで。丞相には何故驚かれますのか」。孔明「私がどうして曹叅など恐れようか。日頃から心配していたのは、司馬懿ただ一人である。今、孟達が大事を行おうとしているが、もし司馬懿がこの大権を得れば、事は必ず敗れようぞ。孟達は司馬懿の敵ではなく、必ず捕えられる。もし孟達が死ねば、中原の回復はたやすい事ではない」。

諸葛亮自らが、自分の敵は司馬懿を描いていないと宣言するのである。諸葛亮と司馬懿という対偶を、読者に印象づける効果は絶大であろう。

ここまで、甲乙丙三項にわたって、『演義』が司馬懿に施したフィクションについて述べてきた。そして、フィクションを用いた理由がほぼ一点に集約されることも、明らかにし得たであろう。すなわち、諸葛亮と司馬懿という対偶を強調することこそ、『演義』の意図であった。

時間的に追ってゆくと、諸葛亮と司馬懿とを対偶とする意識は、拡大の一途を辿っていると行ってよい。換言すれば、両者の対偶は史実を出発点とはするが、史実を逸脱し完全に伝説化しているのである。

そして、ここまで述べてきた通り、その伝説を受容する点において、『演義』の準備は極めて周到であった。ほとんど何の伏線もなく、北伐における諸葛亮と司馬懿の対偶を語り出す『平話』に比し、『演義』は実に多くの伏線を張り、読者に抵抗を感じさせずに、両者の対偶を受け入れさせるのである。史実や先行テキストとの綿密な比較をしなければ、『演義』の叙述を虚構だと感じることさえ無いであろう。諸葛亮と司馬懿を対偶を描くに当たって、『演義』はその真骨頂を発揮するのである。



〔註〕

- 〔一〕『三國志』第四冊／卷三五／九二七頁。
- 〔二〕『晉書』第七冊／卷八二／二二五—二二五八頁。
- 〔三〕輿膳宏・川合康三著『隋書經籍志詳攷』（汲古書院 一九九五年七月）五六六頁。
- 〔四〕『藝文類聚』（上海古籍出版社排印二冊本 一九六五年十一月）下冊／卷六七／一一八七頁。
- 〔五〕『北堂書鈔』（文海出版社影印本 一九七八年一月）下冊／卷一一八／四葉b、『太平御覽』（中華書局影印本 一九六〇年二月）第二冊／卷三〇七（兵部三八）／鷹兵／八葉bを参照。
- 〔六〕角谷聰「『三國時代物語』の形成—西唐書における三國時代の人物—」（『中国学研究論集』第四号「一九九九年十月」一五—三〇頁所収）参照。
- 〔七〕『三國志』第四冊／卷三五／九二五頁。
- 〔八〕『新影注胡曾詠史詩』（『四部叢刊統編』所収）卷二／九葉a b。
- 〔九〕一粟「談唐代的三國故事」（『文学遺産』増刊一〇輯「中華書局 一九六二年七月」一一七—一二六頁所収）や金文京『三國志演義の世界』（東方書店 一九九三年十月）六二頁などを参照。
- 〔一〇〕釈景霄撰『簡正記』巻一には「乾寧二年乙卯（八九五）」の文字があり、巻九には「天復三年癸亥（九〇三）」の文字が見える。また、後梁龍德二年（九二二）に『簡正記』を手写したという題跋が存するから、この書は唐末か、遅くとも五代の初頭には成立していたと考えられる。詳しい書誌については『仏書解説大辞典』第四巻（大東出版社 一九六五年改訂再版）二二三頁参照。テキストは『正統藏経』第六冊／一〇七—一〇五六頁所収のものに拠った。
- 〔一一〕釈道宣述。武徳九年（六二六）初稿。貞観四年（六三〇）校定。詳しい書誌については註「一〇」所掲『仏書解説大辞典』第四巻／二二六頁参照。『大正新脩大藏経』第四〇巻／一八〇四／一一五六所収。

- 〔一二〕註「一〇」所掲『正統藏経』第六八冊／『簡正記』巻二六／九八八—九八九頁。
- 〔一三〕釈大覚撰。七二二年成立。詳しい書誌は註「一〇」所掲『仏書解説大辞典』第四巻／二二四頁参照。テキストは註「一〇」所掲『正統藏経』第六七冊／二二七頁—第六八冊／一〇六頁所収のものに拠った。
- 〔一四〕『簡正記』の序において、景霄は次のように述べている。
- 爰自巨唐貞観之後、製造章疏四十餘家、而條貫極繁、篇軸兼盛、欲遍披討、難究源流。但景霄夙欽化緣、功承稟訓、輒簡諸多正義、編集成之。
- 〔一五〕註「一三」所掲『正統藏経』第六八冊／『鈔批』巻二六／二九—三〇頁。
- 〔一六〕『三國志』第四冊／卷三五／九二—九三三七頁参照。
- 〔一七〕陳翔華著『諸葛亮形象史研究』（浙江古籍出版社 一九九〇年十二月）二八頁参照。
- 〔一八〕『三國志』第四冊／卷四〇／一〇〇二頁。
- 〔一九〕註「一七」所掲『諸葛亮形象史研究』二九頁参照。
- 〔二〇〕『晉書』第一冊／卷二／六頁。
- 〔二一〕同右。
- 〔二二〕『三國志』第一冊／卷三／九四頁。
- 〔二三〕『三國志』第四冊／卷三五／九二四頁参照。
- 〔二四〕『三國志』第一冊／卷九／二七九—二八〇頁。
- 〔二五〕『三國志』第五冊／卷四七／一一三四頁。
- 〔二六〕『三國志』第一冊／卷三／九四頁。
- 〔二七〕『平話』巻下／七三葉a—七八葉b参照。
- 〔二八〕『平話』巻上／一葉a—四葉a。
- 〔二九〕小松謙「兩漢をめぐる講史小説の系統について—劉秀伝説考補論—」（『未名』第十号「一九九二年三月」五一—八〇頁所収）参照。
- 〔三〇〕『平話』巻下／七八葉b。
- 〔三一〕呉観明本第九十五回後。

- 〔三二〕『三国志』第四冊／卷三五／九二二頁参照。
- 〔三三〕同右。
- 〔三四〕呉観明本第百回。
- 〔三五〕土屋文子「龐統と諸葛亮―三国故事における軍師像の変遷―」（『中国文学研究』第二期「一九九五年十二月」五〇―六二頁所収）五二頁下段―五三頁上段。
- 〔三六〕呉観明本第百一回後／一一葉b。
- 〔三七〕「雋義」は恐らく字であろうが、史書や『演義』の他の部分は「備义」に作る。
- 〔三八〕『三国志』第二冊／卷一七／五二六頁。
- 〔三九〕呉観明本第九十五回後／一三葉a b。〔四〇〕『三国志』第二冊／卷一七／五二七頁。
- 〔四一〕『三国志』第四冊／卷三三／八九六頁。
- 〔四二〕『三国志』第二冊／卷一七／五二七頁。
- 〔四三〕『平話』卷下／七五葉b。
- 〔四四〕呉観明本第三十九回／六葉a b。
- 〔四五〕『通鑑』第五冊／卷六五／二〇七九頁。
- 〔四六〕『綱目』卷一三／一〇六葉a。
- 〔四七〕毛本第三十九回／五〇三頁。
- 〔四八〕『三国志』第四冊／卷三三／八九四頁。
- 〔四九〕註「九」所掲『三国志演義の世界』三九―四〇頁。
- 〔五〇〕小川環樹『『三国演義』の発展のあと』（『小川環樹著作集』第四卷「筑摩書房 一九九七年四月」三五―五四頁所収）参照。
- 〔五一〕呉観明本第九十一回前／四葉b―六葉a。
- 〔五二〕『通鑑』第五冊／卷七〇／二二二八頁。
- 〔五三〕『通鑑』第五冊／卷七〇／二二三〇頁。
- 〔五四〕『晋書』第一冊／卷一／四一五頁。
- 〔五五〕呉観明本第九十四回後／七葉b―八葉a。

第二部 長篇としての『三国志演義』

## 小序

第二部では『演義』は長篇である」という前提に立ち、『演義』がどのように意図的に全体を構成しようとしていたかを考えたい。

後漢末の桓帝の死より始まって、西晋の武帝の統一によって幕を下ろす『演義』の物語構成は、従来、ごく当然であるかのように受け取られ、議論の対象となることはほとんどなかった。しかし、この構成は本当に「ごく当然」のことなのだろうか。

例えば、同じように網羅的に三国時代を扱う『平話』と『演義』は、その始点も終点も一致しない。詳しくは第五章で述べるが、『平話』はその始点を後漢初めに設定し、終点を西晋の滅亡に置いている。

つまり、『演義』の構成は紛れもなく『演義』独自のものなのである。そして、分析を進めてゆけば、『演義』が長篇として緻密に構成されていることは明らかである。

ここでは、劉備・曹操・司馬炎の三人に焦点を合わせ、具体的に長篇としての『演義』について論ずる。

## 第三章 『演義』の貴種流離譚—劉備

本章では、劉備を採り上げる。具体的には、『演義』が劉備を如何なる人物として描き出そうとしたかを、これまで論じられたことのない視点から再構成したい。

### 第一節 従来劉備像

魯迅は「中国小説史略」において『演義』の人物評を試みており、関羽を『演義』の人物形象の成功例として挙げる。

惟于関羽、特多好語、義勇之概、時時如見矣。<sup>二</sup>

(ただ関羽だけが、特に素晴らしい表現が多く、その義勇は、時時、眼前に現れるかのである。)

しかし、この評価は例外的なものである。魯迅は『演義』の人物描写を基本的には評価していない。

至於写人、亦頗有失、以致欲顯劉備之長厚而似偽、状諸葛之多智而近妖。<sup>三</sup>

(人物描写にあっても、また欠点が多過ぎ、劉備の温厚篤実を強調しようとしてかえって偽者のようになり、諸葛「亮」の智多きことを表そうとしてまるで妖怪のようになってしまっている。)

ここで具体的に酷評しているのは、『演義』の劉備と諸葛亮に対してであるが、他の言説から推せば、『演義』の曹操像にも彼はかなりの不満を抱いていたであろう<sup>三〇</sup>。

ただ、魯迅がこの文章において述べる批評は印象批評の枠を出ず、例えば、『演義』の劉備像がどのように「失有」るかを述べない。それに対して、一個の解答を与えたのは井波律子であった。

とりわけ注意深く劉備の粗暴性を除去する『演義』が強調するのは、その慈愛深い「仁君性」である。……樊から撤退したさい、大勢の住民が同行を願い、これら大量の非戦闘員を抱え込んだために、劉備軍の撤退の速度が落ちたことはまぎれもない史実である。しかし、劉備が人々の苦しみをみかねて、自殺までしようとしたというのは、むしろ『演義』のフィクションにはかならない。こうまで芝居気たっぷりに「仁君性」が強調されると、眉ツバもいとところで、魯迅ならずとも「『演義』は」劉備の温厚篤実ぶりを強調しようとして、偽善者のようになっていく(『中国小説史略』)と、いいたくなくなってしまう。

……以上のように『演義』は、高貴性をもつ仁君であると同時に、義理と人情の化身として、徹底的に美化した劉備を物語世界の中心に据える。しかし、美化されれば美化されるほど、逆に、一点非の打ち所のない劉備のキャラクターは特性を失い、その存在感が薄められるのも否めない。<sup>四</sup>

『演義』の劉備を概観したとき、井波の評は肯定できる。

しかし、『演義』が劉備に加えた虚構は、「仁君」「情の人」というにとどまらないと筆者は考える。それどころか、主人公にふさわしく劉備の形象には、実に周到な「仕掛け」が施されているのである。次節以下、そのことについて明らかにしてゆきたい。

## 第二節 逃げる劉備

かつて、金文京は雑劇に登場する劉備の人物形象を、「逃げる劉備」と表現した。

最後に劉備はどうか。劉備はむろん張飛のことがさつ者ではない。かといって関羽のように沈着冷静で意志堅固かといえは、そうでもない。三国劇の中の劉備に特徴的なのは、彼が逃亡する存在だということであろう。3「劉玄德独赴襄陽会」は、あやうく暗殺を免れた劉備が、的盧馬で檀溪を越えて逃れる話、6「劉玄德醉走黄鶴楼」は、黄鶴楼で宴を開き劉備を殺そうと図る周瑜の陰謀から、孔明の計略でかろうじて逃れる劉備を描き、10「両軍師隔江闘智」は、やはり周瑜の計略で孫権の妹と結婚した劉備が、これまた孔明の知謀により呉から逃れる話、そして16「莽張飛大鬧石榴園」も、石榴園での宴席で劉備を亡きものにするようとする曹操の手から逃れる劉備と、そこでの張飛の活躍を扱っている。

要するに劉備はほとんどなにもせず、ただ逃げてばかりいるのである。

るが、この「逃げる劉備」というテーマは、ある意味で劉備という人物の性格と行動の本質をとらえていると思える。逃げる劉備をまわりの人間が必至で助ける、ということと「三国志」という物語は出来ているとも言えるからである。<sup>五</sup>

金の指摘は、雑劇におけるものであるが、「劉玄德独赴襄陽会」や「両軍師隔江闘智」に関して言えば、同内容の挿話は『演義』にも存するのであり、ならば、『演義』の劉備にも「逃げる」という要素は多分に含まれていると言えよう。

ところで、『演義』の場合、劉備が逃げる挿話は、類型化して考えることができる。すなわち、

### ①被害 — ②逃走 — ③（協力者との）邂逅

というパターンが見出せるのである。「協力者」という語彙は、些か曖昧であるが、ここでは、劉備を庇護したり、手助けをしたりする者という義で用いている。

具体例を二つ挙げよう。一つは、『演義』第二回に見える挿話である。

黄巾討伐で功を上げた劉備は、定州中山府安喜県尉に任ぜられる。劉備は職務に励み、民情はたちまち安定した。

あるとき、督郵（朝廷の査察官）が、官吏査察の名目で来訪する。督郵は暗に賄賂を求めると、劉備が容れないため、朝廷に、劉備の行状を悪く報告しようと図った。それを知った張飛は、酒の勢いも手伝って督郵を滅多打ちにしてしまう。

結局、劉備は官を辞め、関張とともに涿郡へ帰る。一方、命をとりとめた督郵は朝廷に報告し、朝廷は劉備らに追手を差し向けた。それを知った劉備らは、家族を連れて代州の劉恢のもとへと投ずる。

その後、漁陽で張挙・張純が反乱を起こす。劉備を匿っていた劉恢は、幽州牧の劉虞に劉備を推挙する。劉虞は劉備を先鋒とし、劉備は瞬く間に反乱を平げる。喜んだ劉虞はその功を朝廷に上奏し、同時に公孫瓚も劉備の前功を上表した。そこで、朝廷はその罪を許し、劉備は平原県令に着任することとなる。

この挿話の構成は、以下のように分析することができるであろう。

- ①被害 督郵の来訪。朝廷への誣告。
- ②逃走 帰郷。劉恢のもとへ投ずる。
- ③邂逅 劉恢の推挙。劉虞・公孫瓚の上表。

すなわち、前述した如くに類型化できる。

次の例は、『演義』第三十四—三十五回に見える挿話である。

汝南で曹操に敗れた劉備は、宗族である劉表を頼って、荊州へ向かう。劉表は劉備を迎え入れ、新野の城に置く。

あるとき、劉表は劉備に、自分の後継者問題を相談する。劉備は長幼の序を尊重することを唱えるが、結果的に次男の生母たる蔡夫人とその弟、蔡瑁の恨みを買ってしまう。

その後、蔡瑁は、襄陽にて豊年の宴を開き、劉備を殺害せんと図る。宴そのものが謀略であることを看破した劉備ではあったが、劉表の信

頼を裏切らぬため、趙雲と二百騎を率いて襄陽へと向かうこととなる。

宴の最中、蔡瑁は劉備を殺そうとするが、趙雲が背後で目を光らせているため手を下すことができない。そこで、趙雲を別室にてもてなすこととし、劉備と趙雲を引き離すことに成功する。

一方、劉表の客分であった伊籍は、劉備に好感を持っていたため、蔡瑁の害意を劉備に伝える。驚いた劉備は慌てて宴席を去り、的盧馬を駆って、伏勢のない西門を突破する。

蔡瑁が西門に兵を置かなかつたのは、その先に急流の檀溪が待ち受けているからであった。果たして、劉備は檀溪を前に立往生する。しかし、追っ手を目の前にして、劉備は的盧を励まして急流を渡りきる。

こうして追っ手を振りきった劉備は、山中で一人の童子に出会うが、その童子は一目で劉備であることを見抜く。驚いた劉備がその理由を問うと、童子は自らの師匠が劉備について語っていたことゆえだと答える。その師匠とは、水鏡先生こと司馬徽であり、劉備は童子に導かれて司馬徽と会うこととなる。そして、司馬徽は、伏龍か鳳雛のいずれかを得れば天下を取れると劉備に告げるのであった。

この挿話も前述のものと同様、以下の三段より構成される。

- ①被害 蔡瑁が劉備を害そうとする。
- ②逃走 劉備が襄陽から逃れて檀溪を渡る。
- ③邂逅 司馬徽と出会い、助言を得る。

ここに示した説話構成は、『演義』に固有なものではなく、むしろ普遍的と言ってよいものであろう<sup>16)</sup>。

ともかく、『演義』にあっても「逃げる劉備」は存在した。そこで、論を一步進めて、次節では、「逃げる劉備」を描く挿話(仮に「逃走譚」と呼んでおく)の特徴を示してみたい。

### 第三節 劉備の逃走譚

まず、『演義』における劉備の逃走譚を、『演義』の進行に沿って概述することから始めよう。(【】内の漢数字は『演義』の回数を示す。協力者の中で○で括ったのは、事件当時、すでに劉備の配下であった人物である)。

#### ①安喜県尉から平原県令へ【二】

協力者 劉恢・劉虞・公孫瓚

内容については既述。

#### ②呂布のもとから曹操のもとへ【一四—一九】

協力者 呂布・曹操・劉安

徐州牧となった劉備は、曹操に敗れた呂布を受け入れ、小沛に置く。しかし、劉備が袁術攻撃に出ている隙に、留守居の張飛の失態につけ込んで、当の呂布が徐州を乗っ取ってしまう。進退窮まった劉備だが、呂布と和解することで解決を図り、今度は呂布が劉備を小沛に置く。だが、結局、劉備と呂布は決裂し、戦いに敗れた劉備は曹操のもとへ身を寄せる。曹操は劉備を予州牧に任命し、呂布と和解させた上で、呂布への牽制として小沛においた。しかし、曹操との密謀が呂布に発

覚し、激怒した呂布は劉備を攻撃、劉備は只一騎で敗走する。その途中、劉備は劉安の家で宿泊することになり、「狼の肉」をふるまわれる。しかし、実は、それは劉安の妻の肉であり、貧しい劉安は自らの妻を殺して劉備をもてなしたのであった。その後、劉備は曹操と合流し、関張とも再会する。

#### ③曹操のもとから袁紹のもとへ【二〇—二四】

協力者 袁紹

劉備が曹操に身を寄せた後、曹操の専横は日に日につのってゆく。たまりかねた献帝(劉協)は、車騎將軍の董承へ曹操討伐の密勅を発する。董承は同志を集めるが、その中に劉備もいた。その後、劉備は、曹操が己を警戒していることを知り、袁術討伐を口実に、許昌を逃れて徐州へ向かった。そして、徐州太守の車胄を関羽が斬り、劉備は曹操と袂を分かつこととなる。その後、献帝の密勅が発覚、曹操は劉備を討つべく徐州に向かい、大敗した劉備は、只一騎で袁紹のもとへと落ちのびる。

#### ④袁紹のもとから劉表のもとへ【二七—二八・三一】

協力者 劉辟・龔都・劉表

劉備は袁紹のもとへ奔った。一方、劉備の家族の安全を守るため、関羽は曹操に降る。やがて、曹操と袁紹は先端を開くが、その戦いの最中、関羽は袁紹の将、顔良・文醜を斬る。激怒した袁紹は劉備を処罰しようとするが、劉備は何とか言い抜ける。その後、曹操を背後から突くように劉表を説得すると言って、劉備は袁紹のもとから逃れる。そして、汝南にて



関羽・張飛と再会し、ひとまず黄巾賊の残党たる劉辟・龔都の勢力を吸収する。この二人は、劉備に対して極めて好意的であった。

官渡で袁紹を破った曹操は、矛先を劉備に転じる。劉備軍は大敗し、劉備は自尽しようとしたが、劉辟が身を捨てて血路を切り開いたことで、どうにか落ちのびることができた。そして、孫乾の勧めで宗族である劉表のもとへと向かう。

#### ⑤ 襄陽会【三四—三五】

協力者 司馬徽

内容については既述。

#### ⑥ 新野から夏口へ【四〇—四二】

協力者 魏延・劉琦・(趙雲・張飛・関羽・諸葛亮)

諸葛亮を迎えた劉備ではあったが、相変わらず根拠地を持ってないでいた。そんな折、劉表が逝去する。外戚の蔡瑁らは策動して次男の劉琮を後継にし、さらには荊州を南下してきていた曹操に献上してしまう。いち早く情報を知った劉備ではあったが、打つ手はない。仕方なく、曹操軍を避けるために、領民を連れて、新野を捨て襄陽へと向かう。

しかし、襄陽にいる蔡瑁らが劉備を受け入れるはずもなかった。城内にいた魏延は劉備を迎え入れようと城門を開くのだが、劉備は領民に迷惑のかかることを恐れ、江陵へと進路を変える。

荊州に入った曹操は、後顧の憂いを絶つため劉琮・蔡夫人を殺し、その後、改めて劉備を追った。一方、劉備は領民を率いているため遅々として進まない。そのために、当陽(長坂坡)にて曹操軍に追いつ

かれるが、その場合は、趙雲・張飛の奮戦で逃れることができた。その後、漢津にて曹操軍に再び追いつかれるが、救援に駆けつけた劉琦・関羽・諸葛亮の軍によって、夏口に落ちのびる。

#### ⑦ 孫夫人を娶る【五四—五五】

協力者 呉国太・孫夫人・(趙雲・諸葛亮)

赤壁の戦いの後、荊州の領有権をめぐる、劉備と孫権の間は不和になっていった。建安十四年(二〇九)、呉の大都督たる「周瑜は劉備の夫人(甘氏)が亡くなったことを知り、計略を思いつく。すなわち、孫権の妹(孫仁。後の孫夫人)と劉備の結婚を持ちかけ、劉備を呉に呼び寄せて捕え、その身柄と荊州を交換しようと考えたのである。諸葛亮は、この話を受けるように劉備に勧める。そして、三つの秘計を錦囊に入れて趙雲に授け、劉備と共に呉に送り出す。

呉に着いた劉備は、諸葛亮の第一の計に従って呉国太の協力を仰ぎ、周瑜の謀略を未然に防いで孫夫人を娶った。それを知った周瑜は、賁沢な暮しを劉備にさせ、骨抜きにして臣下との間を割く計略を実行する。周瑜の思惑通り、劉備は安楽な生活にふける。

そんな劉備の様子を心配した趙雲は、錦囊を開き第二の計に従う。すなわち、劉備に曹操の荊州来襲を告げたのである。驚いた劉備は、急いで呉脱出を図る。

建安十五年(二一〇)元旦、祖廟に詣でることを口実に、劉備一行は孫権のもとを逃れる。翌日になって孫権は劉備の逃亡に気付き、二度までも追手を差し向け、周瑜も将を配置して劉備を捕えようとした。窮地に陥った劉備だったが、諸葛亮の第三の計に救われる。すなわち、孫夫人に全てを打ち明けて説き伏せ、男勝りの孫夫人は追手の武将た

ちを怒鳴りつけて退がらせたのである。こうして劉備は、無事に諸葛亮率いる水軍と合流することができた。

#### ⑧夷陵<sup>七</sup>の戦い【八一—八五】

協力者（諸葛亮）

関羽が呉と魏の連合軍に敗れて斬首される。それを知った劉備は、諸葛亮や趙雲の諫めを聴かず、関羽を斬った呉に復讐戦を挑む。先端を開く直前には張飛が部下の裏切りによって殺され、殺した部下が呉に奔ったため、劉備の復讐心は高まる一方であった。

開戦直後、劉備は連戦連勝、呉の領地深くまで攻め込む。しかし、これは劉備軍の補給線が伸びきったところで一気に叩こうという呉の大將、陸遜の作戦であった。果たして、彝陵にて陸遜の火計に遭い、劉備軍は大敗する。敗走した劉備は白帝城に逃れ、そこで病の床に就いた。そして、急遽駆けつけた諸葛亮に後事を託し、息を引き取るのである。

右に挙げた八つの挿話が、『演義』における劉備の逃走譚と呼び得るものである。ただ、この八つもまた、幾つかに分類できる。

一つは史書に源流を持つものである。③④がこれに当たる。無論、史実そのままというわけではないが、大筋は史実と一致している。

他に、先行する史書以外のテキストに基づくものがある。⑤⑦がこれに当たる。ともに元代に刊行された『全相平話三国志』（以下、『平話』と称す）に類話が見える。また、⑥は「劉玄德独赴襄陽会」雜劇とも、⑦は「兩軍師隔江鬪智」雜劇とも共通する話柄を持つ。

残る①②④⑥は、折衷型とでもいべきものであろう。話の大枠は史

書に準拠するが、伝説をも多く取り込んだ挿話である。解り易いのは⑥であろう。劉備が曹操軍に迫られて樊を去り、領民を引き連れて逃げたこと、曹操軍に追いつめられるが、漢津で関羽らの救援を得、夏口に落ちのびたことは、『三国志』蜀書・先主伝に見える。だが、魏延が城門を開く話は史書に見えず、長坂坡での趙雲・張飛の奮戦は、明らかに伝説に端を発するものである。

さて、八つの挿話の内、①②は顕著な特徴を有する。①では劉恢、②では劉安という協力者が登場するのだが、この二人、史書に見えぬ人物であり、また、管見の限り、如何なる伝説にも見出せぬ人物なのである。すなわち、この二人は『演義』にしか現れぬ人物といえる。そこで、次節以降、劉恢と劉安を手懸かりとして、劉備の逃走譚の特徴を考えてみたい。

#### 第四節 劉備をめぐる「劉」

第二節でも触れたが、督郵を鞭打ったことにより朝廷に迫られる身となった劉備一行を匿ったのが、劉恢である。

彼は『演義』でも第二回にしか現れぬ人物であるが、渡邊精一は、この劉恢について比較的詳しい考証を試みている。

陳寿の『三国志』、范曄の『後漢書』を調べると、「劉恢」は三名が四カ所に見える。その中で時代的に一番近いのは、『後漢書』靈帝紀に見える甘陵王の劉恢だが、彼は熹平元（一七二）年十二月に薨じており、この時劉備は（一六一年生まれ）数え十二歳。「桃園の誓い」

よりも十六年も前に、劉恢は世を去っているのである。したがって、『演義』がいかなるつもりで劉恢なる人物を設定したか、よくわからない。はたして代州を治めていたかどうかも定かではない。しかし、原文に「往代州投劉恢（代州に往きて劉恢に投ず）」という書き方がしてあり、「刺史」「牧」などの文字がないことからみれば、時代的接点のないことを承知したうえで、ボカして登場させたようにも思われる。<sup>18</sup>

その博搜には敬意を表するが、個人的には、この「劉恢」という人名に因して、余り実在の人物に拘泥する必要はないように思う。劉恢が著名人であるならばともかく、『後漢書』に伝さえも立てられないような人物を、史実をねじ曲げてまで登場させる必然性はないと思われるからである。「劉恢」の名は、「劉」を「恢」復する義を込めたものにすぎまい。それより問題とすべきは、何故ここで「劉恢」が登場したかである。『演義』第二回には、次のようにある。

県民解放督郵。督郵婦告定州太守、太守勅文書、申聞省府、差人捕捉。玄德・関・張三人事急、車載老小、往代州投劉恢。恢見玄德乃漢室宗親、隱匿養贍在家不題。<sup>19</sup>

（県民が督郵を解放した。督郵は帰ると定州太守にこの次第を報告する。太守は文書を発して役所に通達し、追捕人を出して「劉備たちを」つかまえるようとした。玄德・関羽・張飛の三人は慌てて、車に家族を乗せ代州の劉恢のもとに投じた。劉恢が玄徳の漢室の宗親たるのを見て、家に匿って養ったことはいちいち述べない。）

劉恢は、劉備が「漢室宗親」すなわち劉姓であるから匿ったのである。明言はされないが、この行動から、劉恢自身が漢室の流れを汲んでいると考えることは可能であろう。

更に、再び劉恢が登場するときも、劉姓であることが意識される。

劉虞與兵討張舉、代州劉恢書薦玄德見虞。虞大喜、令玄德為都尉、丘毅為先鋒、直抵賊巢。……劉虞表来、奏劉備大功、朝廷赦免鞭打督郵之罪、除下密丞、遷高堂尉。公孫瓚表陳玄德前功、封為別部司馬、守平原。玄德在平原、頗有錢糧軍馬、重整旧日氣象。劉虞平寇有功、官封太尉。<sup>20</sup>

（劉虞が兵を興し張舉を討とうとした時、代州の劉恢が書状でもって玄徳を推薦した。劉虞は大いに喜んで玄徳を都尉に任命し、丘毅<sup>21</sup>を先鋒にして、直ちに賊の本拠へと向かわせた。……劉虞は上表して劉備の大功を奏したので、朝廷は督郵を鞭打った罪を許し、下密の丞に任じた。その後、高堂<sup>22</sup>（唐の誤りであろう）の尉となった。公孫瓚は劉備の前功を述べ、別部司馬の位を与え、平原県令を代行させた。玄徳が平原に着任すると、物資や兵馬は極めて充実し、以前の様子を取り戻した。劉虞は賊を平らげるのに功があったので、太尉に封ぜられた。）

劉恢は、劉備を幽州牧の劉虞に推挙する。ここに登場する劉虞は歴とした皇族<sup>23</sup>であるから、「劉」備は、「劉」恢から「劉」虞へと、すなわち漢王朝の血の上を渡り歩くのである。

附言すれば、劉虞に關しても問題がある。『演義』において、劉虞が登場するのはこの部分のみであり、『演義』の読者にとっては単なる端役に過ぎない。しかし、歴史的に見れば、彼はかなり重要な役を演じて

いるのである。金文京の言を借りよう。

たとえば、『演義』第二回で、安喜の県尉をやめていた劉備を、ふたたび都尉にとりたてた人物として一度だけ名に見える幽州牧の劉虞は、実際にはこの時代の重要人物のひとりであった。曹操らの連合軍が董卓と対決している時、連合軍の盟主に推されていた袁紹が、冀州牧の韓馥らと語って皇室の有徳者であったこの劉虞を帝位につけようと画策したことがある。この計画は曹操がまず反対し、本人も固辞したため実現しなかったが、一方の董卓もまた彼を最高の位である三公の一つ、太傅に任じており、劉虞は董卓側と連合軍側の間で微妙な立場にあった。この事件をめぐるのは、のち袁術や公孫瓚なども加わって複雑なかけひきがあり、最後に劉虞は公孫瓚に殺されるのであるが、その間の経緯について『演義』は一言もふれていない。劉備と関係の深い公孫瓚をあまり悪者にしたててなくなかったのかしれないが、ともかくこれによって『演義』の記述はかたよったものになっているのである。<sup>〔三三〕</sup>

金の言は、まったくその通りであるが、筆者には付け加えておきたいことがある。史書に照らし合わせた時、『演義』における劉虞の登場には、まったく必然性がないのである。

劉備が平原の政務を司るまでの経緯については、『三国志』蜀書・先主伝に詳しい。

靈帝末、黄巾起、州郡各率義兵、先主率其属従校尉鄒靖討黄巾賊有功、除安喜尉。督郵以公事到県、先主求調、不通、直入縛督郵、杖二

百、解綬繫其頸着馬柳、棄官亡命。頃之、大將軍何進遣都尉母丘毅詣丹楊募兵、先主与俱行、至下邳遇賊、力戦有功、除為下密丞。復去官。後為高唐尉、遷為令。為賊所破、往奔中郎將公孫瓚、瓚表為別部司馬、使与青州刺史田楷以拒冀州牧袁紹。数有戦功、試守平原令、後領平原相。<sup>〔三四〕</sup>

(靈帝の末、黄巾 起き、州郡 各おの義兵を挙げ、先主 其の属を率いて校尉鄒靖に従い黄巾賊を討つに功有り、安喜の尉に除せらる。督郵 公事を以て県に到り、先主 調を求むるも通ぜざるに、直ちに入りて督郵を縛り、杖すこと二百、綬を解きて其の頸に繋けて馬柳に着け、官を棄てて亡命す。頃之して、大將軍何進 都尉母丘毅をして丹楊に詣らせ兵を募らしむるに、先主 与に俱に行き、下邳に至りて賊に遇い、力戦し功有り、除せられて下密の丞と為る。復た官を去り、後に高唐尉と為り、遷して令と為る。賊の破る所と為り、往きて中郎將公孫瓚に奔り、瓚 表して別部司馬と為し、青州刺史田楷と与に以て冀州牧袁紹を拒がしむ。数しば戦功有り、平原令を試守し、後に平原の相を領す。)

『演義』とは細かな事情が異なるが、「下密丞」「高唐(堂)尉」「平原令」という三種の官職名が完全に一致することから、『演義』が正史のこの部分を参考に行っていることは間違いないであろう。しかし、正史では劉備を推挙するのは公孫瓚のみであり、劉虞の名はまったく見えない。つまり、『演義』の該当部分において、劉虞が登場するのは虚構なのである。『演義』は正史における劉虞の事跡をまったく省略しておきながら、この場面では正史を逸脱して劉虞をわざわざ登場させるといふ、極めて奇妙な記述をしていることになる。

ならば、『演義』にあって、劉虞が登場する所以を考える必要がある

う。そして、それは、劉虞が漢室の血をひくことにしか理由を見出せない。すなわち、劉備が漢王朝の血を引く「劉」氏を渡り歩くという構図を作り出すために、『演義』は劉虞を登場させたのではないか。

④の逃走譚に協力者として現れる劉辟にも、同様のことが言える。劉虞とは異なり、『演義』に現れる劉辟の事跡は、正史のそれが出典とはなっている。『三国志』魏書・武帝紀及び蜀書・先主伝の当該部分を引いておく。

#### 〔武帝紀〕

汝南・潁川黃巾何儀・劉辟・黃邵・何曼等、衆各數萬、初應袁術、又附孫堅。二月、太祖進軍討破之、斬辟・邵等、儀及其衆皆降。〔二五〕

（汝南・潁川黃巾何儀・劉辟・黃邵・何曼等、衆各數萬、初め袁術に應じ、又孫堅に附く。〔建安元年〕二月、太祖軍を進めて討ちて之を破り、辟・邵等を斬り、儀及び其の衆皆降る。）

#### 〔先主伝〕

曹公与袁紹相拒官渡、汝南黃巾劉辟等叛曹公応紹。紹遣先主將兵与辟等略許下。関羽亡帰先主。曹公遣曹仁將兵擊先主、先主還紹軍、陰欲離紹、乃説紹南連荊州牧劉表。紹遣先主將本兵復至汝南、与賊龔都等合、衆數千人。曹公遣蔡陽擊之、為先主所殺。

曹公既破紹、自南擊先主。先主遣糜竺・孫乾与劉表相聞、表自郊迎、以上賓礼待之、益其兵、使屯新野。〔二六〕

（曹公 袁紹と官渡に相拒ぎ、汝南黃巾劉辟等 曹公に叛し紹に應ず。紹先主をして兵を將いて辟等と許下を略せしむ。関羽 亡げて先主に歸る。曹公 曹仁をして兵を將いて先主を撃たしめ、先主 紹軍に還るも、陰かに紹

を離れんと欲し、乃ち紹に説きて南のかた荊州牧劉表と連らならしむ。紹先主をして本兵を將いて復た汝南に至らしむるに、賊龔都等と合し、衆數千人たり。曹公 蔡陽をして之を撃たしむるも、先主の殺す所と為る。

曹公 既に紹を破り、自りて南のかた先主を撃つ。先主 糜竺・孫乾をして劉表と相聞せしむるに、表自ら郊迎し、上賓の礼を以て之を待し、其の兵を益して、新野に屯せしむ。）

敵密に言えば、劉備と合流したのは龔都だけであり、劉辟はそれ以前に曹操に破れ斬られている。ただし、先主伝の記述を見る限り、劉辟と劉備が相前後して袁紹に呼応したように読め、『演義』は、先主伝を（意図的にか、偶然にかは解らぬが）誤読したものと思われる。

ただし、筆者は『演義』が劉辟をここで登場させたのは意図的であると考え。なぜなら、『演義』の劉辟には正史にはまったく見えぬ要素が附加されているのである。『演義』第三十一回に云う。

玄德方欲退後、只見山頭上紅旗磨動、背後一軍從山塢内擁出、乃高覽也。玄德兩頭無路、仰天大呼曰、「天何使我受此窘極。功名不成、不如就死」。欲拔劍自刎。劉辟急止曰、「容某死戰、奪路救君」。辟便來陣後、与高覽交鋒。戰不三合、被高覽一刀斫于馬下。玄德正慌、方欲自戰、高覽後軍忽然大乱、一將衝陣而來、鎗起處、高覽翻身落馬。刺高覽者、乃子龍也。〔二七〕

（玄德が退却しようとするが、山上で紅旗が揺れ動いたかと思うと、また一隊の軍が山のかげより群がり出でた。これすなわち、高覽の軍である。玄德は前後を相塞がれたので、天を仰いで「天よ、何ゆえ私をこのように苦しめ給うのか。功名が成らぬならば、死ぬしかあるまい」と叫び、劍を抜いて自

尽しようとした。劉辟は慌ててこれを止め、「それがしが決死の戦をして、退路を切り開いて吾が君をお救いいたす」と言うや、殿軍に下がって、高覽と矛を交えた。しかし、三合も打ち合わずして、高覽の一刀に斬って落とされた。劉備が慌てて自ら戦おうとすると、高覽軍の後方が突然乱れ、一将が陣を抜いて来ると言うや、ただ槍の一突きに、高覽を馬から突き落とした。高覽を討ったのは、誰であろう子龍〔趙雲のこと〕である。

劉辟は、劉備の血路を切り開こうと奮戦して撃たれるのである。忠臣の最期と言ってよいであろう。ところが、正史では、前述したように劉辟は劉備が汝南に入る前に死んでいるのだから、『演義』に描かれた劉辟の最期は、完全な虚構である。

『演義』の劉辟は、史実に従って黄巾賊の残党とされるから、劉備に忠節を尽くす必然性は伺えない。だが、他のテキストに現れる劉辟を併せて考えたとき、『演義』の劉辟像は理解できるのである。『平話』巻中には次のようにある。

帝宣、三人借袍見帝。献帝見先主面如满月、両耳垂肩、貌類漢景帝。又問、「玄德祖宗何人」。先主、「本祖十七代孫、中山靖王之後、先君漢靈帝、因十常侍弄權、落于百姓之家」。帝驚、宣宗正府宰相、檢祖宗部。有国舅董成奏帝曰、「劉備、漢之宗室」。帝大喜、即加玄德豫州牧・左將軍・漢皇叔。又宣関・張二將、各賜恩賞、御宴數日。帝大喜、自思、「有皇叔荊王劉表、又有滄州劉璧、長不在吾左右。今有皇叔劉玄德、漢天下有主矣」。

（帝が勅を出し、三人は袍を借りて帝に拝謁した。献帝が先主を見ると、面は満月の如く、両耳は肩まで垂れ、その容貌は漢の景帝の如くである。そこ

で「玄徳の祖先は誰であるか」と尋ねると、玄徳は「景帝の十七代の孫にして、中山靖王の後裔にございます。先君漢の靈帝の時は、十常侍が専權を揮っておりましたので、庶民に身を落としておりました」と答えた。帝は驚いて、宗正府の宰相に命じて、祖宗の系譜を調べさせる。すると、国舅の董成〔承〕がまかり出て、「劉備は漢の宗室でございます」と上奏した。帝は大いに喜び、すぐさま玄徳に豫州牧・左將軍の位を与え、漢皇叔の称号を賜る。また、命じて関羽と張飛の二将にも、それぞれ恩賞を賜った。そして、帝の開いた宴は数日に及んだ。帝は喜び、内心に「皇族の有力者には」皇叔の荊王劉表と、滄州の劉璧がいるが、ながらく朕の左右には居らぬ。だが、今、皇叔の劉備がいれば、漢の天下は主を取り戻せるかも知れぬ」と考えていた。

ここに登場する「劉璧」とは何者か。『三国志』『後漢書』を閲しても、「劉璧」なる人物は見えない。ならば、劉辟こそ「劉璧」であると考えるのが、最も自然であろう。『演義』は語らぬが、劉璧をして漢の宗室と見なす伝説が存在したわけである。そして、この前提に立てば、『演義』に描かれる劉辟の忠義も理解できる。同族であるからこそ、劉辟は、劉備を庇って死んでいったのである。劉備の側から見れば、劉辟は、劉恢や劉虞と同質の存在、すなわち劉備の協力者であると言える。また、この三人が劉備に協力するという事実は、正史には見えない虚構であるという点でも共通する。

そして、劉備に協力する劉氏はこの三人のみではない。劉備の逃走譚には関係しないため、前節ではあげなかったが、劉焉という人物がいる。彼は漢室の一族であるが、第一回に幽州太守として登場し、黄巾討伐のために義兵募集の高札を掲げる。それに呼応して起ち上がった人物こそ劉備であった。劉焉は劉備を受け入れ、部下の鄒靖とともに黄巾討伐に

派遣する。そして、この黄巾討伐の戦いこそが、劉備の初陣であった。すなわち、劉焉は劉備が世に出るきっかけを作った人物だといえる。

さらに言えば、劉焉は、後に劉備が深くかわかることになる劉璋の父親でもあった。劉璋は益州牧であったが、劉備はその地位を逐い、自らが益州（蜀）を治めるのである。

ところが、正史を閲すると劉焉が幽州太守であったという記述はなく、劉備とかかわったという記述も見えない。『演義』に現れる劉備と劉焉の関係は、またしても虚構なのである。『三国志』蜀書・劉二牧伝の劉焉の伝に云う。

劉焉字君郎、江夏竟陵人也。……焉少仕州郡、以宗室拜中郎、後以師祝公喪去官。居陽城山、積学教授、举賢良方正、辟司徒府、歷雒陽令・冀州刺史・南陽太守・宗正・太常。……焉内求交阯牧、欲避世難。議未即行、侍中広漢董扶私謂焉曰、「京師將乱、益州分野有天子氣」。焉聞扶言、意更在益州。会益州刺史郗儉賦斂煩擾、謠言遠聞、而并州殺刺史張壹、涼州殺刺史耿鄙、焉謀得施。出為監軍使者、領益州牧、封陽城侯、当収儉治罪。〔一七〕

（劉焉字君郎、江夏竟陵の人なり。……焉少くして州郡に仕え、宗室なるを以て中郎を拜し、後 師の祝公の喪を以て官を去る。陽城山に居りて、積学教授し、賢良方正に挙げられ、司徒府に辟せられ、雒陽令・冀州刺史・南陽太守・宗正・太常を歴す。……焉 内かに交阯牧を求め、世難を避けんと欲す。議 未だ即ち行われざるに、侍中広漢董扶 私かに焉に謂いて曰く、「京師將に乱れんとし、益州の分野に天子の氣有り」と。焉 扶の言を聞きて、意 更めて益州に在り。会たま益州刺史郗儉 賦斂するに煩擾あり、謠言遠く聞こえて、并州 刺史張壹を殺し、涼州 刺史耿鄙を殺すに、焉の謀

施さるるを得。出でて監軍使者と為り、益州牧を領し、陽城侯に封せられ、儉を収して治罪するに当たる。）

中略した部分にも、劉焉が幽州と関係したという記述はない。また、先に引用した蜀書・先主伝に見えたとおり、黄巾討伐の際、劉備は鄒靖に従ってはいるが、この時、鄒靖は劉焉の部下であったわけではない。すなわち、『演義』は、劉虞の場合と極めてよく似た方法を用いて、劉焉と劉備を関係づける虚構を語るのである。

『平話』についても言及しておこう。『平話』においても、劉備は黄巾討伐の義軍を率いるのだが、『演義』とはやや経緯が異なる。『平話』では、天下の騒乱を嘆く劉備に対し、張飛が次のように勧めるのである。

却説張飛一日告二兄曰、「今黄巾賊遍州郡、劫掠民財、奪人妻女。倘若来、飛雖有家財、不能作主」。玄德曰、「似此若何」。飛曰、「咱不若告燕主、招些義兵、便賊来何懼」。玄德并関公言曰、「此举有理」。即便上馬離家、来見燕主議事。〔二一〕

（さて、張飛はある日、二人の兄に告げて言う。「今、黄巾賊は全ての州郡に及びて、民の財産を強盗し、人の妻子を奪うて有様だ。もし奴らが来たら、俺の家には些か財産があるといっても、自分の物じゃなくなっちゃうだろう」。玄德が言う。「どうすればいいのだ」。張飛が答える。「俺たちが燕主に義軍を召集してくれて言うのがいい。そうすりゃ黄巾賊が来たって何の恐れることがある」。玄德と関公が言った。「それは道理だ」。そこで馬に乗って家を離れ、燕主に会って事を謀ろうとした。）

「燕主」に義兵を挙げさせようと勧め、自ら直談判に乗り込むのであ

た。ここで現れる「燕主」とは、文脈から推して『演義』の幽州太守に相当すると思われるが、姓名は明言されない。おそらく、劉焉を幽州太守（燕主）とする設定は『演義』に始まるものであろう。

ここまで確認すれば、次のように言うことが許されよう。すなわち、『演義』における劉備は、劉焉に始まり、劉恢・劉虞・劉安・劉辟・劉表・劉璋というように、次から次へと劉氏（すなわち漢室の宗族）の助けを借りてゆく存在である。そして、最後の二人（劉表・劉璋）との関係のみは史書と比較的近いものであるが、他は、完全な虚構であることは、ここまで確認してきたとおりである。

ここに至って、根元的な問いに向き合わなければならない。『演義』は、何故、このような虚構を語る必要があったのか、換言すれば、このような虚構を用いて『演義』は何を語ろうとしたのか、という問題である。

## 第五節 貴種流離譚

その問いの解答を示すのが、劉安という存在であると、筆者は考える。②の逃走譚における協力者である彼は、『演義』における異様な挿話の中心人物として知られている。

その挿話は、第十九回で語られる。大略は第二節に掲げたか、ここで全文を引用しておく。

却説玄德匹馬往山中逃難、正行之間、背後一軍來趕、回頭視之、乃孫乾也、相抱而哭。玄德曰、「吾今二弟不知存亡、老小失散、吾將自尽矣」。

孫乾曰、「不可。何不投操、以圖後計」。玄德依其言、尋小路投許都。路上絕糧、于村中求食。但到處、聞劉豫州、皆跪進飲食。忽到一家投宿、其家一後生出拜、問之、乃獵戶劉安也。聞是同宗豫州牧至、遍尋野味不得、殺其妻以食之。玄德曰、「此何肉也」。安曰、「乃狼肉也」。二人飽食、天晚夜宿。至曉辭、去後院取馬、見殺其妻于厨下、臂上尽割其肉。玄德問之、方知是他妻肉、痛傷上馬、欲帶劉安去。安曰、「老母見在、不可遠行」。玄德謝了、遂取路出梁城。忽見塵頭蔽日、漫山塞野、軍馬來到。玄德迎之、乃是操軍也。直到中軍旗側、下馬拜迎。操亦下馬答之。説失沛城、散二弟、陷老小、操亦下泪。更説劉安殺妻為食之事、操令孫乾以百金賜之。<sup>三三三</sup>

（さて、玄德は只一騎で難を山中に逃れた。すすんでいると、後ろから一隊の軍が追いかけてくるので、振り返って見ると、なんと孫乾の軍であったので、抱き合せて泣く。玄德「私は二人の弟の生死さえもわからず、家族も散り散りになってしまった。自尽するほかに仕方あるまい」。孫乾「なりませぬ。どうして曹操のもとに投じて、以後の計を立てようとはなさらぬのか」。玄德はその言に従い、間道を選んで許都へと向かった。道中、食糧がなくなると、村々で食を求めたが、到るところ、劉豫州が来たと聞くと、皆跪いて食をすすめてくれた。ある日、一軒の家を訪れて宿を求めると、若者ができて平伏するので、訊ねると、獵師の劉安であると答える。彼は同族の劉豫州が来られたと聞き、獲物を探し回ったが得られず、妻を殺してそれを献じた。劉備が「これは何の肉だ」と尋ねると、劉安は「狼の肉でございます」と答える。「そこで」二人は腹一杯たいらげて、その夜は一泊した。朝になって別れを告げ、裏庭の馬を引き出そうとすると、その妻が厨で殺されており、肘の肉がすっかり切り取られているのが目に入った。玄德はその所以を問い、昨夜の肉が彼の妻の肉であったことを知った。涙に濡れながら馬に乗り、劉安



ここに挙げた三種の説話は、「流浪の主君」を助けるために、「人肉を食べさせる」という点で軌を一にする。

ただし、「人肉」という要素を強調せずに「自らが犠牲を払う」と置き換えれば、さらに普遍的な説話となり、『演義』の本来の意図をも明らかにし得るように思う。

すなわち、これらの挿話は、忠義の臣（劉安・介子推・周倉）が自らが犠牲を払って（妻を殺す、自らの肉を切る）、他人、それも高い身分の人間（劉備・文公・関羽）をもてなし、自らも応報を得る（百金を得る）話と整理できる。周倉と介子推の場合は、一見、応報を得ていないかのようなのであるが、「自らの死」という結果も一種の報いと考えれば、問題はあるまい。そして、同様の構造を持つ説話は、世界中に類話を見出すことができるのである。日本人に最もよく知られた類話は、謡曲「鉢木」であろう<sup>三三〇</sup>。大略を以下に示す。

ある雪の夜、上野国佐野に住む佐野源左衛門常世の家を旅の僧（実は、時の執権である北条時頼）が訪れ、一夜の宿を乞う。常世が留守であったため、その妻は頼みを断るが、僧はそれなら常世の帰りを待つと言う。やがて常世が帰ってくるが、貧乏で充分なもてなしができないからと断り、やむなく僧は去る。直後に、妻は後悔して僧に功德を積んでおくべきだと常世に言う。そこで常世は僧を呼び戻し、粟飯をふるまい、暖をとらせるために秘蔵の梅桜松の鉢木を燃やして、僧をもてなす。

僧がこのように零落した理由を問うと、常世は一族の者に領地を横領されて落ちぶれたと語り、しかしながら、いざ鎌倉というときには、

みすぼらしい装束ではあっても真っ先に馳せ参じるつもりだとの存念を話す。僧は翌朝、礼を述べ、「われ世の中にあらんほど、またこそ参り候はめ」と言い残して去ってゆく。（前段）

鎌倉に戻った時頼は、関東八州の軍勢に参集を命ずる。見事な装束で集った武士たちの中、みすぼらしい装束を身に纏った常世の姿もあった。時頼は常世を居並ぶ武士たちの中から呼び出し、自分が世話になった僧であることを告げ、常世の決意に偽りのなかったことを賞して、元の所領を返した上、梅桜松の鉢木の返礼に、加賀の梅田、越中の桜井、上野の松枝の三荘を与える。常世は感激して佐野へと戻っていった。（後段）

金海南は、この「鉢木」の背後に、折口信夫の「マレピト」と「貴種流離譚」の要素を見、さらにその普遍性を次のように云う<sup>三三〇</sup>。

マレピトの思想と貴種流離譚の構造、言い換えれば変身して遊行する神の話は、日本ばかりでなく世界中に流布している。中国や朝鮮では、それはしばしば僧侶や道士、乞食などの姿をした観音または仏であり、かつ実際に乞食が新年に「財神」に扮して家々をまわるといふ習俗が各地に見られる。（黄強『中国の祭祀儀礼と信仰』第一書房一九九八年を参照）

ユダヤでは予言者エリア、またヨーロッパでは聖ペテロをともなったキリストが、同じ役割を果たしている。ギリシャ神話の宝库、ローマのオウイディウスの叙事詩『変身物語』にみえる、ユピテル（ゼウス）とその子メルクリウス（ヘルメス）が貧しい老夫婦の家を訪れる話は、「鉢木」と同工異曲であろう。<sup>三三九</sup>

ここに挙げた三種の説話は、「流浪の主君」を助けるために、「人肉を食べさせる」という点で軌を一にする。

ただし、「人肉」という要素を強調せずに「自らが犠牲を払う」と置き換えれば、さらに普遍的な説話となり、『演義』の本来の意図をも明らかにし得るように思う。

すなわち、これらの挿話は、忠義の臣（劉安・介子推・周倉）が自らが犠牲を払って（妻を殺す、自らの肉を切る）、他人、それも高い身分の人間（劉備・文公・関羽）をもてなし、自らも応報を得る（百金を得る）話と整理できる。周倉と介子推の場合は、一見、応報を得ていないかのようなのであるが、「自らの死」という結果も一種の報いと考えれば、問題はあるまい。そして、同様の構造を持つ説話は、世界中に類話を見出すことができるのである。日本人に最もよく知られた類話は、謡曲「鉢木」であろう<sup>三七〇</sup>。大略を以下に示す。

ある雪の夜、上野国佐野に住む佐野源左衛門常世の家を旅の僧（実は、時の執権である北条時頼）が訪れ、一夜の宿を乞う。常世が留守であったため、その妻は頼みを断るが、僧はそれなら常世の帰りを待つと言う。やがて常世が帰ってくるが、貧乏で充分なもてなしができないからと断り、やむなく僧は去る。直後に、妻は後悔して僧に功德を積んでおくべきだと常世に言う。そこで常世は僧を呼び戻し、粟飯をふるまい、暖をとらせるために秘蔵の梅桜松の鉢木を燃やして、僧をもてなす。

僧がこのように零落した理由を問うと、常世は一族の者に領地を横領されて落ちぶれたと語り、しかしながら、いざ鎌倉というときには、

みすぼらしい装束ではあっても真っ先に馳せ参じるつもりだとの存念を話す。僧は翌朝、礼を述べ、「われ世の中にあらんほど、またこそ参り候はめ」と言い残して去ってゆく。（前段）

鎌倉に戻った時頼は、関東八州の軍勢に参集を命ずる。見事な装束で集った武士たちの中、みすぼらしい装束を身に纏った常世の姿もあった。時頼は常世を居並ぶ武士たちの中から呼び出し、自分が世話になった僧であることを告げ、常世の決意に偽りのなかったことを賞して、元の所領を返した上、梅桜松の鉢木の返礼に、加賀の梅田、越中の桜井、上野の松枝の三荘を与える。常世は感激して佐野へと戻っていった。（後段）

金海南は、この「鉢木」の背後に、折口信夫の「マレピト」と「貴種流離譚」の要素を見、さらにその普遍性を次のように云う<sup>三八</sup>。

マレピトの思想と貴種流離譚の構造、言い換えれば変身して遊行する神の話は、日本ばかりでなく世界中に流布している。中国や朝鮮では、それはしばしば僧侶や道士、乞食などの姿をした観音または仏であり、かつ実際に乞食が新年に「財神」に扮して家々をまわるという習俗が各地に見られる。（黄強『中国の祭祀儀礼と信仰』第一書房一九九八年を参照）

ユダヤでは予言者エリア、またヨーロッパでは聖ペテロをともなったキリストが、同じ役割を果たしている。ギリシャ神話の宝库、ローマのオウイディウスの叙事詩『変身物語』にみえる、ユピテル（ゼウス）とその子メルクリウス（ヘルメス）が貧しい老夫婦の家を訪れる話は、「鉢木」と同工異曲であろう。<sup>三九</sup>

筆者が取り上げた『演義』第十九回の挿話は、劉備を基軸として語られているゆえ些かわかり難いが、劉安の役回りが、「鉢木」の常世と酷似していることは間違いないであろう。

ならば、この挿話における劉備は貴種流離譚の「貴種」に当たる。

ここで、劉安は、漢の宗親であると設定されていることに注目したい。この時、劉備は呂布に敗れて只一騎で落ちのびる最中であつた。その困窮した劉備を同族の劉安が助けるのである。この構図は、先述した劉恢や劉虞などとまったく同一のものである。とすれば、すなわち、劉恢や劉虞と劉備の挿話もまた、貴種流離譚の一種だと捉えられはしないか。そして、「劉」から「劉」へと渡り歩く劉備の物語は、『演義』の中に埋め込まれた長大な貴種流離譚と解釈できるであろう。別言すれば、『演義』が周到に「長篇」として構成されていることを、劉備の流離譚は雄弁に物語っているのである。

さらに言えば、劉備は最終的には帝位に就くのであるから、劉備の物語には王権伝説の要素も含まれていることになる。そして、貴種流離譚と王権伝説の二つが揃うのなら、小松謙の指摘した劉秀伝説を想起せぬわけにはいかない<sup>三〇</sup>。後漢の光武帝、劉秀の物語と、蜀漢の昭烈帝、劉備の物語は同質の基盤の上に成り立っており、極言すれば同じ根源から発生したものとも考えられる。

このような前提の上で、劉秀を題材とした講史(『全漢志伝』『兩漢開國中興伝誌』『東漢演義』)を見た場合、劉秀もまた、数多くの劉氏と関係づけられることに気づく。

例えば、三者の内、最も古態を伝えていると考えられる『兩漢開國中興伝誌』(以下、『伝誌』<sup>三一</sup>)を一読するだけでも、劉良・劉寅(史書で

は劉續)・劉仲・劉唐・劉林など、枚挙に暇がないほど劉秀を助ける劉姓の人間が登場する。特に、劉良と劉唐は注目すべき人物である。劉良は『後漢書』にも見える人物であるが、『伝誌』に描かれる劉良は劉秀を助けるという面が極めて強調されている。また、劉唐は史書に名の見えぬ人物であつて、劉秀を逃がして自らは処刑されるという役回りを演じる(『伝誌』巻五「文叔逃難出長安」)。劉備に対する劉恢・劉安といった人物に相当することは明らかであろう。

数ある貴種流離譚にあつて、劉備及び劉秀の物語に独自性を見出すのであれば、これまで述べてきた一族としての固い紐帯にこそ求めるべきであろう。なぜなら、この紐帯は劉備と劉秀に共通する特殊な立場に起因するからである。

劉秀は、一度は王莽に滅ぼされた漢を復興して後漢を立てた。そして、劉備は衰亡した後漢の後を受け蜀漢の皇帝として即位する。つまり、この二人は、ともに「中興の祖」というべき存在である点で共通する。そして、已に存在した王朝の血を承けているからこそ、全国に散らばった同族の協力を受けることができるのであつた。

〔一〕『魯迅全集』第九卷「中国小説史略」(人民文学出版社 一九八一年)第十四篇「元

明伝来之講史(上)」一二九—一三〇頁。

〔二〕同右一二九頁。

〔三〕「魏晉風度及文章与葉及酒之関系」で、魯迅は『三国志演義』に見られるような曹操の見方を、「不是觀察曹操的真正方法」と言い、さらに「其実、曹操是一個很有本事的人、至少是一個英雄、我雖不是曹操一党、但無論如何、總是非常佩服他」と言っ

ている。(註「一」所掲『魯迅全集』第三卷 五〇一―五〇二頁)

〔四〕井波律子『三国志演義』(岩波新書 一九九四年八月) 一一九―一二〇頁。

〔五〕金文京『三国志演義の世界』(東方選書 一九九三年十月) 一〇〇頁。

〔六〕ウラジミール・プロップ著/北岡誠司・福田美智代訳『昔話の形態学』(水声社 一九八七年) などを参照。

〔七〕毛本は「彝陵」に作る。

〔八〕渡辺精一『三国志人物事典』(講談社 一九八九年八月) 八三二頁。

〔九〕呉観明本第二回前/六葉b―七葉a。

〔一〇〕呉観明本第二回後/八葉b。

〔一一〕正史の田丘毅に当たるのであろう。

〔一二〕『後漢書』劉虞公孫瓚陶謙列伝第六十三に伝があり、また『三国志』魏書・二公孫陶四張伝第八の裴松之註に引く『呉書』に「虞、東海恭王之後也」とある。

〔一三〕註「五」所掲『三国志演義の世界』四二頁。

〔一四〕『三国志』第四冊/卷三三/八七二頁。

〔一五〕『三国志』第一冊/卷一/一三頁。

〔一六〕『三国志』第四冊/卷三三/八七六頁。

〔一七〕呉観明本第三二回/九葉a b。

〔一八〕『平話』卷中/第二十六葉a。

〔一九〕『三国志』第四冊/卷三二/八六五頁。

〔二〇〕劉備と劉焉の関係については、註「八」所掲『三国志人物事典』第八三〇頁に言及がある。

〔二一〕『平話』卷上/八葉a。

〔二二〕呉観明本第十九回/一葉b―二葉b。

〔二三〕劉安の名は『三国志』にはまったく見えない。また『後漢書』では、『淮南子』の撰者として知られる劉安を始め、四人の

『劉安』がいるが、いずれも年代的に大きくずれている。

〔二四〕註「八」所掲『三国志人物事典』第八二八―八二九頁。

〔二五〕『莊子』のテキストは『四部叢刊初編』所収『南華真經』に拠った。同書二〇九頁下段―二一頁上段参照。

〔二六〕『花間索伝』別集/三葉b―四葉a。

〔二七〕『鉢木』のテキストは、『謡曲集 下』(『日本古典文学大系』第四一巻 岩波書店 一九六三年)に拠る。また、大略をまとめるに当たって、金海南『水戸黄門漫遊考』

(新人物往来社 一九九九年) 九九頁の記述を参考にした。

〔二八〕註「二七」所掲『水戸黄門漫遊考』一一二―一五頁参照。

〔二九〕同右一一四頁。

〔三〇〕小松謙『劉秀伝説考』(『未名』第九号「一九九一年三月」五一―九三頁)・同「兩漢をめぐる講史小説の系統について―劉秀伝説考補論―」(『未名』第十号「一九九二年三月」五一―八〇頁)参照。また小松以外では、大塚秀高「漢の物語から唐の物語へ―『三国志平話』をめぐって」(『中国通俗文芸への視座』「東方書店 一九九八年三月」一四九―一七九頁)も、劉秀伝説について言及している。

〔三一〕『伝誌』のテキストは、『古本小説叢刊』第二輯/第三冊「中華書局 一九九〇年八月」所収のものに拠った。なお、『伝誌』の性格については、註「三〇」所掲「兩漢をめぐる講史小説の系統について―劉秀伝説考補論―」に詳しい。

## 第四章 鼎立の構造—曹操

本章では、曹操について論ずる。従来、『演義』の曹操は悪役であると認識されてきた。吉川幸次郎は『三国志実録』「曹操父子伝」の冒頭で次のように言う。

魏の武帝、曹操は、中国の民衆のあいだで、たいへん評判の悪い人物である。

不評は、主として、明の羅貫中の歴史小説、「三国演義」のおかげである。

三世紀、三国時代の歴史に取材したこの小説は、善玉と悪玉とを、はっきりとわり切っている。

四百年間の統一国家であった漢の王朝、その衰弱に乘じ、表面はそれに忠勤を抜きんでるごとく見せかけつつ、陰險な策動でその帝位をのっとりおさせる一步手前でなくなったのが曹操、そのあととりとしてついに帝位をうばったのは、その子曹丕、この二人ははっきりと悪玉であり、その家来たちも、みな悪玉である。〔一〕

右の指摘は、多くの『演義』読者と重なるに違いない。しかし、『演義』の曹操が持つ役割とはそれだけなのか、という疑問は提出されてしめるべきであろう。

### 第一節 「奸雄」曹操

『演義』において、曹操が奸雄として描かれ、悪役に属するというのは、多くの読者の共通認識であろう。例を挙げれば枚挙に暇がないが、ここでは、魯迅の言葉を借りよう。

魯迅は『而已集』に収める「魏晉風度及文章与葉及酒之關係」において、次のように云う。

漢末魏初這個時代是很重要的時代、在文学方面起一個重大的變化、因當時正在黃巾和董卓大亂之後、而且又是党錮的糾紛之後、這時曹操出來了。——不過我們講到曹操、很容易就聯想起『三国志演義』、更而想起戲臺上那一位花面的奸臣、但這不是觀察曹操的真正方法。……其實、曹操是一個很有本事的人、至少是一個英雄、我雖不是曹操一党、但無論如何、總是非常佩服他。〔二〕

（漢末、魏初という時代は、大変重要な時代です。文学の方面では重大な変化が起こりました。当時は、ちょうど黄巾と董卓の大亂の後、しかも党錮の混亂のちです。このとき、曹操があらわれました。——ただ曹操というと、我々はすぐに『三国志演義』を連想する。そして舞台の上の敵役、あの奸臣を思い浮かべます。だが、これは曹操を観察する真の方法ではない。……ところが曹操はとも実力のある人です。ともかく英雄ではありません。私は曹操の一味ではありません。だが、とにかく彼にたいへん感服しています。〔一〕

魯迅はここで曹操の再評価を試みるわけであるが、その前提として『演義』と演劇に曹操を挙げ、「奸臣」に描かれていると述べるわけである。

また、郭沫若も、話劇『蔡文姬』の序において、ほぼ魯迅と同じ見解を述べている<sup>〔三三〕</sup>。

曹操を「奸」とする見方は古くからあり、その変遷については井波律子に論究がある<sup>〔四〕</sup>。それゆえ、本稿では詳細に論ずることはしないが、概略だけは述べておこう。

曹操を「奸」と評した記録は早い。『三国志』魏書・武帝記の裴註に引く、東晋・孫盛の『異同雜語』に云う。

孫盛『異同雜語』云、太祖嘗私入中常侍張讓室、讓覺之、乃舞手戟於庭、踰垣而出。才武絶人、莫之能害。博覽群書、特好兵法、抄集諸家兵法、名曰接要、又注孫武十三篇、皆伝於世。嘗問許子將、「我何如人」。子將不答。固問之、子將曰、「子治世之能臣、乱世之姦雄」。太祖大笑。<sup>〔五〕</sup>

（孫盛『異同雜語』に云う、太祖 嘗て私かに中常侍張讓の室に入り、讓之を覚るや、乃ち手戟を庭に舞わし、垣を踰えて出づ。才武 絶人たり、之を能く害するもの莫し。郡書を博覽し、特に兵法を好み、諸家の兵法を抄集して、名づけて接要と曰い、又た孫武十三篇に注し、皆な世に伝わる。嘗て許子將に問う、「我 何如なる人ぞ」と。子將 答えず。固く之を問い、子將曰く、「子は治世の能臣、乱世の姦雄なり」と。太祖 大いに笑う。）

『演義』にも採られるこの挿話は、曹操を「奸」と印象づける最も早い例と言えよう。しかし、西晋・東晋代において、このような評価が主流だったわけではなく、肯定的な評価も当然、ある。魏書・武帝紀の陳寿評を引用しよう。

評曰、漢末、天下大乱、雄豪並起、而袁紹虎踞四州、疆盛莫敵。太祖運籌演謀、鞭撻宇内、攬申・商之法術、該韓・白之奇策、官方授材、各因其器、矯情任算、不念旧惡、終能總御皇機、克成洪業者、惟其明略最優也。抑可謂非常之人、超世之傑矣。<sup>〔六〕</sup>

（評に曰く、漢末、天下 大いに乱れ、雄豪 並び起ちて、袁紹 四州を虎踞して、疆盛 敵する莫し。太祖 籌を運らし謀を演べ、宇内を鞭撻し、申・商の法術を攬り、韓・白の奇策を該ね、官は方に材に授け、各其の器に因り、情を矯め算に任せて、旧惡を念わず、終に能く皇機を總御して、克く洪業を成すは、惟だ其の明略 最も優るればなり。抑 非常の人、超世の傑と謂うべし。）

陳寿は、魏の正統を受け継いだ晋に出仕した人であるから、魏の太祖たる曹操をあまり貶すわけにもゆかなかつただろうが、極めて肯定的な評価が曹操に対して加えられている。

曹操の「奸」の部分が強調され出したのは、南北朝の、所謂「志人小説」からであったと言つてよい。劉宋の劉義慶が編んだ『世說新語』から二例挙げておこう。

#### 容止第十四

魏武將見匈奴使、自以形陋、不足雄遠國、使崔季珪代、帝自捉刀立牀頭。既畢、令問諜問曰、「魏王何如」。匈奴使答曰、「魏王雅望非常、然牀頭捉刀人、此乃英雄也」。魏武聞之、追殺此使。<sup>〔七〕</sup>

（魏武 將に匈奴の使に見えんとし、自ら以えらく形 陋にして、遠國に雄たるに足らずと、崔季珪をして代え、帝 自ら刀を捉り牀頭に立つ。既に畢り、問諜をして問わしめて曰く、「魏王 何如」と。匈奴の使 答えて曰く、

「魏王 雅望非常、然れども牀頭にて刀を提りし人、此れ乃ち英雄なり」と。  
魏武 之を聞き、追いて此の使を殺す。」

### 假譎第二十七

魏武常云、「我眠中不可妄近、近便斫人、亦不自覺、左右宜深慎此」。

後陽眠、所幸一人窃以被覆之、因便斫殺。自爾每眠、左右莫敢近者。」

(魏武 常に云う、「我 眠りし中に妄りに近づくと可からず、近づけば便ち人を斫るも、亦た自ら覺えず、左右 宜しく深く此れを慎しむべし」と。後に陽り眠るに、幸する所の一人 窃かに被を以て之を覆わんとす、因りて便ち斫殺す。爾れ自り毎に眠るに、左右 敢えて近づくと者莫し。)

前者は、『世説新語』に先行する東晋裴啓撰『語林』や、『世説新語』にやや遅れる梁殷芸撰『小説』<sup>二〇</sup>に、後者も『語林』に、ほぼ同様のものが収められている<sup>二〇</sup>。当時、相当に流布していた説話であったことが、容易に推察できよう。

そして、このように曹操の「奸雄」めいた部分は時代が下ると強められてゆく。例えば、初唐の成書である『貞観政要』誠信十七において、唐太祖(李世民)は次のように曹操を評する。

朕常以魏武帝多詭詐、深鄙其為人。<sup>二二</sup>

(朕 常に以えらく魏武帝は多く詭詐にして、深く其の為人を鄙しむ。)

さらに、北宋に下ると、蘇軾『東坡志林』卷一は、劉備を応援し曹操を憎む子供たちの姿を記す。

王彭嘗云、「塗巷中小兒薄劣、其家所厭苦、輒与錢、令聚坐聽說古話。至說三國事、聞劉玄德敗、顰蹙有出涕者、聞曹操敗、即喜唱快。以是知君子小人之沢、百世不斬」。彭、愷之子、為武吏、頗知文章、余嘗為作哀辭、字大年。<sup>二三</sup>

(王彭 嘗て云う、「塗巷の中の小兒 薄劣にして、其の家の厭苦する所となれば、輒ち錢を与えて、聚まり坐らしめ古話を説くを聴かしむ。三國の事を説くに至り、劉玄徳の敗るるを聞けば、顰蹙して涕を出す者有り、曹操の敗るるを聞けば、即ち喜びて快を唱す。是を以て君子小人の沢、百世斬きざるを知る」と。彭、愷の子なり、武吏と為るも、頗る文章を知り、余 嘗て為に哀辭を作る、字大年。)

右の史料は、巷間で三國故事が語り物となっていたことを示す史料として、屢々言及されている<sup>二三</sup>。

このように、曹操を奸雄と看做し、否定的な評価を与える記述は繰り返しなされてきた。

このように見てくると、あたかも曹操を「奸」とする視点が中国を覆っていたかのようなのであるが、無論、そんなはずはない。曹操を奸雄と見るのが主流ではあったかも知れないが、肯定的な見方も存している。例えば、唐・張鼎は「鄴城引」詩の前半部で、曹操の覇業を謳う。

### 鄴城引

君不見漢家失統三靈變

君 見ずや 漢家の統を失い三靈変じ

魏武爭雄六龍戰

魏武 雄を争いて六龍と戦す

邊海吞江制中国

海を邊かし江を呑みて中国を制し

迴天運斗応南面<sup>二四</sup>

天を迴らし斗を運らし応に南面すべし

つまり、曹操には「奸雄」と「英雄」の二側面がある。そして、魯迅や郭沫若は、『演義』の曹操から、「奸雄」の側面だけを読み取るのである。しかし、『演義』の曹操は、本当に「奸雄」というだけにとどまるのだろうか。

## 第二節 『演義』の曹操

前節の問題提起を受け、本節では『演義』の曹操像を整理してみたい。

### 甲 『演義』序文における曹操評

『演義』に数多くの版本があるのは周知の事実である。版本の種類が多いということは、出版件数が多いということであり、出版競争が激烈だったことを示す。すると、書坊は他とは違うという宣伝を行う必要があるのだが、その際に大きな役割を担うのが、『演義』に付された序文である。

試みに『中国歴代序跋集』を閲すると、実に二十四種もの『三国志演義』序文を収める<sup>〔五〕</sup>。『演義』の出版競争の激烈さを物語っているであろう。

この序文からは、多くのものが読み取れるのだが、ここで着目したいのは物語の受容という側面である。

序文では、『演義』の本質を短い言葉で集約しようとすることが多い。しかし、極めて長大な物語を対象とするのだから、その行為には無理がつきまとう。その結果、序文の言説は、その作者の偏見、という語がま

ずければ『演義』や三国故事に対する解釈が如実に反映される。つまり、序文を読めば、ある読者がどのように『演義』を解釈していたかが推察できるのである。

まず、最古の版本である嘉靖本に付された庸愚子の序を挙げよう。

曹瞞雖有遠図、而志不在社稷、假忠欺世、卒為身謀、雖得之、必失之。万古奸賊、僅能逃其不殺而已、固不足論。孫權父子、虎視江東、固有取天下之志、而所用得人、又非老瞞可議。惟昭烈漢室之胄、結義桃園、三顧茅廬、君臣契合、輔成大業、亦理所當然。<sup>〔二六〕</sup>

（曹瞞 遠図有りと雖も、志は社稷に在らず、忠を仮りて世を欺き、卒に身<sup>みづか</sup>らが為に謀り、之を得と雖も、必ず之を失う。万古の奸賊にして、僅かに能く其の殺されざるを逃るのみ、固より論ずるに足らず。孫權父子、江東を虎視し、固より天下を取るの志有るも、用て人を得る所は、又た老瞞の議すべきに非ず。惟だ昭烈 漢室の胄にして、義を桃園に結び、三たび茅廬を顧し、君臣契合し、大業を輔成するは、亦た理の当然なる所なり。）

文中の「万古の奸賊」「固より論ずるに足らず」「老瞞」という語から判るように、彼は極めて否定的に曹操を評価する。そして、このような評価は嘉靖本以降、綿々と受け継がれていると見て良い。その集大成とも言えるのが、毛宗崗が自ら校訂した『演義』に附す「説『三国志』法」である。彼は、この文中で『演義』には「三絶」がいると称する。些か長くなるが引用しよう。

古史甚多、而人独貪看『三国志』者、以古今人才之聚、未有盛于三国者也。……吾以為『三国』有三奇、可称三絶。諸葛孔明一絶也、関雲



雲長一絶也、曹操亦一絶也。……歴稽載籍、奸雄接踵、而智足以攬人才而欺天下者、莫如曹操。聽荀彧勸王之説、而自比周文、則有似乎忠。黜袁術僭号之非、而願為曹操、則有似乎順。不殺陳琳而愛其才、則有似乎寬。不追関公以全其志、則有似乎義。王敦不能用郭璞、而操之得士過之。桓温不能識王猛、而操之知人過之。李林甫雖能制禄山、不如操之擊烏桓于塞外。韓侂胄雖能貶秦桧、不若操之討董卓于生前。窃國家之柄而姑存其号、異于王莽之顯然弑君。留改革之事以俟其兒、勝于劉裕之急欲篡晋。是古今来奸雄中第一奇人。有此三奇、乃前後史之所絶無者。故説遍諸史、而愈不得不喜『三國志』也。〔七〕

(古史 甚だ多きも、而して人 独り『三國志』を食り看るは、古今の人才の聚むるに、未だ三國より盛んなる者有らざるを以てなり。……吾れ以為く『三國』に三奇有り、三絶と称すべし。諸葛孔明 一絶なり、関雲長 一絶なり、曹操 亦た一絶なり。……載籍を歴稽するに、奸雄 踵を接げど、智以て人才を攬りて天下を欺くに足るは、曹操に如くは莫し。荀彧の勤王の説を聞きて、自ら周文に比するは、則ち忠に似たる有り。袁術の僭号の非を黜して、曹操為らんと願うは、則ち順に似たる有り。陳琳を殺さずして其の才を愛するは、則ち寬に似たる有り。関公を追わずして以て其の志を全うせしむるは、則ち義に似たる有り。王敦 郭璞を用うる能わず、而して操の士を得るは之に過ぐ。桓温 王猛を識る能わず、而して操の人を知るは之に過ぐ。李林甫 能く禄山を制すと雖も、操の烏桓を塞外に撃つに如かず。韓侂胄 能く秦桧を貶むと雖も、操の討董卓を生前に討つに若かず。國家の柄を窃みて 姑く其の号を存するは、王莽の顯然と君を弑するに異なる。改革の事を留めて以て其の兒を俟つは、劉裕の急ぎて晋を篡わんと欲するに勝る。是れ古今来の奸雄中第一の奇人なり。此の三奇有るは、乃ち前後の史の絶えて無き所なり。故に諸史を読み遍くして、愈『三國志』を喜ばざるを得ざ

るなり。)

「是れ古今来の奸雄中第一の奇人なり」という語が、称揚の意か、或いは誹謗の意なのか、にわかには判断に苦しむところであるが、ここでは恐らく否定的な言であろう(理由については後述する)。

見てきたとおり、『演義』序文の作者たちの見方は大勢において一致している。それでは、その見方はテキストに沿ったものなのであるか。或いは、彼らの先入観に過ぎないのであるか。

## 乙 『演義』本文における曹操評

『演義』において、曹操を否定する言辞を見付けるのは容易い。例として、『演義』第六十回後の劉備の発話(セリフ)を挙げよう。

玄德曰、「今与吾水火相敵者、曹操也。操以急、吾以寬、操以暴、吾以仁、操以譏、吾以忠。每与操相反、事乃可成耳。今以小利而失信義於天下、吾為此不忍也。」〔八〕

(玄德が言った。「今、わしと、水と火の如く敵対するのは曹操じゃ。曹操が事を急げば、わしは緩やかにし、曹操が暴虐ならば、わしは仁愛を旨とし、曹操が人を欺けば、わしは誠実を第一とする。何事も曹操と裏腹に行つてこそ、大事はなろう。今、小利に目が眩み、信義を天下に失うなどということを行うのは、わしには耐え難いのじゃ。)

曹操と劉備の性格を端的に表す言説である。ただし、より厳密に言うならば、「そう読者に思わせる言説」と表現すべきであろう。何故ならば、この言葉は、劉備という、曹操の敵対者から発せられているからである。

『演義』で、ある人物の立場によって別の人物に対する評価は異なる。現実世界に照らし合わせれば、当然のことであろう。張松という人物を例として挙げる。

『演義』第六十回の挿話である。張松は、益州別駕として益州牧の劉璋に仕えていた。漢中の張魯の勢力が大きくなったことを聞いた劉璋は、恐れおののいて配下に対策を図る。そこで、張松は次のように進言する。

松曰、「某聞許都曹操已掃蕩中原、呂布・二袁皆被滅之、南直抵於江漢、北直抵於幽燕、近又破馬超、天下無敵矣。主公可備進獻之物、松親往許都、說曹公興兵、去取漢中、以圖張魯、則魯豈敢望蜀中耶。」

二九

（張松が言う。「私めの聞くところでは、許都の曹操は已に中原を平らげ、呂布と二袁〔袁紹と袁術〕はすべて彼に滅ぼされました。その勢力は、南は江漢の流れにまで、北は幽燕の地にまで至り、近頃はまた、馬超を破ったとのこと、天下に敵する者はおりますまい。わが君には献上する礼物を用意していただき、この張松自らが許都に赴き、兵を興して漢中を取り、張魯を伐つように、曹公に説いて参りましょう。さすれば、どうして張魯が蜀を奪おうなどとしましようや。」）

曹操を指して、張松は「天下に敵無し」と肯定し、「曹公」という尊称を用いる。実のところ、張松の真意は懦弱な劉璋に見切りをつけ、益州を保護してくれる実力者に献上しようと考えたのであり、その相手を曹操と見定めたのであった。しかし、許都へ向かった彼は、曹操に無惨な仕打を受ける。張松の容貌が優れないのを嫌った曹操は相手にせず、腹に据えかねた張松は、曹操を嘲弄する。怒った曹操は彼を棒打に処し、

張松は許都を去る。

その張松を暖かく迎えたのが、荊州に居た劉備であった。張松は劉備に惚れ込み、彼に益州を献上しようとして決意する。そして、益州に戻った張松は、劉璋に次のように告げるのである。

次日張松見劉璋。璋問、「幹事若何」。張松曰、「操乃漢賊、欲篡天下、不可為言、彼已有川之心」。璋曰、「似此如之奈何」。松曰、「松有一謀、使張魯・曹操皆不敢輕犯西川。璋又曰、「如何解之」。松曰、「見居荊州劉皇叔、与主公同宗、加之本人仁慈寬厚、有長者之風。赤壁鏖兵之後、操聞之而胆裂、何況張魯乎。主公何不遣賚書、以結好之、使為外援、足可以拒曹操・張魯、蜀中可安矣。」

（次の日、張松は劉璋に見えた。劉璋は、「首尾は如何であったか」と問う。張松「曹操は漢の賊にして、天下を奪わんとし、話になりませぬ。それに彼奴には已に西川を取ろうとの腹づもりがございます」。劉璋「それならば如何したものか」。張松「張松めに一計がございます。張魯や曹操らに軽々しくこの西川を犯させはいたしません」。劉璋「いったいどうするのじゃ」。張松「荊州に居られます劉皇叔を見ますに、わが君と同族にして、加えて仁愛深く寛厚の御仁、長者の風格がございます。赤壁にて兵を皆殺しにされて後、曹操は彼の名を聞けば胆を裂かんばかり、ましてや張魯ごときは言うに及びませぬ。わが君にはどうして親書を遣わされて、誼をお結びになりませぬのか。彼をして外の援けとすれば、曹操・張魯を防ぐに足りましょう。さすれば蜀中は安泰にござりまする。」）

曹操と会見する前後で、張松の曹操評は著しく変化する。人物の発話、立場によって変化する好例であろう。

別の例を挙げよう。劉備が『演義』で「仁義の人」と評されるのはよく知られた事実だが、その劉備に対して蔡瑁という人物は次のように評価する。

蔡瑁諳曰、「不可、不可。劉備心術不正、背義忘恩。先從呂布、後事曹公、近投袁紹、皆不克終、足可見其為人。今若納之、必惹曹公加兵、使九州生靈不安。不如斬乾首以曹公、曹公必重待主公也。」<sup>(三二)</sup>

(蔡瑁は誘って言う。「なりませぬ、なりませぬ。劉備は心根が正しからず、義に背き恩を忘れる類の者であります。はじめ呂布に従い、後に曹公に仕え、近ごろは袁紹に投じましたが、みな長続きはしなかったのを見れば、その人となりは知れようと申すもの。今もしも彼を受け入れましたら、必ず曹公の出兵を促し、九州の人民を安からぬ思いに致しましょう。孫乾〔劉備の使者〕の首を斬って曹公に献上するのが最上、さすれば曹公も必ずわが君を重く遇するであります。』)

汝南で曹操に敗れた劉備が荊州牧の劉表を頼ろうと思ひ、使者に孫乾を立て、その孫乾と劉表が会見したとき、近侍していた蔡瑁がこの発話を立て、蔡瑁は荊州土着の豪族であり、劉表夫人の弟でもあった。彼は、劉表を傀儡として自分達(荊州豪族)が荊州の実権を握ることを望んでいたから、声望があり、ある程度の軍事力を持つ劉備を迎え入れるのは避けるべき事態であった。それゆえ、彼は劉備の不義理をなじるのである。つまり、彼の発言は、その政治的立場に由来する相対的なものであった。

蔡瑁の発言が相対的なものであることは、直後に続く孫乾の発話が証明する。孫乾は蔡瑁に反論し、劉備の正当性を説くのである。

孫乾正色言曰、「乾非懼死之人也。劉使君雖從事三人、皆非其交、布乃殺父之徒、操誠欺君之賊、袁紹不納忠言、損害賢良、似此等輩、安可共論仁義之道。劉使君赤心報國、言必有信、忠孝兩全之士、豈肯屈身于俗子之下哉。今聞劉將軍漢朝苗裔、宗族之兄、寬洪大度、敬老尊賢、愛民惜物、乃當世之英雄、故千里而投之。爾何獻讒言而妬賢嫉能耶。」<sup>(三三)</sup>

(孫乾は顔色を正して言った。「私は死を恐れる者ではありません。劉使君は三人に仕えましたが、その三人は交わりを深くするに値しませんでした。呂布は父殺しの徒であり、曹操は帝を侮る全くの賊、袁紹は忠言に耳を貸さず、賢者や忠臣を害しました。このような輩と、どうして仁義の道を共に論ぜましょうや。劉使君は真心を以て国に報いんとし、その言は信ずるに足り、忠孝兩全の士であるからには、どうして俗人の下に身を屈することを肯んじましょうや。今、劉將軍は漢朝の裔にして、族兄に当たり、寛仁大度にして、老人・賢者を敬い、民草を愛する当世の英雄であるとお聞きしたゆえ、千里を越えて身を寄せんとしたものであります。何故、お前は讒言して賢能の士を妬み害さんとするのか。』)

『演義』において、人物の評価をする記述は実に多い。そして、それらの評価が、読者が『演義』の人物を評する際の一助となっていることは間違いない。しかし、往々にして、同じ人物に対して全く異なる評価が下されることは注意しておくべきであろう。特に劉備と曹操については、肯定的評価と否定的評価がともに多く、それに頼る限り、劉備を「善」、曹操を「悪」と断じることが難しく、精々、相対的に「曹操の方が劉備よりも悪評が多い」と言い得る程度であろう。別言すれば、『演

義』の発話に現れる人物評は、人物を一面的に描く弊を避け、多面的・重層的に表す効用があるとも言えるが、それは措く。

ともかく、発話に現れる人物評に頼る限り、曹操を「奸」と決めつけることには相当な無理があるのである。

### 丙 「毛宗崗本」という問題

さらに、劉備と曹操の形象が、毛宗崗本と嘉靖本で異なっているという指摘が、徐中偉「不可等量齊觀的両部『三国』——嘉靖本与毛本『擁劉反曹』之不同」<sup>(21)</sup>において行われている。「演義」研究を進める上で根本的な問題をも示唆しているので、やや詳しく取り上げておこう。

徐は、鄭振鐸が言うように「毛宗崗はほとんど本文を変えていない」のではなく、ある視点から見れば、毛本と嘉靖本の間には「重大な差異」があるのだと指摘する。

彼は、まず、嘉靖本の中で繰り返される「天下者、非一人之天下、乃天下人之天下也（天下は、一人の天下に非ずして、乃ち天下の人の天下なり）」という語が、毛本では削除されていることに注目する。そして、こう結論づける。嘉靖本で、劉備が帝位を継ぐべき存在だとされるのは、彼が皇族であるばかりでなく、「有徳者」であるからである。また、劉備に限らず、帝位に就く者は「有徳者」であらねばならぬという思想が看取される。一方、毛本では「有徳者」という観点がなくなり、劉備の血の正統性ばかりが強調されるのだと、徐は言う。

そして、右のような毛宗崗の態度は人物形象にも反映される。彼の筆は曹操に対して極めて冷淡である一方で、劉備を擁護する傾向は極めて強い。

徐は、『演義』第一回（嘉靖本では巻一）における曹操の登場場面を

挙げ、嘉靖本と毛本の違いを具体的に指摘する。上下に対照して示そう（訳文は嘉靖本による。傍線筆者、以下同）。

見一彪人馬、尽行打紅旗、

当頭来到、截往去路。為首閃

出一箇好英雄、身長七尺、細

眼長髯、胆量過人、機謀出衆、

啖齋桓・晋文無匡扶之才、論

趙高・王莽少縱橫之策、用兵

彷彿孫吳、胸内熟諳韜略、官

拜騎都尉、沛國譙郡人也、姓

曹、名操、字孟徳。

忽見一彪軍馬、尽打紅旗、

当頭来到、截往去路。為首閃

出一將、身長七尺、細

眼長髯、

官

拜騎都尉、沛國譙郡人也、姓

曹、名操、字孟徳。<sup>(24)</sup>

（一隊の人馬が、ことごとく紅の旗を立てて現れ、「黄巾賊の」正面にまわるやその行く手をふさいだ。その先頭に現れた一人の英雄は、身長七尺、目は細くひげは長く、胆量は人に過ぎ、知謀は群を抜く。齊の桓公と晋の文公を指して王室を保つ才がないと笑い、趙高と王莽は縦横の策が少ないと論じ、用兵はあたかも孫武・呉起が甦ったかのよう、その胸中には六韜三略を諳んずる。官は騎都尉、沛國は譙郡の人で、姓は曹、名は操、字は孟徳であった。）

嘉靖本に現れる曹操を肯定的に評価する言説が、毛本ではほぼ削除されている。毛本の改作態度が如実に現れている。また、劉備の形象について徐は次のように云う。

……有人認為、毛本「擁護劉備、不是擁護他姓劉、而是擁護他的『仁

徳』。如果僅局限于『三国演義』本身、這種立論的缺陷確實不易看出、

可是当把嘉靖本与毛本对劉備的態度作一比較之後、就不難發現、這樣立論恰恰是因果倒置。<sup>〔二五〕</sup>

(ある人は、毛本が「劉備を擁護するのは、彼の姓が劉だからするのではなく、彼の『仁徳』のためにするのだ」と考えている。もしも、『三国演義』そのものに限って言えば、この議論の欠陥を見出すことは確かに容易ではない。しかし、嘉靖本と毛本の劉備に対する態度を比較すれば、このような議論はまさしく因果を逆転させてしまっているものだということが、容易に解るであらう。)

そして、彼は毛本が巻頭に掲げる「凡例」を、その証拠として挙げる。

一、俗本謬託李卓吾先生批閱、而究竟不知出自何人之手、其評中多唐突昭烈、謾罵武侯之語。今俱削去、而以新評校正之。<sup>〔二六〕</sup>

(一 俗本は「李卓吾先生批閱」に偽託しているが、結局誰の手から出たものかわからない。その批評中に昭烈帝「劉備」に対して軽率であったり、武侯「諸葛亮」をあざけり罵ったりした言葉が多い。今、いずれも削り去り、新しい批評で校正した。)

これは評に対する毛宗崗の態度の表明だが、徐の指摘するとおり、本文にまで、この態度が拡大していることは明白である。

そして、徐は、毛宗崗のこのような態度が顕著に出ているのが、『演義』の標題であると言う。解り易い例を挙げておこう<sup>〔二七〕</sup>。

回数	呉観明本	毛宗崗本
一一前	劉玄德北海解困	劉皇叔北海救孔融

二三前	禰衡裸体罵曹操	禰正平裸衣罵賊
二四前	曹操勒死董貴妃	国賊行兇殺貴妃
二四後	玄德匹马奔冀州	皇叔敗走投袁紹
三四後	玄德躍馬跳檀溪	劉皇叔躍馬過檀溪
六九後	耿紀韋晃討曹操	討漢賊五臣死節
七八後	魏太子曹丕秉政	伝遺命奸雄數終

曹操に関して言えば、毛宗崗がひたすらに彼を貶めようとしたことが窺えよう。劉備とは扱われ方が露骨に違う。

以上を主要な論拠として、毛本が毛宗崗によって恣意的に改変されている以上、嘉靖本との比較が必須であると、徐は結論づける。

徐の結論そのものは、近年の版本研究の進展と相俟って、研究者の常識となつていえる<sup>〔二八〕</sup>。徐の研究において注目すべきは、人物形象そのものが毛本と他の版本(ここでは嘉靖本)では大きく異なる点を指摘した点にあらう。

毛本というのは通行本であり、それ以前に数多くの版本が存在したのは周知の事実である。しかし、毛本が現れるや、他の版本は圧倒されその姿を消した。その後、『三国志演義』と言えば、専ら毛本のことを指したから、『演義』テキストにとって毛本は終着点と言える。そして、曹操を「奸」と見た魯迅や郭沫若の視点は、毛本から多大な影響を受けていたはずである。一方、本論で論じてきたのは、『演義』テキストの生成過程であった。当然、毛本以前のテキストをも問題とすべきである。そこで、次節以降、毛本以前の『演義』について検証してみたい。

### 第三節 呼称をめぐって

本節で問題とするのは、『演義』の、曹操に対する意識である。それを論じるには、様々な方法があるだろうが、ここでは、従来、あまり論及されることのない視点で議論を進めてゆきたい。すなわち、人物の呼称に着目するのである。

『演義』において、関羽の呼称が極めて特殊であることは、屢々指摘されるところであり、周知の事実であると言って良からう。小川環樹は次のように云う。

関羽の忠勇がほめたたえられたのは、『平話』でもそうであったが、「千里独行」や「单刀会」その他、かれを主人公とした戯曲も多く作られ、忠義一途にこりかたまったかれの誠実さが読者と看客とに感銘をあたえて来た。かれには狡獪、怯懦の色はいささかもない。かれを宋代以来、神として崇拜することが各地におこった。元の戯曲においてかれを関大王と称するのは、宋代にかれの廟に贈られた神号にもとづくのであり、元刊本の『平話』でも関羽の名をそのままに称することはきわめて少なく、たいてい「関公」とよんでいるのは（張飛にはこのことがない）、その名を呼びつけにすることをはばかったのである。このことは『演義』においては、さらに著しく、巻頭の人名表の中でも「関某」と書いてある。これは清朝に孔子の名をそのまま書かず邱の字を用い、音読するときは孔丘と言わず孔某と読む習慣であったのと同じで、神としての尊敬を示すのである。元の戯曲の中には、実際、神としてのかれについてのべている処もある。<sup>〔二九〕</sup>

別の例として鄭振鐸の言を挙げておこう。

在毛宗崗改編的『三国志演義（第一才子書）』裏、凡書中的「関某」二字、已都改作「関公」二字、卻仍不敢直呼其名、大約「某」之改「公」、完全為的是「某」字見得生硬拗口之故吧。<sup>〔三〇〕</sup>

（毛宗崗が改編した『三国志演義（第一才子書）』では、書中の「関某」の二字が、すべて「関公」の二字に書き改められている。これはやはり、その名を直接呼ぶのを憚ったためで、おおよその処、「某」を「公」に改めるのは、「某」字が生硬で言い難いために違いないだろう。）

鄭振鐸の語は、些か事態を単純化しすぎており、「関某」がすべて「関公」になっているわけではない。例えば『演義』第二十回前では、毛本も「関某」を用いている。呉観明本と比較して示そう（上段が呉観明本、下段が毛宗崗本）。

雲長曰、「関某素知文遠忠

雲長曰、「関某素知文遠忠

義之士、吾以性命保之」。

義之士、願以性命保之」。<sup>〔三一〕</sup>

（雲長が言う。「関某は平素より文遠が忠義の士であることを知っております。わが命に代えてかれを助けたまえ」。）

この場面において、呉観明本と毛宗崗本の記述はほぼ一致し（「吾」と「願」が異なるのみ）、毛本でも、「関某」という呼称が用いられている。そもそも、「関某」は、関羽の自称に用いられることが多く、その際、「関公」としてしまえば、関羽が自らを尊崇することとなり、些か理屈に合うまい。

ともかく、関羽の呼称については論考が存在している。

対して、他の人物の呼称についてはどうかだろうか。例えば、曹操に対する呼称のみを見ても、「曹操」「孟徳」「曹公」「丞相」「魏王」など多数あるが、従来、それらについて論じられることはほとんどない。しかし、関羽の「関公」が問題になるならば、これらを論じないわけにもゆくまい。そこで、以下、『演義』における曹操の呼称について、特殊だと思われるものを幾つか採り上げて論じてみたい。

#### 第四節 曹操の呼称(一)―曹公

最初に、「曹公」という呼称について見てゆこう。なお、先の引用に倣い、『演義』本文を引用する際は、呉観明本(上段)と毛本(下段)を対照する形で引用する。毛本の特異性をも、併せて明らかにするためである。また、論考の性質上、特に必要と思われるときを除き、訳文は省略した。

##### 甲 「曹公」の例

『演義』において「公」と称されることのある人物は幾人かいるが、叙述において「公」の称が用いられるのは二人しかない。一人は言うまでもなく関羽であり、もう一人が他ならぬ曹操である。

「関公」が尊称であるならば、「曹公」も尊称であろう。悪玉であるはずの曹操に尊称が用いられているのである。これはどう解釈すべきであらうか。

網羅的に挙げることはしないが、「曹公」は多く発話の中で現れる。

三例ほど挙げておこう。

且説高順等 出徐州。

有人入小沛報 玄德、

玄德急聚衆人商議。孫乾曰、

「可先告急于曹公、……」

欲拔劍自刎。左右奪劍而

勸曰、「主何自死耶。袁紹

非治世之人、不納直言、後必

為曹操所擒耳。主 与曹公有

旧、何不棄暗投明、以避袁紹

之患」。只這兩句言語、点醒

許攸。

昭曰、「近聞劉豫州三顧先

生於草廬之中、而聽高論、豫

州如魚得水、每欲席捲荆・襄。

今一旦以屬曹公、未審是何主

見。

且説高順等引兵出徐州。將

至小沛。有人 報知玄德、

玄德急与衆 商議。孫乾曰、

「可速告急于曹操、……」

遂欲拔劍自刎。左右奪劍

勸曰、「公何輕生至此。袁紹

不納直言、後必

為曹操所擒。公既与曹公有

旧、何不棄暗投明、

」。只這兩句言語、点醒

許攸。<sup>三四</sup>

昭曰、「近聞劉豫州三顧先

生於草廬之中、幸得先生、以

為如魚得水、思欲席捲荆・襄。

今一旦以屬曹操、未審是何主

見。<sup>三四</sup>

毛本が、第一例と第三例では「曹公」を「曹操」に改め、第二例でのみ「曹公」を保存していることに注意したい。このことから、毛宗崗は発言者の立場を基準として、「曹公」の称を処理していることが推察されるからである。

第一例では孫乾、第二例は許攸、第三例は張昭が発言者である。そして、孫乾は劉備の臣、許攸は袁紹の臣であったが後に曹操に奔り、張昭は呉の臣であった。毛宗崗が発言者の政治的立場を意識しているのは確かであろう。すなわち、曹操に敵対する陣営の人間には「曹公」と言わせないのである（ただし、第一例の段階で、劉備と曹操は同盟関係にある。将来的な敵対を前提としているのであろうか）。

さて、「曹公」の称は、発話だけでなく、頻度は少ないながら叙述（地の文）にも現れる。二例ほど挙げておこう。

操視之、乃揚州刺史、沛國相人、姓劉、名叡、字元穎。本人起自合淝、創立州治、聚逃散之民、立學校、広屯田、興治教、深溝高壘、堅甲利兵、積盈倉之粟、作草店数千椽、貯魚膏數百斛、為守戰之具、久事曹公、多立功績。	操視之、乃揚州刺史、沛國相人、姓劉、名叡、字元穎。馥起自合淝、創立州治、聚逃散之民、立學校、広屯田、興治教、
---	--

操留曹仁・張遼屯合淝。操班師還許昌、群下衆官皆議立曹公為魏王、宮建王宮。群下一人高聲大叫、「不可」。	操留曹仁・張遼屯合淝。操班師回許昌、文武衆官皆議立曹操為魏王、尚書崔琰力言不可。 <sup>三六</sup>
--	--

断っておくが、毛本以前の『演義』において、「曹公」という呼称が支配的であったわけではない。「曹操」が中心であるのは間違いなく、「曹

公」はあくまで例外の範疇である。しかし、例外であるにしても、一般に悪玉であるとされる曹操に尊称が使われていたことも確かである。その由来は確かめておく必要がある。

## 乙 「曹公」の由来

「曹公」の由来として、まず最初に想起されるのは史書であろう。『三国志』・『通鑑』ともに「曹公」という語は頻出するからである。そして、『演義』が直截に史書に拠って、「曹公」という呼称を用いていると明確に指摘できる箇所がある。

### 『演義』

詔曰、「從操其便有三。夫曹公奉天子明詔、征伐天下、其宜從一也。袁紹雖強盛、我以少從之、必不以我為重、曹公雖弱、得我必喜、其宜從二也。曹公五霸之志、必積私怨、以明德于四海、其宜從三也。惟願將軍無疑焉」。

詔曰、「從操其便有三。夫曹公奉天子明詔、征伐天下、其宜從一也。紹強盛、我以少從之、必不以我為重、操雖弱、得我必喜、其宜從二也。曹公王霸之志、必積私怨、以明德於四海、其宜從三也。願將軍無疑焉」。

### 『通鑑』

詔曰、「此乃所以宜從也。夫曹公奉天子以令天下、其宜從一也。紹強盛、我以少衆從之、必不以我為重、曹公衆弱、其得我必喜、其宜從二也。夫有霸王之志者、固將積私怨以明德於四海、其宜從三也。願將軍無疑」。



(翻曰く、「此れ乃ち宜しく従うべき所以なり。夫れ曹公は天子を奉じて以て天下に令す、其れ宜しく従うべきの一なり。紹は強盛にして、我れ少衆を以て之に従うも、必ず我を以て重きと為さず、曹公 衆弱、其れ我を得れば必ず喜ぶ、其れ宜しく従うべきの二なり。夫れ霸王の志有るは、固より將に私怨を釈して以て徳を四海に明らかにせんとす、其れ宜しく従うべきの三なり。願わくは將軍 疑うこと無かれ」と。)

『演義』

公曰、「吾足知曹公待我甚厚、奈吾受劉將軍厚恩、誓以共死、不可背之。吾終不留此。必立以報曹公、然後方退」。

公曰、「吾固知曹公待吾甚厚、奈吾受劉皇叔厚恩、誓以共死、不可背之、吾終不留此。要必立以報曹公、然後去耳」。

『通鑑』

羽歎曰、「吾極知曹公待我厚、然吾受劉將軍恩、誓以共死、不可背之。吾終不留、要当立效以報曹公乃去耳」。

(羽 歎じて曰く、「吾れ曹公の我を待すること厚きを極知す、然れども吾れ劉將軍の恩を受け、誓うに共に死するを以てす、之に背くべからず。吾れ終に留まらざるも、要むるは当に效を立て以て曹公に報い乃ち去るべきのみ。)

毛本も「曹公」の称をそのまま用いていることが注目される。これは、二例とも発言者(賈詡・関羽)が曹操を称揚する意で発言していることと関係がある。この箇所においては、「曹公」とした方が、確かに違和感がない(仮に「曹操」に置き換えるとその不自然さが解る)。しかし、史書に「曹公」と記されるということだけが、『演義』に「曹

公」の称が残っている理由では有り得ない。なぜなら、『演義』における「曹公」のうち、その由来を史書に求められないものもまた多いからである。例えば、甲項で挙げた五例はすべて、史書にその典拠を求められない。

すなわち、『演義』における「曹公」の称の由来を、一貫して史書に求めることは不可能である。他の要素も確認しておくべきであろう。そのような視点で、『三国志平話』(以下、『平話』)や雑劇を見ると、そこには「曹公」という呼称が確かに存する。試みに、『平話』における曹操の呼称の分布を掲げる。

	曹 操		曹 公	
	叙 述	発 話	叙 述	発 話
卷上	三七	六	二	三
卷中	四九	五八	二九	二五
卷下	四四	一六	二四	四
合計	一三〇	八〇	五五	三二

無論、「曹操(単に「操」という場合も含む)」の称は「曹公」よりも多いが、圧倒的と言う程ではなく、「曹公」の称も充分多い。『平話』が史書から懸け離れるのは周知の事実であり、その『平話』に「曹公」の称が屢々見られるということは、所謂「民間伝承」系の三国故事においても「曹公」の称が浸透していたことを示す。別言すれば、民間伝承レヴェルにおける曹操の捉え方が、これまで認識されるように悪玉一辺倒だったのではなく、尊崇の念も少なからず存在していたのではないか。そして、『演義』における「曹公」は、このような状況を反映してい

るのである。だとすれば、毛宗崗が「曹操」を「曹操」に改める理由も理解できる。それは、「関某」を「関公」と改めるのと表裏一体の作業であり、彼はテキストから曹操に対する尊敬の念を抹消したかったのであろう。毛宗崗にとって、曹操とは「曹公」と呼ばれるに値する人物ではなかった。「読『三国志』法」の中で彼が述べる「是れ古今来の奸雄中第一の奇人」の語は、疑いなく否定的な意味を込めたものであっただろう。

ただし、毛本以前の『演義』が、テキスト全体にわたって曹操に対する尊崇の念を受け入れていたとも言えない。明らかに史書に拠る記述でありながら、「曹公」のみ「曹操」と改める部分も存在するからである。

### 『演義』

詔曰、「此易知耳。將軍雖善用兵、非操敵手。操軍雖新敗、必自為將斷其後路、以防追兵、雖精銳彼士亦銳、故知必敗。操必勝之後、未尽力而退、必國內有事。已破我軍之後、必輕車速回、縱留衆將斷後。衆將雖勇、亦非將軍之敵手、故雖用敗兵而載、必勝也。」	詔曰、「此易知耳。將軍雖善用兵、非曹操敵手。操軍雖敗、必有勁將為敵、以防追兵、我兵雖銳不能敵之也、故知必敗。夫操之急於退兵者、必因許都有事。既破我追軍之後、必輕車速回、不復為備。我乘其不備而更追之、故能勝也。」 <sup>〔四〕</sup>
--	--

### 『通鑑』

詔曰、「此易知耳。將軍雖善用兵、非曹公敵也。曹公軍新退、必自

斷後、故知必敗。曹公攻將軍、既無失策、力未盡而一朝引退、必國內有故也。已破將軍、必輕軍速進、留諸將斷後、諸將雖勇、非將軍敵、故雖用敗兵而戰必勝也。」<sup>〔四〕</sup>

（詔曰、「此れ知る易きのみ。將軍 善く兵を用うと雖も、曹公の敵に非ざるなり。曹公の軍 新たに退くも、必ず自ら後を断たん、故に必ず敗れしを知る。曹公 將軍を攻むるに、既に策を失する無く、力未だ尽きずして一朝にして引き退くは、必ず国内に故有らん。已に將軍を破れば、必ず軍を軽くして速進し、諸將を留めて後を断たんとす、諸將 勇なりと雖も、將軍の敵に非ず、故に敗兵を用うと雖も戦いしときは必ず勝たん。」と）

この事實は、『演義』テキストに、部分に拠って、曹操に対する尊崇の念を受け入れたり受け入れなかったりする「揺らぎ」があることを意味していよう。そして、想像を逞しくすれば、この「揺らぎ」は筆者の違いに端を発した、換言すれば『演義』には複数の作者が関わっていた可能性を示唆するのもかも知れないが、本論では措く。再び、曹操の呼称の問題に立ち返ろう。

### 第五節 曹操の呼称（二）——丞相

続いて、「丞相」の称について見てゆこう。

#### 甲 「丞相」の例

言うまでもなく、「丞相」は官名であり、曹操が丞相になったために、曹操の代名詞として機能するようになる。史実では曹操が丞相となった

のは建安十三年（二〇八）六月のことである。魏書・武帝紀に云う。

十三年春正月、公還鄴、作玄武池以肄舟師。漢隴三公官、置丞相・御史大夫。夏六月、以公為丞相。<sup>〔四三〕</sup>

（十三年春正月、公鄴に還り、玄武池を作りて以て舟師を肄なわす。漢三公の官を罷め、丞相・御史大夫を置く。夏六月、公を以て丞相と為す。）

一方、『演義』で、曹操が初めて丞相と称されるのは第十四回後においてである。

操既定大事、乃設一宴于後堂、聚衆謀士共議。操曰、「吾

今以尊王室、位至三公、皆賴汝等助之。吾所憂者、袁術・

袁紹耳。此二人已拋土地、未可凶之。劉備見屯徐州、已

領州事、近呂布在山東、被吾殺敗、今投劉備、養于小

沛。二人若互相起兵、乃吾心腹之大患也。公等有何

妙計可凶之。」許褚曰、「願借精兵五万、斬劉備・呂布之

頭、獻与丞相。」

操既定大事、乃設一宴後堂、聚衆謀士共議。曰、「

劉備 屯兵徐州、自

領州事、近呂布以兵

敗、投之備使居於小

沛。若二人同心引兵來犯、

乃心腹之患也。公等有何

妙計可凶之。」許褚曰、「願

請精兵五万、斬劉備・呂布之

頭、獻於丞相。」<sup>〔四四〕</sup>

この挿話冒頭の「大事」とは、曹操が猷帝を迎え、対立者を廃して許昌

へ遷都を敢行したことを指す。すなわち、史実に照らせば、建安元年（一九六）、すなわち、実際に丞相になる十三年も前の事なのであった。そして、この一例のみであるならば、単純な錯誤である可能性も棄てきれないが、これ以降、曹操が実際に丞相になる第三十九回後までにかけて、丞相という語は、曹操の呼称として頻出する。試みに、呉観明本第十四回から第三十八回までに出現する「丞相（曹丞相）」を数えると、百二十五例が見出せる。内、叙述での使用は三例のみで、残る百二十二例は発話においてであり、登場人物が曹操を呼ぶ（曹操との発話ばかりでなく、話題に出てくるだけの時も含む）際、「丞相」が一般的に用いられる様子が窺える。

以下、特徴的な例を幾つか拾っておこう。

呂布 拜謝。備与呂布、

吃罷早膳、布告回。玄德親

送出城外、布拜別而去。関・

張曰、「兄長何故不肯殺呂布」

玄德曰、「此乃曹丞相疑我与

呂布一処、故教

我兩家自相吞併、他却坐觀成

敗。此乃二雄不並立之計也。」<sup>〔四五〕</sup>

呂布再三拜謝。備留布、

飲酒、至晚方回。関・

張曰、「兄長何故不殺呂布」

玄德曰、「此曹孟徳恐我与

呂布同謀伐之、故用此計、使

我兩人自相吞併、彼却於中取

利。奈何為所使乎。」<sup>〔四五〕</sup>

関公 往数次、皆不放

參。関公往張遼家相探、欲言

其事、遼託疾不出。関公思

之曰、「此是曹丞相不容我去

関公一連去了数次、皆不得

見。乃往張遼家相探、欲言

其事、遼亦託疾不出。関公思

之曰、「此曹丞相不容我去

之意。大丈夫既能去而不動、  
非丈夫也」。即寫辭書一封、  
辭 曹丞相。

之意。我 去志已決、  
豈可復留」。即寫 書一封、  
辭謝曹操。〔四六〕

操大喜、使人 前去取徐  
庶母。不一日而來。丞相親自  
款待、而對徐母曰、……

操大喜、使人星夜前去取徐  
庶母。不一日取至、操  
厚待之、因謂之曰、……〔四七〕

毛宗崗は、「曹公」の場合と同じく、曹操に「丞相」の称を用いるこ  
とも否定的であった。管見の限り、呉観明本で叙述に「丞相」の称を  
用いる例が、引用した第三十六回前を含めて八つ見出せるが、毛本はテ  
キストをことごとく改変し、「丞相」を避ける。これは、「丞相」が「曹  
公」と同じく、ある程度の尊崇の念を含んだ称であることを逆説的に証  
明していよう。毛本が、諸葛亮を「諸葛丞相」と称する例は、そのまま  
受け入れていることが、その傍証となる。

却説建興三年春、諸葛丞相  
在于成都、事無大小、皆是親  
自從公決斷。兩川之民、忻樂  
太平、夜不閉戸、路不拾遺。

却説 諸葛丞相  
在於成都、事無大小、皆親  
自從公決斷。兩川之民、忻樂  
太平、夜不閉戸、路不拾遺。〔四八〕

更に言えば、引用した第十四回と第二十六回の例に現れた「曹丞相」  
の称にも注意したい。史書などにおいて、官職名を記す場合、姓名の前  
に記すことが多い。例えば『後漢書』孝獻帝紀には次のようにある。

辛亥、鎮東將軍曹操自領司隸校尉、錄尚書事。曹操殺侍中臺崇・尚  
書馮碩等。〔四九〕

〔建安元年六月〕辛亥、鎮東將軍曹操 自ら司隸校尉を領し、錄尚書事とな  
る。曹操 侍中臺崇・尚書馮碩等を殺す。

この例に倣えば、丞相職に就いた曹操は、「丞相曹操」或いは「丞相  
操」と称すると予想される。しかし、実のところ、史書において、その  
ような呼称は見出し得ない。ただ、次の例から、丞相であっても他の官  
職と同じく、官職名の次に名が記されることは確認される。『通鑑』卷  
三十三に云う。

有詔問丞相・大司空、「定陶共王太后宜當何居」。丞相孔光素聞傳太  
后為人剛暴、長於權謀、自帝在襁褓、而養長教道至成人、帝之立又有  
力。〔五〇〕

〔詔有りて丞相・大司空に問う、「定陶共王太后 宜しく當に何くに居らしむ  
べし」と。丞相孔光 素より傳太后の為人 剛暴にして、權謀に長じ、帝  
の襁褓に在る自り、而して養長教道して成人に至り、帝の立つに又た力有る  
を聞けり。〕

つまり、「曹丞相」という呼称は、史書に限れば不自然なのである。  
それが証拠に、正史・『通鑑』ともに用例はない。

ならば、「曹丞相」の称は、何処に由来するのであろうか。また、先  
に指摘したとおり、『演義』における「丞相」の出現自体が、史実より  
遙かに先んずる。その所以も併せて考えてみたい。

## 乙 「丞相」の由来

結論から先に言ってしまうと、「曹公」と同じく、『平話』や雑劇など先行テキストに由来することは、ほぼ間違いない。

まず、『平話』を例に採ろう。前節では敢えて触れなかったが、『平話』の曹操は、「丞相」「曹丞相」或いは「曹相」と呼ばれることがある。一覽にすれば、次のようになる。

	曹丞相		丞相		曹相	
	叙述	発話	叙述	発話	叙述	発話
卷上	二	〇	九	二	〇	二
卷中	二	一	九	七	二三	一〇
卷下	〇	〇	三	三	一二	二
合計	四	一	二二	一二	三五	一四

前節で述べた「曹公」に比すると、やや少ないような印象を受けるが、この三つを一つの称と考えれば、大差はない。

参考までに、曹操を「丞相」と呼ぶ最初の例を引いておく。

曹操因催糧、就催青州袁譚去、数日、前至平原県、見玄德、礼畢、操曰、「諸侯都在虎牢関、三將軍若何」。玄德不語、張飛曰、「看漢天下無主、殺太師賊臣、再扶漢室」。先主方許。操曰、「冀王袁紹為元帥、三將軍可以將書与袁紹去」。丞相即便修書付与先主。曹公別了、一去青州。<sup>〔五二〕</sup>

(曹操は兵糧を調達するために、青州の袁譚の処へ催促に赴く。数日して平原県にさしかかったところで、玄德に会って礼が終わると、曹操は言った。「諸

侯は皆、虎牢関に集結しました。御三方には如何されますか」。玄德は語らず、張飛が言う。「見たところ漢の天下には主がいなくて有様だ。太師って称している賊臣を殺して、漢室を助けようじゃないか」。先主はようやく出陣を承諾した。曹操が言う。「冀王の袁紹殿が元帥となっておられるゆえ、御三方にはこの書を持って袁紹殿の処へ行って下され」。丞相はすぐさま書をしたためて先主に与える。そして曹公は劉備たちと別れ、一路青州へと向かった。)

文脈から推察して、この「丞相」が曹操を指すのは明白であろう。これは、所謂「虎牢関三戦呂布」直前の場面であり、『平話』では中平五年(一八八)のこととされる。敢えて史実と照合すれば、初平元年(一九〇)であるべきだが、『平話』の年号について、正確さを求めても無意味であろう。いずれにせよ、史書はおろか『演義』よりも遙かに早い段階である。

ただし、「丞相」の称がいきなり現れる『演義』と異なり、『平話』には伏線らしきものがある。董卓の専横に悩んだ献帝は、諸侯に詔勅を出して董卓を討たんと謀る。その時、曹操が献帝に謁見するのだが、その際、献帝は次のように約束する。

有一人至階下、山呼万歳罷、帝問、「卿姓名」。某姓曹操、字孟徳」。献帝観這漢、可敵二十個董卓、今漢天下無計奈何、須用此人。献帝賜賞曹操、諺目使、「若大事畢、加做天下都元帥、你在意勾当。若卿獲功者、加卿為左丞相」。<sup>〔五三〕</sup>

(そこに一人が階下に至り、万歳を叫び終わる。帝はたずねた。「そこの姓名は何と申す」。「それがしは、姓を曹、(名を)操、字を孟徳と申します」。献帝がこの男を見るに、董卓二十人にも匹敵する人材であり、今、漢の天下が

如何ともし難い状況である以上、この者を用いるべきだと思われた。献帝は大いに喜んで曹操に恩賞を賜り、眼差しを注いで言った。「もしこの大事を成し遂げたならば、天下都元帥に任じよう。そなたは遺漏なきよう事を進めよ。もし功績があったならば、さらに左丞相の職を与えよう。」

右の挿話が、一刻も早く曹操を丞相としようとする意識、すなわち、「曹操＝丞相」と見る意識の結果であることは容易に想像できる。

断っておくと、『平話』で丞相と称される人物に丁建陽と王允がいる。しかし、彼らは巻上でその役割を終え退場する。それ以後は、「丞相」と言えば曹操を指す。

むしろ注目すべきは、『演義』の読者が「丞相」と聞いて即座に想起するであろう諸葛亮が、『平話』において決して「丞相」と称されないことである。『平話』の諸葛亮は、「諸葛」「孔明」「軍師」「武侯」等と称されることがほとんどなのである。

この現象は雑劇とも共通する。現存する三国故事雑劇は二十一種あるとされるが、編者（臧懋循）に拠るテキスト改変が甚だしい『元曲選』にのみ収める「隔江闘智」を除いた二十種中、曹操が現れる（名のみの登場をも含む）のは以下の十六種である。

（登場人物として現れる作品）

諸葛亮博望燒屯／劉玄德独赴襄陽会／○虎牢関三戦呂布／  
関雲長千里独行／関雲長单刀劈四寇／○張翼徳大破杏林莊／  
○張翼徳单戦呂布／張翼徳三出小沛／莽張飛大鬧石榴園／  
曹操夜走陳倉路／陽平関五馬破曹

（名のみの登場）

関大王独赴单刀会／○関張双赴西蜀夢／劉玄德醉走黄鶴楼／  
○走鳳離龐掠四郡／○周公瑾得志娶小喬

○を付したのは曹操が「丞相」と称されない作品であり、十六種の中、六種がそうであることが判る。その六種中、半数は名のみの登場、すなわち話題になる度数そのものが少ない作品である。また、実際に登場しながら「丞相」と称されない三作品は、その理由の推察がつく。

「張翼徳大破杏林莊」は、劉関張三兄弟が黄巾賊首領の張角を討つ話であり、試みに『演義』と比せば、第一回から第二回の挿話に当たろう。また、「虎牢関三戦呂布」「張翼徳单戦呂布」は題目からも察せられるように連続した挿話であり、その内容は『演義』第五回に記される「虎牢関の戦い」に近い。つまり、これらは、三国故事全般の序盤に位置づけられる作品なのであり、この段階で曹操を「丞相」と呼ぶには、流石に無理があると考えられたのではないか（もっとも、『平話』の曹操は、「虎牢関」ではすでに丞相と称されているが）。

ともかく、雑劇中でも、曹操を「丞相」と呼ぶことが広範に行われていたと判断して良からう。翻って、雑劇に現れる諸葛亮を見ると、「丞相」とされることはほとんどない。唯一の例外が、「周公瑾得志娶小喬」である。その第四折冒頭に云う。

「外扮諸葛瑾領卒子上」「諸葛瑾云」直正堅心漢（汗）青、於民潤  
国掌權衡。三分天下民帰順、保助吳邦享太平。小官諸葛瑾是也。輔佐  
江東吳王麾下、官拜宛陵侯之職。昆仲三人、弟乃諸葛亮、佐於劉玄德  
麾下、官封丞相之職、次弟諸葛誕、佐於曹操麾下、官封司空之職。（五三）

〔外が諸葛瑾に扮し従卒を連れて登場する〕「諸葛瑾が言う」ひたすら一心に文書を書き上げ、民草と国を潤すために公正な政を行う。三分された天下にそれぞれ民は帰順し、呉国を助けて太平を享受する。小官は諸葛瑾であります。江東は呉王の麾下にあって補佐し、官は宛陵侯を拜しております。兄弟は三人おりまして、次弟は諸葛亮、劉玄徳の麾下にあって補佐し、官は丞相に任じられており、末弟諸葛誕は曹操麾下にあって補佐し、官は司空に任じられております。〕

ここで、諸葛亮が丞相の職にあることに言及されるのだが、この後、諸葛亮が「丞相」と呼ばれることはない。そもそも、この劇で諸葛亮は登場せず、名が現れるのも此処だけなのであった。結局、現存する雑劇にあって、諸葛亮が「丞相」と呼ばれることは全くないと言って良く、「丞相」と言えば、ほぼ曹操のことである。

整理すれば、次のように言えるであろう。『演義』以前、「丞相」の称には曹操の別名という側面があり、『演義』は、そのような状況から確実に影響を受けているのである。

### 丙 呼称の拡大

曹操の「丞相」に限らず、三国志世界において、官職名や封侯名が、特定の人物の別名として機能することは多い。代表的なものについて挙げれば以下のようなようになろう。

劉備 先主・皇叔・劉豫州  
張飛 張車騎  
諸葛亮 軍師・武侯

呂布 温侯

ここに挙げたものは皆、彼らがそう呼ばれるようになった契機が比較的はっきりしている。例えば、正史は劉備の伝を「先主伝」とし、「劉豫州」は劉備が豫州牧になったこと（一九六年<sup>〔五四〕</sup>）に、「張車騎」は張飛が車騎將軍に任ぜられた（二二一年<sup>〔五五〕</sup>）ことに因む。また、諸葛亮は、軍師中郎將（二〇八・九年頃か）から軍師將軍（二二一年）となっており、「武侯」は彼の死（三三四年）後に贈られた諡号である<sup>〔五六〕</sup>。しかし、これらの呼称が雑劇や『平話』に用いられる際は、曹操における「丞相」と同様、これらの史実は意識されない。生前の劉備を「先主」、諸葛亮を「武侯」と呼ぶ例は枚挙に暇がない。また、張飛の「張車騎」についてやや詳しく述べておくと、「莽張飛大鬧石榴園」雑劇第三折で、正末は次のように唱う。

【尾声】那関雲長武藝高、張車騎情性拗。他殺的你神嚎鬼哭悲風吼、你準備着乱攪東西望風也兒走。<sup>〔五七〕</sup>

【尾声】彼の関雲長は武藝優れ、張車騎は本性賢し。彼の汝を襲い来るは、鬼神の叫び哭き、悲風の吼える如くんば、汝、急ぎ風をまきて逃げるに備えよ

この雑劇は、劉備が曹操の庇護を受けていた時代、史実で言えば建安三年（一九八）から翌四年（一九九）、『演義』ならば第二十・二十一回到当たる。先述の通り、史実において、張飛が車騎將軍となるのは蜀の章武元年（二二二）であるから、本来、この挿話の段階で「張車騎」と称されるはずがない。しかし、雑劇はそんな史実を超越してしまう。「張

車騎」という称は、明白に張飛の別名として浸透・定着していたのである（この現象を、仮に「呼称の拡大」と言っておく）。

対して、強く史実を意識する『演義』において、右の如き呼称の拡大は餘り見られない。管見の限り、「張車騎」の称は絶無であるし、「先主」が劉備の、「武侯」が諸葛亮の生前に叙述で用いられることもない<sup>〔五八〕</sup>。ただし、全く無いわけではない。何より、ここまで述べてきた曹操の「丞相」がそうであり、別の例として呂布の「温侯」が挙げられる。

第一章で述べた通り、『演義』読者の想像を遙かに越えて、呂布に纏わる伝説が存在する。そして、雑劇・『平話』などで、呂布が「呂温侯」と記されることがしばしばあるのは、諱を避ける、すなわち尊崇の念の現れであろう。同時に、先述したような呼称の拡大が、「温侯」の称についても見られるのである。

呂布が温侯に封じられたのは、史書に拠れば、彼が董卓を討った初平三年（一九二）のことである。魏書・呂布伝に云う。

布遂許之、手刃刺卓。語在卓伝。允以呂布為奮武將軍。假節、饑比三司、進封温侯、共秉朝政。<sup>〔五九〕</sup>

（布 遂に之を許し、手づから刃もて卓を刺す。語は卓伝に在り。允 呂布を以て奮威將軍と為す。節を假りて、饑は三司に比し、進めて温侯に封じ、共に朝政を秉る。）

しかし、雑劇・『平話』では、右のような史実を超越し、未だ董卓の配下であった呂布を温侯と呼ぶことがある。「虎牢関三戦呂布」雑劇第一折に云う。

「曹操云」則今日辞別了元帥、便索長行。小校收拾行裝、至青州催運糧草走一遭去。

忙伝将令莫停留、輕弓短箭統戈矛。

積草屯糧人馬壯、恁時方破呂温侯。<sup>〔六〇〕</sup>

（曹操が言う）それでは本日は元帥にお暇して、長旅に赴かねばなりません。従者よ、荷物をまとめよ。青州に行き糧草を一渡り集めてくるようにしましょう。

忙伝 将令 停留すること莫く、輕弓 短箭 戈矛を統ぶ。

積草 屯糧 人馬 壯にして、恁時 方に呂温侯を破らん。）

この時の呂布が、董卓の部下であることは、同一折に呂布が現れたときの台詞に明らかである。

「外扮呂布同八健将楊奉・侯成・高順・李肅・李儒・何蒙・陳廉・韓先領卒子上」「呂布云」画戟金冠戰馬奔、征袍鎧甲帶獅蛮。天下万夫難敵勇、端的是英雄独占虎牢関。某姓呂名布字奉先、乃九原人也。自從董卓為父之後、俺父子每聚集下雄兵戰将、馬草軍糧、更兼某之英勇、觀漢国有如兒戲、威鎮於虎牢関下。<sup>〔六一〕</sup>

（外が呂布に扮し、八健将の楊奉・侯成・高順・李肅・李儒・何蒙・陳廉・韓先とともに従卒を率いて登場する）「呂布が言う」画戟に金冠、戰馬が奔り、征袍・鎧甲に獅蛮の帶締める。何人たりとも我が勇の敵でなく、これこそ英雄独り虎牢関を鎮めるといふもの。それがし、姓を呂、名を布、字を奉先と申し、九原の出なり。董卓を我が父と拝してより、父子二人、常に雄兵勇将、軍馬糧草を麾下に集め、加えて我が勇があれば、漢の軍勢を見るときも兇戯に等しい。我が武威でもって虎牢関を鎮めてくれようぞ。）



すなわち、この雜劇において「呼称の拡大」が起きていることは確実である。

次いで、『演義』を閲してみよう。すると、第五回に次のような記述が見える。

董卓自尊大權之後、……温侯呂布挺身出曰、「父親勿慮。吾觀関外衆多諸侯、如草芥。親提虎狼之師、尽斬其首、懸于都門、呂布之願也」

董卓自尊大權之後、……温侯呂布挺身出曰、「父親勿慮。関外 諸侯、布視之如草芥。願提虎狼之師、尽斬其首、懸于都門」

この部分に続く第五回後の標題が、「虎牢関三戦呂布」であるから、時代設定は先に示した雜劇とほぼ一致する。すなわち、史実では温侯となっていない呂布を温侯と呼ぶのであり、『演義』にも「呼称の拡大」が存する例と考えられる。ただし、「温侯呂布」と譯まで記すこの語を、尊称と扱ってよいかは微妙であろう。「曹丞相」ほど重視すべきではないかも知れない。

ともあれ、『演義』において、劉備や張飛、諸葛亮から尊称が消え、曹操については残っている。この現象は、『演義』が劉備らに如何に注意を払っていたかという事を、逆説的に証明する。それは、曹操の扱いが比較的軽いことを示すわけだが、尊称が残っていることは厳然たる事実である。すなわち、「丞相」の称は、毛本以前の『演義』テキストが、曹操を否定することにそれほど固執していない証拠と指摘し得よう。

## 第六節 曹操の呼称(三) — 魏王

最後に「魏王」という呼称について考えてみたい。

### 甲 「魏王」の例

曹操が魏王に上ったのは史実である。魏書武帝紀に云う。

二十一年春二月、公還鄴。三月壬寅、公親耕籍田。夏五月、天子進公爵為魏王。<sup>〔六三〕</sup>

(建安)二十一年春二月、公鄴に還る。三月壬寅、公親しく籍田を耕す。夏五月、天子 公の爵を進めて魏王と為す。)

これに倣って、『演義』でも第六十八回後にあつて、建安二十一年五月、曹操が魏王に進んだことを記す。そして、この後、曹操を「魏王」と称する例が多い。特徴的なのは、「曹公」「丞相」と比べ、叙述で使われることが多いことである。例えば、「丞相」の称が初めて現れる第十四回から曹操が死ぬ第七十八回<sup>〔六四〕</sup>までで、それが叙述で用いられるのは八例である。対して、「魏王」の称が初出する第六十七回<sup>〔六五〕</sup>から第七十八回までで、「魏王」が叙述に使用されるのは十四例を数える。ここでは、三例を引用しておく。

洪知其消息、星夜前到許昌、奏知魏王。曹操聞知蜀兵來取漢中、愕然大驚、急聚文武商議發兵救漢中。

洪 星夜前到許昌、稟知曹操。 操 大驚、急聚文武商議發兵救漢中。<sup>〔六六〕</sup>

郃聞知大驚、遂引敗

兵到漢水箭營、二將合兵一処。

杜襲曰、「將軍且暫管夏侯妙

才都督印心、以安民心。」

令人飛報魏王。操聞淵死、

放聲大哭。……操深恨黃忠、

遂親統大軍、來定軍山与夏

侯淵報讐、令徐晃作先鋒、行

到漢水、張郃・杜襲接著曹操。

二將奏曰、「今定軍山已失、

某等恐失其利、將米倉山糧

草移于北山寨中屯積、然後進

兵」。魏王依允。

郃 大驚、遂与杜襲引敗

兵到漢水箭營、

面令人飛報曹操。操聞淵死、

放聲大哭。……操深恨黃忠、

遂親統率大軍、來定軍山与夏

侯淵報讐、令徐晃作先鋒、行

到漢水、張郃・杜襲接著曹操。

二將曰、「今定軍山已失、

可將米倉山糧

草移於北山寨中屯積、然後進

兵」。曹操依允。

却說徐晃正坐於中軍帳上、

忽報魏王使至。晃接入問之。

使曰、「今魏王引兵已過雒陽、

令將軍急戰關公、以解樊城之

困」。

却說徐晃正坐 帳中、

忽報魏王使至。晃接入問之、

使曰、「今魏王引兵已過雒陽、

令將軍急戰關公、以解樊城之

困」。

第三例目では、毛本もまた、「魏王」の称を用いるが、基本的には「曹公」「丞相」と同じく「魏王」も、毛本の忌避するところであると言えよう。

このようなことから、「魏王」の称が「曹公」「丞相」と同じく尊称

に類するものであることは容易に推察される。それでは、「曹公」「丞相」と同じく、その由来について考えてみることにしよう。

## 乙 「魏王」の由来

「魏王」の由来を考えると、「曹公」「丞相」と決定的に異なる点があることに気付く。「曹公」「丞相」が『平話』・雑劇、すなわち演義に先行する三国故事テキストで常用される言い回しであったのに対し、「魏王」は曹操の別称として用いられることがないのである。

管見の限り、雑劇において「魏王」の語が確認できるのは一例のみである。『曹操夜走陳倉路』第一節に云う。

「冲末曹操領卒子上」「曹操云」……某姓曹名操字孟德、沛国譙郡人也。自出仕于以来、与漢朝建立功勳、加某為丞相之職、掌握軍國從事。後進爵為魏王、加某九錫。天下諸侯藩鎮者、無不瞻仰。

〔冲末の曹操が從卒を率いて登場する〕「曹操が云う」……それがし、姓を曹、名を操、字を孟徳と申し、沛国譙郡の生まれである。朝廷に出仕してよ、漢朝のために勲功を立て、朝廷はそれがしを丞相の職に任命し、軍と國の大事を司ることに相成った。後に爵位は魏王へと進み、九錫を賜った。天下の諸侯軍閥で、それがしを仰ぎ見ない者はない。

また、『平話』においても、「魏王」の語はほとんど見えない。荊州を平らげ長江へ向かった曹操が孫権へ服従を迫る手紙を届けるのだが、その末尾の署名に、

漢上將軍 兼馬步都元帥 正授領省大魏王 曹操

と記すのが、「魏王」が『平話』に現れる唯一の例である。

斯くの如く、『演義』の「魏王」が雜劇・『平話』に由来しないことはほぼ確実である。ならば、どこにその淵源を求めるべきであろうか。

最も可能性が高そうなのは、史書、就中『通鑑』系の史書である。正史の場合、魏王に上った曹操を「王」と称する例は枚挙に暇がないが、表註を除いた本文で曹操の別称として「魏王」を用いる例はない。一方、『通鑑』においては「魏王」という称は頻出する。一例を挙げよう。

春、正月、魏王操軍居巢、孫權保濡須、二月、操進攻之。<sup>〔七〕</sup>

(春、正月、魏王操 居巢に軍し、孫權 濡須を保つ、二月、操 進みて之を攻む。)

ただし、「魏王」のみでなく、「魏王操」という形である。つまり、史書もまた、『演義』の直接的な淵源とは考え難いのであった。

以上のようなことから、「魏王」を曹操の別称として用いることは、『演義』独自の現象と捉えるべきであろう。とすれば、論ずるべきは、『演義』が何故、そのようなことをしたのかということである。

## 第七節 鼎立の構造

ここで我々は曹操以外の人物の呼称にも、目を向けるべきであろう。すなわち、孫權と劉備である。

まず、孫權について検討しよう。

劉備と曹操、諸葛亮と司馬懿、ひいては蜀と魏という対立構造が餘りにも判り易いためか、呉という国は、どっちつかずの脇役と捉えられることが多い。本章冒頭に引いた吉川幸次郎の言が、その事実を象徴する。しかし、『演義』テキストを詳細に見てゆけば、曹操と同じく、孫權にも敬意が払われていることが判る。

例えば、『演義』は孫權を屢々「呉侯」と称する。

却説有人 報知呉侯。呉侯

会文武商議。權曰、「当

初吾欲与玄德一同収川。誰思

今日背了吾、自去取之。当復

如何」。顧雍進曰、「劉備分

兵遠涉山險而去、未易往還。

何不差一軍、先截川口、断絶

劉備歸路、後尽起東吳之兵、

一鼓而下、可得荆・襄矣

」。權曰、「此

計大妙、便要起兵」。

早 有細作報入東吳、呉侯  
孫權会文武商議。

顧雍進曰、「劉備分

兵遠涉出險而去、未易往還。

何不差一軍、先截川口、断

其 歸路、後尽起東吳之兵、

一鼓而下、 荆・襄 。此

不可失之機會也」。權曰、「此

計大妙 」。〔七三〕

玄德 喜、遂作書具礼、令

伊籍入呉、先到荊州、説与雲

長、可撥江夏・長沙・桂陽以

東属孫權、然後入呉。到秣稜、

来見呉侯、先通了姓名。乃召

伊籍入。

玄德大喜、遂作書具礼、令

伊籍 先到荊州、知会雲

長

。然後入呉、到秣稜、

来見孫權、先通了姓名、權召

籍入。〔七三〕

権依其言、令衆謀士遠接、

権依其言、令衆謀士接、

滿寵入城相見呉侯。礼畢、権

滿寵入城相見。礼畢、権

以賓礼待寵。

以賓礼待寵。

曹操の呼称ほどではないが、毛本が「呉侯」という称を忌避することは明白であり、「呉侯」が尊称と認識されうる証拠となろう。

さて、この「呉侯」であるが、史書を閲する限り、孫権が封じられたことはないようである。しかし、権の兄、策が呉侯に封じられたことは史実である。『通鑑』卷六十二、建安三年（一九八）の条を引いておく。

孫策遣其正議校尉張紘獻方物、曹操欲撫納之、表策為討逆將軍、封  
呉侯。<sup>〔七五〕</sup>

（建安三年）孫策 其の正議校尉張紘を遣りて方物を獻せしめ、曹操 之を撫納せんと欲し、表して策を討逆將軍と為し、呉侯に封す。）

『演義』は孫策の封侯名であった「呉侯」を、孫権の別称として用いるわけである。用いられた理由は単純な錯誤かも知れないが、孫権を「呉侯」と称する用例自体は『演義』に始まるわけではないことは指摘しておくべきであろう。『平話』にこそ見られないが、雜劇には孫権を「呉侯」と称するものが存在するのである。

雜劇において孫権は餘り登場する人物ではなく、第五節乙項で言及した雜劇二十種の中、彼が登場するのは「周公瑾得志娶小喬」だけである（名のみでの登場を除く）。その第一折に云う。

〔外扮喬公淨領家僮上〕〔喬公云〕……老父姓喬名玄字仲華。江東呉

國人也。……夫人劉氏、所生二女、皆有國色、名号曰、大喬・小喬。

深通文墨、頗看詩書、聰明智慧。今有呉侯下財治礼、娶大喬為妻。老

夫甚喜。……<sup>〔七六〕</sup>

〔外が喬公に扮し淨の家僮を連れて登場する〕〔喬公が言う〕……やつがれ

は姓を喬、名を玄、字を仲華と申します。江東は呉國の生まれであります。

……妻の劉氏は、二人の娘を産み、ともに絶世の容色で、名づけて、大喬・

小喬と申します。深く文章に通じ、なかなか経書を修め、実に聡明でござ

います。只今、呉侯には結納をお贈り下さり礼儀もお尽くしになって、大喬

を正夫人として娶られる由。やつがれの大いに喜ぶとあります。……

史書に拠れば、大喬を妻としたのは孫策であるから<sup>〔七五〕</sup>、この雜劇は、

表面的に二つの錯誤（孫権を「呉侯」と称する、孫権が大喬を娶る）を

犯していることになる。ただし、この雜劇は、孫策と孫権は同一の人物

だと捉えていたかも知れず、単純に錯誤であると断ずるのは難しい。と

もあれ、「周公瑾得志娶小喬」雜劇は孫権を「呉侯」と称するのであり、

『演義』と共通する。

『演義』に立ち戻ると、叙述が孫権を「呉侯」と称するのは二十四例

を数える。そして、第八十二回前において孫権が呉王に封じられるや、

彼の称もまた「呉王」へと転ずる。

却説孫桓令人求救于呉王。

却説孫桓令人求救於呉王。

呉王大驚、即召文武商議曰、

呉王大驚、即召文武商議曰、

「今孫桓受困于夷陵、朱然大

「今孫桓受困於彝陵、朱然大

敗于江中、蜀兵勢大、如之奈

敗於江中、蜀兵勢大、如之奈

何」。

何」。

却説吳王見張温入蜀未還、  
乃聚文武商議。忽近臣奏曰、  
「蜀遣鄧芝同張温入国答礼」。  
權召入。

却説吳王見張温入蜀未還、  
乃聚文武商議。忽近臣奏曰、  
「蜀遣鄧芝同張温入国答礼」。  
權召入。

ここに挙げた二例では、毛本も「吳王」の称を用いている。管見の限り、毛本が「吳王」を避ける例はあるものの、「吳侯」ほど顕著などは言えない。その理由を断ずることは難しいが、以下のような推察が可能であろう。

すなわち、毛本にとって、この段階における「王」という呼称は尊称ではなかったのではないか。已に『演義』第八十回において、曹丕が漢の社稷を奪って帝位に就き、劉備もまた、その漢の社稷を継いだと称して皇帝となっている。つまり、孫権が吳王となった段階で、一人の「帝」が出現しているのであり、「王」という称は、相対的に尊称としての機能が弱いと考えられる。その推察を裏付ける一つの証拠として、以下の記述が挙げられよう。

孔明 将書付費禕去了。禕  
持書逕到建業、入見吳主孫權、  
呈上孔明之書。權拆視之、書  
曰、……吳主覽畢、大喜、  
乃召費禕曰、「朕久欲興兵、  
未得会合丞相。……」

孔明即修書付費禕去了。禕  
持書逕到建業、入見吳主孫權、  
呈上孔明之書。權拆視之、書  
略曰、……權 覽畢、大喜、  
乃謂費禕曰、「朕久欲興兵、  
未得会合孔明。……」

この段階の孫権は皇帝となっているのだが、毛本は「吳主」を避け、諱を記す。皇帝となって、蜀と魏の元首（ここでは、劉禪と曹叡）と対等になったはずの孫権を貶める必要が、毛本にとって生じたのである。別言すれば、毛本以前の『演義』は、孫権を蜀・魏の皇帝と対等に扱うのである（この問題については第五章で詳述）。翻って曹操に立ち戻れば、彼に対する「魏王」も同じような役割を果たしていよう。すなわち、ある人物と曹操を対等にするからこそ、「魏王」の称が用いられた理由であった。

その人物とは、言うまでもなく劉備である。劉備にも、『平話』・雜劇、そして『演義』を通して、様々な別称があることは第五節丙項で触れた。また、そこで挙げたものは、この三者に共通してみられたものである。

ただし、『演義』で用いられる別称がすべて先行テキストに見えるわけではなく、『演義』にしか見られないものとして、「漢中王」の称がある。用例を示す。

細作人探聽 曹操結連東吳  
欲取荊州、即飛報入蜀。漢中  
王忙請孔明商議。孔明曰、「某  
已料曹操必有此謀、比及借債  
東吳起兵。吳地謀士極多、  
必教操令曹仁先興兵矣」。漢  
中王曰、「似此如之奈何」。

細作人探聽得曹操結連東吳、  
欲取荊州、即飛報入蜀。漢中  
王忙請孔明商議。孔明曰、「某  
已料曹操必有此謀、  
。然吳中謀士極多、  
必教操令曹仁先興兵矣」。漢  
中王曰、「似此如之奈何」。

却説漢中王  
昏倒於地。衆文武急救、半晌  
方醒、扶入内室。  
却説漢中王聞関公父子遇害、  
哭倒於地。衆文武急救、半晌  
方醒、扶入内殿。<sup>〔八二〕</sup>

これまでの議論に従えば、毛本は「漢中王」の称は改変しないと考えられるが、果たして、叙述で用いられる「漢中王」を、毛本が改変することはない。毛本が、劉備を称揚し、曹操・孫権を貶める意識はテキスト細部にまで浸透しているのである<sup>〔八三〕</sup>。

対して毛本以前の『演義』は、劉備を「漢中王」と称すると同時に、曹操を「魏王」と、孫権を「呉王（呉侯）」と称する。少なくとも呼称のレヴェルに置いて、劉備は突出した存在ではなく、劉備・曹操・孫権の三者は対等に扱われている。譬えるならば、同一平面に三者をそれぞれ頂点とする正三角形が描かれているのである。そして、その構図は三国鼎立を描こうとした行為にはかなるまい。

ただし、そのような『演義』の意図は多くの受容者に違和感を覚えさせるものでもあったであろう。第一節で引いた『東坡志林』に顯著なように、三国故事の受容者は、屢々その物語の中に、劉備と曹操、諸葛亮と司馬懿など、所謂「善と悪」という二項対立を見出すからであり、そちらにこそ三国故事の本質があるかのように受けとめるからである。毛宗崗によるテキスト改変は、またその毛本を読んだであろう魯迅や郭沫若の言は、そのような事情を反映していよう。

裏を返せば、受容者に違和感を強いてまで、『演義』は劉備（蜀）・曹操（魏）・孫権（呉）を対等に置く、「鼎立」という構造に拘ったとも言えよう。

ここで、当然の疑問に突き当たる。何故、そうまでして『演義』は「鼎

立」に拘ったのか。次章では、この問題について論じてみたい。

〔註〕

- 〔一〕吉川幸次郎『三国志実録』（ちくま学芸文庫 一九九七年三月）八頁。
- 〔二〕『魯迅全集』第三卷（人民文学出版社 一九八一年）五〇二頁。
- 〔三〕『郭沫若全集』文学編・第八卷（人民文学出版社 一九八七年一月）四頁。
- 〔四〕井波律子『三国志演義』（岩波新書 一九九四年八月）一一頁―二七頁。
- 〔五〕『三国志』第一冊／巻一／三頁。
- 〔六〕『三国志』第一冊／巻一／五五頁。
- 〔七〕『世説新語箋疏（修訂本）』（上海古籍出版社 一九九三年二月）下冊／巻一四／六〇五頁。
- 〔八〕註〔七〕所掲『世説新語箋疏（修訂本）』下冊／巻二七／八五三頁。
- 〔九〕『語林』『小説』は已に逸書であるが、『太平御覧』（中華書局影印本 一九六〇年二月）第三冊／巻七〇七（服用九）／被／九葉a所引の『語林』及び『太平広記』（中華書局排印本 一九六一年九月）第四冊／巻一九〇／雜講智（魏太祖）／一四二五―一四二六頁所引の『小説』に『世説新語』と類似した記事を収める。
- 〔一〇〕註〔九〕所掲『太平御覧』第四冊／巻七七九／奉使三（奉使下）／四葉b所引の『語林』に同様の説話が見える。
- 〔一一〕『貞観政要』（『四部叢刊統編』所収）巻五／誠信第一七／三四葉a。
- 〔一二〕『東坡志林』（『学津討源』第一五集／第四冊）巻一／懷古／七葉ab。
- 〔一三〕金文京『三国志演義の世界』（東方選書 一九九三年十月）七六頁および「俄」李福清著『三国演義与民間文学伝統』（王元化主編『海外漢学叢書』所収 上海古籍出版社 一九九七年七月）四二頁などを参照。

- [二四] 『全唐詩』(中華書局排印本 一九六〇年四月) 第六冊/卷二〇二/二〇九頁。
- [二五] 丁錫根編著。人民文學出版社、一九九六年七月。中冊/八八六—九三三頁參照。
- [二六] 嘉靖本『三國志通俗演義序』四葉b—五葉a。
- [二七] 毛本『說』『三國志』法』二—三頁。
- [二八] 吳觀明本第六十回後/一二葉b。
- [二九] 吳觀明本第六十回前/一葉a。
- [三〇] 吳觀明本第六十回後/九葉b—一〇葉a。
- [三一] 吳觀明本第三十一回後/一一葉a b。
- [三二] 吳觀明本第三十一回後/一一葉b。
- [三三] 徐中偉「不可等量齊觀的兩部『三國』——嘉靖本与毛本『擁劉反曹』之不同」(『文学遺產』一九八三年第二期 八八—一〇〇頁)。以下、徐中偉論文と称す。
- [三四] 嘉靖本卷一/一三葉a b。毛本第一回/一〇頁。
- [三五] 注「三三」所掲徐中偉論文九五頁。
- [三六] 毛本「凡例」一頁。
- [三七] 注「三三」所掲徐中偉論文九五—九六頁參照。
- [三八] ただし、毛本と嘉靖本という比較に、必然性はないと思われる。毛本の成立過程については、中川論『三國志演義』版本の研究』(汲古書院 一九九八年十二月) 一五—二七頁參照。
- [三九] 『三國演義』の発展のあと』(『小川環樹著作集』第四卷「筑摩書房 一九九七年四月」三五—五四頁所収) 四四頁
- [四〇] 『三國志演義的演化』(鄭振鐸『中国文学論集』「港青出版社 一九七九年八月」二五—三九頁所収) 二五六頁。
- [四一] 吳觀明本第二十回前/一葉a。毛本第二十回/二四八頁。
- [四二] 吳觀明本第十八回後/八葉a。毛本第十八回/二三四頁。
- [四三] 吳觀明本第三十回前/六葉a b。毛本第三十回/三八四—三八五頁。
- [四四] 吳觀明本第四十三回前/三葉a。毛本第四十三回/五五四頁。
- [四五] 吳觀明本第四十八回前/四葉a。毛本第四十八回/六二二頁。
- [四六] 吳觀明本第六十八回前/六葉b。毛本第六十八回/八九〇頁。
- [四七] 吳觀明本第二十三回前/一葉b—二葉a。毛本第二十三回/二八九頁。
- [四八] 『通鑑』第五冊/卷六三/二〇一—二〇二頁。
- [四九] 吳觀明本第二十五回後/八葉a。毛本第二十五回/三一八頁。
- [五〇] 『通鑑』第五冊/卷六三/二〇二—二〇七頁。
- [五一] 吳觀明本第十八回前/三葉b—四葉a。毛本第十八回/二二—二二二頁。
- [五二] 『通鑑』第五冊/卷六二/二〇〇—二〇四頁。
- [五三] 『三國志』第一冊/卷一/三〇頁。
- [五四] 吳觀明本第十四回後/八葉a b。毛本第十八回/一六七頁。
- [四五] 吳觀明本第十四回後/九葉b。毛本第十八回/一六八頁。
- [四六] 吳觀明本第二十六回後/九葉b。毛本第二十六回/三三二頁。
- [四七] 吳觀明本第三十六回前/四葉a。毛本第三十六回/四六一頁。
- [四八] 吳觀明本第八十七回前/一葉a。毛本第八十七回/一一二四頁。
- [四九] 『後漢書』第二冊/帝紀第九/三八〇頁。
- [五〇] 『通鑑』第三冊/卷三三/一〇五—一〇五頁。
- [五一] 『平話』卷上/一七葉a。
- [五二] 『平話』卷上/一六葉a。
- [五三] 『全元戲曲』第七卷/六五六頁。
- [五四] 『三國志』魏書・武帝紀(第一冊/卷一/一四頁) および蜀書・先主伝(第四冊/卷三二/八七—八七四頁) 參照。
- [五五] 『三國志』蜀書・張飛伝(第四冊/卷三六/九四三頁) 參照。
- [五六] 『三國志』蜀書・諸葛亮伝(第四冊/卷三五/九一五—九一六・九二七頁) 參照。
- [五七] 『全元戲曲』第七卷/六三五頁。

〔五八〕但し、作品中に引かれる詩はこの限りではない。例えば、呉観明本第三十八回／六葉aに引く詩には「只因先主丁寧後」の一句がある。

〔五九〕『三国志』第一冊／巻七／二二〇頁。

〔六〇〕『全元戯曲』第四巻／四〇六頁。

〔六一〕『全元戯曲』第四巻／四〇二—四〇三頁。

〔六二〕呉観明本第五回前／六葉a。毛本第五回／五七頁。

〔六三〕『三国志』第一冊／巻一／四七頁。

〔六四〕曹丕が曹操死後、丞相を嗣いだことから明らかなように、曹操は死ぬまで丞相であつた。『三国志』魏書・文帝紀（第一冊／巻一／五七頁）参照。

〔六五〕敵密に言うと、第六十七回の段階では、曹操は魏王となつておらず（即位は第六十八回後）、これも一種の呼称の拡大とみるべきであろうか。但し、一例のみ（呉観明本第六十七回後／一一葉a）であり、魏王即位直前でもあるので、ここでは問題としない。

〔六六〕呉観明本第七十一回前／一葉b。毛本第七十一回／九二二頁。

〔六七〕呉観明本第七十一回後／七葉b—八葉a。毛本第七十一回／九二七頁。

〔六八〕呉観明本第七十六回後／二葉a b。毛本第七十六回／九八五頁。

〔六九〕『全元戯曲』第七巻／六八九頁。

〔七〇〕『平話』巻中／四三葉a。

〔七一〕『通鑑』第五冊／巻六八／二二四八頁。

〔七二〕呉観明本第六十一回前／二葉b。毛本第六十一回／七九〇頁。

〔七三〕呉観明本第六十七回後／七葉a b。毛本第六十七回／八七七頁。

〔七四〕呉観明本第七十三回前／六葉b。毛本第七十三回／九五二頁。

〔七五〕『通鑑』第五冊／巻六二／二〇〇八頁。

〔七六〕『全元戯曲』第七巻／六四二頁。

〔七七〕『三国志』呉書・周瑜伝（第五冊／巻五四／二二六〇頁）参照。なお『三国志』は「大

橋」に作る。

〔七八〕呉観明本第八十二回後／一〇葉b。毛本第八十二回／一〇六三頁。

〔七九〕呉観明本第八十六回前／一〇葉b。毛本第八十六回／一一一四頁。

〔八〇〕呉観明本第九十二回前／五葉b—六葉a。毛本第九十二回／一三三二頁。

〔八一〕呉観明本第七十三回後／九葉a。毛本第七十三回／九五二—九五三頁。

〔八二〕呉観明本第七十八回前／一葉a。毛本第七十八回／一〇〇九頁。

〔八三〕毛本が叙述における曹操・孫権の尊称を諱に改めた理由は、単純に彼らを貶めるためだけではないかも知れない。毛本以前の版本では発話と叙述の区別が截然としなかつたものを、毛本に至って明確に区別したという可能性が指摘できるのである。ただし、毛本が劉備を「漢中王」と称するのを保存する点から、劉備を称揚する意識は確かに存在していると見るべきであろう。



## 第五章 物語の終焉——司馬炎

本章では、前章で提起した『演義』は何故、三国鼎立に拘ったのか」という問題について考えてゆく。そして、この問題は『演義』の歴史観と密接に結びついていると思われる。それゆえ、まず、『演義』の歴史観を検討したい。それには、様々な方法が考え得るであろうが、本章では、『演義』における物語の終焉に着目して議論を進めてゆく。

### 第一節 『演義』の始点と終点

『演義』が、晋による天下一統の実現を描くことで、その物語を締め括るのは周知の事である。しかし、その結末は肯定的に受け入れられていると言えるだろうか。

日本人に限れば、恐らくそうではあるまい。それを証明するには、吉川英治の小説『三国志』を採り上げれば事足りる<sup>二</sup>。吉川は諸葛亮の死を以て、物語を締め括るのである。一応、「後蜀三十年」「魏から—晋まで」という節を立てて、諸葛亮死後についても書いているのだが<sup>三</sup>、原稿用紙六千枚を遥かに越えるこの作品にありながら、四十枚に足りず、何より「篇外余録」に収められていることが、その存在の軽さを物語っているであろう。そして、この作品が、戦後日本における「三国志」の代名詞となっていたことは間違いないから、吉川の態度は、ほぼそのまま日本人の「三国志」読者に反映される。つまり、極端な言い方をすれば、多くの日本人にとって、諸葛亮死後の「三国志」物語は存在しない

に等しいのではないか。

同様の視点に立ったものとして、また、松浦友久の以下のような指摘がある。

真の主役の孔明が死んだとき、敵役としての曹操・魏国もまた、小説における敵役としての活力を失う。ひとたび孔明が死んでみると、あれほど非道な敵国だったはずの曹魏（曹氏の魏国）という存在から、にわかには憎むべき篡奪者としての色彩が薄れてしまうのは興味深い。さきに、孔明の死によってこそ曹操も本当の死を死ぬと言ったのは、この意味からである。主役と敵役が退場してしまえば、小説や演義の吸引力は、そこで終る。五丈原から晋の統一にいたる五十年間が、感動的な文学作品と言うよりも、マニュアル的な歴史年表の趣をもつのは、このためであろう。<sup>三</sup>

この言説も、諸葛亮の死以後の物語を「余録」と捉えているがゆえに、発せられたものであろう。

しかし、本当に、『演義』の描く晋の統一という結末は、「篇外」の「余録」と扱ってよいものなのだろうか。

『演義』のような講史、更に敷衍して言えば歴史物語を記す場合（或いは史書そのものでも構わないのだが）、その作者（一人とは限らない）にとって、記述をどの時点から始め、どの時点で終わらせるかということとは、実のところ、重要な問題の一つであろう。何故ならば、始点と終

点の決定は作者にしか行えないことだからである。例えば、『演義』は後漢桓帝の死（延熹十年、一六七）より物語を始め、西晋による天下統一（太康元年、二八〇）で締め括る。編年体という『演義』の形式と併せて考えれば、『演義』の始点と終点は、『演義』が見たとされる史書に拠って、直截に規定されたものでは有り得ない。

まず、『通鑑』は、東周の威烈王二十三年（前四〇三）から後周の顯徳六年（九五九）までを扱う史書であり、『綱目』もそれに準ずる。すなわち、『通鑑』は後漢末から書き起こされるわけでもなければ、晋の統一によって締め括られるわけでもない。『通鑑』系からは、『演義』の始点と終点を規定できないことは一目瞭然である。

一方、断代史である『三国志』であるが、やはり直接的な原拠とは言えない。紀伝体に於いて年代記的な役割を負うのは帝紀であるが、『三国志』の帝紀は魏を正統と看做すため、魏の滅亡（咸熙二年、二六五）を以て終わる。つまり、西晋の統一までは記さない。無論、呉書・三嗣主伝の孫皓の伝では、呉の滅亡、すなわち西晋の統一を記すわけだが、魏書から呉書へと視点を移す時点で、何らかの恣意を想定すべきであろう。少なくとも単純な機械的作業では、正史からも『演義』の終点を取り出すことはできないのである。

これは、始点についても同様のことが言える。先述の通り、『演義』は桓帝の死から説き起こすわけだが、その直後に次のような怪異が現れたことを述べる。

建寧二年四月十五日、帝会群臣於温徳殿中、方欲陞座、殿角強風大作、見一条青蛇、從梁上飛下来。約有二十餘丈、蟠於椅上。靈帝驚倒、武士急慌救出。文武互相推擁、倒於丹墀者無數。須臾不見、片時大雷

大雨、降以水雹。到半夜方住、東都城、中、壞却房屋數千餘間。<sup>〔四〕</sup>

（建寧二年〔一六九〕四月一五日、帝が温徳殿で群臣と会わんとし、玉座にのぼられようとしたとき、御殿の片隅より強風が吹き起こり、見ると一匹の青蛇が梁の上より飛び下って来る。長さはおよそ二十餘丈もあり、玉座の椅子にとぐろを巻いた。靈帝が驚いて倒れたのを、衛士が慌てて救い出す。文武百官は互いに揉み合い、丹塗りの庭に倒れる者は数え切れなかった。しばし間に蛇の姿は見えなくなり、間もなく、大雷大雨となって、やがて雹に変わった。夜半にいたってようやく止んだが、洛陽の城中では壊れた家々が数千餘軒に上った。）

建寧二年四月に雹が降ったことは『後漢書』五行志に<sup>〔五〕</sup>、青蛇が現れたことは楊賜伝にそれぞれ見える<sup>〔六〕</sup>。また、『通鑑』は、この二つの事象を併せて記す。

夏、四月、壬申、有青蛇見於御坐上。癸巳、大風、雨雹、霹靂、拔大木百餘。<sup>〔七〕</sup>

（夏、四月、壬申、青蛇の御坐上に見ゆる有り。癸巳、大風、雨雹、霹靂、大木百餘を抜く。）

『演義』の記述は、これらの史書を原拠とするのであろう。一方、正史『三国志』が、この怪異を記さない。『演義』の始点も、『三国志』に拠って描き得ないものなのである。

以上の事から、『演義』が意図的に始点と終点を選択していることは明らかである。換言すれば、『演義』の描く結末には、何らかの意図が込められていると考えるべきであろう。決して「篇外余録」ではない。

そして、『演義』の結末がある意図に基づいていることを、逆説的に証明するのが、『演義』に先行する網羅的三国故事である『平話』である。そこで、次節では『平話』の始点と終点について分析する。

## 第二節 『平話』の始点と終点

まず、『平話』の始点と終点について、やや詳しく述べておこう。

『平話』が『演義』と違い、仏教的な輪廻転生観を思想的なバックボーンとしていることは、以前から指摘がある。そして、『平話』の冒頭はこれを受けて、荒唐無稽とすら言える転生譚より始まる。第二章と重複することになるが、その概略を示しておこう。

後漢光武帝の時代、司馬仲相という書生が酒を飲みながら歴史書を読んでいると、五十人あまりの役人が現れ、仲相を連れ去る。着いた所は黄泉の裁判所（陰司）、「報冤之殿」であった。仲相はそこで死者を裁く事になる。そこへ現れたのが、血まみれになった漢の功臣、韓信、彭越、英布であった。三人は無実の罪で殺された事を口々に訴える。それを聞いた仲相は劉邦と呂后、そして証人として蒯徹（韓信の軍師）を呼び、裁決を天帝に上奏する。天帝はそれを受けて次のように言う。

玉皇勅道、「与仲相記、漢高祖背其功臣、却交三人分其漢朝天下。交韓信分中原為曹操、交彭越為蜀川劉備、交英布分江東長沙吳王為孫權、交漢高祖生許昌為獻帝、呂后為伏皇后。交曹操占得天時囚其獻帝、殺伏皇后報仇。江東孫猷占得地利、十山九水。蜀川劉備占得人和。劉備索取關、張之勇、却無謀略之人、交蒯通生濟州、為琅邪郡、復姓諸

葛、名亮、字孔明、道号臥龍先生、於南陽鄧州臥龍岡上建庵居住、此処是君臣聚會之処、共立天下、往西川益州建都為皇帝、約五十余年。交仲相生在陽間、復姓司馬、字仲達、三国併収、独霸天下」。天公斷畢。<sup>八九</sup>

（天帝は判決を下した。「仲相と共に記す。漢の高祖は功臣に背いたので、罰として三人（韓信、彭越、英布）にその天下を分け与える事とする。韓信には中原を分け与え曹操と為し、彭越は蜀川の劉備と為し、英布には江東長沙を分け与え呉王孫權と為し、漢の高祖は許昌において獻帝と為し、呂后は伏皇后と為す。曹操には天の時を占めさせ、獻帝を虜とし、伏皇后を殺させて仇を報じさせる。江東孫權は地の利、即ち天然要害を占める。蜀川劉備は人の和を占める。劉備は関羽、張飛の猛勇を得るも、知略の人がいない。故に蒯通をして濟州、琅邪郡に復姓諸葛、名は亮、字は孔明、号は臥龍先生として生まれせしめ、南陽鄧州の臥龍岡に庵を結ばせる。君臣はここにおいて出会い、共に天下を立て、西川益州に行きて都を建て（劉備を）皇帝と為し、国は五十年余り続く。そして、仲相をして現世に戻し、復姓司馬、字は仲達として、三国を併合し、天下に覇を唱えさせる」。天帝はそう断じ終えた。）

この挿話は、韓信・彭越・英布の三人が転生して、同じく転生した劉邦と呂后に対して復讐を果たすことを暗示しているよう。

次に『平話』の結末部分を見ておく。  
『平話』が、『演義』と結末を異にすることは有名であり、従来よりしばしば指摘されるところである<sup>九〇</sup>。

惠帝死、立起懷帝。却說漢王領軍數十萬、前至洛陽伐晋。晋懷帝出迎敵、陣敗、漢兵執之、殺而祭劉禪之廟。又有晋愍帝即位長安。漢王

遣劉曜征之、遂虜晉愍帝、遂納晉惠帝羊皇后為妻、遂送晉帝於平陽郡。漢王遂滅晉國、即漢皇帝位。遂朝漢高祖廟、又漢文帝廟、漢光武廟、漢昭烈皇帝廟、漢懷帝劉禪廟而祭之、大赦天下。

漢君懦弱曹吳霸、昭烈英雄蜀帝都。

司馬仲達平三國、劉淵興漢鞏皇囚。<sup>二〇</sup>

(晋の) 惠帝が死に、懷帝が立てられた。さて、漢王は数十万の軍勢を率い、先に洛陽に至り晋を伐った。晋の懷帝は迎撃に出たが、軍は敗れ、漢兵は懷帝を捕らえ、これを殺し、劉禪の廟を祭った。また、晋の愍帝が長安で即位した。漢王は劉曜を派遣してこれを伐ち、劉曜は晋の愍帝を虜とし、晋の惠帝の羊皇后を手に入れて妻とし、晋帝を平陽郡へ送った。漢王は晋を滅ぼし、漢の帝位についた。そこで漢高祖の廟、漢文帝の廟、漢光武帝の廟、漢昭烈皇帝(竹内注、劉備のこと)の廟、漢懷帝劉禪の廟に詣でて祭祀を行い、天下に大赦を施した。

漢君懦弱にして 曹吳 霸たり、昭烈英雄にして蜀は帝都たり。

司馬仲達は三國を平らげ、劉淵 漢を興して皇囚<sup>かた</sup>を鞏む。

『演義』との相違は一目瞭然であろう。『演義』が西晋の統一によって物語を締め括るのに対し、『平話』は晋の統一後も物語が続く。そして、劉備の子孫である劉淵が漢を復興するところで物語を終えるのである。

歴史上、劉淵という人物は実在する。四世紀はじめに今の山西省に拠って、確かに「漢」を自称している。そして、その子の劉聰が南方に攻勢をかけ、晋王朝(正確には西晋)を滅ぼしたことも史実である<sup>二二</sup>。この点から言えば、『平話』の結末はおおむね史実に沿っている。しかし、劉淵は匈奴の出身であり、漢王朝や劉備とは血縁関係のあらうはず

がない。『平話』の結末はこの点を捉えられて、「荒唐無稽」と評されることもある<sup>二三</sup>。

さらにつけ加えるならば、従来、『平話』の結末は復讐譚という理解を一般的に為されてきた。そして、『平話』の結末を復讐譚と捉える場合、先述した輪廻転生譚と対になって意識される。

始点の挿話は、韓・彭・英の三者が復讐を果たすことを暗示するものであった。正しく復讐譚と呼ぶにふさわしい内容であろう。そして、劉禪の外孫である劉淵が晋に滅ぼされた漢を復興して『平話』の物語は終わる。劉淵の復漢は、滅ぼされた漢の仇を討つことになるわけだから、それぞれの挿話の話し型は相似している。この点を捉えるならば、『平話』の物語は確かに「かたきうちが始まって、かたきうちに終わる<sup>二四</sup>」のであった。

ただし、『平話』の始点と終点の挿話を指して、ともに「復讐譚」であるという理解にとどまることには大きな陥穽がある。仔細に検討してゆくと、この二つの挿話には互いの間で矛盾が存するのである。

矛盾の一つに劉備の描かれ方が挙げられよう。発端の挿話にあって、劉備は彭越の転生した姿である。彭越は韓信、英布と共に漢の高祖に復讐するために転生する。そして、漢の高祖は転生して献帝となる。彭越ら三人と漢の高祖はいわば敵対関係にあるわけだから、その転生した姿である劉備・曹操・孫権の三人と献帝もまた、敵対関係にあるはずである。少なくとも『平話』の発端を読む限り、そのような図式が成り立つであろう。これに対し結末においては、劉備の曾孫たる劉淵が漢王朝を復興する。つまり、発端において漢の皇帝と敵対していたはずの劉備の一族が、結末では漢王朝を受け継ぎ復興させてしまうのである。これは大いなる矛盾と言えまいか。

『平話』全体を通して考えると、発端における劉備と漢王朝の関係だけが孤立したものであることは容易に看取できる。発端を除けば劉備と漢王朝は、常に良好な関係を保っているのである。例えば、劉備は『平話』巻中の冒頭にあつて、献帝と謁見するのだが、その場面は以下のよう  
に描写される。些か長くなるが引用しよう。

曹操引関公・張飛・劉備軍回、正西行數日、到長安。無三日、現帝、  
突斬呂布於下邳。帝喜、有意加官。曹操奏曰、「非臣之功」。帝問、「何  
人」。涿郡劉備・関・張也」。帝宣、三人借袍現帝。献帝見先主面如  
滿月、兩耳垂肩、貌類漢景帝。又問、「玄德祖宗何人」。先主「本祖十  
七代孫、中山靖王之後。先君漢靈帝、因十常侍弄權、落於百姓之家」。  
帝驚、宣宗正府宰相、檢祖宗部。有国舅董承奏帝曰、「劉備、漢之宗  
室」。帝大喜、即加玄德豫州牧・左將軍・漢皇叔。又宣関・張二將、  
各賜恩賞、御宴數日。帝大喜、自思、「有皇叔荆王劉表、又有滄州劉  
璧、長不在吾左右。今有皇叔玄德、漢天下有主矣」。<sup>二四</sup>

（曹操は関羽・張飛と劉備を連れて軍を返した。西へ行くこと數日、長安の  
都に着いた。到着して三日も経たない内に献帝に拝謁し、下邳で呂布を斬し  
たことを奏した。帝は喜び、曹操の官位を上げようとした。曹操が奏して言  
う。「臣の功績ではございませぬ」。帝が問う。「では誰の功であるのか」。「涿  
郡の劉備と関羽・張飛であります」。帝は三人をお召しになり、三人は借りた  
袍を着て帝に拝謁した。献帝が先主を見るに顔は滿月のよう、兩耳は肩に垂  
れ、その容貌は漢の景帝に似ていた。そこでまた問う。「玄徳の祖は誰である  
か」。先主「景帝十七代の孫、中山靖王の後裔であります。先君漢の靈帝のと  
き、十常侍が権力を恣にしておりましたので、庶民へと身を落としておりま  
した」。帝は驚き、宗正府の宰相に命じて、祖宗の系譜を調べさせた。国舅董

承が帝に奏して言う。「劉備は漢の宗室であります」。帝は大いに喜び、すぐ  
さま玄德に豫州牧・左將軍・漢皇叔の位を賜った。また命じて関・張の二將  
にも、おのおの恩賞を賜り、そして帝自ら開いた宴は數日に及んだ。帝は大  
いに喜び、心中思う。「皇叔の荆王劉表と滄州の劉璧が（皇族の諸侯として）  
いるが、長らく私の左右にはおらぬ。今、皇叔の玄德がおれば、漢の天下は  
主を取り戻せるやもしれぬ」。

ここで、劉備は献帝に謁見し、「漢皇叔」の位を与えられている。こ  
れは「皇帝の叔父」という意味であり、具体的には漢の献帝の叔父とい  
うことを示している。つまり、「皇叔」は劉備と漢王朝とのつながり  
を重視した呼び名にほかならない。また、『平話』において、「皇叔」は  
劉備を指す呼称として頻繁に用いられる。さらに、『平話』では、劉備  
の建てた国は「漢」と称される。つまり、劉備は献帝の後を継ぐのであ  
る。『平話』における劉備の描かれ方を考えた場合、始点を除き、常に  
漢の一族、もしくは後継者という位置づけを与えられていると考えて良  
いであろう。劉備の形象のみを考えるならば、『平話』の始点に置かれ  
た輪廻転生譚は明らかにその後の内容と矛盾すると言い得る。

そして、『平話』の始点がその後の内容と矛盾するという現象は、何  
も劉備の描かれ方に限ったことではない。もう一例を挙げよう。

始点の転生譚にあつて、漢の高祖とともに妻である呂后も登場する。  
彼女も夫と同じく復讐を受ける立場であり、献帝の皇后である伏氏に転  
生する。『演義』の読者がこの伏皇后から連想するのは彼女が曹操によ  
って一族もろとも殺されたという挿話であろう（この挿話については第  
三節で詳述）。『演義』にあつては、曹操の不忠を描くための重要な挿話  
だといって良い。その伏皇后が『平話』の始点にあつて登場するのだけ

ら、『平話』も『演義』と同様に曹操が伏皇后を害する挿話を採って、  
そうなるものである。ところが、伏皇后の名は始点に見えるばかりで、そ  
の後一度も現れない。

『平話』にあって、『演義』が描いた伏皇后殺害の挿話に当たると考  
えられるものはある。巻下に描かれる「曹操斬太子」の挿話がそれであ  
る。だが、この挿話において殺害されるのは献帝の太子であって、  
皇后については一言も触れていない。この事実もまた、『平話』の始点  
が全体からは孤立したものであることを示している。

それでは『平話』の始点は、なぜその後の内容と矛盾するのか。この  
理由はなかなか判然としない。しかし、以下に示す小松謙の推論が一つ  
の説明になると思われる。

「両漢をめぐる講史小説の系統について—劉秀伝説考補論—」<sup>二七</sup>の  
中で、小松は『三国志平話』の発端に言及している。これは現存する『平  
話前漢書』と『平話三国志』の間に『平話後漢書』が存在しなかった可  
能性を指摘するためである。小松はこの挿話が後漢の初代皇帝、劉秀の  
時代に設定されていることに着目し、その理由を説明するために、次の  
ように推論する。

一人の作品かどうかは別問題として、全相平話を一つのシリーズを  
なす連作としてとらえ、後漢をとばして前漢の次にすぐ三国が来るも  
のと考えれば、これらの問題は容易に解決できる。この話は、西漢の  
物語と三国の物語をつなぐ橋渡しの役割を担っているのではあるまい  
か。……そしてあくまでつなぎである以上、その話が前後と密接に関  
連しないのは当然のことである。……<sup>二七</sup>

先述した『平話』における劉備の形象や伏皇后の不在は、小松の説を  
補強する証拠となりうるであろう。そして、小松の説に従うのならば、  
『平話』冒頭の挿話が「前後と密接に関連しないのは当然のことである」  
とすれば、『平話』本体のストーリーから始点を切り離して考えること  
が可能であろう。その結果、『平話』のストーリーの大枠はきわめて単  
純に把握することができる。

それは、漢王朝の衰退から復興への歴史である。『平話』にあって、  
漢は曹操の専横によって脅かされ、ついには中原を失う。そして、献帝  
は帝位より逐われるが、益州に入った劉備によって漢王朝自体は存続す  
る。その劉備によって継承された漢も晋によって滅ぼされるが、劉備の  
曾孫、劉淵によって復興を遂げる。

漢が中国を統一している状態は、秩序が保たれている状態であり、換  
言すれば漢という王朝は秩序の象徴ということもできよう。そして、漢  
が中原を失うことで、その秩序は崩壊し、中国は混沌の状態となる。さ  
らに、その秩序を回復すべき蜀漢も晋に滅ぼされてしまう。蜀漢の滅亡  
自体は史実であり、『平話』にしろ、『演義』にしろ、この史実をねじま  
げることはしなかった（あるいは、できなかった）。しかし、蜀漢の滅  
亡という出来事は、物語を進める上で非常に都合な事件であろう。秩  
序の象徴たる蜀「漢」を滅んだままにしておくならば、物語を秩序の回  
復という、きわめて分かり易い大団円（ハッピーエンド）に結ぶことは  
不可能になるからである。そこで、『平話』は異民族である劉淵を漢の  
後継者に設定し、中原を回復させる。これによって、秩序は回復され、  
物語は大団円を結ぶ。

しかし、『平話』に現れたこの大団円、すなわち劉淵の復漢を描くこ  
とは、『演義』には不可能であった。その理由については、金文京の以

下のような見解が正鵠を射ていると思われる。

劉淵は、晋を亡ぼし漢を復興したという点からいえば、漢王朝の正統な後継者であるにちがいない。……しかし一方、劉淵は『平話』には出てこないが匈奴という異民族であり、……もしこの点に着目すれば、劉淵はたちまち中国への侵略者、征服者に変じるであろう。……『平話』の結末は、民族より王朝の正統性を優先させる元王朝の立場を反映していると考えられよう。そして明代の『三国志演義』が、あれほど蜀をもち上げ魏をおとしめて正統思想を鼓吹しているにもかかわらず、晋の三国統一で物語を終え、劉淵の復漢をとりあげなかったのも、また当然である。明はモンゴル人を追放することによって成立した漢民族の民族国家であり、彼らの正統思想は、華夷の別という名の民族思想と表裏の関係にあったからである。<sup>二五</sup>

明という時代背景は、『演義』に劉淵の復漢によって物語を締め括ることをさせなかった。しかし、作品中でしばしば劉備が称揚されることから判るように、『演義』も漢を秩序の根拠とする点では平話と共通する。つまり、「(蜀)漢の滅亡」という史実が、物語を進める上で不都合なことには変わりはない。冒頭に引いた松浦友久の言は、『演義』はその不都合を黙認するという見解であろう。しかし、筆者には、『演義』もやはり、『平話』とは別の形で、「(蜀)漢の滅亡」を超克し、物語における秩序を回復しようとしたように思われる。

### 第三節 司馬炎の父祖

筆者が、『演義』も秩序の回復を意図したと考える第一の根拠は、『演義』に現れた司馬炎の人物形象にある。

彼は、西晋の武帝であり三国統一を成し遂げる。別言すれば、『演義』の物語を締め括る人物といえよう。

ところが司馬炎という人物は、『演義』の物語にあつて些か印象が薄い。当然といえば当然である。司馬炎が物語に登場するのは第百十四回後という終盤であり、しかもここでは名みの登場である。確認のために、その挿話を引いておく。

却説司馬昭因賈充勸魏国正統之事、昭与充曰、「昔文王三分天下有其二、以服事殷、故聖人稱為至德。魏武帝不肯受禪於漢、猶吾之不肯受禪於魏者也」。於是賈充等聽畢、已知司馬昭留意於子司馬炎之身矣。<sup>二五</sup>

(さて司馬昭は賈充が魏の禪讓を受けることを勧めたので、こう賈充に言った。「むかし、周の文王は天下を三分してその二を保ちながら、殷に従ったから、聖人〔孔子〕は至徳であると称えた。魏の武帝が漢の禪讓を受けなかったのは、わしが魏の禪讓を受けようとしないと同じことだ」。賈充等はそれを聴き、司馬昭が子の司馬炎のことだけしか念頭にないことを知ったのであった。)

司馬炎が本格的に物語に姿を現すのは、第百十九回後、すなわち物語が残りの一回半しか残っていない段階である。これでは、司馬炎自身の印象が薄いのも仕方がなからう。

しかし、読者が司馬炎に対して抱く印象は、本人が現れる場面のみで

決定されるわけではない。司馬炎には、司馬懿・司馬師・司馬昭という物語の中で重要な役割を占める先祖がいるからである。司馬懿は祖父、司馬師は伯父、司馬昭は父に当たる。この三人は司馬炎よりも早くから登場し、かつ活躍場面も多い。このような場合、子孫である司馬炎は先祖が読者に与える印象から逃れることはできないであろう。司馬炎のように、先祖（具体的には父親であることが多い）の印象に大きく影響を受けている人物は、『演義』に多く登場する。代表的な例として関興や諸葛瞻などが挙げられよう。関興の父は関羽、諸葛瞻の父は諸葛亮であり、ともに『演義』の物語にあって中核を占める人物である。これに対して、息子である関興や諸葛瞻は脇役の座を与えられるに過ぎない。自然、彼らは「関羽の息子」・「諸葛亮の息子」という形で読者に記憶されることが多いであろう。

逆のパターンも存在する。例として、曹操とその父である曹嵩が挙げられよう。曹操が『演義』の中心人物であることは疑う余地がなく、対して曹嵩の方は極めて印象が薄い。「曹操の父」という形でしか印象が残らない人物であると言って良いと思われる。以上のことから『演義』の物語において、「活躍した人物」の「子孫もしくは先祖」は、その「活躍した人物」が読者に与えた印象から、逃れ難い影響を受けていると整理できよう。

司馬懿・司馬師・司馬昭の三人は物語の後半、特に劉備や曹操といった前半の中心人物が没した後は、物語の中核を担う存在と言える。その子孫である司馬炎は、先祖三人が読者に与えた印象から影響を受けざるを得ないであろう。そこで、司馬炎自身の人物形象を検討する前に、その先祖の描かれ方を見てゆきたい。

司馬懿については、已に第二章で詳述した。彼は、『演義』後半の主

人公と言うべき諸葛亮の最大の敵手である。『演義』は司馬懿を諸葛亮の敵手として描くため様々の操作を加えており、敵役として描かれていると行って良いであろう。ただし、同じ敵役である曹操と大きく異なる点がある。それは忠義の面においてであり、この点で司馬懿には余り失点がない。曹操は伝統的に敵役として意識される人物であるとともに、後漢最後の皇帝、劉協を脅かす不忠の臣でもあった。これに対し、司馬懿は明確に敵役ではあるけれども、不忠である面は余り見えてこない。

だが子の世代に至ると、曹操と同じように、司馬氏にも不忠の面が現れるようになる。司馬懿の死後、その家督は長子である司馬師が継ぎ、司馬師の死後、弟である司馬昭が継ぐ。この二人は、ともに自らの君主を廃し、新たな君主を立てる。司馬師は曹芳を廃して曹髦を立て、司馬昭はその曹髦を廃して曹奂を立てている。「廃君」という行為が、忠義から大きく逸脱しているものであることは確認するまでもないであろう。

ただし、司馬師の廃君と司馬昭の廃君の描かれ方はやや異なったものとなっている。

司馬師が廃君を行うのは、第百九回後においてである。まず概略を示す。

司馬師と司馬昭の兄弟は魏の権力を一手に握り、皇帝はなきがごとき有様であった。魏帝曹芳は事態を憂え、側近の李豊・夏侯玄・張緝と図って、司馬兄弟を除こうとする。しかし事は簡単に露見し、三人は処刑される。司馬師はさらに曹芳の皇后が張緝の娘であったため、皇后をも殺してしまう。



『演義』は曹芳の皇后であった張氏が殺された後、次のような二首の七言詩を挿入する。

当年猷帝正君臣 当年 猷帝 君臣を正さんとし  
伏后哀哉尽滅門 伏后 哀しい哉 尽く門を滅す  
司馬今朝依此例 司馬 今朝 此の例に依り  
天教還報在兒孫 天の還報せしむるは兒孫に在り

姦臣篡国最堪傷 姦臣 国を篡うは最も堪傷すべし  
離別君王伏后亡 離別 君王 伏后 亡ぶ  
天理昭然施報応 天理 昭然 報応を施し  
故令張氏亦遭殃 故に張氏をして亦た殃に遭わしむ

この二首の詩にあって『演義』が糾弾しているのは曹操の悪行であって、司馬師の行為ではない。曹操はその昔、猷帝の皇后であった伏氏の一族をクーデターの嫌疑によって誅殺している<sup>三三〇</sup>。今、曹操の子孫である曹芳はその報いを受けて、皇后である張氏の一族を司馬師に滅ぼされてしまうわけである。ここに詠われるのは、曹氏が因果応報を受けるさまであって、司馬師の行為そのものに対する善悪の判断は行われていない。ただし、曹芳が都から追放された直後に、次のような記述はある。

只有数員忠義之臣、含涙而送。<sup>三三一</sup>  
(ただ幾人かの忠義の臣が涙を浮かべて見送るばかりであった。)

この語を裏返せば、司馬師の廃君・主君の追放という行為は不忠であ

ると言うことはできるであろう。ただ例示した詩が明確に曹操を糾弾するのに対し、この一言はせいぜい司馬師の不忠を暗示するといった程度のものであり、『演義』が司馬師の不忠を積極的に描き出しているとは言い難い。

一方、第一百十四回前においては、司馬昭の廃君が描かれる。その概略は以下のようなものである。

司馬昭は日に日に専横をつのらせ、篡奪の野心が見え隠れしていた。魏の皇帝、曹髦はついに司馬昭を除く決心をする。一方、司馬昭は曹髦が自分を害そうと考えていることを知り、腹心の賈充にその処置を命じる。曹髦は僅かの兵を率いて司馬昭を誅しようとするが、賈充の命令を受けた成済・成倅兄弟に殺害される。司馬昭は形だけはその死を悼み、直接手を下した成済・成倅兄弟を処刑することを決定する。成済は司馬昭と賈充を罵りながら処刑された。

この挿話にあって、『演義』は七言詩二首を挿入しているのだが、司馬師の時と比べ、その主調は一転している。『演義』はあきらかに司馬昭を弾劾するのである。

仮意投身強哭屍 意を仮りて身を投げ強いて屍に哭し  
公然弑主待推誰 公然と主を弑し誰を推す待たん  
欲誅成済瞞天下 成済を誅し天下を瞞かんと欲するも  
天下人人已尽知 天下の人人 已に尽く知れり

司馬当年命賈充 司馬 当年 賈充に命じ

弑君南闕緒袍紅 君を南闕に弑し 緒袍 紅なり

却將成濟夷三族 却かえつて成濟を將て族を夷ぼろはし

欲使軍民耳尽聾 軍民をして耳を 尽こごとく聾せしめんと欲す

この詩が挿入される直前に、司馬昭はまさに曹髦の屍にとりすがって「哭」いている。「演義」が弾劾したのは、疑いなく司馬昭である。つまり、「弑君」という同じ行為を扱いながら、司馬師と司馬昭とでは、『演義』の態度が明らかに異なる。

司馬師の廃君と司馬昭の廃君の描写の間に、なぜこのような違いが生じたのか。これには様々な理由が考えられよう。一つには、司馬師の行為が曹操のそれと酷似していることがある。前述のごとく、第六十六回後において、曹操は献帝の皇后、伏氏を殺している。曹操を除こうとした国舅（皇后の父）、伏完らの企てが露見し、皇后はその罪に連座して殺されたのであった。この状況は司馬氏の廃君にあつて繰り返される。国舅であった張緝が司馬氏を除こうとする計画に参画し、それが露見して曹芳の皇后である張氏は殺されることになったのである。このように、司馬師の皇后殺害は、曹操が行ったそれを想起させずにはおかないものであった。それゆえ、曹操の不忠を弾劾し、その子孫が報いを受けるさまを描くことが『演義』の主調になったのだと思われる。

また、司馬兄弟の廃君の描写が異なっていることには、主君を殺したか否かも大きく関わっている。忠義という観点から考えれば、「主を殺す」というのはもともと弾劾されて然るべきものである。そして、忠義を称揚することが演義の眼目の一つである以上、『演義』が司馬師の廃君よりも、司馬昭のそれを強く弾劾するのは当然と言えよう。

さて、右に述べた如く、司馬氏兄弟は濃淡はあるにせよ不忠の存在であった。そして、同時に父の司馬懿同様、敵役でもあり続けたのである。

司馬懿はクーデターによって魏の実権を握り、司馬師・司馬昭の代に至ると、絶対の権力者となる。つまり、劉備亡き後、蜀を代表するのが皇帝の劉禅ではなく諸葛亮・姜維であるように、二代目の皇帝である曹叡亡き後、魏を代表するのは帝室の曹氏ではなく司馬氏なのである。そして、司馬氏が実権を握った時代にあつても、魏は諸葛亮、すなわち主人公の遺志を継いだ蜀と戦いを続けている。魏は依然として敵役であり、当然、司馬氏兄弟もまた敵役であると言えよう。このような司馬氏の描かれ方は、漢の丞相でありながら、漢に対して不忠に描かれ、さらには主人公劉備の敵役であった曹操の描かれ方と重なるものと言えよう。卑俗に言えば、「悪玉」ということである。

司馬炎は、その「悪玉」司馬昭の後継となる。その様子は第百十九回後に現れる。

次日病危、太尉王祥・司徒何曾・司馬荀頤及諸大臣、入宮問安。昭不能言、以手指司馬炎而死。時八月辛卯日也。何曾曰、「天下大事、皆在晋王也。可立太子為晋王、然後祭葬」。是日、司馬炎即晋王位、封何曾為晋丞相、司馬望為司徒、石苞為驃騎將軍、陳騫為車騎將軍、諡父為文王。<sup>二四</sup>

（次の日、「司馬昭の」病は篤くなり、太尉王祥・司徒何曾・司馬荀頤および諸大臣が屋敷を見舞いに訪れた。司馬昭は言葉発せなかったので、司馬炎を指さしてから死んだ。時に八月辛卯の日であった。何曾が、「天下の大事は、みな晋王にかかっている。太子を立てて晋王とし、然る後に葬儀を行うべきだ」と言うので、即日、司馬炎は即位して晋王となった。何曾を晋の丞相に、

司馬望を司徒に、石苞を驃騎將軍に、陳騫を車騎將軍に、それぞれ封じた。そして父の司馬昭に文王と諡した。）

この場面にあつて、親子の間の対立や矛盾は一切読みとれない。司馬炎はきわめて円満に父の後を継ぐのである。それはとりもなおさず、敵役と不忠の臣という「悪玉」的役割を引き継ぐことに繋がるであろう。少なくとも、読者がそのような印象を受けるのは、ごく自然のことだと思われる。

#### 第四節 司馬炎の形象

では、実際に『演義』の司馬炎は「悪玉」なのであろうか。

おそらく、そうではない。司馬炎の登場する第百十九回後および第百二十回を検討すると、『演義』は司馬炎を悪玉とは程遠い、むしろ正反對と言ふべき存在に描いていることが容易に看取できる。司馬炎及び彼の立てた晋王朝は明らかに肯定的に描かれるのである。

まず、呉観明本から、晋王朝を肯定すると思われる記述について概述しておこう。

A 司馬炎は魏帝（曹奂）に迫つて、帝位を譲り受ける。その位を迫られた曹奂は陳留王に封じられ、都を追放される（傍線筆者、以下同）。

是日、文武百官再拜於臺下、山呼萬歲。炎紹魏統、国号大晋、改元為太始元年、大赦天下、置立諫官。此時魏亡、人民安堵、秋毫無犯。

後史官有詩嘆曰、……（二五）

（この日、文武百官が受禪台のもとで再拜し、大いに万歳を呼ばわった。司馬炎は魏の社稷を受け継ぎ、国号を大晋とし、太始元年と改元した。天下に大赦を施し、諫官を設置した。ここに魏は滅び、人民は安堵し、〔軍は〕まったく人民を脅かすことがなかった。後の史官が詠嘆した詩に言う。……）

魏が滅び晋がたったことにより「人民安堵、秋毫無犯」という状態になったのである。無論、これは一種の決まり文句であるが、呉観明本が司馬炎の治世を称揚していることには違いない。この描写では、司馬炎、すなわち晋王朝の治世は明らかに肯定されるのである。

B 呉を滅ぼした司馬炎は、投降してきた呉の皇帝、孫皓を引見した。そして、その場において、呉討伐の論功行賞を行う。

帝命設筵、勞賞呉之君臣、封皓為帰命侯、子孫封中郎、随降宰輔皆封列侯。丞相張悌陣亡、封其子孫。天下大定。封王濬為輔国大將軍。

（帝は命じて席を設けさせ、呉の君臣の封侯を行った。孫皓を封じて帰命侯とし、その子孫は中郎に封じられ、孫皓に従つて降つた大臣たちはみな列侯に封じられた。丞相の張悌は戦死していたので、その子孫を封じた。天下は一つに定まったのである。王濬を封じて輔国大將軍とした。）

ここにおける「天下大定」という言葉は、物語の完結宣言と言えよう。それまでは乱の極みにあつた中国が、晋の手によって統一される。この「天下大定」は、その統一による安定を積極的に評価し、ついに物語が

終わることを告げるのである。

更に、版本によっては、司馬炎を肯定する次のような記述がある。嘉靖本に拠って示そう。

C 呉の永安七年（二六四）に呉主孫休が死に、孫皓が立った。この孫皓は暴虐であり、次々と臣下を肅清するなどの暴政を行った。これを見た晋の征南大將軍羊祜は呉討伐を司馬炎に上表する。

……丞相万彧・將軍留平・大司農樓玄、見皓無道、三人苦諫、皆被殺之。前後十餘年、殺忠臣四十餘人。皓出入、常帶鉄騎五万。群臣恐怖、莫敢奈何。却説晋帝司馬炎恢弘大度、容納直言。明達善謀、能断大事。時咸寧二年冬十月也、征南大將軍羊祜上表請兵伐呉。炎觀表曰、……

（……丞相万彧、將軍留平、大司農樓玄は孫皓の無道を見て、三人とも厳しく諫めたが、みな殺された。前後十余年の間、忠臣四十人あまりが殺された。孫皓は、どこへ出るにもいつも鉄騎五万人を引き連れていた。群臣は恐怖し、どうすることもできなかった。さて、晋の皇帝司馬炎は広く大きな度量を持ち、直言を聞き入れた。明敏にして、謀<sup>はかりごと</sup>を善くし、大事を決するに果断であった。時に咸寧二年の冬十月、征南大將軍の羊祜が上表して兵を興して呉を討伐することを請うた。炎がその表を見ると、次のようにあった。……）

司馬炎の人物がきわめて肯定的に描かれる。また、ここで描かれる司馬炎が、その直前に描かれる無道の君主、孫皓と対比されているのは明らかであろう。この場面において司馬炎は理想的な君主であり、確実に「善」の属性を負っているのである。ただし、この記述には出典がある。

『通鑑』は、司馬炎が崩御した際に次のような評価を記している。

己酉、崩于含章殿。帝字量弘厚、明達好謀、容納直言、未嘗失色於人。<sup>二八</sup>

（永熙元年三月、二九〇）己酉、含章殿に崩す。帝、字度弘厚にして、明達好謀、直言を容納し、未だ嘗て色を人に失わず。）

嘉靖本の記述は明白にこれを下敷きにしたものであろう。しかし、この評価は『通鑑』では司馬炎の死に際して記されたものである。『演義』は司馬炎の三国統一によって物語を終えるのであるから、司馬炎の死が描かれるわけがない。つまり、歴史的記述を補うために単純に『通鑑』を用いるのであれば、この評価は使われるはずのないものである。この記述に限れば、嘉靖本は『通鑑』の中から司馬炎を肯定する表現を選択し、この挿話に挿入したとみるべきであらう。『通鑑』を元にしてはいるが、嘉靖本が司馬炎を肯定している表現と違って良いと思われる。ともかく、右に引用したA・B・Cの記述は、すべて司馬炎および晋を肯定的に描く。先に述べたごとく、司馬炎が登場するのは物語の最終盤であって、わずか三則に過ぎない。その三則の間に、繰り返し司馬炎と晋王朝を肯定する描写が現れるのである。

しかし、第百十九回まで読み進めてきた『演義』読者にとって、司馬炎が肯定的に描かれることは、きわめて奇妙な印象を与えないだろうか。前節に見たように、『演義』は司馬炎の先祖すなわち司馬懿・司馬師・司馬昭の三人を一貫して敵役、「悪玉」として描く。特に司馬昭に到っては不忠でさえある。その司馬昭の子が司馬炎であり、かつ円満にその後を継いでいる。このような経緯を持つ司馬炎を肯定的に評価するのは

矛盾とは言えまいか。司馬氏は司馬炎の代に至って、否定の対象から肯定の対象へと逆転するのである。

ところで、『演義』の版本のすべてが司馬炎を肯定的に描くわけではない。版本の系統、具体的に言えば二十卷繁本系諸本では、右に引いた司馬炎（晋）を肯定する表現は全て削除されている。余象斗本（二十卷繁本系）と劉龍田本（二十卷簡本系）を上下に対照して、その事実を示そう。

A 是日大赦、

改元為

太始元年。

後

來史官有詩曰、……

B 帝大笑、設宴待之、封

為婦命侯、封其子瑾為中郎將、  
隨降臣宰皆封列侯。丞相張悌

死節、当封其子孫。

遂封王濬為輔國上將軍。

C ……丞相方或・將軍留平・

大司農樓玄

苦諫、尽皆斬之。靜軒詩曰、

…〔略〕…前後

殺忠

是日、文武百官再拜于

臺下、山呼萬歲。炎晋改 為

太始元年、大赦天下、是日魏

亡、人民安妥、秋毫無犯。

史官有詩嘆云、……〔二五〕

晋帝

封皓

為婦命侯、子孫封中郎將、  
隨降臣宰皆封列侯。丞相張悌

等死節、皆封其子孫。天下大

定。封王濬為輔國大將軍。

……丞相方或・將軍留平・

大司農樓玄、見皓無道、三人

苦諫、皆被殺之。

前後十餘年、殺忠

臣四十餘人。

皓凡出入、常帶鉄甲

禁兵五万。人皆恐惧、莫敢發

言。

晋咸寧二年冬

十月、征南大將軍羊祐上表請

伐東吳。其表曰、……

臣四十人。後人有詩曰、…

〔略〕…皓 出入、常帶鉄甲

禁兵五万。群臣恐怖、莫敢上

諫。且說晋帝司馬炎容納直言。

善謀決断大事。時咸寧二年冬

十月、征南大將軍羊祐上表請

兵伐 吳。 ……〔二七〕

『演義』の版本研究では、二十卷繁本系と二十卷簡本系との距離は、二十四卷本系と二十卷本系（繁本・簡本）の距離より近いとされる〔二四〕。右の引用からも、その事実は容易に看取できよう。Bの挿話を例に採ると、先に引いた吳觀明本（二十四卷本系）では「宰輔」であったものが、ともに「臣宰」に変わっており、「陣亡」はともに「死節」に変わっている。繁本と簡本が極めて近い関係にあることは明瞭であろう。けれども、そのように近い関係にあるはずの両者が、司馬炎を肯定的に評価する記述においてのみ一致しない。そして、二十卷簡本系の諸本と嘉靖本における司馬炎を肯定する表現は、ほぼ完全に一致するのであるから、そもそも原『演義』には司馬炎肯定の記述があり、二十卷繁本系の祖本がそれを削ったと考えられる。

付言すれば、基本的に司馬炎を肯定する二十四卷系であるが、例外もある。通行本である毛本がそうであり、ことこの部分に限って言えば、毛本の記述は、明白に二十卷繁本系に近い。だが、今、この種の版本を交えて論ずると、議論が煩瑣に過ぎよう。そこで、司馬炎肯定の記述を削除する版本については後述することとし、ここでは、『演義』が何故、司馬炎を肯定する必要があったのかを考えてみたい。

先述した如く、父祖の代では否定の対象であった司馬氏は、司馬炎にいたって肯定の対象へと逆転する。親子間の相剋などが記されない以上、この逆転は、『演義』物語の整合性を損なうものである。つまり、『演義』の司馬炎に対する記述は、「不自然」なのである。ならば、何故、そのように「不自然」な記述を『演義』は採用したのであるだろうか。

それは、言うまでもなく、『演義』の司馬炎が、『平話』における劉淵の役割、すなわち「秩序の回復」を果たすべき人物であるからである。諸葛亮が「鼎立」を一時的な安定と規定し、あくまで中原回復を目指したことが象徴するように、『演義』にあつて「統一」こそがあるべき状態であることは疑いない（これは『平話』でも同じであろう）。だとすれば、三国という混沌を、統一という秩序へ導く司馬炎の形象に、「善」の属性が与えられることは寧ろ当然であろう。そして、別の視点から見ても、司馬炎がやはり「秩序の回復」を担っていることは確認できる。次節では、そのことについて述べてみたい。

## 第五節 「皇帝」司馬炎

まず、司馬炎が魏の皇帝、曹奂に、帝位の禪譲を迫る場面を見てゆこう。その挿話中、司馬炎と魏の社稷を守ろうとする黃門侍郎張節との間で、次のようなやりとりが交わされる。

炎大怒曰、「此社稷乃大漢之社稷也。曹操倚仗漢相之資、挾天子以令諸侯、自立魏王、篡奪漢室。吾祖父三世輔魏得天下者、非曹氏之能、実司馬氏之力也。四海咸知。吾今日豈不堪紹魏之天下乎」。節又曰、「若

行此事、乃篡國之賊也」。炎大怒曰、「吾与漢家報本、有何不可」。

（司馬炎は大いに怒って言った。「この国の社稷は漢の社稷である。曹操は漢の丞相の権力に寄り掛かり、天子をたばさんで諸侯に号令し、自ら魏王となり漢の帝室を篡奪した。わが父祖は三代にわたつて魏をたすけ、国を支えたのは、曹氏の力ではなく、司馬氏の力であることは、四海あまねく知るところである。私が今日、魏の天下を継ぐことができないはずがあらうか」。張節がまた言った。「このようなことをするのは、国を奪う賊であるぞ」。炎は大いに怒って言った。「私は漢の仇を討つのだ。何の悪いことがある」。）

この部分にあつて、「吾与漢家報本」という司馬炎の発話（セリフ）科白は注目に値するであろう。この部分のみを取り出せば、司馬炎の発話は自己正当化の弁と捉えることもできる。しかし、三国故事における漢王朝の位置を考えた場合、この発話の持つ意味は重要であろう。劉備が漢皇叔と呼ばれ、蜀漢が中原回復（すなわち漢王朝の中興）を標榜していたことに示されるように、また『平話』が漢の姓を継ぐ劉淵を秩序の回復者に位置づけていたように、「漢」こそは三国故事における秩序の象徴であった。ならば、「吾与漢家報本」という司馬炎の発話は、自らが秩序を回復するという名乗りとも受け取れよう。

そして、これ以降、『演義』の叙述における司馬炎の呼称に劇的な変化が起きることからも、彼の負った役割は推察される。まず、範例を示そう。

晋帝司馬炎追諡祖司馬懿為宣帝、伯父司馬師為景帝、父司馬昭為文帝、立七廟、以光祖宗。

（晋帝司馬炎は祖父司馬懿には宣帝と、伯父司馬師には景帝と、父司馬昭に

は文帝と諡し、また七廟を立てて、祖先を顕彰した。）

是年十一月、羊祐病危、晋帝司馬炎車駕幸祐家問安。三五

（この年の十一月、羊祐の病は重篤となり、晋帝の司馬炎は自ら車駕に乗って羊祐の家に御幸し、見舞った。）

却説王濬班師、遷吳主皓赴洛陽面君。行至洛陽、時太康元年夏五月。

皓登殿稽首、以見晋帝。帝賜坐曰、「朕設此座、待卿久矣」。皓对曰、

「於南方亦設此座、以待陛下」。帝大笑。三六

（さて王濬は軍を返し、吳主孫皓を洛陽に赴かせて主君と謁見させる。洛陽に到着したのは、時に太康元年夏五月のことであった。孫皓は宮殿に上り頭を深く垂れて、晋帝に拝謁した。帝は席を賜い言う。「朕はこの席を設けてから、久しくそちのことを待っておったぞ」。皓は答えた。「南でもこの席を作って、陛下をお待ちしておりました」。帝は大いに笑った。）

司馬炎に用いられる特徴的な呼称とは、「晋帝」或いは「帝」である。

彼は、魏の禅譲を受けて帝位を継いだのであるから、一見、彼をして「帝」と呼ぶことは極めて当然であるかのように思われる。しかし、事情はそれほど簡単ではない。何故ならば、『演義』の叙述において、魏吳蜀三国の君主が「帝」と呼ばれることはほとんどないからである（表五——参照）。彼らはほとんどの場合、「主」あるいは「王」と呼ばれ、「帝」と称される例は数えるほどしかない。

なお、表五——を見ると、司馬炎を「帝」ではなく「主」と呼ぶ例もかなりある。しかし、これは一部の版本、具体的に言えば嘉靖本を除く二十四卷系諸本に限られる現象である。嘉靖本や二十卷系諸本にはこの

ことがなく、恐らく二十四卷系諸本特有の挿入説話に関わる問題であろう三七。ともかく、想定される原『演義』には「晋主」の称は存在せず、司馬炎には「帝」の称が与えられていると捉えてよい。

それでは、司馬炎が現れる以前の『演義』において、「帝」と呼ばれる人物がいまいかと言うと、そうではない。漢の皇帝は、ごく普通に「帝」と呼ばれるのである。『演義』には四人の漢帝（桓・靈・少・献）が登場するが、登場時などを除いて、諱を呼ばれる例は皆無に近く、基本的には「帝」と称される。すなわち、呼称の面においては、司馬炎は正しく漢の後継者なのであった。先述した「吾与漢家報家」の語は、そのような司馬炎の立場を象徴的に示したものと言えよう。そして、司馬炎の立場をこのように捉えたとき、従来、論じられてきた『演義』の歴史観も、再度見直す必要が生ずる。

## 第六節 『演義』の歴史観

『三国志演義』は、数多い講史の中でも、最も歴史観が問題になる小説である。その原因は、この作品が語られる舞台であり、題名にも掲げられる「三分分立」という極めて特殊な政治状況に求められよう。

中国史を考えれば、分裂状態というのはそれほど珍しいことではない。寧ろ、枚挙に暇がないと言ってもよい。そのような分裂状態の一つでありながら、三国時代がとかく問題となるのは、中国史上初めて、複数の帝（天子）が比較的長い期間にわたって共存した時代だからであろう。

このような時代を議論する際、最も問題となってきたのは、一体、どの王朝を正統とみなすかという、所謂「正閏論」である。以下、その概

表五-一：『三国志』における四王朝（魏呉蜀晋）の皇帝の呼称分布  
（叙述のみ）

回数	魏			蜀			呉			晋		
	諱	主	帝	諱	主	帝	諱	主	帝	諱	主	帝
八〇	16	2			2							
八一					51							
八二	10		3		22	1						
八三					43	1						
八四		5			33							
八五	17	3		4	57							
八六	18	8			8							
八七					4							
八八												
八九												
九〇												
九一	32	4			7							
九二	1	2										
九三	7	2										
九四	13	5					10	4				
九五	3	2										
九六	9	3			5							
九七	5	3			6							
九八	8	3			4							
九九	9	8			1							
一〇〇		1			3							
一〇一	6	2	1		12							
一〇二	5	3			3		1	7				
一〇三	3	13	2				2					
一〇四					3							
一〇五	18	9	1		33		5	2				
一〇六	27	10										
一〇七	3	3	1		1							
一〇八	2	2			1		15	7				
一〇九	24	3										
一一〇	4	2			3		1					
一一一	6	3					1	1				
一一二		1			1							
一一三	1	1		1	5		31	9				
一一四	24	3			4							
一一五					16		1	1				
一一六					8							
一一七					8		1	2				
一一八	1	1			22							
一一九	15	5			18					20		1
一二〇	1	1		1	1		32	16	2	18	16	9



要を述べておこう<sup>三六</sup>。

正史『三国志』において、正統と看做されたのは魏朝であった。それを証明するには、『三国志』は魏の皇帝の伝記のみを「紀」と称し、蜀呉の皇帝の伝記は「伝」と称するという一事を挙げるだけで十分であろう。『三国志』は魏を「正」とし、蜀呉を「閔」とするのである。また、『三国志』がそのような態度をとった理由も明らかである。この書が著されたのは西晋時代であり、撰者陳寿は蜀の旧臣であるが、晋にも出仕している。そして、晋は魏の禅讓を受けているのであるから、魏を正統と看做さねば、晋の正統性もまた失われてしまうのである。

右のような正史の歴史観を受け継いだのが『通鑑』である。無論、北宋代に編まれた『通鑑』の撰者にとって、陳寿のように、魏の正統性を擁護する必要はない。けれども、客観的に見た場合、中国全土の約三分の二を有し、西都（長安）と東都（洛陽）の双方を支配下に収めていた魏を正統と看做すことは、至極、蓋然性のあることであろう。

一方、魏を正統とせず、蜀を正統と看做す歴史観も存在した。そもそも、正統とはしないまでも、蜀朝を特別扱いする現象は、已に正史『三国志』に見ることができ。そして、ラディカルに蜀正統論を打ち出した最も早い例としては、東晋の習鑿齒が著した『漢晋春秋』が挙げられる。つとに原著は逸し、今は『三国志』裴松之註にその断片を見るのみであるが、この書について井波律子は次のように云う。

『漢晋春秋』は、まず後漢王朝の創設者光武帝から筆を起し、最後の皇帝献帝に至るまでの史実を記す。後漢王朝の滅亡後は、これにつづけて蜀の先主（劉禅）、後主（劉禅）を正統として記述をすすめる。蜀王朝滅亡後は、西晋に続けるという体裁をとる。呉王朝はむろんの

こと魏王朝すら無視しているわけだから、これはまた陳寿の『三国志』の記述方法とはおよそ対照的に、蜀びいきに徹した著述にほかならない。<sup>三九</sup>

南北朝以降、蜀正統論は時には声高に主張されたり、時には下火になったりする。しかし、南宋に至って、朱熹という論者を得ることで、魏正統論をおしのけて、隆盛を誇ることになる。朱熹が蜀を称揚する態度は、編纂に携わった『綱目』が蜀の年号を採用している一事からも明白であろう。

なぜ、「蜀正統論」が形成されたのか。その理由は、この思想が流行した時代を検討することで明らかになるであろう。先述のように、「蜀正統論」は東晋、南宋といった時代に流行した。これらの時代は、漢民族が中原を逐われ、中国が複数の王朝によって割拠された状態にある点で共通する。つまり、当時において漢民族は蜀や呉と同じく地方政権の立場に置かれていた。ならば、蜀を正統と見なすことは自らを正統と見なすことにつながるのである。「蜀正統論」が流行するのも当然であろう。付言すれば、魏に臣従した呉ではなく、漢王朝を継承し、中原回復を建て前とした蜀を選んだのもまた当然である。

さて、一般に、右に示した蜀正統論は『三国志演義』にも継承されていると捉えられてきた。再び井波の言葉を借りるならば、蜀正統論こそは、曹操英雄伝説とならぶ『三国志演義』を支えるキーコンセプト（基本構想）<sup>四〇</sup>だとされてきたのである。『演義』が、劉備や諸葛亮を中心に物語を展開することは疑いないから、この認識は、一見、妥当であるように思われる。

しかし、本当にそうなのだろうか。

史書がいずれの王朝を正統として扱っているかは、叙述における皇帝に対する呼称と採用する年号によって判断されよう。そこで、編年体の体裁をとる『通鑑』と『綱目』を例に採り、その実際を確認する。

まず、皇帝の呼称についてである。『通鑑』卷七十に云う。

辛未、帝以舟師復征吳、群臣大議。<sup>〔四二〕</sup>

（黄初六年三月）辛未、帝 舟師を以て復た吳を征さんとし、群臣 大いに議す。）

これは、黄初六年（二二五）、魏文帝曹丕が吳を征伐しようとしたときの記事である。曹丕が「帝」と称されることに注意したい。次に『綱目』の当該箇所と比較する。

夏五月、魏主丕以舟師伐吳。

魏主丕復以舟師伐吳、群臣大議。<sup>〔四三〕</sup>

（建興三年）夏五月、魏主丕 舟師を以て吳を伐つ。

魏主丕 復た舟師を以て吳を伐たんとし、群臣 大いに議す。）

『通鑑』は二二五年三月とし、『綱目』は五月とするが、記事の内容から、同一の事象を指していることは明白である。年紀のずれは、『通鑑』が征伐の計画時を記すのに対し、『綱目』は実際に軍事行動があった時を記すからであろう（『通鑑』でも、実際の軍事行動が五月であると記されている）。無論注目すべきは、『綱目』が曹丕を指して「魏主」と称する点である。

一方、蜀の皇帝に対してはどうであろうか。劉備の死の記述を見よう。

『通鑑』卷七十

漢主病篤、命丞相亮輔太子、以尚書令李嚴為副。……夏四月、漢主殂於永安、諡曰昭烈。<sup>〔四三〕</sup>

（漢主 病い篤く、命じて丞相亮に太子を輔け、尚書令李嚴を以て副と為さしむ。……〔黄初四年〕夏四月、漢主 永安に殂し、諡して昭烈と曰う。）

『綱目』卷十四

夏四月、帝崩于永安、丞相亮受遺詔輔政。<sup>〔四四〕</sup>

（建興元年）夏四月、帝 永安に崩じ、丞相亮 遺詔を受け 政を輔く。）

魏の皇帝の場合とは正反対に、『通鑑』は「漢主」といい、『綱目』は「帝」という。この二書の歴史観の違いが端的に現れている。

さて、吳についてであるが、『通鑑』『綱目』ともに「閔」とみることから、「吳主」と呼ばれているであろう事は容易に想像がつく。事実、その通りなのである。

『通鑑』卷七十二

五月、吳主入居巢湖口、向合肥新城、衆号十万。<sup>〔四五〕</sup>

（青龍二年）五月、吳主 居巢湖口に入り、合肥新城に向かう、衆 号して 十万。）

『綱目』卷十五（1539b—40a）

五月、吳主權擊魏、秋七月、魏主叡自將擊却之。

吳主權入居巢湖口、向合肥新城、衆号十万。<sup>〔四六〕</sup>

〔建興十二年〕五月、吳主權 魏を撃つ、秋七月、魏主叡 自ら將に之を撃却せんとす。

吳主權 居巢湖口に入り、合肥新城に向かう、衆 号して十萬。

さて、『演義』に立ち戻れば、表五―一に示した如く、三朝の皇帝全ては「主」と呼ばれている。無論、劉備父子が諱を殆ど呼ばれないのに對して、魏吳の皇帝はしばしば諱を記されていたり、「先主」「後主」という半ば固有名詞化した語を用いたりしていることに、蜀朝の優位を見出すことはできる。しかし、『演義』の「主」と『綱目』の「帝」との間には、やはり懸隔があると言わざるを得まい。別言すれば、『演義』は『通鑑』や『綱目』のように正閏を截然と区別するのではなく、相対的であるにせよ、三朝を平等に、すなわち鼎立状態として記しているのである。つまり、『演義』は『綱目』に代表される蜀正統論を無批判に承継しているわけでは、決してない。

前節で少しく述べた、晋朝との扱いの違いを見れば、それは明瞭になる。司馬炎は魏朝の禪讓を受けた段階より「帝」と称される。對して、『綱目』はやや事情が異なる。

司馬炎が禪讓を受けたのは、泰始元年（魏の咸熙二年、二六五）だが、その後、暫くの間、『綱目』は司馬炎を「帝」ではなく「晋主」と称するのであった。

秋八月、晋主謁崇陽陵。〔四七〕

〔泰始二年〕秋八月、晋主 崇陽陵に謁す。〔四八〕

晋主親耕籍田。〔四八〕

〔泰始四年正月〕晋主 親ら籍田を耕す。〔四九〕

『綱目』にあって、彼が「帝」と称されるのは、太康元年（二八〇）に吳を滅ぼして統一を成した以後である。範例を示す。

三年春正月朔、帝親祀南郊。〔四九〕

〔太康〕三年春正月朔、帝 親ら南郊に祀す。〔五〇〕

「主」が、閏朝の皇帝に対する称であることを考えれば、『綱目』は、統一を果たすまでの司馬炎をして、正統の「帝」と看做していないと断ぜよう。言い換えれば、『綱目』の歴史観に拠れば、蜀漢滅亡（二六三）より晋の統一（二八〇）に至るまでは、中国に正統の王朝は存在せず、閏朝しか存在しないのである。そして、このような歴史観が、『演義』の、即位直後から司馬炎を「帝」と扱う態度と一致しないのは疑いない。

『演義』は漢帝および、司馬炎をのみ「帝」として扱い、魏吳蜀の皇帝は「主」と称する。つまり、『演義』の歴史観に拠れば、三国鼎立期（二二〇―二八〇）において正統の王朝は存在しない。すなわち、この期間は秩序の象徴たる「帝」が存在せず、文字通り混沌の時期として扱われるのである。

年紀表記にも、『演義』のこのような態度は表明されている。『通鑑』は魏、『綱目』は蜀、というようにその書が正統と看做す王朝の年号が採用されている。對して、『演義』は事件の語られる場に依じて、三朝の年号を使い分けるのである。

時景初二年春正月、有長安人報緊急軍情、乃幽州刺史毌丘上表、報

称遼東公孫淵造反、自号為燕王、改元紹漢元年、建宮殿、立官職、與兵入寇、揺動北方。叡大驚、即聚文武官僚、商議起兵退淵之策。<sup>〔五〇〕</sup>

(時に景初二年〔二三八〕春正月のこと、長安より急報があった。すなわち、幽州刺史の母丘儉の上表によれば、遼東の公孫淵が謀反を起し、自ら燕王と号して紹漢元年と改元し、王宮を造り、官制を立て、兵を興して魏に攻め入り、北方を揺るがせているというのである。曹叡は大いに驚き、文武百官を集めて兵を興して公孫淵を退ける策を議した。)

太和元年秋八月初一日、忽起風、江海湧濤、平地水深八尺、吳主先陵所種松柏、尽皆拔起、直飛到建業城南門外、倒挿于道上。權因此受驚成病。<sup>〔五一〕</sup>

(太和元年秋八月一日、にわかには大風が吹いて、河も海も波高く、平地にあふれた水の深さは八尺であった。吳の国主代々の陵に植えられていた松や柏はことごとく吹き飛ばされ、建業の南門の外まで飛んでいって、道に逆さに突き立った。孫權はこの出来事に驚倒し病氣となってしまった。)

蜀漢延熙十六年秋、衛將軍姜維起兵二十万、令廖化・張翼為左右先鋒、夏侯霸為參謀、張疑為都轉運糧使、又出陽平関伐魏。<sup>〔五二〕</sup>

(蜀漢の延熙十六年〔二五三〕秋、衛將軍姜維は兵二十万を動員し、廖化・張翼を左右の先鋒、夏侯霸を參謀、張疑を都轉運糧使、として、ふたたび陽平関より出でて魏を伐とうとした。)

第二例の太和元年を文字通りに受け取ってしまえば、これは魏の年号である。しかし、魏の太和元年とは西暦二二七年に当たり、前後と照応しない。これは明らかに、吳の太元元年(二五一)の誤りであろう。事

実、葉逢春本などは太元元年に改めている<sup>〔五三〕</sup>。

さて、景初は魏明帝(曹叡)の、太元は吳大帝(孫權)の、延熙は蜀後主(劉禪)の元号であるから、『演義』が一つの王朝に限らず、三朝すべての年紀を使い分けていることは明白である。この点においても、三国は鼎立しているのであった。

ここまで見てくれば、第四章で提示した問題に答えることが可能であろう。『演義』の歴史観に従えば、蜀魏吳の三朝は併置されるべきものである。劉備・曹操・孫權が呼称の面で対等に扱われるのは当然の帰結である。何度も繰り返すが、その三国鼎立の状態とは、『演義』にとつては「混沌」の状態であった。それゆえ、『平話』が劉淵による秩序の回復を希求したように、『演義』もまた、「帝」たる司馬炎に秩序の回復させたのがその証拠である。『演義』の結末もまた、混沌から秩序へと至る大団円であった。

ここで、再び『演義』の始点に目を移すとき、「長篇」としての『演義』が、如何に巧妙に構成されているかに気付く。『演義』は次のような文章で始まるのである。

後漢桓帝崩、靈帝即位、時年十二歳。朝廷有大將軍竇武・太傅陳蕃・司徒胡広共相輔佐。至秋九月中涓曹節・王甫弄權。竇武・陳蕃預謀誅之、機事不密、反被曹節・王甫所害。中涓自此得權。<sup>〔五四〕</sup>

(後漢の桓帝が崩御し、靈帝が即位した。時に十二歳であった。朝廷では大將軍竇武・太傅陳蕃・司徒胡広がその補佐の任に当たった。秋九月になると宦官の曹節と王甫が権力を恣にした。竇武と陳蕃は謀を練って彼の者たちを誅さんとしたが、事は漏れ、かえって曹節と王甫に殺されてしまった。宦官は、この時から権力を握ることになった。)

皇帝の崩御から筆が起こされるのは極めて暗示的であろう。この時点で後漢王朝がすぐさま滅ぶわけではないが、その崩壊の予兆は示されるのである。次いで、宦官の擡頭が語られ、混沌への予感益々確実となる。始点もまた、終点と同じく、極めて意図的に語られていることは明白であろう。

『演義』は、秩序から混沌への変転を語り、混沌から秩序への変転を語る。このシンメトリーを見ると、長篇としての構成の堅牢さもまた、意識されるべきであろう。

#### 附考 二十卷繁本系諸本および毛本について

さて、ここまで『演義』の歴史観を見てきたわけだが、第四節に述べたとおり、二十卷繁本系諸本と毛本では司馬炎を肯定する記述が削除されている。司馬炎を肯定する記述は、司馬炎を秩序の回復者と看做す『演義』の歴史観の一端であるから、それを缺くこれらの版本では、本文で示した『演義』の歴史観がそのまま継承されていると捉えることは無理であろう。

何故、これらの版本群は、司馬炎を肯定する記述を削除したのであるか。その最も大きな理由は、第三・四節で述べた如く、司馬炎を肯定することには一つの大きな矛盾があるからであろう。すなわち、彼らの父祖は、『演義』中では敵役・悪玉として述べられるのであり、司馬炎を肯定する描写と整合性が取れないのである。

そして、二十四卷系諸本および二十卷本簡本系諸本、ひいては原『演

義』はその矛盾を軽く扱うのであるが、二十卷繁本系諸本および毛本は、その矛盾を極めて重大なものと捉えたのであろう。結果、後者では司馬炎を肯定する描写が削除され、極力、父祖の形象との整合を保つことを指向する。このとき、司馬炎は必然的に敵役・悪役の範疇に入ることになる。

ただし、このような操作を行ったとき、確かに司馬氏の形象は明瞭になるが、秩序の回復という大団円は抛棄せざるを得まい。この場合、『演義』の物語は三国の滅亡という歴史の無常を語ることに力点が移ることになる。

二十卷簡本系諸本に限って言えば、果たしてどこまでそのようなことに自覚的であったかは判らない。しかし、唯一、毛本のみは自覚的に大団円を抛棄しているように思われる。

『三国志演義』では、どの版本もその末尾に長詩を引く。これは漢の高祖より始まって、三国の興亡を唱うものであるが、毛本以外の現存する版本では、どの末尾は次の一句で締め括られる。

一統乾坤帰晋朝〔五五〕 一統の乾坤 晋朝に帰す

つまり、三国が一統されたことを宣言して、『演義』はその幕を閉じるのである。対して、毛本は次の一句で物語を締め括る。

後人憑弔空牢騷〔五六〕 後人 憑弔して 空しく牢騷たり

(後の人は古人を偲び弔う、三国の栄枯も空騒ぎであったのかと)

ここには晋の統一を積極的に肯定する意識は全く見られない。ただ、そ

それぞれの栄華を誇った三国もついには滅んでしまったことを悼み、歴史の無常を思う。物語は一種の悲劇に終わるのであった。

〔註〕

- 〔一〕 テキストは吉川英治『三国志』（講談社文庫八冊本 一九八〇年十一月—一九八一年二月）に拠った。
- 〔二〕 註「一」所掲『三国志』第八冊／三四六—三六五頁。
- 〔三〕 松浦友久『詩歌三国志』（新潮選書 一九九八年十月）一七九頁。
- 〔四〕 呉観明本第一回前／一葉 a b。
- 〔五〕 『後漢書』第二一冊／志第十五／三三—三四頁。
- 〔六〕 『後漢書』第七冊／列伝第四十四／一七七—一七六頁。但し、建寧二年（二六九）ではなく熹平元年（一七二）のことだとする。
- 〔七〕 『通鑑』第四冊／卷五六／一八一—一八二—一八三—一八四頁。
- 〔八〕 『平話』卷上／四葉 a。
- 〔九〕 小川環樹『三国志演義』の発展のあと（『小川環樹著作集』第四卷「筑摩書房一九九七年四月」三五—五四頁所収）三七—三九頁、井波律子『三国志演義』（岩波新書 一九九四年八月）七六—七八頁などを参照。
- 〔一〇〕 『平話』卷下／七九葉 b。
- 〔一一〕 『晋書』劉元海載記・劉聰載記・劉曜載記（第九冊／卷二〇—二一／二六四—二七〇五頁）参照。
- 〔一二〕 註「九」所掲『三国志演義』の発展のあと」参照。
- 〔一三〕 同右三八頁。
- 〔一四〕 『平話』卷中／二六葉 a。

- 〔一五〕 『平話』卷下／六七葉 a b。
- 〔一六〕 『未名』第十号（一九九二年三月）五一—八〇頁所収。
- 〔一七〕 同右七六頁。
- 〔一八〕 金文京『三国志演義の世界』（東方書店 一九九三年）九〇頁。
- 〔一九〕 呉観明本第百十四回後／五葉 b—六葉 a。
- 〔二〇〕 呉観明本第百九回後／八葉 b。
- 〔二一〕 呉観明本第六十六回後参照。
- 〔二二〕 呉観明本第百九回後／九葉 b。
- 〔二三〕 呉観明本第百十四回前／四葉 b—五葉 a。
- 〔二四〕 呉観明本第百九回後／九葉 b。
- 〔二五〕 呉観明本第百九回後／一葉 b。
- 〔二六〕 呉観明本第百二十回後／一五葉 b。
- 〔二七〕 嘉靖本卷二四／七一葉 b。
- 〔二八〕 『通鑑』第六冊／卷八二／二五九—二六〇頁。
- 〔二九〕 余象斗本卷二〇／二四葉 b。劉龍田本卷二〇／二二葉 a。
- 〔三〇〕 余象斗本卷二〇／二八葉 b。劉龍田本卷二〇／二四葉 b—二五葉 a。
- 〔三一〕 余象斗本卷二〇／二五葉 a。劉龍田本卷二〇／二二葉 b。
- 〔三二〕 中川論『三国志演義』版本の研究』（汲古書院 一九九八年十二月）三五〇—三九八頁参照。
- 〔三三〕 呉観明本第百十九回後／一〇葉 b。
- 〔三四〕 呉観明本第百十九回後／十二葉 a。
- 〔三五〕 呉観明本第百二十回前／七葉 a。
- 〔三六〕 呉観明本第百二十回後／一五葉 b。
- 〔三七〕 嘉靖本を除く二十四卷本系諸本に、他系統には見られない十一の説話が挿入されていること、また、そのほとんどが『通鑑』系の史書に拠ったであろうことはつとに

指摘されている(註「三二」)『三國志演義』版本の研究』五七―六九頁参照)。この十一の説話の中、四つまでが司馬炎即位後に語られる。そして、「晋主」の称は、ただ一例(吳観明本第百二十回前/五葉b)を除いて、この挿入説話において用いられているのである。この現象は、嘉靖本を除く二十四卷本系の祖本が説話を挿入する際に、「晋主」の称を用いる史書に拠ったことを示唆しているであろう。また、後述の如く、「晋主」の称を用いる『通鑑』系史書としては『綱目』が存在することを附言しておく。

〔三八〕詳細は、註「九」所掲『三國志演義』二―三三頁参照。

〔三九〕同右二八頁。

〔四〇〕同右三三頁。

〔四一〕『通鑑』第五冊/卷七〇/二二三頁。

〔四二〕『綱目』卷一四/一〇六葉b

〔四三〕『通鑑』第五冊/卷七〇/二二四頁。

〔四四〕『綱目』卷一四/九九葉a。

〔四五〕『通鑑』第五冊/卷七二/二二九二頁。

〔四六〕『綱目』卷一五/三九葉b―四〇葉a。

〔四七〕『綱目』卷一六/六五葉b。

〔四八〕『綱目』卷一六/七二葉a。

〔四九〕『綱目』卷一七/一四葉b。

〔五〇〕吳観明本第百五回後/十六葉a。

〔五一〕吳観明本第百八回前/二葉a。

〔五二〕吳観明本第百九回前/一葉a。

〔五三〕葉逢春本卷九/八四葉b。

〔五四〕吳観明本第一回前/一葉a。

〔五五〕吳観明本第百二十回/一七葉a。

〔五六〕毛本第百二十回/一五五八頁。

## 結 語

本論第一章と第二章では『演義』における伝説の受容について、第三章から第五章では長篇としての『演義』について考察を行った。ここで今一度それを簡単にまとめておきたい。

第一章では、呂布を中心におき、それに対置される存在としての薛仁貴、後継者としての関羽について論じた。これらは全て史書から見出せるものではなく、完全に「伝説」の範疇に属する。そして、『演義』はこれらの「伝説」を排除するのではなく、寧ろ積極的に受容するといつてよいテキストであった。

第二章では、諸葛亮と司馬懿という対偶が、史実にその出発点があるにせよ、後代に至ってから増幅が甚だしく『演義』もその増幅を継承していることを明らかにした。

そして、『演義』の呂布あるいは諸葛亮と司馬懿という対偶に共通して見出せたのは、語られる「伝説」が極めて「合理化」されて提示されることである。『平話』に代表される荒唐無稽な不合理は完全に影を潜め、多くの読者にあたかも史実であるかのように感じさせるまでに、『演義』は「伝説」を「合理化」する。

章学誠が「七実三虚」の語を用いて批判したように、『演義』が読者に虚構を史実と誤解させる書物となったのは、この「合理化」ゆえであることは明白であろう。しかし、『演義』を一個の文学作品として捉えるとき、この「合理化」は完成度の高さを支える重要な手段でもあったのである。

第三章では、劉備の逃走譚を分析し、そこに登場する「協力者」に「劉」

という共通の記号が与えられていることを発見した。この発見は、『演義』が、一種の貴種流離譚として劉備の物語を生成し、テキストに埋め込んでいることを証明する。更に言えば、『演義』がまぎれもなく長篇としての構想をもって構成されていることをも現していよう。

第四章では、『演義』最大の敵役と目される曹操の呼称について分析した。その結果、『演義』は曹操に対して尊称を用いていることを明らかにした。そして、旧来言われているような「劉備(善)」対「曹操(悪)」という単純な二元論を『演義』が全面的に肯定しておらず、むしろ、三国時代を文字通り鼎立の時代として見ている可能性があることを指摘した。

第五章では、物語の終焉を分析した。その結果、『演義』は三国を統一する司馬炎を肯定的に描き、更には「帝」の称を与えていることを発見した。対して、三国(魏呉蜀)の君主には「主」の称しか許さないのであり、前者が後者より高い位置に据えられているのは明らかであろう。更に言えば、『演義』は従来議論されてきたような正閏論から脱し、三国全てが「閏」であるという、独自の歴史観を持っているのである。

第二部を通して指摘できることは、『演義』という作品が網羅的三国故事、換言すれば長篇であることは、『演義』そのものを特徴づける極めて重要な要素となっているということである。

かつて、『演義』の建安諸本(二十卷本)の研究をするに際して、金文京は『演義』版本研究が遅滞した理由の一として、以下のような指摘を行った。



〔『演義』版本研究が遅滞した理由の〕一つは、『三国演義』は『水滸伝』などよりは史実に依存する部分があるかに多く、大体は正史の『三国志』や『資治通鑑』などに基づいて書かれており、したがって各版本間に文字や体裁の異同、ニュアンスの相違はあっても、語られる事柄は同じはずであるという先入観があったこと。〔二〕

念は版本研究を念頭に置いていたが、『演義』が「史実に依存する部分があるかに多」という先入観は、実のところ、『演義』の内容研究にも深刻な影響を与えていたのではないか。総序に示した章学誠などの言に明らかなように、常に『演義』は「従」であり、史実こそが「主」であった。

しかし、『演義』を「主」に置いたとき、『演義』は史実に依存するという先入観は棄てざるを得ない。それは本研究によって明らかになったであろう。『演義』は、あくまで史書（および他の先行テキスト）を利用して独自のテキストを生成するのであり、史実を装っているに過ぎない。

従来の『演義』研究は、『演義』テキストは史実に依存している」という前提のもとに成されたものが大部分であった。その前提が崩れるのならば、『演義』の内容研究には未開拓の部分が多量に残存していることになる。

『三国志演義』の内容研究は、その端緒に着いたばかりなのである。

〔註〕

〔一〕『三国演義』版本試探—建安諸本を中心に—（『集刊東洋学』第六一号 一九八九年五月）四三—四四頁。

## 初出一覧

### 第一章

#### 第一節―第四節

呂布と薛仁貴 ―英雄の祖型―

『未名』第十七号、中文研究会、一九九九年三月

#### 第五節―第七節

関羽と呂布、そして赤兔馬 ―『三国志演義』における伝説の受容―

『東方学』第九十八輯、東方学会、一九九九年七月

### 第二章

司馬懿像について ―正史から演義へ―

『未名』第十三号、中文研究会、一九九五年三月

### 第三章

書き下ろし（掲載予定有）

### 第四章

書き下ろし

### 第五章

『三国志演義』の結末に対する一試論 ―司馬炎を起点として―

『未名』第十五号、中文研究会、一九九七年三月

※ 既発表原稿については、いずれも大幅な加筆修正を施した。